
ポケットモンスター ～白き金剛石の輝き～

Kavallerist

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケットモンスター ～白き金剛石の輝き～

【Nコード】

N0609T

【作者名】

Kavallerist

【あらすじ】

ポケットモンスター、縮めてポケモン。

その生態にまだまだたくさん謎を秘めている不思議な生き物。

そんなポケモンがすむ世界の一部、シンオウ地方。

そこに住んでいたツツコミ属性の少年、ダイヤ。

ツツコミすぎてポケに成り代わりそうな少年の旅が今、始まる！！

『いまさらDPPかよ』というツツコミ、それは正しいです。

新章突入、謎の企画もご用意してございます。

物語の序章…旅立ち。(前書き)

さて、連載が2本ある中、友人に『実はポケモンの小説も書こうと思ってる』と言ったところ、『投稿しやがれクソ野郎!!』『シヨボーン』って言う展開になったので頑張って書いてます。

中二展開になるのは目に見えています。

楽しんでいただければ幸いです。

物語の序章…旅立ち。

「行くのね」

旅立つ男の背中に、女は言う。

男は一拍置いて、振り返らずに答えた。

「ああ。あいつは任せた」

「…あの子には、貴方が必要よ」

ふっと、男の頬が緩む。

「父親らしい事の一つもしないで、本当に悪いと思ってるよ」

「…あの子だけじゃない。私にも」

「ごめんな」

不意に口をついた言葉に赤面しながら、女は訂正する。

「いいのよ。貴方は、高みを目指すからこそ」

「『輝く』。」

「自分で言うの？」

「まあな。そう呼んだのはお前だろ？」

男の言葉に、今度は凜とした笑顔で答えた。

「そう。私は貴方のそんなところに惚れたんですもの。行ってらっしゃい、気をつけてね」

「…ああ。」

『このとき私たちは赤いギャラドスを見つけられませんでしたでしたが、確かにその存在を確信S』

プツッ。

少年が、親指でリモコンの電源ボタンを押していた。くぁ、と大きな欠伸をする。

「…ふぁーあ…なんだ、結局見つかなかったのかよ…」

特にすることもなく、話題のチャンネルもつまらなくなってテレビを消したというわけだ。

「仕方ない。あいつを苛めにいくか」

立ち上がり、階段を下りる。と、居間で茶を飲んでいた母親から声がかかった。

「あら、ダイヤ。さっきジュン君が呼んでたわよ。『湖に早く来い！』って」

ダイヤは、とりあえず『うぜえ』と思った。

『ジュン』というのは、この俺『ダイヤ』の幼馴染の爆走野郎。持ち前の高テンションと暴走力で、俺とはほぼ対極に位置している。若干俺もテンション上げないと突っ込みきれないほどだ。

そんなやつを苛めようと思った矢先の出来事。

正直、好都合といえれば好都合だが、それより何より、あいつから先にふっかけられたというのがうざかった。

「うっぜえ…しかたねえ、出かけてくるよ」

「草むらには入らないでね。ポケモンが襲ってくるから」

「わーっってるよー」

母からいつも言われる事にうんざりして家を出ると、頬を風が撫でた。見れば、町の出口でジュンが手を振っている。

「手前、何の用だ？」

「ぎゃー、殴るんじゃないよ!!」

「悪いな、殴らせてもらう。」

「ぐはあ!!」

振りかぶった拳をたたきつけるとジュンは数メートル吹き飛んだ。だがしかし、ジュンは即復活して話しかけてくる。

「…さっきのテレビ見たろ？」

「あー、あのつまねえ奴か。で？」

「ああいうのって、俺らの湖にも居るんじゃないかなって思ってたさ!!」

「……」

こいつの発想は、俺にも分からない。溜め息が漏れた。

『俺らの湖』とは、きつとシンジ湖のことだろう。
まあ、歩いて数分の位置だ。

「…仕方ねえ。暇だから付き合ってやる」

「よっしゃー!! 行こうぜ行こうぜ!!」

「あーあー、わかったわかった」

気付けば、ジュンに引きずられる形で、湖についた。
と同時に、ジュンが目を凝らして言う。

「…あれ? 誰か居るな」

「何…? あれ、どっかで見たことあるな、あのオッサン」

草むらの中で話す、自分達と同じ年頃の少女と、髭をたくわえた老人。

『どこだったかな…?』

「…お、こっち来るぜ」

こちらに向かって歩いてくる。

「ちょっと失礼するよ」

「あ、どうぞ」

左右に分かれて避ける。老人は何も言わず、少女は頭を下げて去っていった。

「…あれ？見てみろよ」

「カバンだな。さっきの奴らの忘れ物じゃねえか？」

草むらの中にあるが、仕方ない。近づいて、中を確認した。

「ん、ボールが三つ。返しに行こうぜ」

「ああ。早く行こう…っと！！」

「ピュイイイイー！！」

「うおおおお！！？」

突如として、森からムツクルが飛び出してきた。ついボールをとり、構える。

「お、おいダイヤ！？」

「不可抗力だ！手前もとれ！！」

ジュンに叫んで、ボールを投げる。中から出てきたのはポツチャマだった。

「ジュン、お前はそっちを頼む！！」

「お、おう！」

ジュンも、アタフタしながらボールを投げた。それを確認し、ポツチャマに指示を出す。

「よし、行けポツチャマ！『あわ』だ！！」

「ちゃまー！！」

「ピュイイイ！！」

泡がぶつかり、爆ぜる。と、ムツクルは逃げ去っていった。

「よし、よくやった。」

ポッチャマの頭を撫でてボールに戻すと、ジュンが近づいてくる。

「大丈夫か、ダイヤ？」

「ん、べつにな。お前は？」

「俺も大丈夫。ってか、これ勝手につかっちゃってよかったのか？」

「仕方ねえだろ…そうだ、思い出した。あの爺さん、ポケモン博士のナナカマドだ」

テレビで見たことがある。確か、何かの発表のことだったか…。

「だったら、研究所まで行ける。届けて、事情を話すか」

「そ、そうだな…怒られたらどうしよう…」

「何度も言うが、不可抗力だからなあ。どうなるか。」

「……？」

「近くの奴に聞いたら、ここだって」

研究所の前で往生していると、中から先ほどの少女が出てきた。

「あ。…それ！見つけてきてくれたの！？」

「え、ああ、まあ」

「何たじろいでんだよ。…博士はいるか？ちょっと用事があるんだ

が」

「うん、いるよ。カバンを探してたから、きっと喜んでくれるわ」

少女に連れられ、研究所の中に入る。老人は険しい顔だ。

「…そのカバンは」

「あー、忘れ物だったみたいなんで、俺らが持ってきたんです。草むらの中にあったんで、ムツクルに会ったときに中のポケモンを使っちゃいました。済みません」

「ふむ、そういうことか。……」

ナナカマドが、ジュンとダイヤの横にいるポツチャマとナエトルを眺める。

数秒重い空気が流れた後、ナナカマドは頷いて口を開いた。

「ふむ。このポケモンたちは、君たちにあげよう」

「え!?!」

「…マジで?」

「出来れば、私の願いを聞いてもらいたい。」

「どんな?」

うむ、と近くの机から何かを取り、差し出してくる。

「この“ポケモン図鑑”のデータを完成させて欲しいのだ。…君たち二人に頼みたい。どうだね?」

「楽しそうだな…。」

ジュンは興味津々だ。今にも飛びつきそうに、目を輝かせて図鑑を見ている。

…まあ、最近俺も暇だったからな。面白いかもしれない。

「俺はやろう」

「お、俺も俺も!!」

「そうか。では、これを」

ポケモン図鑑を渡される。しばらく弄っていると、ナナカマドから声を掛けられた。

「この地方の研究の手伝い、ということを親に話してから行くのだ。分かったな？」

「ああ。分かってる」

親…。とりあえず、フタバに戻ろうか。

「じゃ、母さん。行ってくるよ」

「うん、気をつけてね。たまには電話してよ」

「わーってるよ。…じゃ」

「じゃあね。」

手を振った後、背を向け、走り出す。このあとの旅に、思いを馳せて。

折角だからジムも回ろう。そうすると、まずはクロガネシティがいちばんだろうか。…振り返らず、一目散に駆けていった。

物語の序章…旅立ち。（後書き）

頑張りました。

感想、要望、評価その他ありましたらいつでもどうぞ。

返信は早いです。

寮で平日はP Cが使えないので、ほとんどは休みの日の更新になる
と思います。

それでは、そんな感じで失礼します。

キャラ設定（主人公・ライバル）（前書き）

キャラ設定です。足りないところ等ありましたら感想でどうぞ。

キャラ設定（主人公・ライバル）

キャラクター設定

・ダイヤ

15歳。男。

白の長髪、目の色は金。

暇つぶしにポケモン図鑑完成への道を進む。

自他共に認めるツツコミ役だが、時々奇行に走って周囲の人を引かせる。

ポケモンの図鑑（アロエ、各地方の博士等著）を読みつくし、大体のポケモンの知識があるが、シンオウに関してはまだ分かってない事も多い。

謎の思考回路が発生する、電波少年になることもある。用はキャラがぶれている。

バトルセンスは中々のもの。

1人称は『俺』。

年上、その他礼儀の必要な人には敬語を使う。が、当然バトルの時には敬語と普段語両方が混ざる。

というか、テンションが上がると基本的に敬語が外れる。

趣味は釣り、ジュンいじめ。

一言。

「あー、何で俺の周りにはまともな人間が少ないんだ…ちょポツチヤマ、つつくのやめえ!!」

・ジュン

15歳、男。

ゲームのライバルと同じグラフィック。キャラも基本的には同じ。

唯一違うのはダイヤにいじめを受けること。

だがこれから旅に出るので、『それも毎日じゃない!!』と歓喜。

正義感に燃える熱血単純。空回りもいいところ。

一人称は同じく『俺』。ダイヤと同じだから非常に書き辛い。
年上等にはぎこちない敬語を使う。

趣味は寝ること、運動すること、勝負ごと。

一言。

「うおあなんだってんだよおお!!、今日の一撃は重いじゃねえか
あああああ!!」

キャラ設定（主人公・ライバル）（後書き）

実は今から楽しみにしてる展開がありまして、それに向かってガンガン更新したいんですよ。

こんな調子で大丈夫かな。いつもこんな感じでボロボロになるんですよねえ。

それではそれでは。

第一話・色々飛ばしてクロガネシティ（前書き）

ありえないくらい早い更新です。

なぜかって？ 需要がないらしいのと、速く展開したいからです。
バトルシーンの難しさが身にします。

第一話・色々飛ばしてクロガネシティ

旅立って数日、現在ダイヤは山道を登っている。
クロガネシティへの途中、クロガネゲートは少しきつい道のりだ。
ここまでで、手持ちはまだポツチャマ一匹。

「…道が険しい…」

先ほどコトブキシティで手に入れた端末、ポケモンウォッチ通称『ポケッチ』で、マップを確認する。目的地まで、そう長くはないようだ。

だが、もともとそれほど体力がないから、険しい道には慣れていなかった。

肩で息をしながら、洞窟を進む。

「はあ、はあ…お、光だ…！」

少し歩くと、出口が見えた。零れた光がまぶしい。

出口を抜けたところで街の景色が見えた。どうやら、フタバよりも賑わっている。

「こういう雰囲気っていいな…。炭鉱町か」

景色を眺めていると、どっと疲れが出た。とりあえずポケモンセンターに向かう。

相変わらず、どこも中は変わらない。逆にそれが落ち着くのだが。

「…はあ。あ、ジョーイさん。ポケモンをお願いします。あと部屋空いてますか？」

「ええ、106号室があいてるからそこを使ってください。これがキーです」

「あ、どうも。」

回復を済ませ、部屋に入った。ベッドに飛び込み、凶鑑を開く。

「見つけた数：15か。はあ、先が長：」

そこで意識が途切れた。初めての旅、疲れが溜まっていたようだ。

「…む」

「ぽちゃ！ちゃま！！」

「ぐお！腹筋痛っ！！やめろ、腹の上で跳ねるな！！」

目覚めると、腹の上でぴよこぴよことポツチャマが跳ねていた。

一体いつの間にボールから出たのだろう。

そのツツコミの前に、腹筋が痛かった。変なところが筋肉痛になったものだ。

「…ま、いいか。さーて、ジム行くぞジム。ポツチャマ、大丈夫か？」

「ちゃま！」

胸を張るポツチャマ。今は仲間がこいつしかない。一番頼れる相棒だ。

頭をなで、キーを返しに受付に向かった。

「ジョーイさん、どうも。ありがとうございます」

「あ、はい。気をつけて」

自動ドアを出ると、空が青く広がっていた。

ジムに向かって歩を進める。数分で着いてしまった。

「お、ジム近いな…あれ? 『ただいま留守にしております』…ええー」

「ちゃま?」

心配そうに覗き込んで来る、ポツチャマの頭を撫でる。

「留守なんだってよ。えっと、『御用の方はクロガネ炭坑へ』……うーん、あっちみたいだな。いくぞ」

「ちゃまー」

「暗いな…。」

クロガネ炭鉱入り口。ダイヤが眩いたとおり、薄明かりでぼんやり
していて視界は悪い。

この中で仕事をしている人間がいるというのだから、尊敬してしま
う。

「そーい、さっき拾ったダークボールってここで使えんのか？」
「ちゃまー!!」

「ん?…うお!？」

『ずばばばばばばばばばば』

炭坑の奥から、勢いよくズバットの群れが飛び出してきた。

「よし、いい試し相手だ。いけポツチャマ！」

「ちゃまー!!」

泡で、一匹のズバットを撃ち落とす。

「ズバ!?!バババ」

「畳み掛けろ！」

「ちゃまままま!!」

「ズバアアア!!」

地上に落ちたズバットを突き続けると、気絶した。そこですかさずダークボールを投げる。

「いけっ！」

ボールが当たり、赤い光がズバットを吸収してころん、ところがる。数度転がって、光が消えた。

「よっしゃ、ゲット！」

「ちゃまー!!」

これで、ついに仲間は二人目。いや、二匹目か。

二人で喜んでいると、パチパチと拍手が起きた。音のした方に振り返る。

「いやあ、いい戦いだった」

「…？誰だ、あんた」

眼鏡を掛けた、作業服の少年が歩いてきた。

「ああ、ごめんごめん。僕はヒョウタ。この町のジムリーダーさ」

「おおお。そういうことですか。俺はダイヤ。あなたに用があるんですよ」

「うん、そうじゃないかと思ってね。ここでいいなら、すぐにでも勝負しようよ」

「おおおお。さらに話が早くて助かります。んじゃ、俺はあっち、あなたはあっちで」

「うん。…あ、その君。審判を頼めるかな？」

「はい」

適当にフィールドを書き、対するように立つ。ボールを構えた。

「ポッチャマ、行け！！」

「イシツブテ！最初は君だ！」

「ちゃま！」

「イシイ！」

「攻めろ、泡！！」

イシツブテを包むように泡が広がっていき、勢いよく弾けた。

「イッシィ…」

「イシツブテ、ステルスロック！！」

「イッシア!!!!」

ヒョウタの指示に従い、イシツブテが地面に拳を叩きつける。
フィールドに、石の破片が転がった。だが、それだけで特に何も怒らない。

「…?なんだ?ま、いいか。ポツチャマ、止めだ!」

「ちゃまー!!!」

「イッシイイイ…」

そのまま素直に気絶する。審判の旗が上がった。

「イシツブテ、戦闘不能!!!」

「よし、ナイス」

「ちゃま!」

「強いねー。じゃ、切り札の…ズガイトス!!!」

「ズッガアア!!!」

見たことのない固体だった。検索のため、図鑑を開く。
ずつきポケモン…。

「ほう、見たことないな…。岩タイプか。よし、泡だ!!!」

「ちゃ…ちゃま!?!? ちゃまま!!!」

足を押さえ、飛び上がるポツチャマ。

「どうした!?!」

「ちゃま、ちゃま!!!」

見れば、その足には小石が突き刺さっている。

「!さっきの技か…!!」

「その通り。地味に痛いのが『ステルスロック』の真骨頂!!ズガイトス、頭突き!!」

「ズッガア!!」

「ちゃまー!!」

強烈な頭突きを受け、三メートルほど吹き飛び、転がった。辛そうに立ち上がる。

「ポツチャマ、大丈夫か!?!」

「ちゃ、ちゃま…ちゃま!!」

痛みを我慢して、胸を張るちゃま。少し無理をしているように見える。

これなら…今、頭の中で考えている無茶な賭けもできるな。

「よし、偉いぞ。…ポツチャマ、ちよつと」

「ちゃま?」

こそこそと、作戦会議。ヒョウタはそれを不思議そうに見ている。

「よし、いけるな?」

「ちゃま…ちゃま!!」

「話し合いは終わったかい?」

ちゃんと待っていてくれたことに感謝しながら、ヒョウタにしっかりと向きなおす。

「すみませんね。待ってて頂いたみたいで」

「いやいや。さあ、どう切り抜けるのか見せてもらおうよ」

ヒョウタは微笑んでいたが、その笑顔は本気だった。

「ああ、わかってるよ。ジャンプして泡だ!!」

「ちゃまー!!」

「甘いね!!ズガイトス、かわすんだ!!」

「ズッガア!!」

泡がすべて外れる。ズガイトスが、また頭突きの体制をとった。

「よし、これで地面に降りた瞬間に終わりだよ!!」

「…それはどうかな？」

「何!？」

「あれを見な」

中空を指差すダイヤ。その先には…

「あ、あれは!？」

「ちゃままままままま!!!!」

「どうだ、あの頑張り!!むちゃくちゃ頑張って羽ばたいて、滞空時間を延ばしてるぜ!!」

「ば、ばかな!!ポツチャマが空を飛ぶだなんて…!!」

ヒョウタの言葉通り、ポツチャマは飛んでいた。ホバリングという奴だが。

だが、ズガイトスが呆けている、今こそ好機!!

「行け、泡!!!!」

「ちゃまー!!!!!!!!」

「ズガ!?ズガガガア!!」

怯んだところに、泡が全弾ヒットした。ズガイトスが倒れ、審判の
声上がる。

「ズガイトス、戦闘不能!よって勝者、チャレンジャーダイヤ!」

「よっしゃああああ!!」

「ふう…。まさか、あんなことが出来るなんて…予測不可能だよ」

「ちゃま!!」

ポツチャマは、誇らしげに胸を張った。どうやらこれがこいつの癖らしい。

「これがシンオウリーグ公認バッジだ。受け取ってくれ」

ヒョウタの手の中に輝く、バッジを受け取る。

だが、それと一緒に何か手渡された。

「ん、ありがとう。…あれ、これは?」

「ボクからの気持ちだよ。秘伝技の岩砕き。きっと必要になる」

このときダイヤの脳内に浮かんだ謎の図式。

『秘伝技をくれる ↓ 秘伝技の継承者 ⇒ 師匠!!』

「師匠!!!」

「え!?何の!?!」

第一話・色々飛ばしてクロガネシティ（後書き）

ほうら、もうダイヤ君がおかしくなっていました。

唯、なんとなくヒヨウタを師匠って呼ばせたかったんですよね…。

まあ、こんなになりましたが。

でも別にヒヨウタに稽古をつけてもらうわけではありません。そういう人は別に考えてます。

ではでは、今日中に挙げるつもりで次話でお会いしましょう。

第二話・花畑と宇宙人（前書き）

宣言どおり今日中です。

需要があるかないかと言われたらありません。
そんな感じで第二話です。

第二話・花畑と宇宙人

「あゝ、いい香りだな…」

「ちゃまゝ」

ソノオタウンに着くと、風に乗って花の香りが広がってきた。
見渡す限りの花畑。だが、ここはまだその一角でしかない。

「あっちが有名な、ソノオの花畑か。花で栄える町か……ん？何だ
あいつら」

花畑の入り口に、どう見ても怪しい人影が見えた。近づいてみる。

「…？なんだお前は。ここはガキの来るところじゃない。あっち行
けあっち」

「うわ、なんだこいつ。言われなくなつてどっか行くわ」

あれだ、宇宙人。そんな感じの格好。

しっ、しっと虫でも掃うかのようにされ、中に入れてもらえなかつた。しぶしぶ、先へ進む。

「ちっ。なんなんだあの宇宙人…」

「あの、おにいちゃん」

「ん？ああ、なんだ？」

話しかけてきたのは4、5歳の少女。

…ああ、俺はロリコンじゃないから興味はないぞ。

「あのね、あっちの発電所にパパが居るんだけど、呼んで来て欲し

いの!!」

面倒ごとはごめんだ。先にも速く進みたい。可愛そうだが、断るでしょう。

「んー、それは自分で出来るんじゃないか？」

「えっと、宇宙人みたいな人たちに中に入れてもらえないの」

「あー」

さっきの奴らと、同じようなのだろうか。あれはどうやら複数人：一団として存在するらしい。そして、二つの位置で道を塞ぐなら：ろくな事を考えていない。

「わかった。お嬢ちゃんの頼みだ、お父さんと呼んできてあげよう」

「本当？ありがとー!」

それに、発電所ならすぐそこだ。寄り道と考える也大したことはないだろう。

厄介な事に巻き込まれそうだが、悪人を成敗するのはいい暇つぶしだ。

「…お、あつたあつた」

発電所の前に、ザ・宇宙人。ドイツもこいつも同じ格好しやがって。

「おい、その宇宙人」

「あ？何だお前は」

「中に入れてくんねえ？ちょっと用事がある」

「ふん：俺に勝ったら入れてやろう」

ボールを構える宇宙人。ポツチャマが前に出る。

「ポツチャマ、やってやれ」

「ちゃまー！」

ほぼ瞬時だった。レベルの上がったポツチャマに、この辺りで敵はいない。

「つ、強い…」

「勝ったけど？入れてくれねえかな」

ぐぐ、と引き下がる宇宙人。そのまま、扉に手を掛ける。

「や、約束は守らないのが大人だ！！」

「あっ汚え！！」

素早く中に入り、内側から鍵を掛けられた。なんて動きだ宇宙人。

「くっそ、開かねえ！！壊すわけにもいかねえし…」

「ちゃま、ちゃま」

「ん？どうした、ポツチャマ」

服の裾を引っ張ってくる。見れば、ソノオの方を指差していた。

「…そうか。花畑の宇宙人!! あいつらなら、何か知ってるかも…。ナイスだ、ポッチャマ!!」

「ちゃま!!」

「あれ、居ない」

ソノオに着いたが、花畑の入り口には誰も居ない。と、奥からわめき声が聞こえた。

「おらオッサン、さっさと『甘い蜜』寄越せよ。持ってたろ?」

「た、確かに持ってるが…これは商品だ! 簡単には渡せん!!」

「いいから寄越せ!!」

「はいはい、お取り込み中失礼」

おじさん一人、宇宙人二人。計三人の間に割って入る。

「強盗はよくないね」

「あ、さっきのガキ!!」

「そういうお前らはさっきの奴らだな? このワ○メちゃんヘアー共が、アホなことしてるんじゃないよ」

「なっ! ワカ○ちゃんの何がいけねえ!! くそ…二対一で勝負だ!!」

何タテでもしてやるよ、の一言が風を切り裂く。

「はい、終了。で？それでもオッサンから蜜を奪うのか？」

「う…。お、覚えてろよ！！」

二人が走り去って行く。後姿がシユールだった。
おじさんが頭を掻きながら近づいてきた。

「いやあ、ありがとうありがとう。おじさん助かったよ」

「いや、別にいいんだよ。所で、あいつら何してたんだ？」

「ん、これかい？おじさんが集めた『甘いみつ』！！木に塗ればポケモンが集まってくる優れものさ。一個百円だけど、君にはただで上げちゃおう！」

「あ、どうも」

見ただけでその甘さが分かる、黄金色の輝き。

「そうそう、さっきの奴らがこんなものを落として行ったんだけど…」

おじさんの手には、銀色の鍵があった。…もしや。

「それは！！おじさん、俺にくれ！！」

「ん、何かに必要な？よし、おじさんは全然要らないからあげちゃうよ」

「ありがとうおじさん！！すごく助かった！！」

「あー、気をつけてねー。」

「よししょ」

がちやり、と扉が開いた。どうやら、先ほど手に入れた鍵でビンゴだったらしい。

中に入ると、さっき扉の前に居た宇宙人と目が合う。

「げー!! 何でお前が!!」

「ん、さっきのか。鍵があるから入ったのさ」

「くっ…!! マーズさん!!」

奥から、赤い髪の女が歩いてきた。気が強そう。って言うか、相変わらずの宇宙人服。

どうしよう、流行ってるのかな? 俺が着いていけないのか?

「あら、ボウヤがこんなところに何の用だい?」

「ここの責任者さんに用があるんだよ」

「ああ、あのオヤジか。さっさと返してやりたいところだけど、わたしたちに手伝ってくれなくてね…。」

遠い目をする女。…いや、明らかにこれは…

とりあえず、思いついた質問。

「…あんたらは何?」

「私たちはギンガ団。世界の平和を願う集団さ」

平和を願う…？言っていることとしていることが違ってはいないか？

「ふーん…。そこらの研究員を見る限り、あまり友好的に協力して
るわけじゃなさそうだ。…止めさせてもらう」

「ハハハ！！正義の勇者気取りかい！！？」

「なんとでも言え。行け、ズバット！！」

「ズバット！！」

「ふん、ブニャット！！」

「ズバット、超音波を出せ！！」

聞こえないほどの音が、ブニャットを襲う。頭に星が浮かんた。

「くっ、小賢しい！！」

「翼で打て！！」

「ズバァッ！」

「ニャー！！」

「ぐっ…！！ブニャット、猫だまし！！」

ブニャットの素早い一撃が決まり、怯んだズバットが落ちる。

「ズバット！？」

「ず…ズバ…」

「止めた、切り裂く！！」

「ニャー！！」

「ヤバイ！ズバット、飛べ！！」

「ず…ず…ズバババァァ！！！！」

ズバットの身体が光り、大きくなっていく。

「こ、これは…!!」

「ゴルバツ!!」

ズバットの影が、ゴルバットの姿に変化していた。

「ご、ゴルバットに進化した!？」

「よし、行けゴルバット、エアカッター!!」

「ゴルバアアッ!!!」

「ニャー!!？」

ブニャットが倒れる。

「くっ!!…仕方ない。お前ら、引き上げるよ!!」

「「はっ!!」」

「…ボウヤ、覚えておきな。ギンガ団の名を」

「……」

ギンガ団全員が立ち去ったあと、研究員の男が話しかけてきた。

「ありがとう、君」

「…ん? ああ、いや。礼ならゴルバットに言ってくれ」

「ゴルバツ。」

「うん、ありがとう。あの人たち、妙なことを言っていてね…。ポケモンやエネルギーを集めて宇宙を作るとか…。ボクには理解できないことばかりだった」

「…そうか。妙な奴らだな…。」

少し考えたが、今度は別のことを思い出した。

「ああ、あんた、娘さん居る？」

「え、居るけど。」

「そうか。じゃあ、お嬢さんが呼んでるぞ」

「それを伝えるために来てくれたのかい？ 君は優しいんだね」

「いや。」

「本当にありがとう。じゃあ、僕は娘に会いに行ってくる」

「ああ」

男が出て行くのを見届けて、ゴルバットに向き直った。

「ゴルバット。これからよろしくな」

「ゴルバット！」

仲間が強くなることには、達成感があった。なかなか、言葉では表しづらいことだと改めて感じてしまう。

「…それにしても、ギンガ団…嫌な予感がするが…」

第二話・花畑と宇宙人（後書き）

ついにギンガ団登場です。

もう次の町に行こうかな、それともモミイイベントやろうかな。
どっちがいいですか？

第三話・フリーダムになってきた主人公とハクタイシティ（前書き）

作者「本気でフリーダムになってきました。誰か止めてあげてください。」

ダイヤ「テメエが言うな。俺のキャラがブレブレだろうが、どうしてくれる」

作「今回から、前書きで前回のあらすじのことをダイヤ君と喋る事にしたよ。ウザかったら飛ばしてね。」

ダ「っていうか、基本的に無視していいぞ。あらすじなんて誰も読まねえし」

作「！！お前は俺たちあらすじを書くものを怒らせた！！」

ダ「はいはい。前は、俺が変な宇宙人集団ギンガ団をぶっ飛ばしたりしたぞ。今回はハクタイシティだ」

第三話・フリーダムになってきた主人公とハクタイシティ

ハクタイシティに入ると、もう日が真上に着いていた。

「やべえな…。あれ？何だ、あのすげえデザインのビル」

日を見ていた視線を横に落とすと入ってきた、至る所に棘の生えたビル。

なんだか、周りのものをすべて攻撃しそうな勢いだ。

「面白い形だなあ…あれ、入れねえじゃん。何だこの細い木は」

細くてしなやかで、強力な木が三本、入り口を塞いでいた。

「うーむ…？そうか、これは岩碎きの応用をすればいいんだな？よしよし。ビッパ！！岩碎き！！」

「ビッパッ！！…ビパ？ビッパア」

実は仲間が三匹に増えていました。

チームの中で一番タフなビッパは、困ったようにこちらを向く。

「…何？出来ない？大丈夫だ、俺はお前を信じている！！出来る！

！お前はやれば出来る子だ！！」

「び、ビッパアア！！」

「あー、待ちなさい待ちなさい。物事にはできることと出来ないことがあるでしょう」

気合を入れたところで、突如黒ずくめの女が割り込んできた。金髪が眩しい。

が、折角テンションのあがったところで腰を折られたので若干イラついた。

「ちっちゃっ。これは腐れ縁の友人を見てて気付いたことなんだが…『出来ない』と決め付けられれば出来ない。しかし『出来る』と思えば何でもできる！！俺はビッパの可能性を信じている！！本気だ、本気を出せばなんでもできるんだ！！」

「ビッパアアア！！」

「あー、まあ落ち着きなさいって。このビルがなんなのかわかってるの？」

「知りませんなあ。なあビッパ」

「ビパ！！」

溜め息をついて、ビルを指す女。なんだ、何か俺に可笑しいところがあったか？

「ここは、ギンガ団の支部なのよ。ギンガハクタイビル」

「ああ、『ヤ●ダ電機秋●原支店』的な」

「何でこの世界にないことを言うの？世界観ぶち壊しでしょうが」「すみません」

即行で謝る。と、女の目線がダイヤの手に向いた。

「…あら、それはポケモン図鑑？」

「ん？ああ、そうだけど。戻れビッパ」

ボールの中にビッパをしまい、図鑑を開く。

『ピッ。ポケモン反応なし』

「ということは…ナナカマド博士のお手伝い？」

「正解ですが」

「はぁん、なるほど……。相変わらずみたいね……」

「んあ？」

「あ、いえいえ、こっちの話。じゃあこれをあげちゃいます」

円形の、見たことのある機械。

「これは？」

「秘伝技の居合い斬り。ポケモン図鑑を進めるにおいて大事なことでしょ？」

「……」

クロガネ炭坑と同じ図式（クロガネジム戦参照）が浮かぶ。

「師匠！！！！」

「え！？何！？」

「師匠！！ありがとうございます！！」

「……ねえ、君ってあれじゃないの？見た目的にすごいクールに見えるんだけど」

「あー、こういうノリも結構好きですよ」

少しヒかれたようなのは置いといて。

「それで、師匠はどうしてここに？」

「あー……このハクタイにはね、大昔のポケモンをかたどった像があるの。なんでもすごい力を秘めたポケモンだった、って残されてる」
「ああ、あの丘の上の」

遠くのほうに、大きな像があるのが見える。

「貴方も見ておくといいかもね。…ああ、さっきの秘伝技だけど、このジムリーダーを倒してバッジを手に入れないと、バトル以外で使えないから注意してね」

「了解です。よし、行くぞビッパ」

「だからつくれぐれも岩砕きを使って木をへし折ろうなんて考えないようにね」

「…了解です…」

「…まあ、貴方のビッパもよく育てられているから大丈夫。…じゃあね」

そのまま去ろうとする女に、声を掛け引き止める。

「あ、師匠!! お名前をお聞かせください!!」

「…シロナ。ポケモンの神話を調べている、物好きなトレーナーよ」

バイバイ、と手を振られる。その後姿を見届けて、思ったことを呟く。

「…不思議な人だな…。あ、そうだそうだ。像…」

思い出したように丘に登り、像に着く。石碑の文字を読んだ。

「『生み出されしパル……幾つかの空間を作り出す』…? 消えかかってて見辛い…」

なんだか無駄に存在感がある像だ。圧倒されるというか。

「つと、そうだそうだ。ジムはどこだったかな」

森のようなジム。ハクタイのリーダーは草使いのようだ。

「バット、今回はお前の独壇場だ。よろしく頼むぜ」

「ごるばっ!!」

「そういうのってすごく不利なのよねー。あたし達は使うのが決まってるから」

「うおっ!?!」

茂みの影から声が聞こえたと同時に、女が飛び出してくる。

：へそ出しだが、寒くはないのだろうか。

「や。チャレンジャーのダイヤ君。ヒョウタから話は聞いてるよ」

「あ、そうですか。じゃ、相手してくれるんですね?」

「遠慮なく。じゃ、君そっちで」

「ういーす」

バトルフィールドに立つ。クロガネと同様に、ボールを構えた。

「行け、ゴルバット!!」

「ナエトル!!」

「ごるばっ!!」

「ふえー」

「先手必勝!! 翼で打つ!!」

「ばばばっ!!」

「っふえー!! ぷぎゅう」

ナエトルが一撃でダウンする。

「あっちゃー。やっぱりか。うーん…仕方ない。ロズレイド!!」

「ローズ…ロズッ!!」

草タイプ続き。…いける。

「これで終わらせろ、バット!! 翼で打つ!!」

「ばばっ!!」

「…あまい!! ロズレイド!!」

掛け声で、ロズレイドが茂みに隠れる。姿が完全に消えた。

「なっ…!!」

「ロズレイド、ヤドリギの種!!」

「ばっ!!? ば…ばぁー!!!!」

「ゴルバット!!」

死角からの不意打ち。これは…まずい。

「草結びで止め!!」

「ロズッ!!」

「ばっ!!? ばぁー…」

ゴルバットが倒れたのを見て、ボールに戻る。

「お疲れ。…やっぱり、簡単にはいかねえか…。」

「さあ、このロズレイドのコンボをかわせるかしら?」

それには、まずあの草が問題だろう。…

「…あ」

「?」

ちょうど、ビッパに覚えさせたではないか。フィールドで使えなく

ても、バトルで使えば良いじゃん。

「ビツパ、いけ!!」

「びっぱあ!!」

「あら、その子でどうするの？」

「…師匠、お力を使わせていただきます。ビツパ、居合い斬り!!」

「び……ぱあああ!!」

「なっ!!」

草ごと、ロズレイドを刈り取る。

ロズレイドは苦悶の表情で怯んでいた。

「ろ……ず……!!」

「ビツパ、止めだ、いけ!岩砕き!!」

「っばあああ!!」

「ろずうー!!」

ロズレイドに叩きつけられた拳が、フィールドを砕いた。

「……あちゃー。やられちゃった。やっぱ無理だったかー」

「よっしゃ、ナイスだビツパ」

「ビパ」

悔しそうに頭をかきながら、ナタネが歩いてくる。

「じゃ、はいこれ。フォレストバッジだよ」

「あ、どうも」

「うーん…君は、もっともっと強くなれそうな気がするな。折角だから、他のジムリーダーも全員倒しちゃってよ!」

ジムリーダーとして良いのか、その発言は。

「まあ、そのつもりですが」

「ははは。そうそう、ここから下に行ってからテンガン山を超える
と、ヨスガシティが見えてくるよ。そこがいちばん近いと思うけど」

「ああ、ありがとうございます」

「影ながら応援してるからね、頑張って!!」

「どうも」

これで、バッジは2つ目。順調に進んでいる…。

次の町には、何があるんだろう。期待に胸を膨らませながら…。

第三話・フリーダムになってきた主人公とハクタイシティ（後書き）

今回からやつとシロナさん登場。ししよおおお！！（↑

結構好きなキャラです。更に次回はキャラが増えます。

で、前書きであんな事をした理由なんですが：別の小説家さんがやってたのを見て、やってみたいなあと思いました。

：パクリじゃないです。あくまで参考です。本気で邪魔だと思ったら、感想で申し付けください。

それでは、感想その他いつまでもお待ちしております！！

第四話・自転車争奪―宇宙人幹部との戦い（前書き）

作「ふむ。眠い。」

ダ「知るか。ほら、もうあらすじ始まってんぞ」

作「レポート三つとかマジ有り得ん。」

ダ「…まあ、知らんよ。ほら、早くしろって」

作「ちっ。…えーと、確かダイヤ君のキャラがブルブルラブレで、その勢いでナタネの頭を刈り取ったんだっけ？」

ダ「ちげえよ。テメェ眠いからって適当にすんな。」

作「いーだろー、gdgd感を楽しもうぜ」

ダ「あーもう。…えっと、シロナ師匠に出会って、まあその勢いでナタネさん撃破。今回もハクタイシティだな」

第四話・自転車争奪―宇宙人幹部との戦い

「あ、ちよつとちよつとそこの君」

「ん？俺？」

「そう、キミキミ」

206番道路に向かうゲートで、警備員に声を掛けられた。

「この先は自転車じゃないと通れないよ」

「え、そうなんですか」

「うん。道路と言う名のサイクリングロードだから。…ああ、もし持って無いんだったら、

ハクタイのサイクルショップに行くといい。レンタサイクルもしてくれるから」

「はい、ありがとうございます。」

親切な警備員だ。若干イケメンだったし。来た道に戻るのは面倒だが、仕方ない。

サイクルショップは、思ったより近かった。自動ドアの中に入ると、困った表情の少年が話しかけてきた。

「おや、お客さん？」

「ああ。自転車を一台借りたい」

「残念だったね。今、店長がいないんだ」

「…どこ行っただの？」

「ギンガビルに行っただけ、帰ってこない」

脳内に、刺々しいビルが浮かんだ。俺は早くヨスガシティに行きたいのに、邪魔をしてくれる奴らだ。

「よし。ちょっと行ってくる」

「おらあ！！どけどけ宇宙人ども！！」

「うわああ、なんだこいつは！？みんな、止め……うぐあああ！！」

わらわらした宇宙人を薙ぎ払い、最上階にたどり着いた。そこには、縛られた中年の男、そして変な格好をした女。

「おや、誰も止められなかったのか。情けないねえ」

「…あんたがギンガ団のボス？」

「あははは！！私がボス？面白いことを言うねえ」

「違うんだー…じゃ、そこに居るのが店長さん？」

「それは合ってるよ。このオッサンが、このピッピを取り返しにきたって五月蠅いから、ちょっと黙ってもらってるだけさね」

黙るどころか、すっかり伸びている。

「…で、あんたを倒せば店長さんは返してもらえるのかな？」

「それも正解。私の名前はジュピターよ。行きなさい、スカタンク
！！」

「シャアアアア…！！！」

ボールから出てきたスカタンクが、こっちを睨みつけてくる。その
風格だけで、レベルは感じ取れた。

「…強いな…よし。行け、ポツチャマ！！」

「ちゃまー！！！」

「ふん、そんなポツチャマ程度で、私のスカタンクにかなうとでも
？」

「やってみなきゃわからないさ。バブル光線！！」

「ちゃままま！！！！」

泡が、スカタンクを包み込む。が、瞬間、その姿が消え、ちゃまの
背後に現れた。

「なっ！？」

「不意打ち！！」

「シャアア！！」

「ちゃまっ！！！！」

壁に叩きつけられる。ぽてっと地面に落ちた瞬間、別のボールを取り出した。

「くっ……。ゴルバット！！エアカッターだ！」

「ばばばっ！！！！」

代わりに場に出したゴルバット。その作り出した空気の波が、スカタンクを切り裂いた。

「なかなかやるじゃないか。けど甘いね！辻斬り！！」
「…ばっ！？」

一瞬動きが止まる。と、ゴルバットが地に落ちた。

「な！？」

「遅い遅い。まだまだね」

「くっ…！！終わり…か…？」

残るビッパの速度では、追いつけない。本当に、詰んでしまった。

「さて、ビルを荒らしてくれたこと、後悔させてあげるよ」

「くっ…！！！」

「ばばばっ…！！」

ジリジリと、ダイヤに迫るジュピターとスカタンク。その後ろから、援軍の宇宙人も歩み寄ってきた。

『ゴルバットはもう戦えない…クソッ、ビッパを盾にするわけにもいかねえし』

「さあ、これで終わりだ！！」

「シャアア！！」

『殺られる！！』

スカタンクの爪が振り下ろされ、目を閉じた。

だが、一向に痛みは届かない。恐る恐る、目を開けた。

「ア…ア…」

カキン、と凍りつくスカタンク。戦闘不能となっていた。ジュピターもダイヤも、『まさか』という表情になる。周りの宇宙人も同じだ。

俺は気付き、壁際を見た。そこに居たのは、俺の相棒。

「ぼた!!」

「ポツタイシ! お前、進化したのか!!」

ポツチャマからポツタイシへと進化したらしい。

図鑑で、技を確認する。

「冷凍ビーム: なるほど、強い技を覚えたな」

とりあえずゴルバットをボールに戻し、ポツタイシと共にジュピターに向きなおす。

「どうする? まだやるか?」

「くっ!!! あんた、ただじゃ済まさないからね!!!」

撤収していく宇宙人たち。

「: まだまだ、俺らは弱いな」

「ぼた…」

『んー!! んー!!』

「あ、しまった」

急いで店長の縄を解き、枷をはずす。

「済まない、大丈夫か？」

「ふう、ありがとう、助かったよ！ピッピも無事だし、よかったよ
かった。…あ、もしかして、君は旅の人？」

「ああ。こんなときになんだが、自転車を一台貸して欲しい」

それを聞いて、店長はものすごくいい笑顔。

「貸すだなんて！！一台君に上げよう。命の恩人だ、そのくらい安いもんだよ」

「あ、ありがとうございます！！」

「お、自転車を手に入れたんだね。それなら通れる」

「あ、どうも」

先ほどの警備員。相変わらず笑顔が爽やかだ。

「ガンガンかつ飛ばすと爽快だよー！！あ、でもテンガン山は足場
が悪いから気をつけてね」

「了解です。ありがとうございました」

自転車で、勢いよく道を駆け抜ける。

景色が流れていった。その爽快感に、つい鼻歌が浮かぶ。

「~~~~♪~~~~うお!？」

突然、目の前に何かが出現して、激突した。数メートル上に吹き飛ぶ。

身体と自転車が着地。自転車は無事のようにだ。

「うおお…痛たた…なんだこりゃ」

見てみれば、石像のようだ。触ってみても、押しても引いても全く動かない。

「…ん?これって」

図鑑をかざす。表示されたのは…『ノズパス』。

「ああ、なるほど。…面白い奴だな。お〜い」

返事は無い。

「お〜い」

全く返事が無い。あれか、ただの屍か?

「…えい」

ボールを投げる。ボンツと音がして、ボールの中へ。ボールはそのまま三回転がる。光が消えた。

「……大丈夫かこいつ……」

ボールを拾い、中を覗き込むように見る。
ダイヤは『ま、いいか』とつぶやいて、微笑んだ。

第四話・自転車争奪―宇宙人幹部との戦い（後書き）

一つ言わせてください。

超眠いです!!!（↑

また、速めに次回を仕上げます。

第E X話・狭間にて（飛ばしていただいて構いません）（前書き）

超エクストラ話です。

飛ばしても本編とは関わりないので問題ありません。

寧ろ飛ばしていただければ…。

第E X話・狭間にて（飛ばしていただいて構いません）

黒い、暗い、長い廊下。

「つたく、めんどくせえなあ。また仕事かよ」

「お前：それはニート発言だろ。それ言ったら社会人やめろよ」

「別にいいじゃねえか、めんどいもんはめんどい。ハッキリしてんだろ」

男が2人、歩いていた。1人はフードの位置を直し、もう1人はいかにもだるそうに腕を頭の後ろで組んでいる。そこに、後ろから女が合流する。

「ふふ、貴方らしくていいんじゃないですか」

「ん、何だ。お前も仕事か？」

「珍しいな、俺たち三人が揃うなんて」

三人は深いフードの付いた、真っ黒なコートに身を包み。唯、廊下を歩いていた。

「今日の客は大物らしい。くれぐれも気をつけろよ…特に」

「何故俺を見る」

「さあな」

「んだとコラ！！」

「やんのかゴラ！！」

「ふ、2人とも落ち着いて！！」

男2人の下らないやりとりを、女が必死に止める。

「：着いたな」

「疲れたー。なあ、帰っていい？ W W」

「お前は黙ってる」

廊下の端、真っ黒な扉。

長身の男はそれに手をかけ、開く。

「お待たせいたしました。依頼をお伺い致しましょう」

第E X話・狭間にて（飛ばしていただいて構いません）（後書き）

読んでしまったんですね…。

まあ、別になんでもないです。書きたくなって書きました。

第五話・変な男とコンテスト（前書き）

作「うああああ、眠い」

ダ「寝ろよお前」

作「書き始めたらとまらねえww」

ダ「自業自得。…ええと。確かジュピターって奴に勝って、自転車もらえてイケメンロードを下った。」

第五話・変な男とコンテスト

最近、独り言が多くなってきた。まあ話し相手がいらないから仕方ない。

「ハードな土地だ…」

テンガン山の洞窟。岩肌が悪く、歩くたびに体力が取られる。

「…けど、何か力を感じるな…なんだろう」

「そうだろうな」

「うおっ!？」

気付くと、後ろから青い髪の男が近づいてきていた。

男はよくない顔色でこちらを見、口を開く。

「このテンガン山はシンオウ地方の始まりの場所。そういう説もあるそうだ」

驚い表情で、返事も返せないダイヤを気にもせず、男は続ける。

「ここには、世界の始まりの空気が満ちている。力が満ちている」

「…力？」

やっと言葉が出た。

『力…って、何のことだ…?』

そんな風に考えていると、男は鋭くダイヤの瞳を見つめる。

「君は、ポケモントレーナーだな」

「…ああ」

「争いは醜い」

男の声は、どこか悲しげだった。

「だが、ポケモン勝負と争うことは全然違う。君もポケモントレナーなら、そのことを忘れないで欲しい」

「あ、ああ」

男はそのまま去っていった。…変な男だ。

…あれ、去っていった？…ということは…!!

「あ、出口…!!」

光が見えた。暖かい。

「よっしゃー…うおっ!?!ぐううおおおお…!!」

石につまづき、派手に転がった。

「痛た…大分落ちたな…」

テンガン山の出口が大分遠くなってしまった。と、目の前にポケモンが居ることに気付く。

「…?こいつは…ミミロルか。妙な格好だな」
「みみっ」

無駄に、ドレスやアクセサリーで着飾っている。と、遠くから何か声が聞こえた。

「ミミー!!…あ! いたいた…ありがとう、君」

「ん? ああ、別に構わない」

女が駆け寄って、ミミロルを抱き上げる。

「君がいてくれたおかげで、ミミが見つかったから…そうだな、お礼がしたいから、後でコンテスト会場に来て!!」

「会場?」

そういえばヨスガには、ポケモンコンテスト会場があると聞いた。きっとそのことだろう。

「じゃーねー!!」

「あっ、ちょっ!!」

見かけによらず、駆け足が異常に速い女だった。空を見渡す。

「…会場…あれだな」

ひとときわ大きいドームと、アドバルーンが見えた。行列もちらほらだが、俺はあまりコンテスト会場は好きじゃない。

そもそも人が多くて込んでいるし、更に言えばコンテスト自体興味はあまりないからだ。

そんな事は置いておき、人ごみを掻き分け、自動ドアを潜る。……と。

「よっと…あれ? ゲッ!!」

「あら、ダイヤじゃない。もうこんなところに来たの」

「えっ？この子、アヤコさんのお知り合いですか？」
「ん、息子よ」

そこに居たのは、さっきの女と…我が母。

「……っそ、何でいんだよ…」

「暇だったから」

「む、息子さん！？すっごーい…あ、さっきのお礼。はい、アクセサリケース」

「え？」

女の手から渡される、ピンク色のケース。…ハートは痛いぞ。どこ
の朝アニメだよ。

「ちょっと待て。俺はコーディネーターになるつもりは」

「あら、コンテストに出るの？それなら、ポケモンだけじゃなくて
あなたもおめかししなくちゃ。えっと…」

「ちょ、話を」

「はい、これ。ちゃんと着てね」

渡されたのは、真っ黒な燕尾服…あれ、タキシードとの違いって何
だ？

「…おい、タキシードは俺の趣味じゃねえ」

「じゃーねー」

「無視かよ！…!!」

タキシードを息子に手渡し、母は帰っていった。畜生、調子狂う。
隣の女も、若干の同情がこもった声で言う。

「…まあ、アヤコさんが母親だと大変ね…」

「どうも…」

「でも、腕は相当なものよ。貴方がうらやましいくらい。頑張ってるね」

続けて女も去って行った。名前も名乗らないとは失礼だな…。そこで、重要な事実を思い出す。

「…あ、ジムジム!! 忘れてた!!」

急いで走っていこうとすると、扉で誰かとぶつかった。後ろに転がる。

「うお、痛たた…」

「オー、大丈夫でーすか？」

妙な喋りの女だった。どこか、外国人だろうか。

「あ、大丈夫っす…」

「…オヤ、もしかしてジムの挑戦者？」

「ああ、そうだけど」

「フーン…うーん…」

じと、と上から下まで（まだ地面に転がったままだから下だけか）を眺められる。

「もっともつと強くなってから、ジムに来てくださーい!! そしたら、ワタシが相手してあげまーす」

「え?…あんたがジムリーダー!?」

「ハーン! わたしがメリッサ! あなたの挑戦、待ってますよー!」

その場には、メリッサの残した高笑いだけが木霊していた。

「…なんだったんだ…」

いつの間にやらメリッサの姿は消えていて、仕方ない。喧騒の中、扉を出た。

と、今度は見慣れた友人の姿。…さっきからいろんな奴に出会う。

「よっ、ダイヤ!!」

「…ジュンか。どうした」

「お前と戦いに来た!!」

ボールをこっちに向ける。…相変わらず、元気な奴だ。その元気の半分くらいほしい。あ、やっぱりいない。

「…仕方ないな…行け、ポツチャマ!!」

「いっけえハヤシガメ!!」

「ぼたー!!」

「ガー!!」

登場早々、爪と翼がしのぎを削る。一旦二体が後ろに跳び、間合いが開いた。

「冷凍ビーム!!」

「かわせ!!」

ポツタイシの放った冷凍光線を、見事にかわすハヤシガメ。見た目以上の素早さだ。

「なら、続けてメタルクロー!!」
「ガメツ!!!」

ポツタイシの硬質化した爪が、ハヤシガメを切り裂く。

「くっ!!! 葉っぱカッター!!!」
「がー!!!」
「かわしてバブル光線!!!」
「ぽたっ!!!」

攻撃を華麗にかわしたポツタイシの技により、大量の泡に覆われ、ハヤシガメが膝を突いた。
ジュンが、息も尽かさずボールを投げる。

「く!!! 行け、ポニータ!!!」
「なら!!! お前だ、ノズパス!!!」
「くううん!!!」
「.....」

ずしん、と音がしてノズパスが着地する。

「..... ぽた?」
後ろに控えたポツタイシが疑問符を浮かべる。

「なんだそいつは!?!」
「ノズパス、岩落とし!!!」
「.....」
「.....」
「.....」

返事が無い。ピクリとも動かない。

「…OK？」

「ノズパスううう！？返事Please！！」

「……………」

待ちきれずに、ジュンが先手を取る。

「ポニータ、火の粉」

「くううん…うっ！！」

「なっ！？」

突如、がらがらと、ポニータの頭上目掛けて岩が降ってきた。ポニータを巻き込む。

「きゅううん…」

「ぽ、ポニータ！！」

ポニータは気絶している。隣で動かないノズパスを眺めた。

「ノズパス…お前か？」

「……………」

返事は相変わらず無い。だが、…何か伝わった。

「じゃーな、ジュン。俺の勝ちだ」

「くそっ！次は勝ってやるからな！！」

「頑張れよ」

けど、着実に強くなっている。負けてはいられない。
ノズパスの入ったボールを元に戻し、とりあえずズイタウンへ向か
った。

第五話・変な男とコンテスト（後書き）

次回も速めに！

第六話・ポケモン、ゲットだぜ！！（inズイタウン）（前書き）

作「ネタがないよ。」

ダ「何だいきなり。」

作「ネタください。もうすぐ対ギンガ団編です。」

ダ「ネタばれすんなよ。」

作「いーだろー、もう心は殿堂入りしてるんだよー」

ダ「…あ、あらすじな。テンガン山で変なオッサン、ヨスガで母さんにあって、ジムリーダーとバトルの約束して、ジュンにバトルで勝った。今回はズイタウンのみだな。」

第六話・ポケモン、ゲットだぜ!! (inズイタウン)

「ズイの遺跡？」

休憩ついでに立ち寄った牧場。そこで、男との話に上がった。

「おう。ここらではちと有名だな。面白いポケモンが見られる」

「ふーん…行ってみようかな」

そう男に言われ、少し興味がわいた。東のほうだと聞き、森に向かう。

「…森が深い…」

神秘的な空間。木漏れ日が輝き、時々ポケモンも姿を現す。

「お」

突如目の前に現れた、雰囲気のある入り口。中で、何かがうごめいているように感じる。

「…すごいな」

一歩踏み入れると…目の前に黒い影。

「ぶっ!..?」

べちっと、何かが顔に張り付いた。

「うおおお!?!?!? 何だコリャ…」

大慌てで引き剥がすと、それはポケモンのようだった。

「…アンノーン?」

「ぴろろ」

図鑑で見た事があった。不定形のポケモンで、謎が多い奴……の、Fの形だろうか。

「なるほど、アンノーンの遺跡なのか…。」

「ぴろろ!」

「あ、悪い悪い。」

手を放してやると、アンノーンがぺちぺちと頭を叩く。

「…? 何だ?」

「ぴろろ、ぴろろ」

さらに、奥へ奥へと言わんばかりに引っ張ってくる。

アンノーンも随分と慌てている。…なんだろう。

「奥に、何かあるのか?」

「ぴろろ」

「分かった、行こう」

アンノーン（F）の指すまま、奥へと向かう。どうやら、途中途中で罠が仕掛けてあるようだ。

ふと、Fの死角に、矢の穂先が煌めく。

「F! 気をつけろ!!」

「ぴろっ!？」

「くそっ!!」

弓矢を弾き、Fを引き寄せる。

「気をつけろって言ったろうが。こっちに来い」

「ぴろ…ぴろ!ぴろろ」

と、一階降りた先に見えた小部屋に急ぐF。

「どうした」

急いであとを追うと、圧巻。

小部屋には似つかわしい、大きな岩を指していた。

「それを、どうするんだ？」

「ぴろ!!」

必死に持ち上げようとしている。

「どかせばいいのか」

「ぴろ!!」

「…よし、全勢力で行くか! バット、ビツパ、ちゃま、ノーズ!!」

「ばっ!」

「びば!!」

「ぽたー!!」

「……………」

全員整列し、岩に向かう。

「ゴルバット、エアカッター！ビツパ、岩砕き！ポツタイシ、メタルクロー！ノズパス、体当たり！！」

「「オオオオ！！！」」

バットが削り、ビツパがヒビを入れ、ポツタイシが裂き、ノーズが砕いた。

岩ははじけ飛び、粉々の塵となる。

「どうだ、F」

「ぴろろ」

Fは満足そうに頷く（というか身体を曲げる）。それにダイヤも微笑んで、皆をボールに戻した……すると、何か。

「……………ん？」

穴から、何か…。

「うおお！？」

轟音と共に、大量のアンノーンが噴出してきた。目の前を覆いつくし、気付けば……。

遺跡の外にいた。

「う……………ん。なんだったんだあれは…。」

「ぴろ」

「お、F。仲間のところに戻らないのか？」

「ぴろろ、ろろ」

恐らく、仲間を助けるために俺を呼んだのだろう。そしてこいつは、その役目を
終えて…。

「俺と来たいのか？」
「ぴろろ！」

Fは頷く（というか身体をr y）。バッグから出したボールを当てると、Fが光となって吸い込まれた。

「…よろしくな」

第六話・ポケモン、ゲットだぜ!! (i nズイタウン) (後書き)

ネタください (↑)

第七話・トバリジム戦、仲間の鼓動（前書き）

ダ「なんかさ」

作「ん？」

ダ「ジムリーダー、手持ち少ないっていう話があったらしいな」

作「ぎくっ」

ダ「バトル短いつて感想もyugataさんから貰ったよな？」

作「ぐきっ。」

ダ「何が折れたんだよ。…で、実際どうなんだ？」

作「…いや、なんていうか…早く、話進めたかったっていうか…お前を確実に勝たせたいっていうか…」

ダ「本音は？」

作「めんどい!!」

ダ「……前回は、アンノーン通称Fを仲間に加えた。それだけだったな？」

作「めんどかった!てかスペースなかった!」

ダ「…ちよつとこっち来い」

作「え？あいやー……」

第七話・トバリジム戦、仲間の鼓動

ズイタウンから北に行こうとしたところ、謎の黄色い集団に阻まれる。

「あつれー？…おーい、コダック諸君。通してくれ」

「コダー……」

コダックたちが道を塞いでいて、通れない。

全員をよく見てみると、頭を抱え込んでいるようだ。

「頭痛？」

「コダー……」

「そういうのに効く薬はないし…悪いな。役には立ちそうにない」

道が通れなければ仕方ない。先にトバリへ向かおう。

そう考えてため息をつく、急に雨が降り始めた。

「やっべえ！！自転車自転車…！！うおおお！！！！」

「はぁ、はぁ…びっしょじゃねえか」

襟を直して、雨宿りしている建物確かめた。

「トバリポケモンジム…」

なんて、いいタイミングだろうか。しっかり頭を拭いてから中に入る。

「すみませーん、挑戦に来たんですけどー」

「はいはい」

奥から来たのは、自分よりも年下の少女。

「あれ、リーダーさんは？」

「…えっと、一応私がジムリーダーなんですけど」

「あ、すまんすまん。つい見た目で判断しちゃった」

「いえ、いいんです。よくあることなので」

手を前で振って否定する少女。快活な笑顔が眩しいです。

「私はスモモ。あなたは？」

「俺はダイヤ。じゃ、俺があっちであんたがあっちな」

「はい」

フィールドの両側に並ぶ。

ボールを構え、

「始め!!」

審判の声と同時に、投げた。

「ゴリキー!!」

「ゴルバット!!!」

矢張り、聞いていたとおりの格闘ポケモン。これなら、ゴルバットだけで…。

「ゴルバット、エアカッター!!」

真空の刃が、ゴリキーに向かう。

「ゴリキー、気合玉です!!」

「ごー…っ!!」

「ばっ!!?」

刃がすべて気弾によって弾かれ、消えた。

その衝撃で、風圧が届く。ゴルバットは宙で体制を整えた。

「なら、新技だ!どくどくの牙!!」

「ばっ!!」

「ごっ!」

「ゴリキー!!」

牙が妖しく煌めき、ゴリキーの肩に突き刺さる。動きが鈍った。

「よし、エアカッター!!」

「ゴリキー、気合だ…あっ!」

毒で完全に動けなくなっているところに、刃が舞った。

「ばっ!!」

「ごおお!?!」

大きく吹き飛び、墜落した。完全に気絶している。

「ゴリキー、戦闘不能!!」

「よっしゃ、ゴルバットナイス!」

「ばば!!」

翼と手のひらのハイタッチをかわす。

「ゴリキー、お疲れ様。…次は負けませんよ!!」

「来い!」

「ルカリオ!!」

「ブルッ!!」

スモモの声に呼応して、ルカリオが飛び出す。

かなり珍しいポケモンだ。格闘唯一の特殊タイプ。あまり長引かせては、こちらが不利になる…なら。

「先手必勝だ、どくどくの牙!!」

「…ルカリオ、受けて!!」

「なっ!?!」

余裕の発言だ。…何か策があるのか?

「ばば!?!」

「続ける、ゴルバット!!」

「ばば…ばっ!!」

首筋に噛み付く。…が、ルカリオはピクリとも動かない。

ここで、自分のケアレスミスに気付く。

「…はっ！しまった！」

「そう。ルカリオは鋼タイプ。毒は効きませんよ。…ルカリオ、ドレインパンチ！！」

「ブルル…ルッ！！」

「ばあっ！？」

拳を食らって、大きく空に飛ばされる。

「ばば…」

「大丈夫か、ゴルバット？」

「ばばばっ！！」

まだまだやる気だ。その羽ばたきにも力がこもっている。…よし。

「ゴルバット、エアカッター！！」

「ルカリオ、見切り！！」

すべて、紙一重でかわされる。

「なっ！？」

「ルカリオ、波動弾！！」

「ブル…ルアッ！！」

「ばば！？」

弾があたり、ゴルバットは打ち落とされる。

「ゴルバット！？」

「ばば…ばっ！ばばっ！！」

「タイプに救われましたね。防御面で有利なのはきついですが…」

どうにか飛び上がってくれたが、それもありきつそうだな。
どうすればいい…？あの波動弾のスピードは危ない。

それに相手のスピードに追いつけなくては、話にならない。なら…

「バット、速く！！速く動け！！」

「ば…？ばっ！！ばばばばばば！！！」

「…？そんなことをしても、ルカリオの波動弾からは逃げられませんか？」

「構わない！！速く、速く！！もっと速く！！回転して加速して、
最大スピードで攻撃を放てッ！！！」

「ばばば…ばばばばあーっ！！！！！」

高速で動くゴルバットが、光り輝き始める。これは…。何度も見た、

「進化…？よし、進化するんだな！？」

「させません！！ルカリオ、波動弾！！！」

「ブルッ！！」

波動弾は必中技。それにあの位置では、どちらにしてもまずかわせない…。

「ゴルバット、加速しろおお！！！」

「ばばばば…ばばあっ！！！」

爆発。天井すれすれに波動弾が爆発、黒煙が広がった。
煙が晴れると…そこに、ゴルバットの姿はない。

「なっ！？どこに」

「行け！！エアスラッシュ！！！」

「くろばっ！！！」

「はっ！？ルカリオ、波動弾……！」

「ブルッ……るうあっ！？」

スモモの反応が遅れ、真空の剣がルカリオを裂いた。
その背後には、四枚の羽で羽ばたく……クロバットの姿。

「クロバット、よくやった！！」

「くろばっ」

「……ルカリオ、ありがとう」

スモモはルカリオをボールに戻し、嬉しそうな顔で近づいてきた。

「あなたのおかげで、自分の弱点がよく分かりました。ありがとうございます
ございます」

「いや、礼を言うのは俺のほうさ。バットが進化できたのもあんた
のおかげだよ」

「いえ、そんな。……あ、これ、コボルバッジです。受け取ってくだ
さい」

「ありがとう」

手のひらに輝くバッジ。栄光への架け橋だ。

「クロバット、これからもよろしくな」

「くろばっ。」

強くなった仲間とともに、意気揚々と扉を潜る。と、

「あ、ダイヤ君？」

「ん？ああ、なんつったっけ…」

「あ、そっか。私はヒカリ。よろしくね」

「ああ、よろしく」

そう、湖、そして研究所であつた少女。

しばらくの再会に、とりあえず握手を交わす。

「それで、いきなりなんだけど…手伝って欲しいの」

「なんかお困り？」

「うん。じつは、あのビルあるでしょ？あれ、ギンガ団のアジトなんだけど…」

随分遠くに、また攻撃的な装飾のビルが。ハクタイが思い起こされる。

「ああ。で？」

「その倉庫の前で、うっかり図鑑を落としちゃったのよ。そしたら、ギンガ団に盗られちゃって」

「あー。読めてきた。あれか。『拾ったものは俺のもの』とか言い出したんだろ？」

「えーっと…そうなの…」

暗い表情だ。本当に困ってるらしい。

…仕方ない。やってやるか。

「どこの宇宙人だ？」

「倉庫の前にいると思うんだけど…」

「了解」

倉庫の前に、宇宙人が二人。

『どっち?』

『たぶん、左だと思っただけど…』

『見た目が全く一緒だからなあ。』

ひそひそと、気付かれないように声を出す。

『わかった。…行ってこい、クロバット』

「くろばっ。」

『いいか? あいつらのポケットをエアスラッシュで切るか、驚かしてもいい。凶鑑を取り返すんだ。』

「ばっ。」

頷いて、クロバットが飛び出した。ヒカリはそれを心配そうに、

『大丈夫なの?』

『大丈夫だろ。』

「ん? なんだ?」

「クロバットか…。野生は珍しいな、捕まえるか?」

「…ばばばばばばあっ!!!!!!」

「「うわあああああ!?!?」」

『…大丈夫じゃないな……………。』

つい、頭を抱える。目の前は悲惨。

クロバットがエアスラッシュを乱射すると、宇宙人どもがどこかへ去っていった。

「あ、あれ。凶鑑だろ」

道の真ん中に落ちる、赤い端末。

「本当だ!! ありがとう、ダイヤ君!!」

「いいんだよ。…じゃ、俺は先を急ぐから」

「うん、気をつけてね」

いいことをしたなあ、と考えていると、隣でクロバットが嬉しそうに笑っていた。

『お前はやりすぎだと思うがな…』

第七話・トバリジム戦、仲間の鼓動（後書き）

作「…すみませんでした…（泣）」

第八話・大乱闘ノモセ大湿原（前書き）

作「ねみーー」

ダ「その前にいうことあるだろ。謝れよ」

作「拓也様。折角ネタを頂いたのに、本編として書くことができませんでした、申し訳ありません。ですが、必ずEX話等で仕上げたいと思います。まことに申し訳ありませんでした」

ダ「全く、作者がダメですみません。えと、前はトバリジムを制覇。クロバットに進化して、手持ちも強化されました」

作「今回はノモセです。ガンガン進んでいきましょう!!」

第八話・大乱闘ノモセ大湿原

「うーん…」

ノモセのポケモンセンターで茶を飲みながら考える。

「水タイプか…。相性悪いんだよなあ…。」

「あれ、ダイヤじゃん。」

「…ん？」

振り返ると、そこにはジュンが居た。ヨスガ以来か？

「さっき、ななつぼしの前で見かけてさ。ここに居るのかなーって
思ってた」

「そうか、お前もあの辺りに？」

そういえば、さっきリッシ湖のほとりを歩いた。

そんな事を思い出していると、ジュンはいや、と顔を横に振る。

「俺はリッシ湖に行こうと思ったんだよ。けど、なんかの研究があるって言って、中に入れてくれなかったんだ」

「…へえ。お前、凶鑑は？」

「まあぼちぼちかな。そうだ、ダイヤはジム戦だろ？」

「ああ」

「ま、頑張れよ。応援してるから」

「…気持ち悪い事言うな？」

ジュンの輝く目線から逃げ、ジムに向かった。

内部はプールのようだ。水が頬にかかる。

「たのもー」

「ん、挑戦者か!？」

大きな声が響いた。そして、これまた図体のでかい仮面の男が近づいてくる。

「え、っと、まあ」

「そうかそうか!! 俺はマキシマム仮面!! よろしくな!!」

「…は、はあ。ダイヤです」

ばしばし、背中を叩かれる。痛え。超痛え。

「よし! 正々堂々いい勝負をしよう!」

「はあ」

プールの両サイドに並ぶ。

「行くぞ! ギャラドス!」

「ギャオオオオ!!」

「行け、ビードル!!」

「びだあああ!!」

あのビッパが、実は進化してました。何かそんな展開ばっか r r y

「ビーダル、とりあえず水へ！」
「びだっ!!」

どぼん、と音を立てて着水。ここからは水中戦だ。慣れてはいないが、仕方ない。

「様子見で、水鉄砲！」
『びだっ!!』

水中から飛び上がり、ギャラドスの顔面目掛けて水鉄砲。

「…ぎゃ」
「びだ!?!」

ギャラドスはこちらを睨んでくる。やば、怖っ。

「ふっ、ギャラドス!! 破壊光線!!」
「ギャオオオオオ…」
「え? ちょ」

明らかなチャージモードに入るギャラドス。
：ちよっと待て。これって、室内（しかもあんまり広くない）でやったらやばいのでは…

「発射あああああ!!!!」
「ギャッオオオオオオオオオオオオ!!」
「うおおわあああああああああああああ!!?」

ダイヤとビーダルの真横を通り過ぎ、壁をぶち抜いて。

爆風で、髪が逆立つ。

破壊光線は当たらなかった。

「……………」

「……………」

「はっはっは、やりすぎたな!!!」

「アホかあんた————っ!!!!!!」

「ジムのスタッフ全員から怒られたから、バトル以外の方法でバッジ認定をするぞ」

「でしようね」

現在、マキシマム仮面に連れられてノモセ湿原に来ている。どうも湿気が多くてじめじめしていて、好めない。

「この辺りだな」

「なにがですか？」

「じつはな。ノモセでしか手に入らないポケモンというのがいるのは知ってるか？」

その質問には、即効で答えられた。

「スコルピ、マスキッパ、あと…グレッグルですか？」

「そう、正解だ。その中でもグレッグルはノモセでは神聖とされていてな。そして、この湿原には」

がさり、と音がして、後ろの茂みからグレッグルが飛び出してくる。

「…そう、主と呼ばれるグレッグルがいてだな…俺でも少々てこずっている…」

「…もしかして、それと戦えって言うんじゃないですよね…?」

「これが強くてな。偶に、湿原に來た観光客に悪さをする事があるんだが…何分気まぐれでな。」

グレッグルは頬を膨らませ、いかにもダルそうな姿勢でこちらを見ている。

「…その気まぐれが、どっちに運ぶか…」

「…すみません、冷や汗が止まらないんですが」

「奇遇だなダイヤ、俺もだ」

不意に、グレッグルは立ち上がり、身構える。

そこでダイヤは反射的にボールをとり、マキシマム仮面は走り出した。

「ちょー!! あんた何やってんですか!?!」

「すまん、あいつには耐性がない!!! 後は頼んだぞダイヤ!!!」

「あーもう!!! 行け、ビーダル!!」

まずはビーダルが先鋒。

「いけ、岩砕き!!!」

「びだぁぁぁ!!!」

拳が、真っ直ぐグレッグルの頭上へ。
…が、何故だかその拳は地面を砕いた。

「ケッ」

「なっ!？」

「…ケッ」

「びだあああ!？」

ビーダルに一撃決め、間合いを取られる。
その一撃で、ビーダルは見事に目を回していた。

「…T U E E E …」

「気をつけろ、そいつは一撃一撃が化け物だ!!」

「あんたは黙っててくれ」

中堅、クロバット。その羽ばたきは旋風を起こす。

「クロバット、エアスラッシュ!」

「ばばばっ!!」

風刃の乱舞。しかし、それはルカリオのときのように、見事にかわされる。

「ば、ばけもんだろ…?」

「ばば…ばっ!？」

「ケッ!!」

クロバットまで、瞬時だった。まさか、こんな事が。

「うっそお…」

「ケッ」

『もう終わりか?』とでも言いたげに、再び中腰になった。
仕方ない。自身の相棒を信じて、戦うしか。

「頼んだぞ、ポッターシ!!」

「ぼた!!」

「メタルクロード!!」

ポッターシの翼、グレッグルの拳。激突した。が、ポッターシのほう
が力不足だった。はじかれ、ビーダルのように決められる。

「ぼた…!!」

「ポッターシ!!」

吹き飛んだポッターシはすぐに起き上がり、ダイヤのそばへ走って
くる。

そのまま、俺のバッグへ手を伸ばした。

「おいこら、なにしてんだ!?!」

「ぼた、ぼた…ぼた!!」

何かを取り出し、歓喜するポッターシ。
よくみれば、それは…

「不思議な飴?」

「ぼた!」

「おっおい、それは戦闘中に使っちゃ」

ポツタイシは構わず飴を口に放る。

「お馬鹿！何やってんだお前！」

「ぼたーーーーー！！」

「っ！！」

ポツタイシの身体に、光がともる。

マキシマム仮面が、いつの間にやら隣にいた。

「進化のようだな。」

「え、ええ…でもこれって」

「まあ反則だが、公式戦でもなんでもないんだ。別にいいだろう」

「はあ…」

「エエーーーーー！！！！」

金の嘴、鋭いブレードのような翼、巨大な身体。エンペルトへの進化。

「…ケッ」

グレッグルは反応もせず、ただこちらの様子を伺っている。

「…エンペルト、いいか。勝手なマネはするなよ」

「エン！」

「よし。アクアジェット！！」

「エンッ！！」

グレッグルの特性は乾燥肌。水タイプの攻撃は吸収される…が、アクアジェットは、『体当たり』という面がある。

結局は、そこでダメージが通るはずだ。

が、期待に反して、アクアジェットはかわされる。

「ケッ!!」

「強っ!! ハンパじゃねえ!! マキシマム仮面、どうしたらいいんですか!?!」

「:一つだけ、策がある」

「マジですか。最初から頼みますよ」

エンペルトとグレッグルが激闘を繰り広げる中、マキシマム仮面から渡されたのは一つのモンスターボール。見たことのない装飾だった。

「これは？」

「最近、ホウエン地方で開発されたボールでな。名前を『タイマーボール』と言う。これは、戦闘開始からの時間分、つまり相手が疲れた分で捕獲率が上昇するのだ」

「かなり便利じゃないですか。ください」

「一つしかないのだがな」

「いいじゃないですか。どうせ使わないんでしょ?」

「痛いところをつくな、お前は」

ぐだぐだ話し合っている間に、エンペルトは押され始めている。

「くっそ:ええい、よこせ!」

「あ、こら!」

たまらなくなつてタイマーボールを奪い取り、グレッグルの隙を突いて投げる。

「食らえ!」

「ケッ!？」

流石に不意だったようで、ボールは見事に頭にヒット。赤い光に吸い込まれていった。

「どうだ…?」

1、2、3。

光は消え、ボールの揺れも止まる。

「いよっしゃあああああ!!!!」

「エエエーーン!!!!」

「よし、よくやった!!」

ボールを広い、エンペルトとハイタッチ。

その後、マキシママ仮面にバッジを渡された。

「お礼と祝いだ。受け取ってくれ」

「はい、ありがとうございます!!」

再びエンペルトと目を合わせ、笑った。

実に、充実した一日だったような気がする。

第八話・大乱闘ノモセ大湿原（後書き）

途中途中の道路を飛ばすと、ここまで進みが速いんですね…。
ネタ提供をしてくださった拓也様、yugata様、ゲームス様も
ありがとうございました！！

第九話・リッシ湖、追跡行（前書き）

作「寮行きたくないよう。」

ダ「黙って行ってこいよ。あと三十分だろ？」

作「えーん、家に居たいんだい。小説書きたいんだい」

ダ「黙って支度しろよマザコン野郎。調子乗ってると」

作「あ、空きれーだなー」

ダ「……」

作「おや？ダイヤの様子が…アンギャアアアーーーーー」

ダ「…前は、アホの仮面レスラーに無理やり押し付けられてグレ
ッグル&バッジをゲットした。今回は短いが…ま、その間にこいつ
の始末は済むな」

第九話・リッシ湖、追跡行

「よ。調子どうだ？」

「おう、バツジゲツツ」

「おー。やったな」

ジムを出たところで、またジュンと鉢合わせた。
もはや待ち伏せてたんじやないかという疑問まで出てくる。

「：あ、あれギンガ団じゃねえか？」

「ん？…そうだな」

ジュンが指した展望台の近くに、見慣れた宇宙人のシルエットがあった。

「ふふふ…この今日届いた例のブツを、あの湖で…」

「どうするんだ？」

「これを使って湖を……ん？なっ、何だお前ら！？」

「何って…」

「通りすがりの旅人A、Bです」

「お前ら、聞いていたな？俺の大きい独り言を」

大きいって自覚はしているんだな。
それだけまだマシか？

「聞いてたなあ。」

「聞いてましたよ。」

「くっ、仕方ない…！！！」

「あっ逃げた！！！」

二人の前から、脱兎のごとく駆け出す宇宙人。

「よくわかんないけど、逃げる奴は追いかけろ！あーいう奴は悪いやつって昔から決まってるからな」

「仕方ない」

軽く準備運動して、駆け出した。

幸い、宇宙人はそこまで速くない。

「いた、あそこだ！！」

ゲートを抜けて、砂浜に影を見つける。

「はあ、はあ…ここなら」

「何だ、もうばてたのかよ」

「げっ！！くそっ」

かなり疲れているようだが、一体どこにそんな力が。今度は、レストランなつぼしのほうだ。

「…あっ！！」

「どうした、ジュン」

「俺、博士に呼ばれてたの忘れてた！！」

「ああ、そうか。じゃあ、こっちは俺に任せて行け」
「悪い！！」

言い出しっぺが去っていく。それを見届けて、再び駆け出した。

「はっ、はっ…くそっ、急勾配が…」

幾ら若くても、この坂は酷だろう。
丘の下に、また影が見えた。

「なっ…もう追いついたのか…」

「はあ、はあ…もうにがさねえぞ…」

「仕方ない、はあ、ポケモン…勝負だ」

「はあっ、望む…ところだあ」

「スカンプー…」

「え、エンペルト…ドリルくちばし…」

「ピュイッ!!」

「シャッ!？」

スカンプーを一撃でしとめると、宇宙人が膝を突く。

「くそっ…仕方ない…これは幹部に渡そう…」

「あ! 待て……」

宇宙人が最後の力を振り絞って駆け出した。それを追おうと、こちらも最後の力を振り絞ったところで。

「あ」

石につまずき、数メートル滑った。

「ぐうおおおおお!!???」

「ピュイ!？」

エンペルトの声が聞こえる。流石に驚いただろう。
顔面が地面に埋まり、起きる気力が一気に削がれた。

…と、凜とした声が聞こえた。

「あら？ダイヤ君じゃない」

「……………？その声は、師匠？」

顔を地面に埋めたまま話を続ける。

「どういう状況？これ」

「話せば長くなりました……………。すみません、手を貸していただけますか」

手を掴み、引いて起こしてもらおう。泥が散った。

「ああ、お久しぶりです。…エンペルト、水鉄砲」

「プュイイイ！！」

「どうおお！？」

泥を落とすだけのつもりだったが、水の勢いが思いのほか強く、遠くの木に激突する。

「うおおお…頭打った…」

「だ、大丈夫？本当にわかんない子ね」

「す、すみません…」

もう一度、手を引かれる。顔をタオルで拭い、向きなおした。

「で、師匠はどうしてここに？」

「ん、私はこの湖に用があったの」

湖…。ジュンの言う通りなら、リッシ湖と言ったか。

「言い伝えのこと、知ってる？」

「いえ、その辺りは全く」

「湖の中に島があって、中にポケモンがいるの。本当かは分からないんだけど」

「ああ、そういえば」

『ポケモンの神話を調べている』と言っていたのを思い出す。

「ダイヤ君は？」

「ああ、実はかくかくしかじかで」

「ふうん、ギンガ団が…。湖って言うと、やっぱりここね。…何かが起ころうとしている…のかしら…」

「？」

考え込んでしまったシロナの顔を覗くと、笑って返された。

「なんでもないなんでもない。そういえば、この後はどこに行くつもり？」

「ああ、ヨスガシティに戻ってみようかと。メリッサさんが戻ってきていると思うので」

「なるほど。…あ、その前にはズイタウンがあったわね？」

「そうですね。そこはもう…そういえば、コダックが道を塞いでたっけ」

「コダック？…そっか。じゃ、これを使ってみるといいかも」

軟膏の入った箱を渡された。苦い香りがする。

「？…薬、ですか」

「そ。古くから伝わるお薬。じゃ、また」

「あ、はい！ありがとうございます！！」

そのまま、鳥ポケモンに乗って飛び去っていった。と、何か違和感を覚える。

「…あれ、俺、何時名乗ったっけ？」

第九話・リッシ湖、追跡行（後書き）

作「ぐふっ…死んだぜ（ガクッ）」

第E X話・リッシ湖のほとりにて（前書き）

気づきました。

エクストラ話は極端に短いです。

第E X話・リッシ湖のほとりにて

師匠に貰った軟膏を使うため、ズイまで戻ろうとしたとき。

俺の服の裾を、何かが掴んだ。

「ん？」

よく見ると、少年の手。嬉しそうな顔で、ただじっとこちらを見ている。

「…何かな？」

「……………」

…やべえ。

実はこういうタイプが苦手だったりする。

何も言ってくれないと、理解のしようもないからな。

「…おうち」

「は？…ああ」

なるほど。『お家』。理解したぞ。

「迷子、ってことかな？」

「…（こくり）」

小さく頷く。うむ、俺の推理はあったようだ。

「仕方ないな…お家、どこだかわかるかな？」

「あっち」

ちなみに現在は、マニアトンネル前である。
この前ちよつとだけ寄ってみたが、あまり広くない。
そんなことは置いといて、少年が指したのはレストランなつぼし
のある方角。

『ってことは、金持ちのお坊ちゃんか？』
面倒なことになりそうだと、溜息を吐いた。

「じゃ、行こうか」

「……うん」

歩き出して数分。

会話が一切ない。気まずい、気まずいぞ。

「えーと…」

「？」

「…ポケモンは好き？」

なんという無難な質問だ。グッジョブ。GJ。
少年は静かに頷く。

「そっか、俺も好きだよ。」

「…どんなところ？」

「うーん、わからんな。優しいし、強いし、かっこいいし。これだ！
ってのはない。」

「…そう」

今、少年が笑ったように見えた。

「あ、そこ」

「ん？」

指差す先は、リッシ湖だった。

ジュンが言っていた研究員達はいなくなっている。

「何、あそこ寄りたいの？」

「…うん」

少し予定外だが、まあいいだろう。

「いいよ。行こうか」

手を引き、湖のほとりへ向かう。ある程度の距離を歩いた所で止まり、湖面を眺めた。

「へえ…綺麗だな」

「…うん」

しばらく眺めて、本来の目的を思い出す。

「あ、そうだ。早くいかなきゃいけないんだったな？……あれ」

振り返ったが、少年はそこにはいなかった。

「…どこいったんだ…？」

『…アリガトウ…』

「ッ！！」

声のした方を振り返る。

だが、そこは唯湖面が波打っただけだった。

第E X話・リッシ湖のほとりにて（後書き）

次回も頑張ります。

第十話・銀河への導き（前書き）

作「まじねむいー…ゲームしてる余裕もない」

ダ「じゃあさっさとレポート仕上げろよ」

作「俺は2時には寝るんだい！」

ダ「今回はカンナギタウンヘレッツゴ―。あの人も出るよ。」

作「そんな感じでどうぞ！」

第十話・銀河への導き

ズイタウン北、カフェ横。

黄色い群団は、いまだにそこにいた。

「コダックー、頭をこっちに向けろー」

「こだ？」

声をかけ、額に軟膏を塗っていく。全員に塗ったところで、険しい顔が戻った。

「コダー!!」

「おー、元気になったか」

「こだこだ」

こっちに礼を言うように頭を下げ、茂みに消えていった。

「よし。これで通れるな、F」

「ぴろろ！」

「や。薬、効いたんだね」

声を聞いて、振り返る。

「あ、師匠」

「ぴろろ?…ぴろっ!!」

「あっ、F!! ストップだ! ストップストップ!!」

シロナに襲い掛かろうとするFを引き止める。

「あら、アンノーン？珍しいわね」

「すみません、血の気が多くって…。ほら、落ち着けて」

「ぴろろ…」

「いいのよ。気にしてないから。そんなことより、さっきのコダックたちだけど」

コダックですか、と返す。シロナはゆっくりと頷いた。

「コダックは頭痛を起こすポケモンとして知られているけど、その原因までは分かってないんだよね…。」

「へえ…。知らなかったな、F」

「ぴろろ」

「そうそう。この先に向かう？」

「あ、はい。一応、カンナギタウンに」

「そっか。じゃあ、一つお願いを聞いてくれるかしら？」

「？お願い…ですか？」

まあそう構えないで、とシロナは微笑んだ。

「このお守りを、カンナギタウンにいるおばあちゃんに届けて欲しいの。」

「…？古い、ですネ」

「うん。遺跡で見つけたものだけど、おばあちゃんなら知ってるかなと思ってね。お願いできる？」

「お使い程度のことなら、やってきますよ。師匠の頼みですから」
「本当？ありがとう！それじゃよろしくね。」

「あ、はい」

バイバイ、と言って、また何かに乗って飛び去った。相変わらず、不思議な人だ…。

が、しかし。

「先が見えん」

真っ白い霧で、一寸先も見えない。

「どうしたもんだろうか」

周りが見えなければ、進みようがない。

「そういえば、霧掃いとかいう技で霧が消せるんだよな…。ぐあー、覚えさせときゃよかった」

後悔先に立たずとは、まさにこのこと。

…仕方ない…。

「秘技、『第六感』!!」

説明しよう！第六感とは、そのものズバリ勘である！

要は、この霧の中を勘で切り抜けようというわけである。

門をくぐると、霧が一気に開けて行った。

「ふっ、着いたな」

気付けば、もはや先ほどから数時間がたっていた。

「…ん、あれは」

最近何度も見える気がする。宇宙人が、少し下ったところに立っていた。何やら喚いている。

「くっそー！ー！頑張ってここまで来たのに、遺跡には何もねーじやねーか！ー！こんな町、ギンガ爆弾で吹き飛ばしてやる！ー！」

うわーお。いっつあふあんたすていっく。

「おいおい、物騒なことを言う宇宙人だな」
「あ！？」

「俺が相手してやるよ。かかって来い」
「憂さ晴らしには丁度いい。行くぞ！ー！」

「エンペルト、とどめ」
「エンツ！ー！」

「うわああ！？くそ、覚えてろー！ツ！ー！」

そんなにたくさん宇宙人の顔を覚えていられるか。…と、誰から声を掛けられる。

「いやはや、ありがとねえ。トレーナーさん」

「ん？ ああ。あれは何度も見てるから。構わないですよ」

話しかけてきたのは老婆だった。随分やわらかい雰囲気を持っている。

「あたしはここで長老を勤めててねえ。最近あんな輩が増えてきて、困ってたんだよ」

「…この遺跡の所為、か？」

「そのようだねえ。見ていくかい？」

「ああ、是非。…あ、もしかして、シロナさんのおばあさん？」

「ん、確かにシロナはあたしの孫さね」

こう、雰囲気似ていた。お守りを懐から取り出す。

「これ、届けるように頼まりました」

「ああ、シロナの友達だったのかい。ありがとね」

『友達って言うか…まあいいか』

中に案内された。神秘的な明るさが、目に優しい。

奥に、壁画が描かれている。

「遺跡の前に、違う壁画があつたじゃろう？」

「ああ、向かい合っていた」

「左が時の神ディアルガ、右が空間の神パールキア。このシンオウを作った神でな」

順々言葉とともに、壁画を指した。

「これは、その神と対を成す存在。知識、意思、感情をつかさどっておる」

「…？三体、ですか？対なんでしょう？」

「ああ、忘れておった。もう一体おる。この世の裏に存在する世界の神、ギラティナじゃ」

「…なるほど」

シロナが調べているのは、この神々のことだろうか。

「そうそう。トレーナーさん、なみのりの秘伝マシン、もらってくかい？あたしは要らないから」

「あ、ありがとうございます」

もうあの方程式を出すのも面倒くさい。技マシンを受け取って、外へ出た。と、

「…君か」

「…？あ、あのときの」

テンガン山で会った…：哲学者、だろうか。それとも、考古学者か？

「ここで、うちの団員が迷惑をかけたそうだな。すまない」

「…うちの団員？…まさか、あんた」

男は、服の『G』の文字を指す。

「紹介が遅れたな。ギンガ団ボス、アカギだ。」

「あんたが…!!」

この地方での巨悪の根源。極悪非道な所業は、耳に届いてくる。

「君には、各地で迷惑をかけているようだ。…寧ろ、君に邪魔をされてるようだが…」

「お前らがいいやり方でやらねえからだろ!？」

「ああ。私もそう思う。」

「…え？」

男の言葉に、拍子抜けする。つい変な声がでてぞ

「争いは醜い。私はそれが好きではない。…我が団員も、もつと世界を見渡して、大きなレベルで物事を見るべきなのだ。…そう、宇宙のような大きさで」

最後の言葉に、奇妙な迫力を感じた。…こわい。

「私は、理想の世界を作るために伝説にまつわる力を探している。君も何か見つけたら教えて欲しい」

「ふざけんな!! 何であんたらに協力なんか…」

男はダイヤの叫びに動じもせず、どこかに消え去った。

「なんなんだよ…あいつ…」

第十話・銀河への導き（後書き）

眠すぎて意味不明なことを書きそうなので、ここで失礼致します。

第十一話・ヨスガ、コンテストバトル（前書き）

作「コンテスト書くの難しッ!!」

ダ「コンテストするのも難しい!!」

作「やっぱり難しいなあ…。眠い。」

ダ「それ毎回言ってるよな。」

作「更新時刻を見ていただければ分かるよ」

ダ「と、そんな感じで今回はヨスガジム戦。」

作「今回は激しいので、修正箇所も出てくるでしょう。生暖かい目
でお願いします!!」

第十一話・ヨスガ、コンテストバトル

「メリッサさん居ますかー？」

「ハーイ！！来ましたネ、チャレンジャー！！」

ヨスガシティジムに入ると、煌びやかな衣装で登場するメリッサ。どうやら覚えていてくれたようだ。

「バトル、お願いできますか？」

「イエース！！…と、言いたいところですが」

「…何か用事でも？」

楽しそうに、嬉々とした表情で言い放つメリッサ。

「折角ですから、コンテスト式と言うのはどうでしょう？」

「コンテスト！？」

会場の風景と、…母の顔が思い浮かぶ。

「聞けば、アナタアヤコさんの息子さん。コンテストの腕を見たいです」

「…お言葉ですが、俺はコンテスト向きでは…」

「では、会場でお待ちしてまーす！！」

「あっ、ちょっ！！」

声を掛けるまもなく、高笑いを残して去っていった。

「くそっ…！！」

着慣れないタキシードを着て、エンペルトと並んだ。

「悪いな、エンペルト。こんなところにださせて」
「エンツ。」

首を横に振るエンペルト。まあ、許容範囲ということか。
係員の誘導で会場に出た。

『さー、始まりました、ヨスガシティコンテスト!! 今回はスーパーランクコンテストバトルと言うことになります!!』

放送が聞こえる。出番の指定を受けながら、それを横目に見た。

『では、一人目! ミスターコンテスト、ジェントルマンのバリウスさんとロゼリアです!』

歓声が上がる。舞台裏にいるが、自分の緊張が全く感じられない。
モニタリングしていて知ったが、登場は技を出しながら、そのうつくしさを競うらしい。なら、少し打ち合わせておくか。

「エンペルト、ごによごによ…」

「エン?...ピュイ、エーン」

「よろしく」

『二人目、キュートなヨスガの天使!! ミニスカートのエリさんとパチリス!!!!』

火花が遠くに見えた。参加者は四人、だとすると…三人目は、

『そしてお待ちせしました！！今回は珍しくスーパーランク参加！
！我らがジムリーダーにしてトップクラスのコーディネーター！！
メリッサさんとムウマージ！！』

「ムウマージ、鬼火！！」

妖しく、炎が舞った。…美しい。一際大きい歓声が上がった。

「…やる気そがれるなあ…。この後だぜ？エンペルト」

「エンツ。」

「…『俺達なら大丈夫』ってか？…そうだな。ちと癪だが、トップ
コーディネーターの息子の実力、見せてやろうぜ」

『そしてそして、今回ジムのチャレンジャー！！なんとトップコー
ディネーターアヤコさんの息子さん！！ダイヤさんとエンペルト！
！！』

「エンペルト、冷凍ビーム！！」

「エン……ッ！！！！」

氷の柱が聳え立つ。間髪いれず、次の指示。

「メタルクローで巻き上げろ！！」

「ピュイイイ！！！！」

氷の粒が舞い上がり、光を乱反射した。歓声が上がる。
初心者にしては頑張った方なのではないだろうか。

「ナイス、エンペルト」

「エンツ。」

『全員そろったところで、今回の審査員！ミミィさんにサスケさん、そしてシュレイドさんです！！』

ミミィ…？あの時の女か。審査員だったようだ。

『それでは一時審査！！ドレスアップしてください！！テーマはとがったものです！！』

とがったもの…。そういえば、アクセサリーはそろっているだろうか？

「…おお。一通りか」

流石に大丈夫そうだ。この中からとがっているものを探して…。

『終了ー！！！！』

「…おっと、パチリスはあまりテーマに沿っていないように見えますね」

「ちよつと勘違いしちゃったのかな？それより、流石はメリッサさん！！とがったものを基調に、それでいてムウマージの妖しさを引き立てていますね！！」

「…ダイヤさんの装飾は、少し前に押し出しすぎているような気がします…」

ツノのカラだらけがまずかったか。

『それでは二次審査！ダンスです！！』

ダンス！？

そんなものは習っていないし、練習していない。

「エンペルト、たぶん、他の奴のやるようにやればいいんだ。上手く真似ろ」

「エン。」

自信はありそうだが、大丈夫か？

大丈夫じゃないな、大問題だ。

「…まあ、気にすんなよ」

「エン……」

ダンスなんてやっていなかったんだから。

「こけたり滑ったりなんて、よくあるって。大丈夫、他で挽回すればいい」

「…エンッ!!」

「おや、大丈夫でーすか？」

「あ、メリッサさん」

控え室の中、話しかけられる。

「この後はバトル審査。トレーナーのアナタには向いていると思います」

「…忠告どうも」

『皆さん、三次審査が始まります。会場にお集まりください…。』
「行きましょうか」

『三次審査が始まりますよー！！！イエーッ！！一対一、一回戦
はダイヤさん対バリウスさん！！』

「お手柔らかにお願いしますよ、オッサン」

「…こちらこそ」

「始めっ！！！！」

「エンペルト、床に冷凍ビーム！！」

「エンッ！！」

床に氷が広がった。ひんやりと、冷気が部屋を包む。

「くっ、ロゼリア、花卉の舞！！」

「ろぜー！！」

「かわせ！！」

紙一重でかわしていく。

「ろ〜ぜ〜…」

「しまった！！」

「よし、こんらん！！」

隙をついて攻撃。

「なみのり！！」

「エーン！！！！」

「くっ！！ロゼリア！！」

「ろ…ろずっ！！」

波の攻撃範囲から逃れるロゼリア。…だが、波は動かない。

「ざーんねん。フェイクだ」

「なっ！！凍り付いている！？」

『なんとエンペルトのなみのりが、最初の冷凍ビームの冷気で凍りついたー！！！！』

「（まさか成功するとは…）ドリルくちばし！！」

「エンッ！！！！」

嘴で氷を切り出す。ロゼリアは避けようとするが、足を滑らせ氷にのしかかれた。

「きゅうう…」

『ロゼリア戦闘不能ー！！！！ダイヤさん、決勝進出です！！！！』

「よっしゃ！！」

「エンッ！！」

一回戦の後、メリッサのバトルを見た。

…強い。そして、美しい。

あまりに激しく、つい見入ってしまうほど。

あれは、レベルの違いを痛感させられた。

…だからこそ。

「あなたと戦えるの、楽しみにしてました！！」

「こちらこそ、同じですよ!!」

『決勝戦、始め!!』

開始とともに、歓声が響き渡る。二人同時の指示。

「ムウマージ、鬼火!!」

「エンペルト、剣の舞!!」

メリッサの動きは、一回戦と同じ。鬼火をまとわせて打撃を封じ、遠距離から連続攻撃。

「ハイドロポンプ!!」

「シャドーボール!!」

技がぶつかり合った。ハイドロポンプがぎりぎり打ち勝ち、ムウマージを襲う。…が、

『ムウマージ、炎の鎧でガードしたーっ!!』

「ちっ!!」

「そう簡単には通しませんヨ!! ムウマージ、鬼火!!」

一度消えた鎧を作ると同時に、エンペルトに飛び火した。

「エンツ!？」

「しまった!!」

『おっと、エンペルト動けないーっ!!!!』

「ムウマージ、シャドーボール!!」

ダメージが蓄積していく。この火と、鎧を一度に消すには…どうす

ればいい…？

「考えろ…考えろ…！！」

「もっと大きな目線で――」

「っ！！」

不意に思い出した、あいつの言葉。

「…あー！ー！！イラつくっ！！エンペルト、ハイドロポンプ！！！！」

「エ…エー！ーん！！！！」

空中を浮くムウマージ目掛けて、水の大砲が向かう。
が、ひらりと余裕でかわされた。

「おっと、あまりに単純な攻撃ですね？」

「…決まった！！」

ハイドロポンプはそのまま天井に激突。大量の水が飛散した。

「なっ！？まさか、これは！！」

『そのまま、フィールドに雨となって降り注ぐーっ！！』

降り注ぐ雨が、エンペルトの火傷を癒していく。

「簡易的な雨乞いだ。エンペルト、メタルクロー！！」

「エンツ!!!!!!」

「むうっ!?!」

硬質化した翼が敵を切り裂く。

「ムウマージ!!!」

『ムウマージダウンーっ!!!勝者、チャレンジャーのダイヤさんとエンペルト!!!そして、この時点で最高得点のお二人が優勝決定となります!!!!!!』

歓声が上がった。…どうやら、母の名を汚すことはなかったらしい。

「エンペルト、サンキューな」

「エンツ。」

胸を張るエンペルトに、リボンをつけてやる。と、メリッサが拍手をしながら近づいてきた。

「おめでとー。これ、ヨスガジム公認バッジよ」

「ありがとうございます。…これで、後三つか」

バッジをケースにしまう。五つの輝きが眩しい。

「シンオウには、まだまだ強いトレーナーがたくさんいること。忘れないで、一つ一つ強くなっていくといいよ。」

「ありがとうございます!!!」

「…それから、出る時は気をつけた方がいいかもネ」

周りを、たくさん報道陣に囲まれていた。注目されすぎている。照れ隠しに帽子を深くして、ボールを投げた。

「…エンペルト、戻れ！！皆さん、失礼しますよ！！」

人々の間をどうにか抜け、会場を後にした。

「ふう、危ない危ない。…さて、次はどこにしようかな…」

「ミオシティとかはどうかしら？」

「あー、確かにあの辺りなら丁度近めだし…ん？ああなんだ、師匠じゃないですか」

後ろでベンチに座り、ドリンクを飲んでいた。

どこにでも出てくるんだなこの人は。

「お久しぶりです」

「うん、おめでどう。それから、お使いは済ませてくれた？」

「ああ、ありがとうございます。ちゃんと渡しましたよ」

「ならよし。」

隣に座る。

「で、何でミオなんですか？」

「ミオシティにはね、図書館があって、大昔の本が読めるのよね」

「へー。」

「ポケモン図鑑を完成させるのに役立つかもしれないわよ？」

「成程、それもそうですね。…師匠、この地方のこと詳しいですね」

「昔のことを知るには、今を知ること重要なのよ。当然でしょ？」

「はい。…ミオシティ、か…」

立ち上がり、コートの裾を払うシロナ。

「ま、手持ちも六体になったなら、貴方も一人前みたいなものよ。」

「…まさか。まだまだ減らず口の、くそガキですよ。」

「…ふふ。似てるなあ」

「?なんですか?」

笑ったシロナに聞いてみる。が、彼女はその笑顔のまま言った。

「なんでもない。じゃあね」

「あ、はい」

後姿を見送ってから、タウンマップを開いた。

「ミオ…コトブキの向こうか。よし、急ごう」

第十一話・ヨスガ、コンテストバトル（後書き）

眠い。

超眠いです。助けて…こんな夜中に同室の人物がデスノ見てるよ…

第十二話・ミオシテイ、熱血少年と超硬派オヤジとの激突（前書き）

作「さー、今回も途中の道路をすっ飛ばして行きましょう。」

ダ「…あれ？お前さっきまで元気なかったよな？」

作「え？そう？」

ダ「いや、何か『兎玉…何とか』ってずっとつぶやいてたじゃん。
あの人が死んだのを二日後に知った云々」

作「…御冥福を、お祈り致します。」

ダ「そんなことは置いといて。前回はヨスガでひどかった。」

作「今回はあのオヤジが登場するよ！」

第十二話・ミオシティ、熱血少年と超硬派オヤジとの激突

「うーむ、潮風が心地いい」

ミオシティは大きな港町で、昔は運送業が盛んだったそうだが、様々な地方から集まる貿易船。想像も難しいな。

「…ん？あの橋は」

何かの文献で読んだ、跳ね橋と言うやつだろうか。確か、船が通るときに左右に大きく開く。

「ほお、意外に見事……ん、あいつも来てたのか」

その丁度真ん中に、見慣れた姿があった。駆け寄って声を掛ける。

「よ。奇遇だな」

「あ、ダイヤ。聞いたぜ、ヨスガコンテスト優勝？」

「大したことじゃないだろ。…そうだ、バッジは？」

ダイヤが言うと、ジュンは誇らしげにバッジケースを開く。

「俺はここで取ったから、残りは三つ。ま、ヨスガはジムリーダーがいなかったからな」

「そうか。俺も、まだ五つだ。ここで取れば六つだな」

「よし…。勝負だ…！」

「仕方ねえな…。相手してやるよ」

「いけっ、ヘラクロス…！」

「グレッグル…！」

跳ね橋の上での戦い。潮風が頬を撫でた。
グレッグルは初勝負。どんな戦いになるだろう…。

「グレッグル、毒づき!!」

「…ケッ。…」

「ちょっ、言うこと聞け!!」

グレッグルは命令を無視し、そっぽを見るだけ。
俺にはレベルが高すぎたのか…?

「行け、ヘラクロス!メガホーン!!」

「ヘラクロッ!!」

「…ケッ!!」

「おお!!」

メガホーンをするりと避けるグレッグル。流石に、群れの長だっただけのことはある。

「よし、毒づき!!」

「…ケッ」

「また無視かー!!!!」

「気合パンチ!!!!」

「ラクロッ!!」

ヘラクロスの一撃が、顔面にヒットする。

…が、グレッグルは微動だにしなかった。
そのまま、返しの一撃が腹部へ。

「…ケッ!!!!」

「ラクロッ!？」

「おお!! カウンターか!!!!」

「ヘラクロス!？」

「ラクロ…」

ヘラクロスが倒れる。それを見ず、グレッグルは、勝手にボールに戻って行った。

「えええ!？ 気まぐれすぎてついてけねえ!!」

「…それでも強いやつだったな…。お疲れ、ヘラクロス。次はドダイトス!!」

「なら、行けビーダル!!」

「ビダッ!!」

「ドーダー!!」

互い、重量級の対決。相性はこちらが不利か…。

「ドダイトス、ウッドハンマー!!」

「受け止めるビーダル!!!!」

「ドーダー!!」

「び…………だー!!!!」

押し合いが始まる。が、受け止めきれずに、ビーダルが吹き飛んだ。

「だー!!」

「しまった!!」

「追撃のリーフストーム!!」

「びだー!!?」

ビーダルが気絶した。最近こんなのばっか r (ry

…が、これも好機。ビーダルの犠牲は無駄じゃない。

「リーフストームはポケモンのパワーを下げるだろうが。忘れたか？ いけ、エンペルト！！」

「忘れちゃいないさ。ドダイトス、ウッドハンマー！！」

「ドリルくちばし！！」

「ドダッ！！！」

「エーン！！！！」

わずかに、力でエンペルトが勝った。ドダイトスが体制を崩す。

「畳み掛けろ、冷凍ビーム！！」

「エーーン！！！！」

「ドダイトス、地震！！！」

「ドダッ！！！」

地砕きが、エンペルトに迫る寸前。冷凍ビームで、ドダイトスが凍りついた。

「ど…ダ…」

「危ねー、ぎりぎりのところだったな。俺の勝ち」

「くっそー、惜しかったー！！！！…次は負けねーからな！！」

「頑張れ頑張れ。」

結果、二人仲良くポケモンセンターに向かった。

「『恐ろしい神話』…。矢張り、神話はこの辺りか」

ミオシティ図書館には、中々の量の本がそろっていた。何かとシロナや、…アカギの言う神話が気になって、少し調べてみることにした。

「…『始まりの話』…ふむ」

本を読むのは元々好きなので、すぐに集中できるし、苦にもならない。

気がつけば、全ての本を読むのに数時間かかっていた。本を戻し、外へ出る。

「……あゝ、肩こった…。さて、ジムはどこかな」

タウンマップを開くと、目的地はすぐ目の前を示した。

「ここか」

自動ドアが開く。潮風が消え、土の匂いが広がった。奥から、大きな声が響いてくる。

「おお、チャレンジャーか!？」

「あ、はい（あれデジャヴ）。よろしくお願いします」

「ガッハッハッハ、硬い挨拶は抜きだ！！ワシはトウガンだ」

「俺はダイヤです」

「そうかそうか！！…ん？ダイヤ？…そうか、ヒョウタを倒したトレーナーって言うのは君か！！」

ジムリーダー内には連絡網でもあるのか？すごい情報伝達だ。

「いやはや、なにぶんあいつはワシの息子でな。まだまだヒョッコだが」

「あ、成程」

それなら聞いていて当然か。むしろ聞いていなかったら危ない。

「さて、早速始めようか。行けいハガネール！！」

トウガンの突然の言葉と共に、巨体をくねらせてハガネールが登場する。

「グウアアア！！！！」

「いきなり！？」

「どうした、速くせい」

ちよいちよい、と指で誘われる。

…郷に入っては、なんとやら。

「仕方ない…。いけ、エンペルト！！」

「エーン！！！！」

「ハガネール、アイアンテール！！」

「グウオオ！！！！」

「よく見てかわせ!!」

「エン…ッ!？」

「なっ!？」

遅いものだと思っていたが、想像以上のスピードだった。尾が完全に直撃する。

「グハハハ、ワシのハガネールのスピードを舐めてもらっては困るわい!!」

「エンペルト!？」

「エ…ン…!!」

「よし、ハイドロポンプ!!」

「穴を掘る!!」

「エー…ンッ…!!」

「グオオオ!!」

「…しまった…!!」

土中に身を隠すハガネール。ハイドロポンプは外れ、エンペルトは辺りを見回した。

「くそ…どこから来る…!!？」

「ハガネール、今じゃい…!!」

「グオオオオ!!」

「エン…ッ…!!？」

「エンペルトオッ!!」

エンペルトの巨体が宙を舞い、地面に激突した。既に気絶している。

「くっ…!!」

「グハハハ、ワシの鋼軍団に死角はないわ!!」

「鋼…そうだ!! 行け、グレッグル!!」

「…ケツ。……」

不機嫌そうに、頬を膨らませるグレッグル。だが、これが俺の逆転の一手。

「ほう、中々強そうだが…毒タイプでハガネールに挑むと言うのは、ちと乱暴ではないか」

「いーからかかって来て下さいよ」

先ほどのトウガンのように、指をちょいちょい。

「ふむ。ハガネール、氷の牙!!」

「グウウオオオ!!!!」

「……? ケツ」

「グレッグル、余裕こくな!! あいつ、意外に素早いぞ!!」

「ケツ」

「ぐおおムカつくー!!!!」

ハガネールの牙が、グレッグルを的確に捉えた。

が、グレッグルは噛み付かれる寸前にそれを避け、顔面に強烈なパンチが叩き込む。フィールドに巨大な亀裂が奔った。

「なんと!?!」

「グウウウウ!!!!」

「…まじかよ」

「…ケツ」

その強さに、某然とする。

こんな奴を、仲間に使っていたとは。

「ハガネール、穴を掘る!!」

「グッ、グオオオ!!」

「なっ、まだ力が残ってたのか!？」

再び地面に姿を隠す。が、グレッグルはこれにも動じない。

「…?グレッグル?もしかして…なにか、策でもあるのか？」

「……ケッ」

何も答えないが、その背中には頼もしささえ感じられて。

「行け、ハガネール!!」

「グ」

「ケッ!!!!」

ハガネールが地面から顔を出す寸前、グレッグルが地面にパンチを繰り出した。地面が碎け散る。

「グウウウウ!!!!」

「は、ハガネール!!」

「……ケッ」

「よし、よくやった!!」

ハガネールの巨体が沈む。それを尻目に、グレッグルはまたも勝手にボールに戻った。

「…相変わらず勝手だな…」

「ふむ、中々やる奴じゃのう!!力でムリヤリ戦況をこじ開けるとは!!!!」

「さ、そちらの二体目は？」

「見せてやろう。行けい、トリデプス！！」

「ギャオオオオ！！」

顔の広い、恐竜のようなポケモンだ。固そう。

「なら、こっちは…F！！」

「ぴろろ！！」

勢いよく飛び出す。威勢は十分だ。

「…ほう。これまた珍しい。この巨体に向けて、そんなちっこいのを出すとは」

「舐めてると痛い目見ますよ？行けF、目覚めるパワー！！」

「ぴろろろろ！！」

周囲に炎が上がり、トリデプスに向かって飛んでいく。

「トリデプス、受けろ！！」

「ギャウウ！！」

「…？なんだ？」

その広い頭部で、炎を受け止めるトリデプス。

「そのままメタルバースト！！！！」

「ギャオオオオオ！！！！」

「なっ！！」

「ぴろろ！！？」

炎を乗せたまま、こちらに猛突進してくる。速度もかなりのもの。

「F、避ける!!」

「ぴろ!!」

ぎりぎりでかわす。と、その突撃で、後ろにあった岩が見事に砕け散った。

「...!!」

「メタルバーストは、ダメージを1.5倍にして返す技。後手に回るこいつにしてみれば適任適任!!」

「...うかつに攻撃できねえか...」

「ぴろろ!!」

呟くと、Fがぺちぺち、頭を叩いてくる。

「...?俺らしくないってか?...わーった。いけ、目覚めるパワー!!」

「ぴろー!!」

力を溜めるF。そこに、トリデプスが突っ込んできた。

「間を空けるな、トリデプス!!攻めて攻めて攻めまくれ!!」

「ギャオオオオ!!」

「ぴろっ!」

「F!!」

ギリギリで発射した攻撃が弾かれ、突進を受けて後ろに吹き飛んだ。岩に張り付くF。

「くそっ...どうしたら...ん?あれは」

先ほど吹き飛んだ目覚めるパワー。それが吹き飛んだ方向の岩が、凍り付いていた。

「…？」

「どうしたどうした、考え事か！？」

「F、お前…よし。間を開けろ！！」

「ぴろ！！」

間合いを広げ、じっと待つ。

『俺の想像が正しければ…もしかしたら！』

「ふん、行けトリデプス！！」

「ギャアアオオ！！！！」

痺れを切らした、トウガンの指示。これを待っていた！

「足元に目覚めるパワー『氷』！！」

「ぴろろろ…！！ろっ！！」

「ギャオツ！？」

衝撃波と共にトリデプスの足元に氷が広がり、滑って転ぶ。

「おお。本当に出来た…お前、いろんなタイプの技が使えるんだな
「ぴろ！！」

「ふうむ、中々やるのう…。トリデプス、動けるか？」

「ギャオ…ウウ」

必死にもがいているが、それも無駄なようで。

「なら、仕方ない。この勝負、ワシらの負けじゃ」

「え？」

「…あまり、自分の家族が傷つくのは見たくない」

「…なるほど」

トウガンの目は真っ直ぐ、自分を向いていた。
歩み寄り、バッジを手渡される。

「マインバッジ。受け取ってくれ」

「はい。ありがとうございます」

「グハハハ！！シンオウは広い！！どんどん強いトレーナーが出てくるわい！！」

ガッハッハと大きく笑って、トウガンはジムの奥へ消えていった。
放置された俺。

「さて、F。これからどうするか」

「ぴろろ」

Fの頭部を撫でながらつぶやく。と、

「おーい、ダイヤー！！」

「…来たよ」

ジyunが息せき切って、爆煙をあげながら入ってくる。

「どうした？」

「図書館！！図書館に来い！！」

「は？いや、俺はもう本は読んだ」

「いいから早く！！」

「うおおおお！意味わからねえ……」

引きずられ、強制的に図書館へ連行された。

第十二話・ミオシテイ、熱血少年と超硬派オヤジとの激突（後書き）

はい、チートです。

いろんなタイプの技が使えるのはいくない。

やっぱり普通が一番やりやすいですね。

そんなチートも生暖かい目をお願いします。そして感想、評価等ありましたらよろしくお願いします！！

第十三話・湖の伝説、駆ける旋律（前書き）

作「中二回来たー！」

ダ「マジ恥ずかしい。」

作「今回も短いですが、楽しんでいただけると幸いです！」

ダ「前回、ミオシテイジムで勝利した俺は、何故かジュンに拉致られた。」

作「それではそんな感じで！」

ダ「『そんな感じで』は口癖らしいぞ。」

第十三話・湖の伝説、駆ける旋律

「ほら！じいさん、ダイヤの奴連れてきてやったぜ！！」
「うむ」

ジュンに連れてこられた図書館二階には、ナナカマドとヒカリが座っていた。

「あ、博士、ヒカリ。こんちは」

「こんにちは」

「じゃ、俺はこれで！！」

「待たんか！」

ダッシュで逃げようとするジュンを引き止めるナナカマド。う、とすごんで、仕方なく座り込んだ。

「…さて。私はポケモンの進化に付いて研究している。それは知っているだろう。…進化とは、実に不思議だ。人間のように生活に適応するためならば、時間を多くかける必要がある。…しかし、彼らの場合は突然、素早く行われる。実に不思議だ」

すでにジュンは着いて来れていないようだ。

「まあ、これは研究テーマの一つでな。調べていくうちに、この地方の神話に行き当たった。…三つの湖の奥深くに、意思、感情、知識をつかさどるポケモンがいるらしい」

「ああ。そういえば、ところどころでそんな話を聞いた」

「私も、カンナギタウンで聞きました」

「うーん。…それで？」

「それでだ。湖は三つ、お前達は丁度三人。それぞれに調査を頼みたい」

成程、それで合点が行った。湖が二つなら、ヒカリと俺のほうが早いから。

「で、俺はどこに行けばいい？」

「ダイヤにはリッシ湖を頼みたい。ジュンはエイチ湖。ヒカリと私でシンジ湖だ」

「うーん、つまり、俺はエイチ湖でポケモンを探せばいいんだな？」

「まあ、簡単に言えばそうだな」

「なら簡単だ！！いっくぜー！！！！」

ジュンが思い切り駆け出そうとしたところで、ダイヤの頭に何かが奔った。

『タ……ケテ……』

「っう……！！！！」

「…ん？ダイヤ！？」

「どうしたの！？」

「なんか…頭に何か…！！」

地面が大きく揺れた。本が崩れる。

「なっ！？」

「地震か！？」

「きゃあああああ！！！！」

揺れが収まる。

「無事か？」

「…ああ、皆大丈夫だ」

無事を確認して、外へ出る。慌てる船乗りを呼び止めた。

「どうした!？」

「よくわからないが、リッシ湖で爆発があったそうだ!!」

「爆発…? リッシ湖…ああっ!! おいダイヤ!!」

「…ん？」

「あれだよ!! 宇宙人!!」

「…そうか!! 悪いな博士、俺は先に行く!! 皆はそれぞれのところに急げ!!」

駆け出した。…『湖で例のブツを』…あの宇宙人の言葉を変えれば…『リッシ湖で、例の爆弾を』になる!!

「ひでえ…」

水は涸れ、コイキングが跳ねている。土地にも穴が開いていた。見えていて、怒りの沸く光景。

「切れた…!!」

一歩踏み出すと、また。どこかで、聞いたような。

『……………ケテ……!!!!』

「っ…………!! 誰だ!？」

『タス…………ケテ…………!!!!』

「おや、こんなところに子供か」

「っ!!!! お前……なんだ？」

意識が揺らぐ中、敵のようだ。

「この胸のマークが見えないか」

服の胸部分には、Gの文字。

「成程な……。ギンガ団幹部か」

「君は何だ? 私たちを止めに来たのか? ならば遅い。ここの伝説のポケモンは捕らえた」

「!!!! お前…………!!!!!!」

言いよの無い怒り。

「ゆるさねえ!!!!」

「だったらどうする?」

「ポケモンバトルだ!!!! エンペルト!!!!」

「ドーミラー」

「馬鹿にすんな!!!! エンペルト、ハイドロポンプ!!!!」

「エーーン!!!!!!」

「ドー……!!!!?」

怒りの一撃がヒットする。ドーミラーが倒れた。

「…ほう…。少しは楽しめそうだ」

「早く次を出せ！！それとももう終わりか！？」

「ドクロッグ！！」

「ドクロッグ！！！！」

と、続けてグレッグルが飛び出した。

「…ケッ」

「…成程。お前が相手したいのか。なら行け！！思う存分！！」

「ケッ！！」

「ドクロッグ！！！！」

激しい攻撃が繰り返される。突いてはかわされ、突かれてはかわし。しばらく緊迫した勝負がされたとき、不意に男がドクロッグをボールに戻した。

「なっ！！逃げるのか！！」

「戦略的撤退だ。…勝負は預けよう。今頃、マーズがシンジ湖で別のポケモンを手に入れているはずだしな」

「待て！！名乗りやがれ！！」

「サターンだ。小さい勇者」

「くそっ…あっ！！！！」

また、何かが奔った。

『……ガイ……スケテ……』

『コ……イ……ワ……ヨ……』

「ああああ…っ！！！！」

「ケッ!!」

「ぐふっ!!」

グレッグルの突きが、腹部に繰り出された。意識がはつきりする。

「はあっ…げほっ、サンキュー。助かった」

「ケッ」

ボールに戻るグレッグル。何やかんやで、助けになっている。

「シンジ湖が心配だ…!!」

故郷への道を急ぐ。

「ヒカリ!! 博士!!」

「だ、ダイヤ!! 早くヒカリを助けてやってくれ!!」

博士は大丈夫そうだ。それより、ヒカリは…まずい。戦況は悪くなっている。

「ヒカリ!! 大丈夫か!？」

「ダイヤ君!!」

「あら、ボウヤじゃない。…何、仲良しカップルのつもりで助けに

来たの？」

「何だ、またやるのか？」

ボールを向ける。と、マーズはヒカリを睨んで引き下がった。

「ま、ポケモンは手に入れたんだ。ここは引いてあげるよ。じゃーね、ボウヤー！」

ギンガ団をつれて、どこかへ去っていく。

その姿が見えなくなったとき、また何かが頭に響いた。

『コワイ……コワイ……タスケテ……』

「ぐう……お前……誰だ……！！！」

「だ、ダイヤ君！？」

「どうしたのかね！？……ダイヤ君！！！」

「くっ……はあ、はあ……何か、助けを求める声が……頭に」

それを聞いて、驚いた表情で問いてくるナナカマド。

「！それは……何度もあったか？」

「……ああ。図書館で一回、リッシ湖で一回。あと、ここに来る寸前に一回」

「……それは……きっと、伝説の三匹の声だ。後、残っているのは……エイチ湖のポケモンか……」

「！ジュンが心配だ……俺、行ってくる」

「待て……！」

「止めるなよ、博士。あいつは馬鹿だから、俺が行ってやらないと」

と、ナナカマドは首を横に振る。

「止める気はない。…エイチ湖は、猛吹雪の吹く豪雪地帯の近くにある。気をつけて行ってきたくれ」

「……ああ。じゃあ、今度こそ行ってくる」

第十三話・湖の伝説、駆ける旋律（後書き）

作「次回『白き金剛石の輝き』、ギンガ団殲滅戦。また見てくれよ
nボファッ!!」

ダ「スルーの方向をお願いします。」

第十四話・強襲、急襲、三体の救出劇（前書き）

作「ついにギンガ団との対決。」

ダ「ああ、そうだな。」

作「どんな感じだったかは後書きで聞こう。」

ダ「そうか？…あ、前はギンガ団が動き出した。今回は本当の勝負だ」

「あ、起きた？よかったー、皆ー、生きてたよー」

目を覚ますと、木製の天井。

「エーン！！」

「ぴろろ！！」

「ばっ！！！！」

「びだっ！！」

「……ケッ」

ゆっくり起き上がると、額から濡れた布が落ちてきた。見回すと、手持ちの仲間と、見知らぬ女。暖炉の付いた、温かい家の中だった。

「……あれ……？俺、確か……」

「雪の中に埋まってたみたいだよ？」

「……あんたは」

「あたしはスズナ。キッサキシティのジムリーダー」

「ああ……あんたが、助けてくれたのか」

「ううん、厳密に言うとは違うね。ここまで運んできたのは、この子達」

指差されたのは、手持ちの六体。（一部は）なんだか嬉しそうだ。

「お前達が？」

「あの猛吹雪の中、あなたを連れてこのキッサキシティまで連れて来たんだから。すごい信頼関係がなきゃ、そこまでしてくれないよ」

「…そうか。ありがとうな」

頭を撫でてやる。と、そこであることに気付いた。

「今何時だ!?!」

「えっ?…午後の三時かな」

確か、最後に時計を見たのが午前十時…。まずい。

「エイチ湖ってどっちにある!?!」

「え? あっただけど…あっ!」

「悪い!! 助けてもらっておいてなんだけど、今急いでる!! 後で礼させてくれ!! 行くぞ皆!!」

走りながらボールと荷物を取り、湖目掛けて駆け出した。

「くっそ…!! 無事でいてくれ!!」

敷地に入ると、ジュンの姿が見えた。…それに、ジュピターの姿もある。

「ジュン…?」

「くっそお…!!!!」

「残念。あなたのポケモンはまあまあでも、あなた自身が弱いものね。それじゃあ、湖のポケモンを助けるなんて無理な話…。」

言いながら、ジュピターはこちらに向かってくる。

「あら、お友達を助けに来たの? でも遅いわね。もう三匹のポケモンは手に入った。…止めようと思ってトバリのアジトに乗り込んできても、意味ないのよ」

「…」

どこかへ去っていった。ジュンに駆け寄る。

「大丈夫か？」

「くそ……くそっ！！！俺が弱いから……！！！」

「…お前は弱くない。唯、あいつが強かったただけだ。そうだろ？なんせ、…お前は俺のライバルなんだからな」

ダイヤの言葉にはっとした様子で、語ってくるジュン。

「…あのポケモン、すごく辛そうだった。ギンガ団は、あのポケモンたちで何をする気なんだろうな…？」

「…俺は、トバリに行く。お前は、博士達のところに行ってくれ」

「俺も行くぞ！！」

静かに、首を横に振る。

「…いい。あいつらの助けの声を、俺は聞いてやらないといけない」

ジュンは『仕方ない』と言うように首を振り。

「…そうか。わかった。気をつけろよ、ライバル！！」

「おうよ、お前こそな、ライバル」

…と言ってギンガ団アジトに入ろうとしたが、当然簡単に中に入るはずもなく。
どうしようか、と首をかしげていた。

「こうしてる間にも、あいつらは悲しんでるんだ…早く、行ってやらないとな」
だが、どうしようもないこの状況。どうしよう。

「うーん…どうしたら…」

裏口でもあれば、それが最も素晴らしい選択だが。
だがしかし、そんな物があるはずもなく。

「まあ、あるとしたらギンガ団がらみのところだよなあ」
「ばば？」

あたりを偵察させていたクロバットが、こちらに振り向く。
…ん？クロバット、トバリシテイ。
…繋がった！！

「あそこか！！」

「おら、早くカードキー寄越せよ」

「ヒ、ヒイイイ！！！」

状況の説明？要らんだろ。

俺が宇宙人からカツアゲしてる。以上。

「こ、これですうう！！」

「ん、ご苦労。おやすみ」

「ばばー」

「ふにゃ」

催眠術で、しっかり眠りにつかせる。これで四、五時間は起きられないだろう。

「よし、ここからはふざけなしだな。…クロバット、行くぞ」

「ばばっ」

カードキーを使って扉を開き、胸に手を当てる。

『待ってる…すぐ助けてやる！！』

『クロバット、道は？』

『ばばっ。』

『上か。分かった』

クロバットの超音波を駆使して、トバリビルを駆け上がる。流石に侵入には気付かれているようで、警備の手が強まっている。

『クロバット、催眠術』

『ばばー…』

「う…？」

警備の宇宙人を眠らせ、先を急いだ。
と、またあの声が響いてくる。

『クルシイ…イタイ……』

「……？どこだ？お前ら…！」

『コッチ……ハヤク……タスケテ……！！』

「くっ……！！！」

クロバットをしまい、階段を一気に駆け上がった。扉を開く。

「……っ…！」

「…これは驚いた。君だったのか、侵入者というのは」

アカギ。なぜだか、虫の好かないやつだ。……いや、当然か。

「幹部もてこずらされたと聞いたのでね。まさかこんな子供だとは」

「おい…！！あいつらはどこだ…！」

「あいつら…？ああ、湖のポケモンたちのことか？」

こちらとは対称的に、落ち着いた調子で話を続けるアカギ。

「そんなに知りたければ、私を倒すといい。一応、私の団が潰されかけたのだ。体面上はボスとしての勤めを果たさせてもらう」

「望むところだ…！！行け、エンペルト…！！ドリルくちばし…！！」

「ドンカラス、辻斬り」

「エー…ンッ…！！」

「ケー…ン！」

一閃。斬り合い、ドンカラスの翼を薙ぎ払い、体制を崩す。

「エンペルト、冷凍ビーム!!」

「エーレンツ!!」

「ケーン!? け……」

黒い翼が凍りつく。アカギは唯、黙ってドンカラスをボールに戻した。

そしてすぐさま、返すようにボールを投げる。

「マニニューラ、辻斬り」

「シャアア!!」

「エンペルト、メタルクロー!!」

「エーレン!!」

一撃決まると、マニニューラが吹き飛んだ。

「…成程。ここまで力があるとは」

「どうした、終わりか!?!」

「ああ。時間稼ぎは済んだ」

「…? まさか」

確かに、最初からおかしかった。ボスだと言うのに、この実力差。わざとらしい話だ。

「そのまさかだ。私は、伝説のポケモンからあるものを作り出していた。それがもう少しで出来るというところで、君が来たのでね。…そうだ、その階段下の部屋にいる。もう用済みだから、好きにしまえ」

「デメエ……!!」

睨みつけてやったが、そんなことをしている場合ではない。

「くそっ!!」

駆け出して、扉を勢いよく開いた。：少し進んだ先には、三つの装置に収められたポケモンたちと、サターンの姿。

「お前か…。ここにいるということは、ボスはお前を見過ごしたというのか？」

「：ああ。見事に時間稼ぎされたよ。俺はこいつらを解放したい」

「そうか。確かにこいつらは用済みだが：逃がすには惜しいな」

ギリッ、と歯を噛んだ音が響く。

「この：!!」

「なんだ、やるのか？」

「上等だ!!」

「ドクログ!!」

「行け、グレッグル!!」

「ドクロッ!!」

「ケッ!!」

湖の時のように、激しい突き合いが繰り返される。と、ドクログに拳がヒットした。

「ドクッ!？」

「ケッ!!!!」

「ドカァア!？」

勝負は一瞬で決まる。

アップーが、見事に直撃した。ドクロッグは気絶している。

「…ケツ」

「グレッグル、よくやった。…こいつらを逃がす方法を聞こうか！
」

「…その、赤いボタンを押せ。」

巨大なコンピュータの、赤いボタンを押す。

と、シエルターが開き、ポケモンが装置から開放され、瞬間的に消えていった。

『アリガトウ……アトハアノサンニンヲ……オネガイ……』

「!……。」

「私は……。ボスが何をしようとしているのか分からない。だが、だんだんとボスがおかしくなっている事には気付いた。ボスは、テンガン山へ向かった」

「……何？」

「もっとも、ボスが何をやる気かは知らないがな……。」

「お前……。」

サターンは宙空を見つめたまま。

「独り言だ。聞いてくれなくていい」

「……じゃあな!!」

第十四話・強襲、急襲、三体の救出劇（後書き）

作「本当の勝負じゃなかったね」

ダ「ちっ、完全に引かなかった」

作「あれか？頭に血が上ってた？」

ダ「そうかもしれないな。あいつらを助ける事だけでいっぱいだった」

作「ふーむ。もっと冷静になろうぜ」

ダ「俺のキャラはお前の所為だろうが!!」

第十五話・激昂、神々の闘い（前書き）

作「さて、前回アカギをブツパしたダイヤ。」

ダ「今回は、一気にテンガン山を駆け上がります。」

作「勢いよく読んでいただけると！」

第十五話・激昂、神々の闘い

「あいつらはテンガン山へ向かった。この事実重要だ」

場は研究所、話し合い内容は、ギンガ団ボス・アカギの計画への対策。

と言っても参加しているのは俺、ジュン、ヒカリ、ナナカマドの四人だが。

「…ふむ。ギンガ団のボスが何をする気かは分らんが…、止めるべきじゃろう」

「でも、どうするんだよ？ テンガン山って言っても、入り口、場所は色々あるだろうが」

「その人は伝説云々言ってたんでしょ？ だったら、場所は限られてくると思うけど」

ヒカリの鋭い言葉に、俺は頷く。

「ああ。俺と博士で話し合った結果、恐らく『鑓の柱』だろうという事になった」

「『『鑓の柱』???』」

俺からバトンタッチして、ナナカマドが説明する。

「数々の神話に登場する、神々の舞台だ。このシンオウ地方を作った神も、そこで休んだ…又は生まれたと言われている」

「そこに行く道は、二通り。ヨスガシティから行く道と、クロガネシティから行く道。」

「分かれていく、ってことか」

今度は、察しのいいジュンの言葉。

「おう。クロガネ側は博士とヒカリとジュン、ヨスガ側は俺」

「ダイヤ君一人!？」

確かに、一見おかしな話だ。

「驚くことはないだろ。女と年寄りとは、元気な男が支えるのが一番だよ。…いざとなったら、皆を守るのはジュンだと…俺は思う」

「……。仕方ねえな、任せろ!！」

胸を張るジュンの視線は真っ直ぐだった。…頼もしい。

「じゃ、行くか。博士、行動開始ってことで。あいつを、速く止めなきゃ」

「ああ。…だが、無茶はするなよ」

心配そうに言うナナカマドに、微笑って返す。

「了解」

「はあっ、はあっ……くそっ」

頬に伝う汗を拭う。息が切れた。

「はぁ、はぁ…早く…行かないと…!!」

必死に駆け上がっていくと、前方に見慣れた影があった。

「師匠!!」

「…? ダイヤ君、どうしてここに」

「実は、かくかくしかじか」

「…成程。私も、ここにたくさんさんのギンガ団が来たのを知って。…
鐘の柱を荒らすようなマネは、絶対にさせない」

そう言った師匠の眼は、怖いくらいに鋭かった。

「じゃあ、一緒に行きませんか? 一人では流石に、この数の宇宙人を捌き切れないので」

「ええ、そうしましょうか。少し急ぎましょう」

早足に上っていく。

途途中の宇宙人たちも、二人協力して残らず倒していった。

「…もうすぐ、中腹に出る道があると思うんだけど…」

「あ、あれですか!？」

光がさしているのが見えた。…と、隙を突かれて、宇宙人のクロバットたちの超音波が響く。

「まずいっ!! 師匠、下がってください!!」

「ええ…ダイヤ君、上ッ!!」

「…はっ!!」

天井が崩れ落ち、砂嵐を立てた。気付いたときには、周りに岩。

「……閉じ込められた……!!」

「まずいわね…。これじゃ出られない」

「こんな岩、ぶっ壊してやる!! ノズパス!!」

「……」

ノズパスはズシンと着地。その重量級の力なら、いける。

「行け、体当た」

「止めなさい。」

静かに制される。

「あなたのノズパスでは、パワー不足。壁を壊しきれずに、こっちに崩れ落ちて来る」

「なら…グレッグル!!」

「…ケツ」

こいつの攻撃力なら、破壊できないものはないはずだ。

…が、

「それもダメ。攻撃がピンポイント過ぎて、さらに天井が崩れてくるわ」

「なら……」

なら、どうしろというのだ。こんな緊急事態に。

「ここで、助けを待つかないわね」

「そんな……！！そんな悠長なこと、言ってもらえないんですよ！！」

岩に駆け寄って張り付き、必死に爪を立てる。

「くそっ……くそっ……！！！」

「あなたは、そんなまでして何がしたいの？」

「……」

手が止まった。

「誰かのため？自分のため？何のためなの」

「そんなの……関係ない」

「どういうこと」

「俺は、今しないと後悔する事をしているだけです。気のすむまでやる」

がりっ、がりっ。岩を削る音が響く。

「やめて。そんなこと、していても無駄よ」

「最初から諦めてる奴が、口出しすんじゃないやねえよ！！！！」

岩を、拳で殴りつける。空気が振動したのが伝わった。

「……もう二度と、あのときみたいな思いはしたくない……！！あのときみたいないな……！！」

応えられなかった、『タスケテ』の声。助けられなかった、ポケモンたち。結局、俺が弱かったから。いち早く気付けなかったから……。それを認めたくなくて。クールぶってたのかもしれない。

「…力が欲しい…!! 一瞬でいい、今、このときだけでも…!!!!」

冷静でいられるはずがないじゃないか。

ノズパスと、グレッグルに駆け寄る。

「頼む、力を貸してくれ!! ここだけでも、俺に!! お願いだ…頼む!! 俺に…何かを救える力を!」

「……………!!!!」

「…ケッ!!!!」

二体の身体が光りだす。形が変わり、大きく。

「…進化…!! しかも、二体同時の…!!」

「お前ら…」

「ディノノーズ!!!!」

「ドクロロー!!!!」

図鑑確認。『ディノノーズ』、『ドクロッグ』。

ぱたん、と図鑑を閉じて、目を拭ってから叫ぶ。

「よし、行け!! ディノノーズ、電磁砲!! ドクロッグ、毒づき!!」

「「オオオオオオ!!!!」」

岩が碎かれ、光で蒸発する。

「…ありがとう、二人とも。…師匠、失礼します」

ボールに二体を戻し、気まずそうに頭を下げた。

「アカギイツ!!!!!!!!!!」

鐘の柱で、大きく叫ぶ。アカギは振り向かずに言い放った。

「君がここまでこられるとは思わなかったな」

「なんだと!?!」

「君も、見ているといい。ここでの儀式を」

「儀式だあ!?! ふざけんな!?!」

駆け寄ろうとしたところを、突如現れたスカタンクとブニャットに道をふさがれた。

「くっ……!!」

「あら、あたし達を忘れてもらっちゃ困るよ」

「アカギ様のところへ行きたけりゃ、私たちを倒してからにしない」

「邪魔だ、お前ら!?! こうなったら、力づくで……」

と、後ろから声が聞こえた。…来たか。俺のライバルにして、相棒。

「ダイヤ!?!」

勢いよくかけてきたジュンが、横に並ぶ。

「遅いじゃねえか、ジュン!!」

「そっちが早いんだよ!!…さっさとこいつら倒して、ボスをどうにかしろ!!」

「おうよ!!エンペルト!」

「ドダイトス!!」

「エーーン!!」

「ドーダー!!!!」

いつも以上に気合が入った二体が、一斉に切りかかる。

「いけ、ドダイトス、ウッドハンマー!!」

「エンペルト、援護しろ!」

「ブニャット、かわしな!!」

「スカタンクもだ!!」

ウッドハンマーをかわしたところを、エンペルトがハイドロポンプで狙い打つ。

標的は、体力、スピードともにあるブニャット。

「エーーン!!」

「ニャアアア!!!!」

「ぶ、ブニャット!!」

ブニャットが吹き飛び、柱に叩きつけられる。

そちらに意識の行った一瞬の隙をついた、ジュンの指示。

「余所見すんなよ!!ドダイトス、地震!!!!」

「ド…ダァッ!!!!」

「シャアアアアア!!!」

大きなひび割れが、スカタンクをはさんだ。二体とも戦闘続行は不可能だろう。

「よっしゃ!! よっしゃよっしゃ!! リベンジ果たしてやったぜ!!」

「ああ。よかったな…っ!? これは」

足に、何かが絡まっている。…何かの兵器だろうか。全く取れない。これでは、前に進む事ができない。

「かかったね。バトルでは負けたけど、こっちの勝負では勝ったというわけさ」

「くっ…目の前なのに…!! アカギ!!」

「もう、儀式は始まった」

「なッ!?」

赤い光を放った鎖が、宙に浮かんだ。

『ギヤオオオオオオオオオオオオ』

『グイアアアアアアアアアア』

「っ!? アカギ、何をしやがった!!」

「…この赤い鎖は、時空の狭間に住む二体の神を引きずり出し、意のままに操るためのもの」

「なんだと!?」

「じゃあ、今の声は……」

そのとき、空間がガバツと口を開き、巨大なポケモンが二体、姿を現した。

「時の神ディアルガ、空間の神パルキア……!!」

高らかに手を上げ、宣言するアカギ。

その表情は、今までに見た冷たいものではない。

「二体の神よ!!! この世界を破壊し、もう一度作り直すのだ!!! 私だけの世界を……!!」

「私だけ……? アカギ様、私たちも連れて行ってくれるのでは!?!」

アカギが、忌々しそうにマーズとジュピターを睨みつける。その間に、エンペルトのメタルクロード足の機械を壊しておいた。

「思いつがるな。私だけの世界、邪魔はさせん」

「アカギ様!?!」

「さあ、ディアルガ、パルキア……!!」

『ギアアアアア』

『グイイイアアア』

ディアルガが吼えると、周りの空気がゆがんだ。

「なっ……? ダイヤ……!!」

「ジュン、下がれ……!!」

ジュンを突き飛ばすと、丁度二人の間をパルキアの発した衝撃波が奔った。地面が見事に裂ける。

さらにディアルガの二度目の咆哮で、二人の間に、見えない壁が完

全に立った。

向こう側のジュンは透けて見えるが、それは全く動かない。

「時と…空間が捻じ曲がったのか……!!」

と、そのとき。二体の神を、黒い手のような影が覆い、どこかの闇に引きずり込んでいった。

『ギイイイイ!?!』

『グギョアアアア』

「なんだ!?! ディアルガ、パルキ…ぐああああっ」

声が聞こえる。アカギもつかまったようだ。と、その影が俺の足元にも。

「しまっ…うあああああああ!?!?!?!」

第十五話・激昂、神々の闘い（後書き）

作「お前、変なところで怒るよな」

ダ「ああ、あれな。俺も変だと思う。けど、何か…許せなかったんだよな」

作「ふーん。そんな事もあるのかねえ」

ダ「別にいいだろ…。師匠に逆らっちゃったのは、流石にあれだったけど」

作「後悔断えない今回ですが、」

ダ「感想等はいつも募集しております!!」

第十六話・銀河の終決（前書き）

作「うーん、勢い付けすぎたせいで面白くなっちゃったな…」

ダ「俺もそう思う。もっと長く書いてみろよ。“戦闘”とか」

作「うぐ！」

ダ「ギンガ団編、ついにここまで来た。…あいつを止める。それだけだ」

作「ひゅーひゅー、中二」

ダ「マジで空気読めお前。」

第十六話・銀河の終決

『ウオオオオオオン…』

『ギィアアアアア…』

神の叫び声が聞こえる。身体を起こすと、そこは意味の分からない世界だった。

「なんだよ…？　なんだよこれ…！？」

上下、左右、重力さえも感じられないような世界。そこで神々が争っている。

捻じ曲がる視界に、頭がおかしくなる。

「う…あああああああ！？　あああ」

頭を抑える。涙が溢れ出た。

「何だよ……うあつ」

「しっかりしなさい。さっきの威勢はどうしたの」

腕を掴んだのは、シロナ。涙が止まった。

「…師匠」

「歯あ食いしばって」

「へ？　おぶうつ！…！」

ばちーん、と音がするほど、思い切り頬をひっぱたかれた。

「痛たた…師匠、何を」

「私を師匠だと思うなら、あんな風に二度といわないこと」
「…あ」

洞窟内の事を思い出した。

素直に頭を下げ、謝る。

「…すみません」

「反省すればよし。…ここは、破れた世界。おばあちゃんから神話は聞いた？」

「ええ、図書館でも一通り。確か、この世には全ての裏の世界がある…」

「そう。そこを支配しているのは？」

名前だけ、長老から聞いた。…確か、

「ギラティナ…ですね」

「そう。あそこで、今まさにアカギが操ろうとしているわ」

指差したほうには、三体の神が暴れていた。

と、ギラティナと思われる神が、あの赤い鎖を受けている。

「まずい、早く行かないと」

「待ちなさい。策はあるの？」

「…ありません。でも、動かないと」

「死ぬかもしれない」

「…自分の身一つで世界が守られるなら、安いもんですよ」

考えずに、駆け出した。…死ぬのは怖い。イヤだ。…けど、

「アカギ!!!」

「：なんだ、君か。三体の神をつけた私に、何か用か」
神を離せ。お前が扱える力じゃない」

アカギは、神に目を向けたまま。

「そうか。何故そんなことが分かる」

「…これは、俺が見つけた本の内容だ」

すう、と息を吸った。

「『三体の神は、それに対する三体の神に許された者でしか扱えない。力なきものが操れば、』……ここまでだが、まあいい事じゃないのは確かだ」

「ふ…ははは!! おかしなことを言う!! 現に、神は私に従っている!!」

三体の神の威圧感は、半端なものではなかった。……だが、その目は悲しそうだ。

「俺が止める。安心しろ」

「神よ、この子供を消せ!!」

「グギユグバアツ!!!」

「グギイイイオオン!!!!」

「ギヤオオアアア!!!」

「エンペルト!!!」

「エー！！」

エンペルトも、一歩も引かなかった。

「…頼む、エンペルト。力を貸してくれ」
「エン」

ゆっくり、頷くエンペルト。…矢張り、お前は最高のパートナーだ。

「ディアルガ、時の咆哮!!!」

『ウウウオオオオオオン!!!!!!』

「避けてハイドロポンプ!!!!」

「エーーン!!!」

巨大な一撃を避け発射した、ハイドロポンプが直撃する。…が、神は微動だにしなかった。

「くッ、エンペルト、怯むな!次が来るぞ!!!」

「え、エン!!!」

『ギラティナ、シャドーダイブ!』

「グガアアアアア!!!」

背後からの突進。これをかわすには…よし。

「エンペルト、アクアジェット!!!」

「エーーン!!!」

超加速して、かわす。その突進の勢いを付け、

「メタルクロー!!!」

「エンッ!!!」

がちん、と音がして。見事にはじかれてしまった。
そして、ここで。神の至近距離にすることで、そのプレッシャーが

発生する。

「え…えん…」

「パルキア、亜空切断」

『グギアアアアア!!!!』

「っエンペルト!!!!」

エンペルトは完全にびびり、反応が遅れている。

——目の前で、やらせるわけには行かない!!

「エンツ!?!」

「ちっ!!!!」

エンペルトを突き飛ばす。と、パルキアの斬撃がダイヤの左腕と肩を挟った。

「うあああああああ!!!!!!」

「エンツ!?!」

「ふん、死んだな」

血が溢れ出る。息荒げて、エンペルトに命令した。

「エンペルト、冷凍ビーム!!」

「エンツ、エーーン!!」

肩を凍りつかせ、止血した。エンペルトをボールに戻し、ふらつきながら立ち上がる。

「…あ…アカギ…!!」

「…なんだ、その執念は…何故、死に掛けても…神が前にいても…」

立ち上がれる……!!!!」

そんな事、俺だって知りはない。

「おおおお!!!!」

アカギに殴りかかろうとしたところで、光が満ち溢れた。

「……? お前らは……」

『アリガトウ……ダイヤ……』

『アトハマカセテ……』

三体の、湖のポケモンたち。赤い鎖を破壊し、ディアルガたちを静めた。

『ダイヤ……』

『カミハ、シヨウキニモドツタ。』

『アノオトコハ……キミニ、マカセヨウトオモウ』

『カレノココロヲ……』

『スクツテ……』

三体は消えていった。

光が消えると、神は落ち着いた表情だった。ギラティナはどこかへ去り、ディアルガは時間の波に消え、パルキアは亜空間に吸い込まれていった。

「なんだと……!?!? 神が……あああ」

破れた世界で、二人だけだった。アカギは憎悪に満ちた目で、こちらを見る。

「あの三匹…もう一度捕らえて赤い鎖を…その前に…貴様を八つ裂きにしてやる…!!」ドンカラス…!!」

「神の願い、聞き届けてやる。エンペルト」

「エン」

「ドンカラス、辻斬り…!!」

「ケー…!!」

「…エンペルト、受け止めろ」

「…エン」

難なく、翼を受け止める。

「なっ…!!」

「…あんた、前に戦った…手を抜いてたときのほうが、強かったよ。…反省しな、神の力に溺れたことを。…エンペルト、『ハイドロカノン』」

嘴の周囲に、水球が発生する。それが、激しい勢いで発射された。

「エ…!!」

「ケー…!!」

「うああああ…!!」

ドンカラスの吹き飛ぶ勢いに巻き込まれた、アカギが倒れる。そして、その上に黒い空間が生まれた。そこに、吸い込まれていくアカギ。

「なっ…イヤだ…止めてくれ…うああああ…」

そのまま引きずり込まれ、姿は見えなくなった。と、目の前に神が

三体、現れる。

『小さき者よ』

頭に、優しく響く音。

『あの者は、相応の罰を受ける。それは、自然の摂理だ』
『小さき者よ。まずは礼を言おう。ここに居る三人、恩を感じている』

「…そんな。神様に感謝されるようなことは」

謙遜したが、神は首を横に振る。

『お前は、半身を失っても我らを助けることをやめなかった。並大抵のものに出来ることではない』

『せめてもの礼だ。元の世界に戻してやろう』

「…本当、ですか…？」

つい、疑ってしまった。

『神に偽りは無い。…そこの影に居るものも、共に返してやろう』
「影？」

近くの岩から、シロナが出てきた。

「流石に、ばれていましたか」
『お前にも、礼を言おう。…この少年、頼んだぞ』
「はい」
「？」

状況が分からないまま、話は進む。

『さあ、ギリティナ。お前の出番だ』

『…もとの世界へ戻るがいい』

目の前に、光が満ち溢れ。ぐるぐると、世界は回った。

「ん……」

「目が覚めたみたいね」

どこかの草原に、寝転んでいた。隣にはシロナ。

「よいしょ…あ」

左腕で起き上がる。さっきまでなかった感覚が…。

「ディアルガが、時を戻してくれたみたいね。よかったじゃない」

「…はい。師匠、師匠はどうしてあの時、あそこにいたんですか？」

「私が考古学者だから。」

「…え？」

ふふ、と微笑んで立ち上がった。裾を払う。

「冗談よ。あなたの後を追っていったら、あそこに着いたの。…今

回の一軒、あなたには助けられたわ。ありがとう」

頭を下げられ、ダイヤは全力で両手を目の前で振った。

「や、やめてください。師匠には何一つしていません」

「この地方の全ての人を救ったのよ。何もしてないはずがない。」

「……そう、ですか」

「お礼の気持ちは受けておくものよ」

ぽんぽんと頭を撫でられた。

「じゃあ、また会いましょう。」

「……え、会えるのは前提ですか？」

「あなたと会わないはずがないのよ。」

何かに乗って飛び去っていった。それを見えなくなるまで見つめ、振り返った。

「……ああ、」

生きてるっていいことなんだな。

涙を流しながら走って来たジュンやヒカリ、後ろで見ているナナカマドを見て、心の底からそう思った。

第十六話・銀河の終決（後書き）

作「決めた。」

ダ「なにを。」

作「バトル頑張る。」

ダ「そうしろそうしろ」

作「応援お願いします!!」

ダ「こんな馬鹿に応援の言葉をお願いします。」

第E X話・白昼霧、強化への兆し（前書き）

作「題名でドヤ顔、どうも作者です。長いので名前は書きません。」

ダ「ドヤ顔するほど旨いこと言ってねえぞ」

作「今回、y u g a t aさんから『エンペルトってハイドロカノン覚えてたんだね』と言われたので、その補足…と言うわけではありませんが、少々昔話を。」

ダ「要は、ただの後付け設定だ」

作「本当のこと言うなよ！」

ダ「だって、『感想もらって、読んだ瞬間に思いついた』って自分で言ってたじゃん」

作「そんな感じで、今回は『十話・銀河への導き』、ダイヤが第六感を発動した後の出来事です。」

ダ「覚えてない人も多いと思うが」

作「グタグタな前書きすみません！」

第E X話・白昼霧、強化への兆し

少し時間は巻き戻って、場は210番道路。

霧の深さを無視して、特攻を仕掛けた少年が一人。

「うおおおおお：痛ッ！？畜生、木か！！」

木に激突し、悶絶するダイヤ。『素直に別の方法を取ればよかった』などという後悔も、今となっては遅く。

「くっ：ここで止まったら日が暮れるな！日なんて見えないが」

自問自答、自分のボケに自分でツツコミ。なんて悲しい。

「：まあいいか、とりあえず走る！！それだけだ！！」

何だか、思考回路がジュンに似てきた気がする。

まあそんな事は置いておき、走る。走る走る。

「：どっかの修行じゃねーんだから：」

目の前に現れた木を避けつつ、なおも走る。

っていうか、この道で本当にあってるのか？馬鹿なことしてるんじゃないのか俺？

「うーん：今から、来た道は戻れないしな：しかたないか」

考えながら走り続けていると、目の前に小屋が現れる。

「おっと。…民家…ってことは、町が近いかな？」

今度こそぶつかりはしなかったが、周りを見た瞬間。抱いた淡い希望もすぐに打ち崩される。

「…なんだよこれ」

崖。なにもない。つまり…行き止まりだ。

「くっそああああ」

叫びは、虚しく白煙に飲み込まれ。しかたない、しかたないと自分に言い聞かせ、扉をノックする。

「すみませーん、誰かいますかー？」

返事はない。

「誰もいないはずねーだろ。嘘だ、嘘だといってくれー」
「嘘だッ！！！」

ばあーん、と扉を勢いよく開いて、中から女が飛び出してきた。

「…いい返事だ。」

「はっしまった、反射的に！！」

慌てて中に戻ろうとする女の襟首を掴み、引き戻す。

「は、話してよーッ」

「まあ待て。ちょっとお話しようか」

「いやー、何か嫌な予感しかない!!」

「なーんで一回目のノックで出てこなかったのかな? かな?」

「そ、その語尾は…げふんげふん。…真面目に答えるからね。あまり外界と通じるなって言われてるのよ」

「外界?」

うんうん、と頷く女。

「うちの家系は代々、『ポケモンたちの封印された力を解く』ってのを生業にしてるの。つまり」

「…その力を悪用されないようにするため…か? 若干信じがたいが」
「そういうこと。」

話が早くて助かるわ、と一言呟く。

「まー、ここは霧払いでも払えないほど霧が深いから、そもそもフツーは人が来られないんだけどね」

じとー、とこっちを見られた。

「ああ、俺。俺は偶然ここに来たんだよ。かくかくしかじか」

「へー、道に迷って…。強運ねー、あなた」

「まあな。…そうだ、俺はダイヤ。ポケモントレーナーだ。」

「私はシュレン。よろしくね」

握手を交わし、とりあえず小屋の中に入る。

内装は俗に言う山小屋。質素な作りだが、TVもある。電波届くのか?

「ほら、あんまりウロウロしないで。お茶いれるから座った座った」

「ああ、悪い。」

席について暫くすると、緑茶を渡される。

「ん、美味しい」

「そう？ 私以外に飲む人が居なかったから、自信なかったけど」

そう言うシュレンは、ニツコリと笑顔を浮かべる。

「家族は？」

言ってから、『しまった』と気付く。

好きで、一人でこんなところに住む人間がいる筈が無い。

「…先代の婆ちゃんが、死んじゃってね。それで、私が代わりにここに来たのよ」

「…すまん」

気まづくなって、茶を啜った。…美味しい。
取り合えず、話を逸らす。

「…あれだ、ここに来られる人間は少ないんだろ？ だったら、仕事はできてるのか？」

「してないわよ。する必要がないもの」
「？」

『必要がない』という言葉に首を傾げると、シュレンは溜息をついてから、重そうに口を開いた。

「『近頃のトレーナーは強くなった、だから我らの力無しでも大丈夫

夫だ』」

「…つまり、仕事がなくなったのか？」

「そー。」

ここで、ふと重要なことに気づく。

「ここまで聞いておいてなんだけどさ、大丈夫なのか？」

「何が？」

「外界に触れちゃいけないんだったら、俺を家にいれるのはまずいだろ」

ハッとして、俺の顔を見るシュレン。

「…今気づいたとか言うなよ？」

「ギクッ。…べ、別に忘れてたとかじゃなくて…えっと、ダイヤ君なら大丈夫だと思ったのよ！」

「…ふうん」

「…その目はやめてよ」

まあ、シュレンが大丈夫ならいいんだが。

「そ、そうだ！ダイヤ君の相棒を見せて欲しいな！」

「ん？なんで？」

問うてみると、待ってましたと言わんばかりに、胸を張られてしまった。

「私の生業だから！」

「おお、成る程」

俺のポケモンを見て、強化してくれるということらしい。

「なら、頼もうかな。エンペルト!!」

「エーン!!」

「おおー」

言いながら、エンペルトの周りをぐるぐると回っている。
その目は真剣そのもの。

暫くすると、彼女は足を止めた。

「…ふむ。私の強化は必要なさそうね」

「どゆこと？」

「しっかり育ってるもの。私が手を出したら、むしろダメになる」

「ふむ、なんか嬉しいな」

シュレンは顎に手を当て、考え込んでしまった。

「…そうね、私が教えられるとすれば…一つ」

近くの書棚から、一冊の本を取り出し、ページを示す。

「ポケモンには、『究極の技』っていうのがあるの。」

「究極の…技？」

「そう。水タイプのエンペルトで言えば、『ハイドロカノン』。これは、トレーナーとポケモンの信頼関係が最高まで高まって、初めて修得できるのよ。あなた達にも、その資格がある」

本をしまい、こちらを向いてニコリと笑った。

…一瞬ドキッとした自分がある。

「きっと、覚えられるわよ。頑張って」

「おう、サンキュー。…そろそろ、おいとまするか。外の住人は外界に帰るわ」

「そう。じゃあ、さよなら」

扉に手をかけ、開こうとしたが。

少し思いついて、振り返る。

「お前、ポケモントレーナーになれよ。」

「え？」

きょとんとしてしまったシュレンに、続けて言う。

「だって、お前は『ポケモンの力を引き出せる』んだろ？それって、トレーナーに向いてるじゃん。こんなところに籠ってちゃ、もったいねえよ。」

「…そう？」

「そう。」

帽子の鰐をあげて、笑う。

「俺、お前と戦ってみたくなって思ったから。そう思わせてくれたのは…4人目かな？…まあいいや。先に、“外界で” 待ってるぜ」

「……」

ボタン。扉を閉じて、走り出す。後ろに、民家は消えて行った。

霧に潜り込んで数分後に気づいてしまった、最悪の事実。

「……道、聞き忘れた」

「……トレーナー、
かあ……」

第EX話・白昼霧、強化への兆し（後書き）

作「次回、逆巻く水流、轟く雷、炸裂するアフロ!! 『渚のラプソディ』、絶対見ろよな!!」

ダ「嘘100%次回予告です」

作「提供は、アフロバーガーがお送りしました。I'm loving it!!」

第十七話・ナギサシティ電磁爆発（しません）（前書き）

作「さて、とりあえず補足を。アンノーン『F』の技めざパを、それぞれ
のタイプの英名＋『ショット』にしようと思います。（例…
氷↓アイスショット 炎↓フレアショット、ファイアショット）」

ダ「俺も、いちいち『目覚めるパワー氷!!』とか言うのめんどく
さいんだよね」

作「では、前回のあらすじと行きましょう。」

ダ「ギンガ団を潰した。以上。」

作「簡潔でよろしい。こんな感じでレッツゴー!」

第十七話・ナギサシティ電磁爆発（しません）

「…釣りっていいよな、エンペルトよ」

「エーン」

釣り糸を大海に垂らし、静かに水平線を見つめながらつぶやく。

結局あの後、『エイチ湖のポケモンを助けた礼』とかでキツサキのバツジを貰い、現在はナギサシティに行く途中。222番道路だ。…色々ぶっ飛んでいる？…話すのも疲れたんだよ。釣りで休ませてくれよ。

「…心が落ち着くって言うか…時間がゆっくり流れてるような気がして」

「エーン」

ちなみに、エンペルトも釣竿を使える。昔ちよつとだけ教えてやったらすぐにできるようになった。

「……おっ！！来た来た！！」

竿が勢いよく引かれ、それに合わせるように調子を上げる。

「よつと…エンペルト、網！！」

「え、エン！」

「うおおおおお！！！！」

勢いよく竿を引く。

水しぶきを上げて釣り上げたのは、テッポウオ。中々の大物だった。

「よっし、ナイスエンペルト!!!!」

「エーン!!」

「おお、燃えてるなあ少年」

ハイタッチをかわしてテッポウオを海に戻していると、後ろから声を掛けられた。

「…個人的にはあんたの頭がどうなっているのか聞きたい」

赤いアフロの青年。雰囲気が熱い。

「お前、ナギサジムには行くか？」

「ああ、まあ」

「ふうん……。」

じーっとみつめられる。

「…なんすか」

「よし。俺は四天王のオーバだ。よろしく」

「はあ、そうなんですか……え？四天王？え？えええ！？」

四天王といえ、チャンピオンと共にポケモンリーグで待ち受ける、最強の四人組だ。

「そ、そんな人が何故」

「そこなんだよ。この前の大停電、知ってるか？」

そういえば、ニュースで『ナギサシティ大停電』なんてトピックスがあったか。

原因については触れられてなかったけど…。

「あれな、ナギサのジムリーダーの仕業なんだ」

「ジムリーダー？」

「…名前はデンジ。俺の友人で、ポケモンバトルをやるのがめんどくさい、とか言い始めてな。バトルへの情熱をジム改築に向けちまった。…それで、異常に電気を消費した」

「…なんか」

ジムリーダーも、一人のトレーナーなんだと改めて思った。きっと、自分より強いトレーナーを見なかったのだろう。

「お前なら、きっとあいつの目を覚ましてやれる。あいつのハートをがんがんに燃やしてやってくれ!!」

「…ま、結局通る道ですから。そのぐらいなら」

「よっしゃ、頼んだぜ!!」

『頼まりました』と呟き、東へ歩を進めた。

…あの熱さ、ジュンに通じるところがあるな…。

何でもオーバの話では、デンジはいつも灯台から景色を眺めているらしい。

「…綺麗だな」

灯台の最上階に上がったときに視界に入った、水平線と港町。

「…あ」

それを、悲しげな瞳で眺めている青年。

「デンジさん…ですか？」

「…？ ああ」

デンジは反応して、その瞳でこちらを確認した。

「俺はダイヤっていいいます。ジムバトルをして欲しいんですけど」

「…チャレンジャーか。…ほら」

何かを投げられた。キャッチしてみると、

「…バッジ？」

「これで良いだろう。帰ってくれ」

ブチッと何かが切れた音がして、バッジを地面に投げつけた。

「っざけんなよ！！！！ あんた、何があったかは知らねえが俺をコケにすんのは止めろ！！」

「…だったらどうした」

怒り心頭。手持ちを全員さらけ出した。

「…どうだ。皆、あんたと戦えるのを楽しみにしてたんだよ。…けど、こんな腑抜けじゃ相手にならないな、皆？」

「……」

全員の目を見るデンジ。と、ふっと微笑んでダイヤを見た。

「…分かった。仕方ない。戦おう」

「本当か!？」

「ああ。…お前との戦いなら、何か得られそうな気がする」

「準備はいいか!？」

「はい!!!!!!」

「行け、ライチュウ!!!」

「F!!!!!!」

ジムバトルの開始。初手のFは、気合十分といった感じだ。

「いけ、アイスショット!!!」

「びろ!!!」

Fが放ったエネルギー弾が、氷に変わる。

「かわしてアイアンテール!!!」

「らいっ!!」

それをいとも簡単に避け、鋼鉄と化した尾が振り下ろされる。

「F、フレアショット!!」

「ぴろろ!!」

炎を地面に放ち、その反動でライチュウの攻撃をかわす。

「…なるほど。久々に楽しいバトルだ」

「F、アクアショット!!」

「ぴろろ!!」

「らいっ!」

かわした隙を突いて、水流がライチュウを飲み込む。

「今だ、アイス!!」

「ぴろおお!!」

「らいっ!?!ら…」

一瞬で、水が凍りつく。ライチュウは全く動けない。

「…流石に、ここまで勝ち続けてきただけはあるようだな」

「でしょう? さ、次行きましょう」

軽く指で挑発すると、デンジは笑う。

「ああ。エテボース!! 猫だまし!!」

「えぼ!!」

「ぴろっ!?!」

目の前で攻撃が出され、怯むF。エテボースは距離をとる。

「投げつける!!」

「えぼっ!!」

「ぴろおお!？」

怯んだ隙をつかれ、王者のしるしが投げつけられた。
Fが吹き飛び、気絶する。

「くっ!!」

「どうした、次」

「ぐ…ビーダル!!」

最近出番のないこいつに、光を見せてくれ…!
と念じながら、ボールを投げる。

「びだっ!!」

「エテボース、ダブルアタック!!」

「えぼっ!! えぼっ!!」

ビーダルに、二回の攻撃が繰り返される。が、ビーダルはそれを耐え、拳を叩きこんだ。

「びだっ!!」

「えぼ!？」

「よっしゃ、カウンター成功!!」

指令してあった、カウンターが発動するとき。
鈍足なこいつにはおあつらえ向きだ。

「ふん：エテボース、一旦退け!!」
「えぼっ!!」

数歩下がり、間を空けるエテボース。

「間を空けても、物理攻撃は意味がありませんよ」
「ああ。物理攻撃はしない」
「…?」

「エネルギー充填だ」
「えぼぼ…」

エテボースの両手の中に、電撃が集中する。

「まさか：ビーダル、カウンターの構えを解け!!」
「びだ!？」
「チャージビーム!!」
「えぼー!!!」
「びだあああっ!？」

ビーダルが電撃に飲み込まれた。煙が上がり、倒れるビーダル。

「び…だ…」
「なんて、一撃だよ…!!」

ボールに戻し、つぶやく。だが、あることに気付いた。

「『エネルギー充填』…? そうか、ドクロッグ!!」
「ドッケー!!」

「ほー。気付いたか。エテボース、気をつけろ」

「えぼっ!!」

エテボースが構えを作る。

「ドクログ、速攻だ!! 毒づき!!」

「ドツケー!!!」

「エテボース、エネルギーを充填しておけ！」

「えぼっ!!…えぼっ!？」

「なっ!!!」

刹那、ドクログは懷にもぐりこむ。

毒づきが決まり、エテボースは倒れた。

「やっぱりな。ノーマルタイプのエテボースには、電気エネルギーを溜めるのに時間が要るんだろ？」

「ご名答。…だが、そっちのドクログも戦闘不能のようだな」

「え?……ちよつ、ドクログ!? 何故飽きている!!」

「…ケツ」

ドクログはいかにもダルそうに座っている。と、勝手にボールに戻った。

「畜生、全く変わってねえな!!」

「さあ、俺はこいつで最後だ。行け、レントラー!!」

「じゃあ、俺は…クロバット!!!」

「クオーン!!!」

「ばばばっ!!!」

クロバットを見つめるデンジが、徐に呟いた。

「…相性が悪いのに、わざとぶつけてきたか」

「こいつは、俺の旅の最初から居るんで。信じてるんですよ」

既に、ポケモン同士でガンの飛ばし合いが起きている。
にやりと笑って、レントラーが軽く首を振った。

「レントラー、チャージビーム!!」

「クオーン!!」

「なっ、クロバット、かわせ!!」

「ばっ!!」

クロバットが寸でのところでよける。どうやら、電気タイプはチャージ時間が大幅に短縮されているようだ。

「どうするか…」

「十万ボルトだ!!」

「クオーン!!」

「ばっ!!?」

レントラーの体全体から、膨大な電流が発生した。
クロバットがそれを持ち前のスピードでかわす。

「早いな。…だが、避けているだけでは勝てないぞ」

「分かってますよ…クロバット、エアスラッシュ!!」

「ばばばっ!!!!」

「レントラー、見切り!!」

「クオン」

全ての風刃が、無駄のない動きでかわされる。

「なっ…」

「十万ボルト!!!!」

「クォーーン!!!!」

「ばばばっ!?!」

こちらにも、問題なくかわした。技を出してはかわしの繰り返しだ。クロバットは翼を動かし続けているため、そう長く持たないだろう。…このままでは、勝てない。

「…ん？」

そのとき、天井から雫が垂れたのに気付いた。天井には、巨大な氷の柱ができている。

「…あれは、確か…」

Fの攻撃で出来たものか。…氷？

「そうか…!! クロバット、風を起こせ!!!!!!」

「ば!?!? ばあああああ!!!!!!」

「クォーン!?!」

爆風が、レントラーを包み込む。デンジは髪を押さえ、目を細めた。

「レントラー、充電!!!! 風は吹いているが、大したことはない…
何をする気だ？」

「もっともっと!!!!」

「ばばばば!!!!!!」

しばらく風が吹き続けた。

…出方を伺っていたデンジも、そろそろ動き出す頃だ。

「…我慢の限界だな。何をしたいかは分からないが、ここで終わらだ。レントラー、電気エネルギー最大放出の十万ボルト!!」

「バット、風を止めて離れろ!!」

「ばばっ!!」

「クォー…く!? クォオオーン!!!」

「なっ!? レントラー!」

レントラーが自身の電気で焦げ付き、倒れる。駆け寄ったデンジは何かに気付いたようだ。

「…濡れている…ハッ、あの氷の雫でぬらされたのか…!!」

「ええ。最初の攻撃が生きていたんです。…仲間の、おかげで勝てました。結局自爆を誘っただけですが」

バットの頭を撫でてやると、デンジが頭をかきながら近づいてきた。

「…お前と戦えて、よかったと思う。バトルの楽しさを思い出したよ」

「そうですか。それはよかった」

「ああ。」

言いながら、ごそごそとバッジを探す

「…ほら、これで本当のバッジ授与だ。ビーコンバッジ、最後の勲章。受け取ってくれ」

鈍い輝きのバッジを手にした。先ほどの灯台のものと、全く重みが違う。

「…これで、シンオウリーグに挑戦できるんですね？」

「ああ。ポケモンリーグ本部で、挑戦の受付をしてからな」

「…ついに、ここまで来たんだ…」

ごくり、と唾を飲むと、デンジの手が肩に乗せられる。

「頑張れよ。リーグ挑戦はテレビ中継も入るから、世界中が見てる」

「うええ！？プレッシャー！！」

「ははは。ま、普通に頑張れって。…ああ、オーバにあったら、礼を言っといてくれ」

「…はい」

オーバに会ったことが、きつとばれているんだろうと思った。

なんやかんやで、遂にリーグ挑戦までこじつけた。ここから、激しい戦いになるんだろうか…。

第十七話・ナギサシティ電磁爆発（しません）（後書き）

作「とても不思議な出来事によって、キッサキシティは飛ばしました。スズナファンの方すみません。」

ダ「寒かった：あんな格好で行く場所じゃねえな、あれ」

作「ジュンは半袖だったじゃないか」

ダ「う…」

作「で、リーグ挑戦に向けて一言どうぞ。」

ダ「ここまでで応援してきてくれた奴のためにも、俺は勝つ。チャンピオンに勝ってやんよ」

作「勝ってやんよやんよというわけで、そんな彼を応援していただけたら幸いです。」

ダ「それではまた！」

第十八話・初戦、VSインセクターリョウ（前書き）

作「マジインセクター。」

ダ「黙ってる。：今回からシンオウリーグ編。恐らく、各四天王一人ごとに一話になると思われます。」

作「終始バトルはきついもう、きついもう。」

ダ「では、楽しんでいただければ幸いです！」

作「ゆっくりしてってね！」

第十八話・初戦、VSインセクターリョウ

ポケモンリーグでのバトル申請も済み、後は日を待つだけとなった。チャレンジャーは専用の控え室で調整を行うらしい。というわけで、現在は控え室。

仲間達と、決意を固めていた。

「…よし。みんな、よろしくな」

「エン」

「ばばっ」

「びだ」

「ディノー」

「ぴろ」

「…ケッ」

「おい、ダイヤ!!!!」

「どうおっ!?!」

突如控え室に飛び込んできたのは、ジュンだった。
また、いつでもでかい声の奴だ…。

「なんだ、お前か。どうした?」

「どうしたもこうしたもねえよ!!!! 二日後には四天王との対戦だろ!?! だったら」

ライバルの俺がお前の練習相手になってやらねえと」

「…成程な。俺の手伝ってことか?」

「おう。外に出ろ!!!! バトルだこのやろう!!!!」

「あー、はいはい」

若干迷惑だとも思ったが、ここまで手伝ってくれるような友人も俺には少ないだろう。

「…サンキュー、ジュン」

「ん？…へへっ、いくぞ！！」

ついに来た、四天王初戦当日。呼び出されたのは、自然溢れるコーラルコロシウムだった。

『さあ、シンオウリーグ四天王戦も初回！！チャレンジャーダイヤモンドの登場だ！！』

何らかのMCの呼び出しに応じ、ゲートを潜った。大勢の観客の歓声が響き渡る。と同時に、全身に緊張が奔った。

「~~~~っ」

ぱちぱちと頬を叩いて、身震いを抑える。向かい側のゲートを睨みつけた。

『そして、チャレンジャーを迎え撃つ最初の刺客は彼！！シンオウの若きインセクトマスター、リョウー！！！！』

女性陣の歓声が大きくなった。門から、緑髪の青年が駈けて来る。

「やあ、チャレンジャーのダイヤ君。お手柔らかに頼むよ」

「いえ、全力で行きますよ。今回はよろしくお願いします」

握手を交わす。それだけで、相手の力量が量れた。

「それじゃ、今回のルールの説明をよろしく!!」

『承りましたーっ!! 今回は、三対三の入れ替え式バトルだ!! ！自分の手持ちから三体を選んでくれ!!』

「∴成程。入れ替え式と言うことは、途中で相性を考えて変えるの
があり、と」

「そう。物分りが良いね。∴じゃ、俺はこの三体で。」

「では、俺はこの三体」

『両者定位置へ!!』

マーカーの位置まで下がる。

「何か聞きたいことはあるかい？」

「いえ、特に」

「なら、始めようか」

『バトルスタート!!』

「クロバット!!!!」

「アゲハント!!」

『両者、飛行タイプの付いたポケモン!! 激しい空中戦が繰り広げ
られそうだ!!』

「クロバット、エアスラッシュ!!」

「ばばっ!!」

「ふっ、甘いよ!! アゲハント、吹き飛ばし!!」
「ふおおお!!」

二体の起こした暴風がぶつかり、相殺された。

「チッ…! 遠隔攻撃は効かないか…」
「そのとおり。さ、どう来るかな?」
「もどれ、クロバット!!」

『おっと、ここできなりのポケモンチェンジ!!』

「いけっ、ビーダル!!」
「びだっ!!」

「へえ。成程、接近戦用のポケモンか。けど、そう上手くいくかな?」

「上手くいかせるのがトレーナーの力量!! 行けビーダル、馬鹿力!!!」

「びだああああ!!!!」

両拳に気がこめられ、アゲハントに降りかかる。

「かわせ!!」
「ふお」
「びだっ!!」

ズガン、と地面にクレーターが出来る。

「ふう、危ない危ない。アゲハント、銀色の風!!」
「ふおおお!!」
「びだ!!」

『アゲハント得意の銀色の風が、ビーダルを多い尽くしたー！！！』

「びだあああ…」

「ビーダル！？」

風が消えると、ビーダルがその場に倒れた。

『ビーダル戦闘不能ー！ー！！！』

「くっ…流石に強い…！！」

「だろう？さ、次は何かな」

アゲハントを腕に留め、余裕の笑みを見せるリョウ。

再び、初手と同じボールを投げる。

「クロバット、行け！！」

「アゲハント、吹き飛ばし！！」

「クロバット、エアスラッシュ！！」

「ばばっ！！」

『再び、凄い技の激突だー！ー！！』

風が消え去り、二体が翼で打ち合う。

「流石に、力押しではこっちの分が悪いからな…アゲハント、銀色の風！！」

「ふおお！！」

「クロバット！！」

「ばばっ！？」

クロバットの周りを、輝く風が覆いつくした。ビーダルのとときと同様、中で激しく音がしている。

『ここでクロバットも戦闘不能かー！？』

「これで終わりだね。さ、次はどうするのかな？」

「…こっちの台詞っすよ、それは」

「何！？」

風が消えるが、そこにクロバットの姿はない。

「ふお！？」

「クロバット、エアスラッシュー！！！」

「ばっ！！」

「ふおお！？？」

「アゲハント！？」

アゲハントが打ち落とされ、気絶する。

『今度はアゲハントが戦闘不能となったー！！！！なんて激しいバトルだ！！』

「一体、いつの間に後ろに…：そうか、影分身を使っただね？」

「バットの得意技だね。瞬間的に使わせてもらいましたよ」

アゲハントをボールに戻し、次のボールを投げるリョウ。

「行け、ビークイン！！」

『リョウの二番手はビークインだ!!』

「ビークイン…？ミツハニーの進化系か」

「そう。ビークイン、攻撃指令!!」

「びびび…びっ!!」

ビークインの六つの巣穴から、大量の蜂が飛び出してきた。バットに真っ直ぐ向かってくる。

「クロバット、振り切れ!!」

「ばばっ!!」

持ち前の最高スピードで移動するが、一向に間が広がらない上に、ずっと追い続けてくる。

「なんだ!？」

「全ての弾が追尾性能を持っている。しかも、全員に嗅覚があるから影分身も見破るよ？…さらに、パワージェム!!」

「びびっ!!」

巣穴から、宝石の粒が飛び出してきた。それと蜂を同時に避けなければならぬ。

「クロバット、どうにかして振り切れ!!」

「ばばばっ!!…ばあっ!!」

『おおーっと、ここでクロバットが蜂につかまってしまったーっ!!』

「なっ!？」

追い討ちをかけるように、宝石が降り注ぐ。

「ばあああっ!?!」

クロバットが力尽きる。完全に、強さが感じられた。

『クロバットが戦闘不能になって、ダイヤ選手は残り一体、しかしリョウは、ピークインを含めまだ二体を残している!!! 一体どう出るんだーッ!』

「やっぱり、強いな」

「そっちこそ。僕がここまで苦戦させられるなんて」

「行け、ダイノーズ!!!」

「ダイノー!!!」

ズシン、と地面に降り立つノーズ。

『ダイヤ選手の三体目は、ダイノーズだーッ!!!』

「へえ、タイプ相性が良いね。でも、…それだけで勝てるほど僕は甘くないよ。行け、攻撃指令!!!」

「びびびっ!!!」

蜂が飛び出し、ダイノーズを取り囲んだ。…が、全く動じない。

「ダイノーズの鋼の身体に、そんな攻撃は効きませんよ。…ダイノーズ、岩雪崩れ!!!」

「ダイノー!!!」

「びび!?! びびび…」

「ビークイン!？」

雪崩を避けきれず、岩に埋まるビークイン。

『戦闘不能ーーーーー!!ビークインが倒れ、一対一!!』

「：凄いな。いくらなんでも一撃とは」

「ええ。：さあ、最後の勝負です。どうぞ」

「そうだね。：ドラピオン!!出番だ!!」

「ドガアアア!!」

『リョウの最後のポケモンはドラピオン!!これは面白くなってきたぞー』

「!!!!」

ドラピオン…。いわずと知れた、超パワータイプ、守りも堅いポケモンだ。

「ダイノーズ、気をつけろ。岩雪崩れ!!」

「ディノーズ!!」

「ドラピオン、ガード!!」

「ドガア!!」

ドラピオンがアームで身体を覆う。と、岩を全て弾いた。

「なっ!？」

「ディノーズ!!」

「そのくらいの物理攻撃じゃ、ドラピオンは倒せないさ」

「成程…。アーマーが硬すぎるのか…。ダイノーズ、穴を掘る!!」

「ノーズ」

その場で回転し、地中に潜る。

「ドラピオン、構えろ!!」

「ドガアア!!」

「…?」

両アームを上へ上げ、地面を見るドラピオン。

『両者、膠着状態!! どうするようになる!?!』

「…ダイノーズ、行け!!」

「ディノロー!!」

「ドラピオン、受け止めろ!!」

「ドガアアア!!」

がちちりと、挟み込まれるダイノーズ。

『なんとダイノーズ、ドラピオンに回転を止められたー!!』
『!!』

「ディノッ!?!」

「なんつーパワーだよ…!!」

「そのまま、シザークロス!!」

「ドガア!!」

「ディノー…っ!!」

二撃が決まり、後ろに吹き飛んだ。流石に硬いと言っても、限界がある。

「…けど、あれは…。」

「ディノ？」

「ノーズ、こっち来い」

ダイノーズを近寄せ、耳（あるのか？）打ちする。

「…ディノ！！！」

「よし。絶対勝つぞ」

「さて、何をする気なのかな？」

「ドガアア！！」

「ロック・オン！！」

「ディノ」

ドラピオンに、マーカーが付けられる。

「ダイノーズ、穴を掘る！！」

「ディノー」

『ここでダイノーズ、再び地中に潜ったー！！だが、その攻撃はドラピオンに封じられているー！！一体どうするんだー！！？』

「ドラピオン、構えておくんだ。…まさか、穴を掘るをドラピオンに確実に当てるつもり？…もう忘れたのかい？次に出てきたときには、最後だよ」

「リョウさん、あんた、少し矛盾したことを言った」
「？」

ドラピオンを指差す。

「そのドラピオン、岩雪崩れを防ぐことが出来る。俺のダイノーズの技の中で、二番目に強い技だ。だが、穴を掘るは以外に弱くてね。なのに、ドラピオンはガードを使わなかった。…妙だな。もしかして、あんたのドラピオン…腹が弱点なんじゃ？」

「ははっ、仮にそうだとしても、次の攻撃は攻略している。君のダイノーズは負けるよ」

「俺のダイノーズは、いつも考えを改めさせてくれますよ」
「…？」

大きく息を吸い込み、声を張り上げた。

「ダイノーズ、最大出力で放て！！『電磁砲』！！！！」
「なっ！？ドラピオン、避け…はっ、しまっ」

ドラピオンの足元が光り、熱線が貫いた。天に昇り、雲を切り開いて消える。

「ど…が…あ」

『ど、ドラピオン戦闘不能ーーーー！！まさか、まさかの連続で、勝者はダイヤ選手に決定したーーーー！！！！』

「…はあ、やられたよ」

地面から上がってきたノーズをボールに戻し、リョウと握手を交わす。

「まさか、ロックオンが電磁砲への布石だとは。…聞いたとおりの…いや、それ以上の実力だ」

「ありがとうございます…え？聞いた？」

「あっ、言っちゃいけないんだった…って言うのは冗談で、噂でね。聞いたただだよ？本当だよ？」

「あー…はいはい」

なぜか、訊いてはいけないうような気がして、訊かなかった。

『勝者のダイヤ選手は、明日の戦いに備えてゆっくり休んでくれー
ー！！！！』

MCの言葉に従って、控え室へと戻っていくことにした。

「よく勝ったな、ダイヤ！！」

「ああ。お前との練習、役立った」

「あの、ロックオンからの電磁砲か。でも、まさか地下からするとは思わなかったぜ？」

そこまでは練習しなかった。あの機転で、よく成功したと思う。

「さ、明日のためにもまた練習だ！！」

「えー。眠いんだけど」

「いいから早くこーい！！！！」

また、引きずられるようにフィールドへ連れて行かれた。

シンオウリーグ・初戦、ダイヤVSリョウ、ダイヤ勝利。

第十八話・初戦、VSインセクターリヨウ（後書き）

作「どや？」

ダ「リヨウさん強え：インセクターじゃねえよあれ」

作「インセクターだって全国覇者じゃん」

ダ「馬の骨に負けてただろ」

作「あーあーキコエナーイ」

ダ「で、次は？」

作「皆大好きキクノばあちゃんだよ。」

ダ「うゝ強敵。応援よろしく！」

作「後書き長いね！」

第十九話・第二戦、VS グランドクイーンキクノ（前書き）

作「テスト前日ですこんにちわ、作者です。現在、ダイヤ君がジュンに貸し出されているので俺一人の独白になります。

前回インセクターを打破したダイヤは、その勢いのまま我らがおばあちゃんキクノを倒せるのか!?

そんな感じの四天王二戦目、よろしくお願いします。」

第十九話・第二戦、VS グランドクイーンキクノ

「うおおお……寝不足……」

いたって普通のコロシウムに呼び出され、控え室でうなるダイヤ。実のところ、昨日ジュンにつき合わされ、ろくに寝られていない。

『さあ、それでは前回見事に勝利を収めたダイヤ選手の入場だー！っ！！』

「うお…眠…」

目の下にクマを作って入場する。フィールドには岩が屹立していた。

『さて、ダイヤ選手お待ちかねの、チャレンジャーへの二人目の刺客！！岩の女王、キクノー！！！』

また、歓声が高まった。対する門から、経験豊富そうな女性が出てくる。

「よろしくお願いします」

「ほほほ、よろしく。リョウ君を倒してしまうとは、中々の腕前だね。…けど、私はそうは行かないよ」

『さて、ここでルール説明だー！っ！！今回は、2対2のダブルバトルを行うー！っ！！』

「2対2？」

「そ。手持ちから二体を選んでフィールドに出し、その二体が倒れ

たら負け。シンプルでしょう？」

たしかにシンプルだが、それだけに奥の深いバトルだ。とりあえず、二体を考え抜く。

『それでは、バトル開始——ッ!!』

「行け、エンペルト、ドクロッグ!!」

「カバルドン、ウソツキー!!」

『カバルドンの特性で、フィールドに砂嵐が広がった——!!』

「なっ!?!」

ごうごうと、目の前で砂が渦を巻く。砂嵐の効果で、ドクロッグは唸っていた。

「くそっ、これは想定外だ…」

「油断してるんじゃないよ!!」

「エンツ——!!?!」

「エンペルト!?!」

エンペルトが突如吹き飛んだ。そこを見ると、地面からカバルドンが飛び出してくる。

『いきなりの不意打ちに、エンペルトはダウンしてしまった——ッ!!!!』

「カバアア!!」

「エ……ン……」

「くそっ!! やられたか…」

「ドクロッ!!」

「なっ!!? こっちもか!?!」

見れば、ドクロッグもウソツキーと格闘を繰り広げていた。

『なんて激しい戦いだ!! 腕が全く見えないぞー!!』

だが、砂嵐の影響で、体力を削られているのはドクロッグの方に見える。

「ぐっ…!!」

砂嵐で見えない、キクノを睨みつけた。

「これはまずいな…!! ドクロッグ、いったん退け!!」

「どっ…ドクロー!!」

「ウソッ!?!」

まるで意地でも張るかのように、ウソツキーを弾き飛ばす。

『ここでドクロッグが優勢か!?!』

「ほお、なかなかやるねえ」

「ドクロッ…」

肩で息をするドクロッグ。明らかに…無理をしている。

「…お前に意地があるのはわかるが、この状況はそれだけじゃ打破できないんだ!!! いいから下がってくれ!!!」

「…ドクロッ!!!」

「エンッ!？」

驚いたことに突如、倒れていたエンペルトに蹴りをかました。

『なんだどうした、仲間割れかーーーー!?』

「エン!!!」

「ケッ、ドクロッ!!!」

「…エン?」

なにやら、会話しているように見える。

「おい、どうしたお前ら?」

「エン!!!」

「ドクロッ!!!」

二体、砂嵐に向かって立ち上がった。…何だか、異様な協力感が感じられた。

「…何だか分からないが、お前らに任せる!!! 唯、一つだけ俺の命令は…勝て!!!!」

「「エンッ!!! ドクロッ!」」

「ふうん、活きが良いのは勝手だが…そう上手くいくかしらねえ?」

『なんだなんだ、ダイヤ選手、勝負をポケモンに預けるようだーッ!!!』

「エーーーーン!!!!」

エンペルトが『なみのり』を放つ。
フィールド全体を覆いつくしていく。

「甘い!! ウソッキー、カバルドン、砂嵐!!」
「「ガアアッ!!」」

砂嵐は勢いを増し、水流を弾き飛ばした。

『さすが四天王、素直に食らうほど甘い相手ではないーーーー!!』

「これで、水を食らうのはドクログだけね」

「それが、こいつらの狙いなんですよ。」

「何? ……特性か?!?! 中々考える子達じゃないか!!」

「そう。乾燥肌で、ドクログは回復する」

「ドツカアーーーー!!!!」

ドクログの傷が消えた。

「よし、エンペルト、ハイドロポンプ!!」

「エーーーーン!!!!」

放たれた水流が、ドクログのスピードを上げる。

「砕け!!! 爆裂パンチ!!!」

「ドツカアーーーー!!」

「ソツキーーーー!!?」

ウソッキーが吹き飛び、気絶する。

『ウソッキー、戦闘不能ーーーー！！これで、ダイヤ選手が優勢となったか！？』

「ふふ、面白い。面白くなってきたよ！！」

「けど、二対一じゃあ分が悪いでしょう」

「そうかな？カバルドンは、一体になったときが強いのか。カバルドン、地震！！！」

「カバァァァァ！！！」

「エンッ！？」

「ケッ！？」

「しまっ！！」

「エンッ！！！！」

「……ケッ！！」

地響きの中、エンペルトの上に飛び乗るドクロッグ。

「エンッ……！！！！」

「エンペルト！！！！」

『エンペルト、戦闘不能ーーーー！！！！この一撃で、戦況を五分に戻してしまったーーーー！！！！なんと言う力だーーーー！！』

「くっ……！！」

どうやら、エンペルトは自分の体力の限界を感じて、ドクロッグを残したらしい。

「自分の身を犠牲にして、仲間を助けたか。なかなか天晴れな心構えだね。……さて、どうするか」

「ドクログ、爆裂パンチ!!」

「ドクログ!!!」

「カバルドン、捨て身タツクル!!」

「カバァ!!」

衝撃で、爆風が吹き荒れた。

「ドクログ!!!」

「カバァ…ッ!!!」

「爆裂パンチ連打!!」

「カバルドン、捨て身タツクルだよ!!」

二体が、激しくぶつかり合う。だが、二体とも疲労が目に見えている。

「次の攻撃で最後になりそうだね…!!!」

「そうですね…!!! 最大の攻撃で行きますよ!!!」

「ああ!!! カバルドン、地割れ!!!」

「ドクログ、爆裂パンチ!!!」

「ドクログ!!!」

「カバァアアア!!」

地が割れ、ドクログが飲み込まれる。

「ドクログー!!!」

「……………」

深い地の底に、見えなくなってしまった。返事は返ってこない。

「く…」

「コレで決まったか。いい勝負だも」「ドクロオオオオッ!!!!」な
んだって!？」

「カバツ!？」

「ドクロツグ!？」

ドクロッグは、二つに裂けた地面の壁を跳び、フィールドに再び戻ってきた。そのまま、呆然としたカバルドンに突っ込む。

「いっけええええええええええ！！！！！」

「ドクロオオオ!!!」

「かばあ ああ ああ ああ ああ ああ ! ! ! !」

強烈なパンチが、カバルドンの腹部に突き刺さった。そのまま空中高く吹き飛び、地面に落ちる。

「くす……」

『カバルドン、戦闘不能——!! ダイヤ選手が、二回戦も制した——!!!!』

「よっしやああ！！ドクロッグ！！」

「……ケツ」

激励の言葉も聞かず、ボールに勝手に戻ってしまった。キクノが歩み寄ってくる。

「さすが、強いわねえ。おばあさんも久しぶりに燃えちゃったわ」

「いえ、キクノさんこそ。ありがとうございました」

握手を交わす。

「次はオーバくんね。あの子は強いわよ、注意しなさい」
「ええ。分かりました」

「おい、聞いたぞ!!」

「また来たのか。帰れ、今すぐ帰れ」

「次はあのオーバが相手なんだろう!? だったら尚更練習しないとな
!!」

「知るか。俺はゆっくり休むの。いいから帰りなさい」

「おまえなあ」

ピルルツ、ピルルツ。

「おおっと、母さんから電話だ。いいから部屋から出る」

「あのなa『ボタン!!』」

電話を取り、ボタンを押す。

「よ。母さん」

『二回戦も勝ったんだって? おめでとう』

「それは、チャンピオンに勝ってからにしろよ」

『まあね。そうそう、そっちに荷物を届けたんだけど。』

「え? : ああ、あったあった」

近くにおいてあった小包を取り、開ける。

「お、これは」

『父さんが昔使ってたグローブ。気に入ってくれると嬉しいんだけど』

「…ああ、ありがとう。使わせてもらう」

手にはめると、丁度サイズが合った。

…親父、か。

「じゃ、お休み」

『うん、じゃあ』

ピッ。

「よし、練習行くぞ!!!」

「帰れお前!!!」

第十九話・第二戦、VS グランドクイーンキクノ（後書き）

作「今回はどうだった？」

ダ「ダブルバトルって難しいな…。」

作「慣れてくると楽しいけどね。本編でも言ったとおり、奥も深いし」

ダ「まあ、俺はシングル専門だけどな」

作「いいんじゃないかな？ お前もよくやってるしね。」

ダ「帰れよお前。」

作「ああ、次はコレを見ている人にも、付き合ってもらおうよ。」

ダ「…人間が完徹したときのテンションなので、そろそろこの辺で失礼します…。」

第二十話・第三戦、VS真っ赤な教祖様（前書き）

作「パラッパッパッパー？I'm lovin' it！！！！」

ダ「誰か、あいつに破壊光線使ってくれ」

作「真面目にやりますよ。・・・第三戦、オーバさんが相手ですが。」

ダ「うーん、長い戦いになりそうだが…」

作「安心しろ、そんなことはさせない」

ダ「は？」

作「長く書けないからな。そんな感じでレッツゴー！！」

ダ「おいこら、何勝手に！！」

第二十話・第三戦、VS真っ赤な教祖様

「こんにちは、オーバさん」

燃え盛る（ソリッドビジョンです）バトルフィールド、相対したオーバに声を掛ける。

「おう。デンジのやつから連絡あったぜ。サンキュー」
「いえいえ」

『さあ、本日も元気に私が司会です！！今回のバトルは、一対一のガチンコバトルだーーーー！！！！』

「え、それだけなんですか？」

「おう。俺とのバトルは、いつもこれって決まってる」

「なら……行け、エンペルト！！」

「俺はゴウカザル！！」

「エーーン！！」

「キィイ！！」

『両者のポケモンは、冒険の最初にもらえるポケモンの最終進化系！！！！これは面白いバトルになりそうだ！！！！』

「エンペルト、なみのり！！」

「エーーン！！」

津波が、ゴウカザルに襲い掛かる。オーバが叫んだ。

「ゴウカザル、フレアドライブ！！！！」

「ウキイイイイ!!!!」

炎を纏い、津波に突進する。波を突き破り、エンペルトに迫った。

「エンペルト、避ける!!」

「エンツ!!!」

「甘い、インファイト!!」

「ウキツ!!!」

ゴウカザルは回転を止め、拳を突き出す。

「くっ、エンペルト、メタルクローで防げ!!!」

「キイイイイイ!!!!」

「エンン!!!!」

『これは、今迄で一番激しい撃ち合いだ!!!!これを制するのはど
ちらだー!?』

威力で、インファイトが勝っているのは明白。次第に押され始める。

「くそっ、エンペルト、アクアジェット!!」

「エンツ!!!」

「もう一度フレアドライブだ!!真正面からぶつかっていけ!!」

「キイイ!!!!」

『今度は、正面での強烈なぶつかり合い!!!!どんどん熱くなって
いくぞー!!!!!!』

「エンツ!?!」

「エンペルト!!!!大丈夫か!?!」

吹き飛ばされたのはエンペルトだった。力はほぼ同等のはずだが、矢張り技の威力が効いている様だ。

…一対一の分、この戦いは短くなりそうだな…。

「諦めるなよ、アクアジェット!!」

「エエエエン!!!」

『これは激しい打ち合いだ、もう私が実況する隙などあるのか――
――!!??』

「…さがれ、ゴウカザル!! 火炎放射!!」

「ウツキイイ!!」

「エンペルト、なみのり!!」

「エエエン!!」

必死に技を出す、どんどんエンペルトが疲労していく。

『最大威力はあの技だが…ゴウカザルを止めるにはどうしたら…』

「ゴウカザル、休ませるな!! インファイト!!!!」

「くっ、エンペルト、メタルクロー!!」

「キイイイイ!!!!」

「エン…!!!!!!」

無理なく、ゴウカザルを止めるのは無茶という物だろう。
…けど、

「エンペルト。無茶を言うぞ」

「エン?…エン」

間を空け、下がってきたエンペルトに言う。

「ああ、お前を信じてだ。ゴウカザルに取り付け！！動けなくしろ！！」

「エン！！！！」

『エンペルト、ゴウカザルに直接取り付いたーーーー！？』

「何ッ！？ゴウカザル、ふりはらえっ！！」

「キィィ！？」

ゴウカザルに取り組み、足を払って引き倒し、のしかかる。

「よし、決める！！ハイドロカノン！！！！」

「エーーーーン……」

「なっ、ゴウカザル！？」

「キィ！？」

「エンッ！！！！」

「キィィィィーーーー！！！！！！！！」

激しい爆発が起きる。煙から二体が飛び出した。

『なんと、あの超攻撃をゴウカザル耐えたーーーーっ！？』

「…そんな…！！」

「ゴウカザル、よし、い………？」

「き……い……」

その場に崩れ落ちるゴウカザル。立ち上がることはない。

『ご、ゴウカザル戦闘不能ーーーーッ!!! 熱い熱いガチンコバトルを制したのは、ダイヤ選手だーーーーッ!!!』

「エンペルト!!!!」

「ゴウカザル!!!!」

二人同時に走り出す。

「エンペルト、大丈夫か？」

「エン。。」

「よく頑張ってくれたな、ゴウカザル。ゆっくり休んでくれ」

「キィ…」

二体をそれぞれのボールに戻し、握手を交わす。

「ガンガンに燃える、熱いバトルだった!!!! ありがとう!!!」

「ええ、こちらこそ!!! すごく楽しかったです!!!!」

握った手を、もう一度振りなおす。

「色々、学ばせてもらいました。」

「ああ、俺もだ。またバトルしよう!!!!」

「ええ、是非お願いします!!!」

コロシウムを後にするとき、心がすごく澄んだ気分だった。

「楽しかった…。な、みんな。」

ボール越しに問いかける。当然、返事は返ってこない。

「いやー、熱い勝負だったなー。感動したー!! もっと長くやってるのを見たかったな」

「作者の限界だよ。」

「ん?」

「いや…なんでもない。で? 今日もお前と練習か。辛いな、たまには何かないの? 飽きてくるんだけど」

はっはっは、とわざとらしく笑うジュン。

「お前がそういうと思ってな。今日はヒカリを呼んだ!」

「久しぶり、ダイヤ君。」

ジュンの言うとおおり、部屋にはヒカリがいた。わざわざすまないな。

「お、久しぶりだな。…お前が相手でも、本気だぜ?」

「当然でしょ? 明日は四天王最強との戦いなんだから」

バチバチ、と火花を散らす。

「俺とヒカリのタッグVSお前だ!」

「お前は空気を読め!!」

第二十話・第三戦、VS真っ赤な教祖様（後書き）

作「メタ発言乙。」

ダ「でも事実だろ？」

作「まあね。…さて、次の相手はあのイケメンよ」

ダ「イケメン？…ああ、あの警備員か？」

作「まさかそれがでてくるとは。ビックリだよ」

ダ「まあ、どうせ早く済んじまうだろ。長く書けないなら、な」

作「キーツ、今に見てろよ！…それでは、この辺で。」

ダ「あ、皆さん感想ありがとうございます。まだまだ受け付けてます。よろしくお願いしますね」

第二十一話・第四戦、VSエスパーマイスターゴヨウ（前書き）

作「ふう、ついに四天王最終戦か」

ダ「それ俺の台詞だし」

作「目の前には力学基礎の教科書。テストも目の前。俺はどうしたらいい？」

ダ「更新率を下げればいいのでは」

作「もうすぐ終わるじゃん。終わらないけど」

ダ「さて、今回は誰だ？」

作「V∥VO+at∴」

ダ「だめだ、完全にトリップしてる。∴あー、グダグダのまま進むな∴そんな感じで第四戦、よろしくお願いします」

第二十一話・第四戦、VS エスパーマイスターゴヨウ

二人にしごかれたのはきつかった。俺よりもポケモンの疲労がすごいかもしれない。

「ふう……。さて、一体誰だ？」

今回は、普通の室内競技場。いたって普通ゆえに、タイプが読めない。

と、紫の知的なシルエットが現れた。

「どうも、こんにちは。四天王最強…を名乗らせていただいております、ゴヨウと申します。よろしく」

「あ、これはご丁寧にどうも」

握手を交わす。と、目をじっと見られた。

「な…なんですか？」

「いえ。…成程、実に聡明な人柄だ」

「はえっ!？」

「何でもありませんよ」

不敵な笑みが、どうも気になる。

「それで、今回は三対三の通常バトルでしょうかと。いかがでしょう」

「あ、そうなんですか。シンプルですね」

「ただし、交代は無し。中々奥が深い勝負です。…ああ、MCの方は以降は無しになりますので」

「…（あの熱さだ、色々合わなかったんだろな）じゃあ、お互い良い勝負をしましょう」

「ええ」

三つボールを選び、腰につける。グローブをはめ直し、帽子のつばを傾けた。

「では」

「はい」

「「勝負!!」」

「チャーレム!!」

「F!!」

相手は、エスパー・格闘タイプ。…トレーナーからして、格闘ではないだろうから…エスパー使いか。

「F、アイスショット!!」

「ぴろろ……!!」

「チャーレム、サイコキネシス」

「チャー……!!」

「ぴろっ!？」

Fの動きが停止し、形成された氷が落ちる。

「なっ!!」

「そのまま、地面に叩きつけてください」

「チャッ!!」

「ぴろおっ!？」

地面に思い切り叩きつけられ、動けなくなる。と、Fを影が覆った。

「『とび膝蹴り』」

「チャーリーー!!」

「びろおおおお!!!!」

「F!!!!!!」

Fは動かない。戦闘不能だ。

「くっ!!」

「さあ、次のポケモンをどうぞ。」

二番手を投げ出す。

「行け、ドクロッグ!!」

「ドッカラーー!!」

「:おや。貴方はもう少し冷静だと思っていましたが」

「タイプ相性にこだわらないのが、俺の戦術ですよ。ドクロッグ、いけるか？」

「ケッ!!」

『愚問だ』とでも言いたそうだ。少し笑って、指示を出す。

「行け!! 爆裂パンチ!!」

「サイコネシス」

「チャッ!!」

「ドクッ!？」

Fと同じように、動きが止められる。

「ドクロッグ!!」

「先ほどと同じように、地面に…チャールム？どうしました？」

チャールムの顔が、苦しそうに歪んでいく。

「ちゃ…チャ…！！！」

「ドツカアアアアア！！！！！」

「よっしやああ！！！」

チャールムのサイコネシスを、力で跳ね返した。そのまま、隙が出来た相手にパンチを食らわす。

「ちゃ…れむ……」

「…ケツ」

「よくやった！！！」

「ふむ…成程。聞いたとおり、無茶な事をするドクログですね。…ならば、ドータクン！！！」

と、無口な土偶が現れる。素早さは低いが、十分な力があるはずだ。

「油断するなよ、ドクログ」

「ケッ！！！」

いきなり突撃する。相変わらず、言う事は聞いてくれそうにない。

「ドータクン、『重力』」

「ドッ」

「け…！！？」

ズシリ、と肩に重りが乗ったように重くなる。ドクログのスピードも下がった。

「ケッ……!!」

「大丈夫か! ドクログ」

「ドータクン、ジャイロボール……!!」

「ど……!!」

高速回転したドータクンが、動きの遅いドクログを跳ね飛ばす。

「ドッカア……!!」

「ドクログ……!!」

「ジャイロボールは、相手よりも遅ければ遅いほど威力が上がる技。いかがですか?」

「うれしくないですよっ……!!」

見るが、ドクログはまだ戦えそうだ。

「ドクログ、とにかく今はしのげ……!!」

「ケッ……!!」

「ドータクン、連続でジャイロボール……!!」

「どっ……!!」

ジャイロボールの軌道を見切り、ぎりぎりでかわすドクログ。

「ほう……中々、反射神経はいいようですね」

「ドクログ、大丈夫か……!!」

「ドク……アアアアア……!!」

ドクログが、喉を膨らませて咆哮を放つ。

「なっ……!!」

「なんです！？」

「どっ！？」

ドータクンは怯み、重力をといってしまった。瞬間、ドクログはドータクンに近づき連撃を与える。

「ど、どどど…っ」

「ドッカアアア！！」

とどめのアッパーが決まり、ドータクンは地に伏した。

「ど……………」

「…まさか、ここまでやるとは…想定外ですね、正直」

「でしょう？俺の自慢の一匹ですよ。な、ドクログ」

「……」

「？ドクログ？」

ゆっくりと、崩れ落ちるドクログ。起き上がりはしなかった。

「なっ！？」

「流石に、ダメージが蓄積していたようですね。…これで、一対一ですか」

「っ…………！！」

ドクログをボールに戻し、唇を噛んだ。

「さあ、最後の戦いです。行け、フリーデイン！！」

「くっ、ビーダル！！」

フリーデインはスピードが高く、遠距離攻撃に適している。…だが、

ビーダルはスピードが低い上に近距離型だ。

「相性悪いなー…くそ」

「びだびだびだ!!」

「?どーしたビーダル」

「びだ!!」

「いや、何言ってるかわからん」

わからない、が。

胸を叩くビーダルの姿は誇らしげだ。

「お前らは、いつもそうだな。『俺に任せろ』って」

「びだ!!」

「よっしゃ、いけっ!!『岩砕き』!」

「びだっ!!」

フリーデインに向かって拳が振り下ろされる。が、それはすらりとかわされた。

「…話は済みましたか?」

「ええ。待っててもらってありがとうございます」

「では。…フリーデイン、サイコキネシス!!」

「フッ!!!!」

「びだあ!?!」

ビーダルの身体がしばらく揺れる。動きが鈍くなった。

「びだ…!!」

「やべえ、さっきと同じ技か…!!」

「そのまま決めてください、エナジーボール&気合玉!!!!」

「フウーーーー……フッ!! フッ!!」

「びだああああ!!」

「ビーダル!？」

ビーダルが大きく吹き飛び、闘技場の壁に激突する。煙が上がった。

「くそっ、効果抜群二連撃か……!! ビーダル!!」

「もう起き上がれないでしょう。私の勝ちで」

「びだああああ!!!!」

煙の中から、叫び声が響いた。

「ビーダル!? 無事なのか!？」

「そんな…まさか!! 確かに二発ともあたったはず」

「びだっ!!」

ビーダルの指差す頭には、赤い鉢巻が締められていた。

「それは…!!」

「『気合のハチマキ』…そうか、俺が持たせておいた奴だな!」

「びだあっ!!」

すぐに冷静さを取り戻して、ゴヨウが言う。

「ですが…気合のハチマキは、体力をぎりぎりで持たせるもの。結局、こちらの優勢は変わりませんね」

「…ビーダル、いけっ!! あいつに攻撃を当てろ!!」

「びだびだびだっ!!!!」

フリーデインの防御力は低い。ビーダルの攻撃力なら一撃でも当たれ

ば倒せるはずだ…。
が。

「攻撃はかわされるよな」

「フッ！フッ！」

「びだだだ！！！！」

「攻撃が単調すぎるんですよ。そんなに接近戦がしたいなら…フリー
デイン、雷パンチ！！」

「フウッ！！」

「びだっ！！」

フリーデインの拳を、ぎりぎりでかわす。

「あぶなっ…。近接戦闘までできんのかよ」

「びだだだ！！」

「フッフッ！！」

パンチをパンチで受け、力を相殺する。

回避なしの、単純な殴り合い。

「…互角といったところですかね…。では、サイコキネシス」

「フッ！！」

「びだ！？」

お決まりの必殺パターンだ。ビーダルの動きが封じられ、フリー
デインが襲い来る。

「雷パンチ！！！！」

「フウウ！！！！」

「びだあああ！！」

雷撃がほとばしり、地面が砕けた。そのあまりの風圧に、目を閉じる。

「くっ!!」

「…今度こそ、私の勝ちです」

こんどこそ終わった。そう思い目を開けた…が、ふっと笑みがこぼれてくる。

「ははは!!!! ありがとうよ、ビーダル!!」

「なにを……!!? まさか」

煙が晴れると、フリーディンの拳を受け止めるビーダルの姿。

「気合のハチマキの効果を付与したカウンター!! 行けえええ!!」
「!!」

「びだあああああっ!!!!!!」

「しまっ……!!!!」

「フッウ!!!!??」

数メートル高く跳び、フリーディンは地面に落ちた。

「…っしやああ!!!!」

「びだああああ!!!!」

ビーダルとハイタッチを交わし、ゴヨウに向きなおす。

「…お見事です。聞いたとおり、実力だけでなく…運も持ち合わせている」

「?聞いた...?」

「いえ、こちらの話です。さあ、一週間後にはチャンピオンとの対決です。我々

四天王としても...応援していますよ」

「はい、ありがとうございます!!」

握手を交わした。

ここから一週間、何をしようか。

「ダイヤ、四天王四連勝おめでとう!!」

ぱちぱちぱち、と拍手をするジュンとヒカリ。

「やめろ。それはチャンピオンに勝ってからだろ?」

「ま、そうだな。それで、今日から1週間どうするんだ?」

「え?別に、普通に。お前らが相手してくれるんだろ?」

ふふん、と自信満々な表情でジュンが続けた。

「普通...とは行かない。」

「?どういうことだ?」

「チャンピオンは四天王と違って、いろんなタイプを使ってくるのよ。だから」

「いろんなタイプに慣れておかないとな!!」
「うおいつ!?!」

力づくで、二人に引っ張られた先は特設の練習場。

「ここがどうしたんだよ? もう四日も通ったから別に」

「別に、なんだい?」

「え?」

岩陰から出てきたのは、クロガネジムのヒョウタだった。

「し……じゃなくてヒョウタさん!?! 何でここに」

「それだけじゃないわ」

ヒカリが言うと、目の前にはシンオウのジムリーダーたちが勢ぞろいした。

「な……え!?! 何で皆!?! え!?!」

「何故って……次の相手はチャンピオンだろう?」

「だから、私たちといろんなタイプで戦って!!」

「君に、次期チャンピオンになってもraitたい。」

順に、デンジ、スズナ、トウガン。

「で、俺が皆を呼んだわけ。」

「ジュンくんだけじゃなくて、私もね。頑張ったわ」

皆、俺のために。けっ、と笑って、帽子のつばを上げる。皆笑顔だったが。

「…今、全部のジムってもぬけの空っすね」

「「「「「「「そこは気にするなよ！！！」」「」「」「」「」」

全員のツツコミがシンクロした。

「くっ……！！」

「どうした、ダイヤ？まだ立てるだろう」

「あのねえデンジさん！！四天王四連戦後にジムリーダーの精鋭ポケモン6体連戦はきついっすよ」

「文句言いながらも、私たちは倒して最後のデンジ君だもんねえ。」

「そっちはそっちで何ブレークタイムしてんだよ」

相手していない他数人は茶を楽しんでいる。

「そりゃー、相手してない間は暇だもん。」

「グハハハ、大丈夫だダイヤ、ワシ達はちゃんと見ているぞ！！」

「あーもう！！エンペルト、ハイドロカノン！！」

「エー……！！！！」

「しまった、レントラー！」

「クウオー……！！！！」

レントラーに、高圧弾が激突する。

「あー、やっとおわった！！ジュン、あと何日ある！？」

「五日くらいかな」

「おらあああ、早く次かかってこい！いいいい！！！」

「…もうなんか、色々と崩壊してるよ」

「ハイ、次はワタシやりまーす」

「その次は私とお願いします!!」

「おっしゃあ、間を空けずにかかって来い!!!」

第二十一話・第四戦、VSエスパーマイスターゴヨウ（後書き）

ダ「勝った…」

作「お疲れさん。ついにビーダルに光が差したな」

ダ「よくやってくれたよ、ホント。」

作「しかもジムリーダー全員集合という。俺、キャラ数多いと動かせないのに」

ダ「頑張ってくれ。」

作「さて、次回は第一部の完成話ですね。」

ダ「チャンピオンか…誰なんだ？」

作「アーアーキコエナ…」

ダ「…？どういうこったか知らんが、テスト頑張れ」

作「グバァ！！！！」

ダ「ではまた次回でお会いしましょう。」

第二十二話・最終戦、VSチャンピオン〜究極の女帝〜（前書き）

作「頑張れよ、応援してるぜ」

ダ「ああ。…俺は、勝つ。勝って皆に礼を言う」

作「さて、前回で四天王を制覇したダイヤはこれからチャンピオン戦。一体どうなる！？今回は前書き短めです！」

第二十二話・最終戦、VSチャンピオン（究極の女帝）

「いよいよだな、ダイヤ」

言いながら、ジュンが肩を叩いてくる。

「私たちは、観客席で見てるから。」

「はっはっは、いつでも野次を飛ばしてやるからな!」

「やめておけいマキシ。それこそ無粋じゃろうて」

オッサン二人にも、背中をバンバン叩かれた。

が、ダイヤは反応しない。

「…ダイヤ君?」

「……ぶつぶつ………」

瞳孔は開き、息も荒い。

「ダーイーヤー!!!」

「痛っ!? てめ、なにを」

あのなー、とあきれたように言う。

「いまさら緊張してんじゃねえよ! らしくねえな。その緊張がポケモンに伝わったらどうするんだよ?」

「…それもそうか…いや、ここで緊張するべきだろ。」

「ま、ここまで全く緊張しなかったってワケでもないんでしょ? だったら、ここで思いつき緊張したほうがいいって」

ナタネが言ったとおり、ここで緊張しておくべきだろう。

「で、『フィールドに出たときには緊張してない』ってくらいの気構えのほうがいいかな。」

「私も、チャレンジャーさんと戦うときはいつも緊張しますよ!」

「ワターシもソウです。コンテストに出るとき緊張します」

「…ふううううー」。――

息を大きく吐いて、後ろの扉へ向かう。

もう一度、大きく息を吐いた。と、頭に手が乗せられる。

「俺達が鍛えたんだ。勝てよ?」

「…このタイミングでプレッシャーかけますか。相変わらずDSですね、デンジさん」

苦笑いをデンジに返す。

扉が開き、入場していく。後ろからも声かけられた。

「頑張れよ!ダイヤ!!」

「応援してるからね!!」

「…ああ。ありがとう」

足取りは軽く、闘技場の中央へ。既に、大勢の観客が客席を埋め、審判が立っていた。

「手持ちポケモンは六体用意しましたか?」

「はい。準備はOKです」

審判の質問に答えると、マイクにスイッチが入れられた。

『…それでは、これよりチャンピオン対、チャレンジャーダイヤのバトルを開始します!』

審判がナレーションをするらしい。

『双方準備も整ったようです。チャンピオンの入場をお願いします
!!』

チャンピオン…。ジムリーダーたちに聞いたところ、矢張りものすごい使い手だという。
どれほど強いポケモンを持つ、強い人だろうか。色々考えを膨らませていると、歓声が上がった。
入場門のほうを見る。

「……………え……………」

目を疑った。見覚えのある黒い影が、こちらに向かってくる。

「……………し、しょう……………」

「ダイヤ君。君なら、ここまで来ると思っていたわ」

考えてみれば、妙だったじゃないか。異常な心の強さ。出さなくてもわかる、手持ちの力。不可解な言動。

「貴方の顔を見れば分かるわ。どんな困難も、ポケモンたちと乗り越えてきたってこと。」

「……………」

押し黙っているダイヤに、笑いながら言うシロナ。

「……はははははははははは！！！」

「まさか。寧ろ、喜んでますよ。いつか貴女と戦いたかった!!」

言いながら、シロナは客席のジムリーダーやジュンたちを見る。

「！！！！」

恐い。その視線は鋭すぎて、冷たかった。

「え、エンペルト!!」

「エエー！ー！！！」

「エー！ン！」

「やった、あたしが鍛えた冷凍ビームだ!!」

「しかも、ガブリアスには効果抜群だ！決まったな！！」
「喜ぶのは早い」

テンションのあがったスズナとジュンを諭すように、デンジがつぶやく。

トウガンもそれに頷く。

「…弱点を突いて、どうにかなるなら…こまらんからのう」

「よし、当たった……？」

完全に凍りついたガブリアス。が、

「ガブリアス、ドラゴンダイブ」

「……ガッバアア……！！」

「エンッ！？」

「なっ！？」

氷を弾き飛ばし、ガブリアスの一撃が直撃する。

「…弱点を突かれた程度で、余裕は持ちちゃいけないわ。……言っ
たはずよ。『手加減はしない』って」

「っ……！！エンペルト、戻れ……！！」

「えんっ……！！」

「行け、F……！！アイスショット……！！」

「ぴろろろ……！！」

「ガブアッ……？」

ガブリアスに、再び氷がぶつかった。

「よし、効果抜群！！師匠、…いや、シロナさん！！俺だって本気をだしてるんです！！」

「…面白い！！！！」

再び、side観客席。

「……なんなんだよ…この勝負…」

言葉を挟む余裕もなく、戦況がめまぐるしく変化する。

「矢張り、僕たちが手伝いに来て正解だったね」

「ええ。私たちと同じように、様々なタイプへの対策が必要ですか
ら」

ヒョウタとスモモが、確認するように言う。

「これは、どちらが勝つかわかりませーんね」

「ああ。けど、俺達はダイヤの奴を信じてやるしかないだろう？」

楽しそうに笑いあう、メリッサとマキシ。

戦況は再び変わっていく。

「びだあああっ……！！」

「ミロオオ……!!」

ビーダルとミロカロスが、同時に力尽きる。

「っ……!!」

「はあっ……!! 行け、ダイノーズ……!! 電磁砲……!!」

「トリトドン、濁流……!!」

「ダイノーズ……!!」

「ト……!!」

電撃がほとばしり、濁流と激突する。相殺された。

「マグネットボム……!!」

「かわして泥爆弾……!!」

「ディッ……!!」

「ト……!!」

激しい攻防。かわしかわされ、当てつ当たりつ。

「ディノッ……!!」

「ト……?」

ダイノーズがトリトドンにのしかかった。

「岩雪崩れ……!!」

「トリトドン、カウンター……!!」

「「オオオオ……!!」」

爆風。二体が吹き飛ばされ、倒れる。

「っそ……!! 休んでろ、ダイノーズ。いけ、ドクロッグ……!!」

「ルカリオ、波動弾……!!」

「ドクロッ!!」
「ブルッ!!!」

連続で、高速に繰り出される波動弾をかわす。
ルカリオが距離をつめた事で、近距離での激しいバトルが始まった。

「ドカカカッ!!!!!!」
「ブルルルッ!!!!!!」
「ドカアッ!!」
「ブルウッ!!!!!!」

突きがぶつかり、一旦間が開く。が、ルカリオは攻撃の手を休めない。
い。

「波動弾!!」
「ブルアッ!!!!!!」
「ドクロッグ!!」
「ケッ!!」

上手くかわしていくが、体力が削られているためか。最後の最後に一発当たってしまった。

「クアッ!!!!!!」
「くそっ!!!」
「竜の波動!!!!!!」
「ブルルル!!!!!!」
「ドガアアア!!!!!!」

ドクロッグが吹き飛ぶ。高く舞い上がったと思うと、地面に落ちた。

「く……!!……アレは」

タイミングがずれて、空からルカリオに向かって何かが落ちてきた。

「……? ブルアッ!？」

「ルカリオ!？」

ドクロッグの『置き土産』が発動したようだ。ルカリオがふらふらと崩れ落ちる。

「っ………」

Sid 観客席

「…やばいね」

「ああ。二体二か…。」

「何ですか? すごく頑張ってると思うんですけど」

ヒカリの当然の疑問に、デンジが答える。

「見た感じではな。けど、ダイヤは残りがクロバットとエンペルト。しかもエンペルトは大ダメージを受けている。…片やチャンピオンは、ガブリアスと何か。しかもガブリアスは体力がまだ残っているほうだ。あいつの破壊力は凄まじい」

「そんな…」

「あいつは勝つ。」

徐に、ジュンが言った。

「あいつは勝つよ。大丈夫だ、ヒカリ」
「…ジュン君」

「ばば…っ」
「とげっ…」

クロバットと同時に、トゲキッスも墜落した。

「っ…っ…」
『これで、お互いに一対一か…。』

最後のボールを構える。

「エンペルト!!」
「ガブリアス!!」

二体とも、息も絶え絶えだ。

「…勝負は、次の一撃で決まりそうですね」
「ええ。ガブリアス、ドラゴンダイブ」
「エンペルト、ハイドロカノン」
「ガブアアア!!!!」
「エー……!!!!」

勢いよく跳んでくる水球を、真正面からドラゴンダイブで受け止め

る。

「ガブア……!!!!」

「エンンン……!!」

が、水球を貫いたのはドラゴンダイブ。

「ガバアアア……!!」

「エー……!!」

「エンペルト……!!」

エンペルトの巨体が、沈んだ。

side 観客席

「……終わったか」

「……残念じゃが、いい勝負だったな」

「まだだ……!! エンペルト……!!」

ジュンの叫びが、闘技場に響いた。

「立て……!! 立てよ……!!」

「ジュン……?」

「お前を信じたダイヤに、仇で返す気か……? まだお前は立てるだろ

「!!」

「…彼も、無茶を言うわね。審判、早く」

シロナが促すと、審判は手を上に上げ、

もう一度、振り下ろした。

『…戦闘、続行』

「なっ!?!」

エンペルトが、必死の形相で立ち上がる。

「えん…っぺる…」

「エンペルト、お前…。」

「エー…!!!!」

肩を上下させながら、エンペルトが答える。

「…次こそ、本当に最後の攻撃ね。ガブリアス、ドラゴンクロール!!」

「エンペルト、振り絞れ!!!! ハイドロカノン!!!!」

「ガ「エンペアアアアアア!!!!!!」

「ガアアアア!?!」

ガブリアスよりも早く、エンペルトが動いた。

side 観客席

「決まった!!」

「いや、まだ浅い!!!! 次で止めだ、行けダイヤ!!!!」

「ダイヤ君!!」

「いけいダイヤ!!!!」

「行け、エンペルト!! とどめのハイドロカノン…?」
「エン…」

何かに気付いて、ダイヤは言葉を止めた。が、エンペルトは首を後ろに下げ、構える。

エンペルトのその姿を見て、シロナが慌てて叫ぶ。

「ガブリアス、立って!! 負けるわよ!!」

「が…!!」

「立って!!!!!!」

ダイヤはシロナを見、エンペルトを見て、呟いた。

「俺の負けだ」

「……え？」

「俺の負けです、シロナさん。」

審判に向かい、もう一度。

「すみません、俺の棄権です」
「え? あ、はあ」

「待ちなさい!! そんなの認められないわ!!」
「何故ですか」

シロナは怒号を飛ばす。

「情けのつもり!? そんな事したって何にも」

「うるせえな、こうするしかなかったんだよ!!!!」

「!? どういう」

「え…ん…」

水球が消え、エンペルトが地に伏した。

誰も状況が判断できていない。——一部の人間を除いては。

side 観客席

「…そういうことか。」

「…………え? どういう…」

ヒカリの問いに続いて、ナタネが言う。

「エンペルトの体力は、あのドラゴンダイブで尽きてたのね」

「それを、エンペルトはトレーナーへの…」

「信頼の力だけで、起き上がったという事でーすね」

マキシの言葉をつなげたのはメリッサ。

「エンペルトは、ボロボロの身体を引き摺ってでも主人に報いたかったんだよ。」

スズナが涙を拭いながらそう言えば、

「…よほど信頼が強くなければ、到底マネできないがな」

トウガンが腕を組んで息を吐く。

最後に口を開いたのはデンジ。

「まさに、ジュンが言った通りに…信頼してたってことだ」

『…エンペルト、戦闘不能!!!!勝者、チャンピオンシロナ!!!!』

審判の声を聞きながら、エンペルトに駆け寄る。

「エンペルト……!!大丈夫か!？」

「エン……」

「…なんだか、悔しいわね」

「ガブアッ」

ガブリアスを撫でながら、シロナが近づいてきた。

「信頼だけで、限界を超えた勝負が出来ちゃうなんて。私たちでも難しい」

「…師匠…俺……」

いろんな感情が混ざって、言葉が出てこない。それを汲んで、シロナが言った。

「いい勝負だったわ、ダイヤ君。ありがとう」

その言葉で、言葉の代わりに…涙が、溢れ出た。

「…ふう」

控え室に戻ると、既に皆が集まっていた。バツが悪くて、目線を下に向ける。

「…悪い、その…手伝ってもらったのに、勝てなくて」「てえいっ!!」

「あべしっ!?! 何しやがる!!」

ジュンにひっぱたかれる。

「よくやった。」
「は!?!」

ジュンの無骨な一言のあとに、ジムリーダーが続く。

「頑張った結果じゃないか。」

「うん。すごいすごい。」

「チャンピオンのポケモンに、ほぼ互角の実力で戦ってたんですよ!?!」

「勝負だから勝ち負けありましたけど、とっても楽しかったはずでーす!」

「ま、俺が鍛えたんだから当然だがな!」

「ちよつと、マキシさんだけじゃなくてあたしも!」

「グハハハ!!! 皆元気があつて何よりじゃわい!」

「そうだ。お前は頑張った。」

「その事実が、何より大事なんじゃない?」

締めめのヒカリをあわせて、九人からの言葉。熱い、何かが伝わってくる。

「…あり、がとう」

「あれ、さっき泣いたのにまた泣いてんのか?」

「ばっ、泣いてねーよ!」

「痛てっ」

ジュンの頭を殴る。

「じゃあ、俺達は帰るぜ。」

「ジムの事もあるからな。」

「あ、その…ありがとうございました!」

全員と握手をする。七人も去ると、少し部屋が寂しくなった。

「ヒカリも、ジュンも。ありがとうな」

「へへっ」

「まあ、ね。」

「ちょっといいかしら」

今しがた閉じられた扉から、シロナが入ってくる。

「師匠！？何故ここに」

「本当にいい勝負だったから、また言おうと思って。楽しいバトルだったわ」

握手を交わす。

「こちらこそ、楽しかったです」

「ジュン君と、ヒカリちゃんも。お疲れ様」

「「は、はいっ！！」」

「じゃあ、ダイヤ君。また会いましょう」

本当に挨拶をするだけだったんだな、と思いながら、去るシロナに手を振った。

「さーて」

と大きく伸びをして、二人に言う。

「帰るか！！」

「「おう！！（うん！！）」」

第二十二話・最終戦、VSチャンピオン（究極の女帝）（後書き）

作「お疲れさん。」

ダ「…ああ」

作「楽しかったろ？」

ダ「…ああ」

作「ならよし。…さて、ここで第一部は終了になります。

ここから先は第二部。完全オリジナルルートです。

そこで、皆様には是非ごらん頂きたいものが。次話として投稿しましたので、目を通していただければ幸いです。」

ダ「俺たちの冒険は、終わらない。」

作「そう。そこにポケモンが居る限り、トレーナーの旅は終わらないのさ。……行ってきたな」

ダ「…おう、行ってきたやるよ!!」

作「…それでは、これからよろしくお願いします。」

企画・こんなのでしょう（この企画に期限はありません）

作「はい、というわけで今回は前書きなし。今回で第一部が終了というわけで、いきなりですが、こんな企画を考えてみました」

ダ「ホントにいきなりだな、どんな？」

作「『第二部に、貴方もこの作品に登場しませんか企画』！どんどんひゅーぽふぽふー！」

ダ「…まあ想像がつくが聞いてやろう」

作「今作のお気に入り登録者が11名。ありがとうございます。その人数のトレーナーが居ると考えて、貴方の考えたキャラ：というより、貴方のゲーム内のキャラを教えてください。必ず本編に登場させます。」

ダ「思い切ったなあ」

作「以下に書くことを記入して、『私のページから』メッセージ送信してください。感想には絶対に書き込まないでくださいね」

- 1、名前
- 2、特徴（容姿、年齢、一人称、二人称、出身地）
- 3、役職（ポケモントレーナー、フロンティアブレン等）
- 4、手持ちポケモン&戦術（手持ちは全地方、戦術は軽くで構いません）。
- 5、キャラで一言。

1と4は必須です（なかった場合、私が決める事になります。どんなフリーダム人間になるか分かりません）。

例として、私が書いたキャラ設定（第二話）を参照ください。足りない部分があれば、私からメッセージ送信いたします。」

ダ「あれ、役職も決められるんだ。ぶっ飛び設定は？」

作「その辺は自重していただいて。トレーナーの強弱もあるから、チャンピオンはやめていただきたいかな。」

ダ「ふーん。で、コレで人数が出たら？抽選？」

作「何言ってるの。全員出します。責任もってね。…勿論一発かレギュラーかは俺が決めるけど」

ダ「そりゃそうだよなー」

作「質問については感想でお願いします。」

ダ「貴方のオリキャラと出会えることを楽しみにしています。」

作「それでは、皆様が参加して下さいることを切に願って。Kavaleristがお送りさせていただきました」

第二部、ダイヤキャラ設定

・第二部でのダイヤ

本人には特に変化はなし。身長が若干伸びた。

手持ちの呼び方には若干の変更。

エンペルト↓エンペルト（昔からの相棒のため）

クロバット↓バット（クロっているのが少し長かったから）

ビーダル↓ビーダル（現在、ナナカマド研究所の諸手伝いをしている）

ダイノーズ↓ノーズ（やっぱり長いため）

F↓F（変える必要なし。）

ドクロッグ↓ドクロッグ（他の呼び方では反応してくれなかったため）

これに、随時交換等して行きます。

この直後に投稿するのが、第二部の幕開けとなります。

新キャラ多数、完全オリジナルシナリオをお楽しみください。

企画にもぜひ参加してください!!

新章・第二十三話、新たなる挑戦と漆黒の影（前書き）

作「さ、新章突入！！」

ダ「シンオウは回り切ったからな。次はどこに行くんだ？」

作「なあに、あの人に任せておけばいいさ」

ダ「？あの人？」

作「物語の始まりは、いつだってあの人だ。動かしやすいしね」

ダ「ふーん…よくわからんが」

作「新たなる地、新たなる敵、新たなる仲間。激しい勝負が、君を待っている？」

ダ「…よっしゃ、行ってくる？」

作「さあ、廻ってきたな。新たな物語を紡ぐ為に」

新章・第二十三話、新たな挑戦と漆黒の影

チャンピオン戦から、数日が過ぎて。ダイヤは家でのんびりと時を貪っていた。

「ふあ……。」

いつも以上に遅く起き、ベッドを降りる。窓を見ると、健やかな晴天だった。

階段に足をかけ、リビングが見えたところで眠そうな声を上げる。

「……お早う」

「あら、お早う。」

「ダイヤ君、随分遅かったわね」

帰ってきた返事は二人分。眠い目をこすってリビングを二度見し、再び自分の部屋に戻った。

「まさかまさか……。何寝ぼけてるんだ。それともこりや夢か。そう
だそうに違いない。寝よう寝よう」

二度目の温もりに潜り込み、寝入った。次に目が覚めたのは一時間後。

「おはよー」

「お早う。朝御飯冷めるわよ」

「遅かったわね。」

「どえ
えええええ！！？？」

再び二人分の返事が返ってきたことに驚き、階段を踏み外した。頭部に強烈な痛みが走る。

「いたたた…なんでこんなところにいるんすか師匠!!!」

「この前言ったじゃない。『また会いましょう』って」

そう、居間に居たのは我が母親と…シロナ。

「あんな劇的な分かれ方してこんな軽い再会ですか!!! なんだかなあもう!!!」

「ダイヤ、早くご飯食べちゃってくれる? 片付けないと」

「あんたはあんたで、何のんびりチャンピオンとお茶してんだよ（怒）」

「お話してたら、意気投合しちゃって」

あーもう、とイライラしながら席に着き、朝飯を口に運ぶ。

「で? 何しにきたんですか（もぐもぐ）」

「うん。私に負けて、目標がなくなっちゃった?」

「…引っかかる言い方っすね」

が、まあ何を目指すかは見失いかけている。

「そんなダイヤ君に、いいお知らせ。」

「?」

差し出されたチラシを開く。

「『バトル：フロンティア』?」

「そ。トレーナーが、純粋にバトルを楽しむための施設。これが、

もうすぐシンオウにもできるんだけど…それに向けての船上パーティがあるの。で、コレに私が御呼ばれして、同行者が一人付けられるんだって。」

びし、と指差される。

「どう？行く？」

「飯食ってからでいいすか（もぐもぐ）」

「どうぞー。あ、アヤコさんコーヒーお替り」

「はい」

「何で順応してんだよ！！」

朝食を取って一段楽した後、再び会話を始めた。

「で、船上パーティの事なんだけど。いろんな地方からトレーナーが集まってくるから、いろんなポケモンと会えるわよ。勿論その後にはフロンティアもあるし」

「へー。シンオウ地方のポケモンは全部見ましたからねえ。行ってもいいかな」

くあ、と欠伸をする。時計のほうをちらりと見て、溜め息をついた。

「あーあ。ちょっと失礼しますよ」

「どうしたの？」

玄関扉へ向かい、開けられた瞬間の客人にパンチをかます。

「ぐあああああ!？」

「あのなあ、俺は疲れてるんだから少しは休ませるってことをしらねえのか。帰れ帰れ」

ばたむ。

「……ジュン君？」

「ええ。毎日朝っぱらからやってきて、いい迷惑です」

本当に毎日、同じ時間にやってくる。正直面倒です。

『あーけーてーくーれーーー』

「無視してていいんで。」

「……そう……」

「ダイヤー、少しは外に出なさいよ。腐るわよ」

『おーいー、ダーイーヤー』

「…あああもう!!」

イライラが頂点に達し、扉を思い切り蹴破る。

扉に張り付いていたジュンが吹き飛んだ。

「へぶっ!？」

「何の用だよ」

言うと、ジュンは器用に起き上がって答えた。

「バトルバトル!!バトルしようぜ!!」

「:一回だけな。エンペルト」

「ドダイトス!!!」

「はい、終了。エンペルト、お疲れ」

「エーン」

「くっそお、なんでだよなんでだよ!!」

地団太踏みながら悔しがるジュン。

「:なんでだろうね」

「同情の目で見えるんじゃないよ!!」

「その調子じゃ、四天王に挑むのも先が長いな」

「もうバツジはあるの!!運営委員が許可してくんないだけ!!」

「あっそ。:師匠、バトルフロンティア、俺行きますよ」

「あら、そう?ジュン君は?」

「うえっ、何でチャンピオン!？」

「気にするなよ」

バトルフロンティア？と、嫌そうな顔をするジュン。

「お、俺はいいや。お前、楽しんで来いよ」

「？めずらしいな、お前が乗り気じゃないなんて」

「ま、まあたまにはな。じゃ！！」

脱兎の如く、逃げ出していった。

「…なんだありゃ。」

「それじゃあ、今すぐ行く？」

「あー…。別に俺はいいんですけど」

「アヤコさん、息子さんお借りしますね」

「はい、よろしくお願いします」

「軽い！！！」

「釣りはいいな、エンペルトよ」
「エーン」

どこかで言ったような台詞だが、ご存知のとおりダイヤの趣味の一

つに、釣りがある。

「心が落ち着くよなあ。…まあ」

横風が吹き付ける。

「こんな高速船の上じゃなけりゃ、だけど」

「高速船？そんな事ないわ。唯のボートよ」

「普通、船って言われたら！タイドリップ号とか！！サント・アンヌ号とか！！シーギャロップとか！！そういうのを考えるでしょうが！！」

サイズは普通の連絡船ほどで、断じて狭くはないが、速度が半端ではない。

というか、シーギャロップは高速船か。

「これは別の港までの船なの。そんなに怒らないでよお」

「キャラ崩壊が激しい！！！！！！」

こんな速度で魚がつれるか、と呟いた瞬間、糸に引きが。

「うっそお！？エンペルト、網網！！」

「え、エン！！」

「おうらあああ！！！！」

ぐいっと引き上げると、魚…ではなく、ポケモンが甲板に飛び出した。

「ヘアッ！！」

「なんじゃありゃ！？」

星型の、見たことのないポケモン。ナナカマド博士に強化してもらった図鑑を開く。

「…スターミー…?」

「かなり強力な水ポケモンね」

「よっし!! エンペルト、メタルクロー!!」

「エンツツペ!!」

「ヘアッ!!」

スターミーは、エンペルトの攻撃をかわし、体当たりしてきた。怯んだところに水の波動が直撃する。

「エンツ!？」

「エンペルト、大丈夫か!？そいつ強いぞ!!」

「えー…ん」

エンペルトの頭上に星が浮かぶ。

「げっ!!」

「水の波動の追加効果ね。混乱してるわよ」

「わかってます!! 戻れ、エンペルト」

エンペルトをボールに戻す。スターミーはまだまだ余裕だ。

「ちっ、行けバット!!」

「ばばばっ!!」

「ヘアアア!!!!」

スターミーの水晶体が輝きだす。

「…？やっべえ、バット、避けろ！！」

「ヘアアアア！！！！」

「ばばっ！？」

冷凍ビームを寸でのところでかわす。

「へえ、その子強いじゃない」

「完全に観客ですね師匠！！くっそ、バット、催眠術！！」

「ヘアッ！！！！」

「っばっ！？」

バットが行動する前に、今度は勢いよく光を放たれた。一瞬目がくらむ。

「くっそ、『フラッシュ』か！？」

「ばばっ…？ばぁー！！！！」

「しまっ！！」

「ヘアッ！！」

「あ、逃げた」

目を開いたときには、甲板にあったのは氷像と貸したクロバットだけだった。

「やべえ！！エンペルト、水で溶かせ！！」

「え、えん！！」

「くっそ、次こそ捕まえてやる！！」

「…高速で移動してるから、会えるとは限らないけど」

「しまった！！！！」

「うー。ショックー」

「えーん…。」

釣り糸をたらしながら、前回の勝負を思い出す。

「あんなに強い野生ポケモンがいていいのでしょうか。」

「えーん」

「ケッ」

「ばばっ。」

「ディノー」

「びだ」

「ぴろろ。」

ドクロッグ以外全員で、糸をたらしてスタンバイする。

「ダイヤくーん、お茶持ってきたよ」

「あ、どうも。」

差し出された紅茶を受け取り、一口啜って水平線を睥む。

「……………」

つんつん、と頬を突かれる。

「：なにしてんすか」

「ダイヤ君、顔恐いよー。そんなにさっきのスターミーが気になるの？」

「ええ、まあ。あんなに強いポケモン、久々に見ましたから」

「ケッ」

「お前は別枠。」

と、そのとき。

「ヘアアッ！！！」

叫びが聞こえ、甲板に振り返った。さっきのスターミーだ。

「よっしゃ、そっちから来るとは都合がいい！！」

「ドツカアアア！！！！」

ドクログが前に出た。

「よし。ドクログ、爆裂パンチ！！」

「ドツカア！！」

「ヘアッ！！」

スターミーが回避を取ろうとしたとき、ドクログがフェイントをかける。

「ヘア！？」

「ドクログ！！」

「ヘアアアアッ！」

スターミーが、空高く吹き飛ぶ。

「ナイスだ、ドクログー!!」

「ケッ」

「ヘアアアー!!!」

中空から、冷凍ビームが放たれる。ドクログはうまくかわしたが、標的を外れたそれはこちらへ向かってきた。

「うあああっ!?!」

「ダイヤ君!?!」

「あああああ!?!」

身体が凍りついたまま、海へと落ちた。船が過ぎるのが見える。

『エンペルト…：ビーダル…：!!!頼む…：…』

そこで、意識が途絶えた。

「はっ!?!」

甲板に寝かせられていた。目を開くと、ポケモンたちとシロナがこ

ちらをのぞきこんでいる。

「ダイヤ君！？良かった、目が覚めたのね」

「あ、はい。いたた…ありがとな、エンペルト、ビーダル。」

「えー、ん？」

「びだ、びだ」

エンペルトとビーダルが指した先には、スターミーがいた。

「…え？」

「彼が空から直接海に飛び込んで、助けてくれたのよ。エンペルトもビーダルも、突然すぎて対応できなかったの」

「そっか、お前が。ありがとな、スターミー」

「ヘアッ。」

心を開いてくれた、のか？…なら、

「俺の仲間に、なってくれるか？」

「…ヘアッ！！！！」

スターミーは宙を舞い、…着水した。

「えええええええ！？なんでえええええ！？」

「あらら。逃げられちゃった」

「…あーあ、逃げられたなら仕方ない。お疲れ、皆。ボールに戻っていいぞ」

全員をボールに戻し、立ち上がる。海水が滴った。

「あっちゃあ、べしゃべしゃ。師匠、どっかシャワー浴びられる場

所ありますか？」

「ああ、奥にシャワールームがあるわよ。一緒に入る？」

「全力で遠慮させていただきます」

side???)

「おい、スターミーどこ行っただろ!？」

直走の高速船上、黒コートの男が声を上げる。

フードを取ると、コートと同じ黒髪が風に揺れた。

「つかしいな…どこ行っただろ? 遠くまで行くなっただのに」

「どうしたあ? なんかあったか?」

別の男が、後ろから声をかけてきた。

「いや、スターミーがな。ボールから出して遊ばせてたらどっか行っちゃったみたいなんだよ」

「ん…」

今度は、フードの中から金色がチラついた。

「ま、大丈夫じゃねえの? 他人に取られるってこともねえだろ」

「確かにそうだが…」

「ヘアッ！！！！！」

不意に、水中からスターミーが飛んで来た。黒髪の男の前で着地し、少し頭(?)を下げた。

「おお、どこ行ってたんだよ？心配したぞ」
「ヘア」

スターミーは、楽しそうに回転し始める。

「？何か楽しいことでもあったのか？」

「ククッ、ならなによりだろ。よかったな、スターミー」
「ヘアッ！！！」

「お二人とも。もうすぐ到着しますよ」

女の声が聞こえて、二人は顔を見合わせる。

「さあ、仕事の時間だな」

「まあ頑張れよwww」

「テメーもやれやゴルァ！！！！！」

ーーーーー港まで、あと13分ーーーーー。

新章・第二十三話、新たなる挑戦と漆黒の影（後書き）

ダ「妙なスターミーがでてきたな」

作「いやゝ、やっぱりスターミーは強いなあ」

ダ「…何か知ってんの？」

作「俺は神だぞ？」

ダ「そうでしたね」

作「さて、次回は船に到着します。謎のコートの秘密も分かるかも？」

ダ「感想等ございましたら、気軽に申し付けください。」

作「それではそんな感じで！」

第二十四話・船上パーティ、まさかのキャラ登場（前書き）

作「テスト期間終了です、投稿再開いたします。ご迷惑をおかけしました」

ダ「うい、おつかれさん。で、今回は？」

作「タイトル通り、まさかのキャラ登場です。」

ダ「ちょっと設定が違うらしいので、それは後がきで。」

作「それでは、そんな感じでお楽しみ下さい？」

第二十四話・船上パーティ、まさかのキャラ登場

「えーっと」

パソコンの預かりシステム。この便利な施設によって、俺は手持ちのポケモンを入れ替えていた。

窓の外には水平線。現在、場はミオシティである。

「：よし。ナナカマド博士、ビーダルは頼みましたよ」

『うむ、しっかり働いてもらうとしよう』

ビーダルは研究所に転送している。船上で、博士から『人手が足りない』という話を聞いたからだ。

「博士の言うこと、ちゃんと聞くんぞー」

『びだびだ！』

画面向こうで、自信ありそうに胸を叩いている。まあ大丈夫そうだ。

「それでは、失礼しますねー」

『うむ』

『びだー！』

プツン。

画面が消え、ロビーのベンチに座り込む。

「ふー」

「ダイヤクーん」

呼ばれたほうを振り返る。こちらに向かってきていたのは、シロナだった。

「はい、受付はすんだわよ。」

「あ、どうも」

パソコンを弄っている間に、受付を頼んだのである。さて、これで。

「船に乗れ———師匠」

「ん？何？」

乗船許可証と、もう一枚。

————『各地方親睦バトルーナメント参加登録、ダイヤ様』———。

「がんばってね☆」

「あんたなああああ！……！」

「…はあ、何でこんな事に」

師匠の勝手な行いによって、船上のバトルフィールドに。

観客は数百人：どんだけ乗ってるんだよ。甲板だろここ。

一応フィールドは三つ：でかいって、広いって。規格外だよオイ。

『あれー：あそこで師匠と話してるのって確か：デボンのダイゴさんだよな？じゃああっちでキラキラ飛ばしてるのはミクリさんで：あっちのボデイスーツはワタルさん？うわあ、ってことはあの人はイッシュのアデクさんか：マジで全員集合かよ』

滅茶苦茶有名人だらけだ：有り得ん…。

『あー、あー：あ、聞こえてる？はい、おk。それでは、これからトーナメントを始めようかな！！司会実況解説はこの私、豪華客船ヴィンセント号船長のロロがお送りしまーす！』

超陽気な女の声が、甲板に響き渡る。一部盛り上がり、一部苦笑というカオスに。

『ルール説明聞きたい人ー？：はい、たくさん居そう！じゃあ説明するね！手持ち3体によるシングルバトル！はい終わり！』

短い！簡潔！というツツコミがいたるところから。なんなんだよ。キャラ濃すぎだろ。

『それではトーナメント一戦目！A会場、シンオウの超新星！チャンピオンに引き分けたその実力は本物だ！ダイヤ選手ー！！どんどんばふー！！』

拍手と苦笑に包まれながら、周りに手を振る。ものすごく恥ずかしいんですが。

『その対戦相手、アデク氏が連れてきたこちらも超新星！チャンピオンの一番弟子、Nー！』

向かい側に立っていたのは、緑の髪の少年。お互いに歩み寄り、握手を交わす。

「君がダイヤか。アデクさんから話は聞いていたよ、チャンピオンの弟子なんだって？」

「ん、まあな。それを言ったらそっちもそうなんだろう？」

「まあね。…ちよつとした過ち、その反省をするためにね」

一瞬、Nの表情が曇った。気まずい空気の誤魔化し、挨拶から。

「で、えーつと。俺はダイヤ。」

「ボクはN。」

「N？」

「N。」

…何も言わんぞ。俺は大人だ。

「お互い、いい勝負をしよう」

「ああ、望むところだ」

『それではバトル開始ー☆』

「頼んだよ、アバゴーラ！！」

「行け、F！！！！」

「ゴォォォ！！！！」

「ぴろろろ！！！！」

アバゴーラ……。見たことがない。と、言う事はイッシュ原産か。

「タイプが分からんが……まあいい、それでこそ知識欲!! F、サンダーショット!!」

「ぴろろっ!!」

「アバゴーラ、まもる!!」

「ゴォッ!!」

『おー、アンノーンの打ち出した稲妻を、見事にバリアで弾いたッ!! 弱点を突けないダイヤ選手、ここからどうする!!?』

「どうするも何も!! F、アイスショット、サンダーショット連射!!」

「ぴろろっ!! ぴろろろろろろ!!!!」

「アバゴーラ、滝登りで突き破るんだ!!」

「ゴォォォ!!」

氷や電撃の弾を弾きながら、猛スピードの突進が迫る。

「くっ… F、上昇!! 空中から打ち込んでいけ!!」

「させないよ! アバゴーラ、ストーンエッジ!!」

「ゴゴゴォォォ!!!!」

「ぴろおお!!?」

『おおー、飛び上がったアンノーンをナイスタイミングで打ち落としました!! 中々やりますねえ!!』

Fは戦闘不能。…なるほど、さすがチャンピオンの一番弟子。向かい側のNに言う。

「強いな、お前!!」

「君こそ、アンノーンをそこまで鍛えあげられるとはね!!」
「いいさ、全力で行く! ドクログ!!」

ボールから飛び出し、地を蹴るドクログ。
そのままアバゴラを睨みつけた。

「行け、爆裂パンチ!!」

「ケッ!!」

「守る!!」

「ゴォっ!! オォ!!」

「なにっ!!」

『おおおお!! なんと言うことでしょう、アバゴラが守る前に!! ドクログは間合いに入り込んで一撃!! ここまでのスピード、コンマ一秒か!!』

「…やるね」

「まあな。ドクログ、まだやるか?」

「…ケッ!!」

「よし」

まだまだ、やる気があるようだ。気まぐれだから使いどころが困る。

「…なら、次だ!!」

「ケオオオー!!」

『N選手の二体目はアーケオス!! この戦い、スピード勝負となるのかなー!!?』

アーケオス……。矢張り見たことのないポケモンだ。イッシュを知らない、戦闘にここまで支障をきたすとは。

「まあ、いいか。任せてもいいか？ドクログ」
「ケッ！！」

勢いよく走り、間合いをつめるドクログ。
それを見て、Nは笑って一言。

「……今だ、アーケオス！」
「ケッ！？」

つまずき、体制を崩す。ドクログの足元を見るが、足元には何も落ちていない。

「……？妙だな……ドクログ、相手は鳥だ！！距離を開けて、遠距離から攻めろ！！」

「……ケッ！！！！」

コレまでに仕掛けてこないということは、風起こしといった技は使えないようだ。ならば、離れてヘドロ爆弾で攻めれば……。そう考えての指示。だが、

「なるほど、鳥への対策は万全だ。……けど、無駄だね！！アーケオス、『ナイトバースト』！！」

「なッ！？」

「ケオッ……ゾロアアアアアア！！！！！！」

「ドッカアアアア！？！？」

突如としてアーケオスの姿がぶれたかと思うと、別のポケモンに変

化して。

強力な波動が、ドクロッグを襲っていた。

「な、何が起きたんだよ!?!」

「オヤ、ゾロアークの『イリュージョン』を見たのは初めてかな? なら説明してあげよう。この特性は、ボクの手持ちの一匹に『化ける』:そういうものなんだ」

なるほど、最初にこけたのは、ゾロアークの不意打ちだったわけか。そして、あいつの最後の一匹、それが本当にアーケオス…。

だが、ドクロッグは息も絶え絶え。残りは一匹。俺の勝機は…一筋だな。

「ドクロッグ、もう少し。頼めるか」

「……ケエツ!!!!」

立ち上がり、こちらに顔を向ける。

『よし』

「さあ、続けていくよ!! ゾロアーク、ナイトバースト!!」

「ゾオロアアア!!!!」

両腕を上に向け、闇の力を集めるゾロアーク。

だが、その隙を逃しはしない。

「ドクロッグ、毒づき!!」

「ケエツ!!!!」

「発射!!」

「アアアアア!!!!」

超近距離で放たれたナイトバーストが爆発し、二体を巻き込む。帽子を押さえて、目を開く。

「…くっ」

「同士討ちか…中々やるじゃないか、キミのドクログ」

「まあね。そっちのゾロアークだってそうだろう？」

『…ハッ！！実況するのをすっかり忘れていました！！ここで残りポケモンは一匹ずつ！！勝者は果たしてー！！？』

「…勝者、か。」

「…勝者、ね。」

言って、二人は見つめあう。…意見は同じようだな。

「「そんな事は関係なくなってきたな（ね）！！」」

「楽しくなってきた！！最後まで楽しんでこうぜ！！」

「ああ、ボクもそうだ！！キミと、最後まで正々堂々戦いたい！！」

（side 観客）

「はっはっは！！シロナの弟子もなかなかやるのう！！」

「いえいえ、アデクさんのお弟子さんも。」

甲板テーブル席で、アデクとシロナが観戦&談笑していた。

「まあ、こっちの試合も中々見ものじゃが…」

「そうですね。気になるのは」

二人からは笑みが消え、視線は別のフィールドへ向かう。

「…あの、トレーナーですか」

そう。ダイヤとNのほかに一箇所だけ、激しいバトルを繰り広げている場があった。…と、言っても白熱はしていない。あまりに一方的なのだ。

「ぐうっ…バクフーン、噴煙!!」

「スターミー、十万ボルト」

バクフーンが構えるよりも前に、スターミーの紅玉が煌めく。

一閃。

「ば…く…」

「ば、バクフーン!!」

「スターミー、戻れ。」

ボールの赤い光。

そのままボールは、黒いコートにしまわれる。

「…強い、な」

「なんででしょう。アデクさん、ミクリ、ダイゴ、ワタル、そしてダイヤ君とN君。そのどれも、違う強さ」

二人のチャンピオンの思考は、行き詰ったまま。

（side out）

「エンペルト、なみのり！！！！」

「アーケオス、岩雪崩れ！！」

「エエエー！！」

「ケオオオー！！」

波状攻撃が岩を押し、岩はそれを必死に受け止めようと。

が、タイプの相性は大きい。

岩は徐々に押され、結果。

「押し切れ、エンペルト！！」

「エエー！！」

『おおおっ、エンペルトのなみのりが更に威力を強めるっ！！岩雪崩れがどんどん押し流されるー！！！！！！』

「しまっ、アーケオス、よけるんだ！！」

「ケオ…ケオオオオ！！」

「ああっ！！」

アーケオスは水流に飲み込まれる。

水が引いたとき、フィールドにはエンペルト、そして地に伏したアーケオス。

『勝者、ダイヤ選手ー！ー！！N選手との激戦を征し、見事に準決勝への道を切り開いたー！ー！！』

周囲から歓声が上がる。それに頭を下げて礼していると、Nが歩み寄って来た。

「いい勝負だったね。楽しかったよ」

「ああ、こっちこそ。」

握手を交わして、ニツと笑う。

「そうだ、折角だ。友達にならないか？」

「トモダチ？」

Nは心底驚いた表情でこちらを見る。そんなに驚くことだろうか？

「ほら、このあとバトルフロンティアに着くだろう？一緒に回らないか？っていう意味でも」

「…ボクで、いいの？」

「へ？」

「ボクなんかに、君のトモダチになる資格はあるのかい？」

そう言うNは、暗く冷たい。…けど。

「いいんだよ。俺は、友達を作るのに条件なんて要らない」

「…ほんとに？」

「ああ、勿論だ。」

「…そう、か」

ふっと、微笑むN。

「じゃあ、よろしく。ダイヤ
「ああ。よろしくな、N。」

第二十四話・船上パーティ、まさかのキャラ登場（後書き）

作「今回登場のNくん。彼の諸設定を。」

・ブラック、ホワイトのエンディング後、アデクの元へ引き取られた。

・その後、数ヶ月がたった時点が、第二十四話である。

ダ「設定っても、難しいことはないな。」

作「うぐ。…キャラ崩壊があるかもしれないので、何かございましたら感想で。」

ダ「しかも作者はBW未プレイだっていうね。」

作「うぐう、それを言われると…」

ダ「では、また次回お会いしましょう。」

作「あのスターミー使いは一体誰なのか！？乞うご期待？」

第二十五話・自己紹介でもしようじゃないか（前書き）

作「どうも、お久しぶりです。他作品放置で進めています」

ダ「最低だな、他作品の読者に謝れ」

作「いや、あっちから読んでくれる人がいるかも危ういし…ごめんなさい。」

ダ「で、前回のあらすじな。Nと友達になった。」

作「今回もまさかのキャラ登場。お楽しみに!!」

第二十五話・自己紹介でもしようじゃないか

準決勝まで、まだ時間があるということ。
船内のロビーで、Nと話をする事にした。

「Nは、やっぱりイッシュの出身か？」

「うん。ダイヤはシンオウ地方？」

「そうだな。イッシュはいいよなー、いろんな気候があつて。うちなんて年中寒いから」

「はは、そんな事はないさ。シンオウには神話も多い。ボクはそれにすごく興味を持っているしね」

さて、出身地の話はこのくらいにしておくか。

「何か聞きたいことある？」

「そうだな…。ダイヤは、どうしてチャンピオンに弟子入りしたんだい？」

「うぐ。……すっごく下らないが、聞く？」

「うん。」

事の始まりを、簡潔に話す。

ギンガハクタイビルの前…。懐かしいな。

「…と、言うわけでな。俺の一方的な理由かな」

「…」

「……？」

「っはははは！！ダイヤ、キミは本当に面白いね！！」

いきなりの笑い声。ちょ、ここロビーだから。周りにトレーナーい

っぱい居るからね。

…でも、安心した。見た目からクールな奴だと思ったけど…戦って、話してみれば普通にいい奴だ。

「はは…。ふう」

「落ち着いたか？」

「ああ、ごめんね。馬鹿にしたつもりはないんだけど」

「いや、馬鹿にされても仕方ないし。今でもあのとき（のテンション）はどうかしていたと思う」

本当、あのときの俺は何がしたかったんだろう。ビッパをゲットして、舞い上がっていたのだろうか？

「で、Nは？」

「…え？」

「弟子入りした理由。」

「あ…：うん…」

また、か。

『友達になろう』って言ったときと、同じ顔。

…ダメなんだよなあ、俺。どうもこういうのに鈍い。

「…いや、良いんだ。言いたくないなら、言わなくて。」

「…ごめんね。」

「いやいや。こっちこそ悪かったな」

…なんかあるんだったら、助けになってやりたいとは思うんだが…。ふう、と息を吐いて、座椅子の背もたれに寄りかかる。

「さて、一通り話したな。次は何話そうか」
「…ダイヤ。キミを信じて話をする」

真っ直ぐな、Nの眼。急にどうしたのかと思うほどだ。

「何だ？」

「…ボクには、不思議な力があってね。ポケモンと話ができるんだ」

突然の告白。

…Nは、なんだか苦しそうに言うが…。それって、

「すげえ…それってすごくないか!？」

「え…?」

「いいなー、俺もポケモンと話してみたいなーって思うもん。」

目の前のNは、かなり驚いている。

「…驚かないの？」

「驚いただろ？」

「そうじゃなく! こう…気持ち悪がるとか…」

「?」なんでだよ。すごくいい事だろ? ポケモンと心を通わせるのが得意って事は。その何が気持ち悪いんだ?」

少なくとも俺はそう思うぜ、と補足しておく。
そのあと、少し間が空いた。だがNは笑って、

「…キミに話して、正解だったね」

「?」何が?」

「いや。…だから、キミの仲間の声も聞いてみたいんだ」

「嗚呼成程。理解した。んじゃ…皆、出て来い!!」

ボールを五つ、宙に投げる（ビーダルが抜けているので五つ）。

※ここからポケモンの声もお楽しみください（by作者）

）side N（

…成程、ダイヤの手持ちは五体なのか。

エンペルト『おや、ここは…船の中、か。水の音が聞こえるな』

クロバット『ああ、もう…！こんな明るいところに急に出されたら目が…あのシャンデリア、打ち落としてやろうかしら！？』

アンノーン『あー、マスターやっぱりかっこいいーな…あ、こっち見た…！』

ダイノーズ『ふうむ。皆、静かにせい。騒いだところで、なーんにもいい事はないぞ。なあドクログよ』

ドクログ『…どうでもいい』

…個性的だなあ…。さすがダイヤ、って事なのかな？

N『やあ、キミ達。ボクはN。ダイヤと友達になったトレーナーさ』
エンペルト『おや、先ほどの。…我々の言葉が分かるのか。珍しい

な』

エンペルトはこちらを澄んだ瞳で見つめてくる。
その間にアンノーンが割り込んできた。

アンノーン『あ、さっきウミガメ出してきた人ー!! あれ結構痛かったんだよー!?!』

N『はは、それはごめん。…ダイヤについて、幾つか質問していいかな?』

その言葉にいち早く反応したのは、エンペルト。
さっきダイヤが話してた一番目の仲間か。

『いいとも。私はこの中で一番』

が、誇らしげに語るのを遮って

クロバット『私が話してあげるよ? 私はマスターのお気に入りだからね♪』

翼の音を響かせて、飛んできた。エンペルトはむっとして

『バット、お前は二番手だろう!! ここは私に任せて』

『うるっさいわねえ、年で言ったらあたしが上でしょ。進化だって早かったし』

『それとこれとは関係ない!!』

『何よ!?! やるっての!?!』

ケンカが勃発するのである。

ダイヤが、心配そうな瞳をこちらに向けた。

「あー…大丈夫か？N。なんか二人とも睨み合ってるが」
「うん、まあ…大丈夫じゃないかな？気にしなくていいよ」

アンノーン（F）『あーあ、二人とも全く。懲りないわねー』
『ははは…。じゃあ、キミから話を聞こうかな？』

苦笑混じりに言うと、アンノーンは嬉しそうに表情を変えた。だが、Nは知らない。

『私から？やった、じゃあ話すわね？あれはそう、私とマスターが出会った時…』

後悔は、先にたたないのだと。

一時間経過……

『で、そこでマスターが』
『ちょ、ちょっと待ってくれるかい？分かった、ダイヤがすごいのは分かったから。一旦』

が、Nの制止も聞かずに尚も続く、ダイヤの話。

『『気をつけろって言っただろ？こっちに来て』……きゃー？』
『（…誰か助けてくれ…）』

Nが心で呟くと、それを察するかのように声かけられる。

『お困りのようじゃなあ、少年よ』

『…？キミは』

ダイノーズ『おお、申し遅れたわい。わしゃあダイノーズ。主にはノーズと呼ばれとる』

随分と人生経験豊富そうな喋り方だ。まともに話せるのがいて良かった。

『そうか。さっきのバトルでは見なかったね。ボクはNだ、よろしく』

『よろしく、N。…まあ、そのちびっ子は放置してやってくれい。主の話をすると、すぐああなる』

『は…』

この言い方だと、きっとしょっちゅうあったのだろう…。

『さて、主の話か。…あの状況では、3人からまともに話を聞けないのじゃろ？』

『うん、まあ…すごいのは分かった』

それを聞いたノーズは、呆れたような声で。

『全く、まあ彼奴のいうことも分かる。とにかく、凄い人じゃよ。のう、ドクログ嬢』

一人と一体の視線が、壁際へ向かう。

ドクログ『…どーでもいい。あと嬢って言うな』

『ふおっふおっふお。それはすまなかった。…さて、こんなところかう?』

『ああ、そうしようかな。ダイヤについても、よく分かったよ』
『ほう?』

帽子の唾を上げて言うN。

『仲間想いだね』

『…言ってくれるわい』

『ふふ。…さて』

side out

しばらくバットとエンペルトをなだめていると、Nがこっちにもどってきた。

「ありがとう。楽しかったよ」

「そっか。…にしても、本当に何言ってたかわかんなかったな」

「そう?」

理解出来ないとはまさにこのこと。そう思った。
皆をボールに戻し、ロビーに座る。

また談笑していると、向こうから人影。

「…あれ、師匠?」

「ああ、居た居た。向こうにあるモニターで、A会場の対戦表が出てるわよ。見に行ってくれば?」

「おー、ありがとうございます？行くか、N？」
「うん、そうしよう」

「なあNよ」

「何かな？」

「時すでに遅し」

「その様だね」

現在表示されているのは、B会場のバトルのダイジェスト。
…つまり、機を逃した。ということか。

「あーあ、外したなー…次誰だか見たかったのに」

「まあまあ…ほら、次はC会場のバトルみたいだよ」

「んー……」

流石に各地方の猛者がそろっているようだ（勿論名前は知らない）。
…が、その中でも、一際目立つ。

「何だ…あの黒コート」

一回戦、つまり俺とNが激闘を繰り広げていた頃、黒コートの男は
スターミー一体で三タテしていた。

「強いね…。ええっと、名前は」

「ああ…」

Nは名前が気になったようだが、俺は違うほうに意識が集中していた。

「（…あのスターミー、似てるな…）」

船で襲ってきた、あいつ。

だが、そもそも技構成が違う。どうせ関係ない奴だろう。C会場の対戦表が出され、Nの声で意識が引き戻される。

「ダイヤ、聞ってる？」

「あ、すまん。聞いてなかった」

「全く…。今の人の名前はね」

「んだよ、あいつ出てねえのか…無駄足だったな」

モニターの前に現れた、漆黒の姿。

「あ…」

「ん…？」

モニターから逸れた視線がぶつかり、スターミー使い…コートの男はこっちに歩いてきた。

「あー、君がダイヤ君か。成程。テレビ見てたよ」

「え、あ、はあそうですか」

テレビ…。きつとチャンピオン戦だろう。まあ、全国放映だったらしいからな。

誰が見ていても可笑しくはないか。

「…そうそう、俺と同じような格好した奴見なかった？」

「？いや、見てませんけど」

「ボクも見えてないな」

「そうか。ならいいんだが…ったく、あいつどこ行ってやがる」

フードを弄りながら、どこかへ歩いていってしまった。

「…なんだったんだ」

「いや、こっちが聞きたいよ」

「で？N、さっきなんか言い欠けてt『第二回戦を開始いたします。参加者の皆様方、甲板へお戻り下さい』：orz」

「？どうしたんだいダイヤ、早く行こう」

「…おう」

ショボーンとなりながら、歩を早めていった。

『ご乗客の皆様方、お待たせいたしました。第二回戦の開幕でございます。』

あれ、人が変わってる。男の声だ。

『司会進行は船長に変わりました、私副船長のレイが務めさせていただきます。よろしくお願いいたします』

…船長は、多分飽きたのだろう。なんとなく想像がついてしまう。

『あくまで“司会進行”です故、私は実況は行いません。ご了承を』

甲板がまた苦笑で埋まる。カオスな豪華客船だな。

『では、時刻となりましたので開始いたしましょう。A会場二回戦、選手両名は壇上へどうぞ』

レイの声を受け、階段に足をかける。と、横にいたNが口パクで何か言ってきた。

『…………がんばってね』

『…あったりまえだ。お前に勝ったんだぜ?』

声には出さないが、意思は通じたようだ。笑顔が交わされ、再び歩を進める。

『簡単ではございますが、ご紹介させていただきます。一回戦、N選手との激戦を制した猛者!ダイヤ選手!!』

「はい、どーもー」

観衆に向かって手を振る。中々慣れてきたのではないだろうか。…が、そんな考えも、すぐに吹き飛ぶ事となる。

「…………え」

『第一回戦、見事なテクニクでミナキ選手を下した麒麟児!! シュレン選手!!』

「久しぶりー、ダイヤ君」

そう。本当に、久しぶりだ。

☆～☆～☆～☆～☆～☆～

ハーイ、どうも作者です。

忘れている方も居るでしょうから、少し補足を。

『シュレン』とは、ダイヤが210番道路で道に迷ったときに出会った少女である。

『ポケモンの封印された力を解き放つ』という才能を持ち、ダイヤの一言によって、引きこもり生活から感化されたようだ。

☆～☆～☆～☆～☆～☆～

風に揺れる、ブラウンのサイドテール。

「ひ、久しぶり…。」

「ほんっとーに驚いてるわねー。さっきの試合表、見なかったの？」
「…あ、えっと」

あまりに呆然としていたので、反応が遅れてしまった。
…だって、まさか来るとは思わないじゃないか…。
とりあえず冷静になって、口を開く。

「い、いや。見られなかったんだよ」

「へー。私は楽しみにしてたのになー」
「？」

意味が分からず首をかしげると、鈍いねえ、と笑われてしまう。
『…仕方ないだろ、俺だって驚いててまだ頭が回ってないんだ』

「ダイヤ君と、こうして戦える事。」

「ああ、なるほど」

「あのときダイヤ君に言われて、いっぱい修行してきたんだから。
油断すると負けるわよ？」

そう言うシュレンの表情は、楽しそうで、自信に満ちている。

…成程、確信した。

あのときの俺は、…いや。今もか。本当にこいつと闘いたかったんだ。
だ。

『お二方、準備はよろしいでしょうか？』

「じゃあ、そろそろ」

「ええ。わかってるわよ」

「「始めようか（ましようか）！！！」」

『それでは、只今より…第二回戦、開始！！』

第二十五話・自己紹介でもしようじゃないか（後書き）

作「と、いうわけでシュレンちゃん登場ですよ。」

ダ「いまさらだけど、名前がBWの誰かと被ってねえか」

作「何を言う。いいか、『シュレン』というのは、『修練』、又は『てだれ』と読む『手練』からきている。つまり努力の子だ」

ダ「なるほどな。よくわからん」

作「あの子の頑張りを見てやりな、修行してきてるんだぜ？」

ダ「おう、そうする。では、今回はこの辺で。」

作「感想意見要望企画ネタその他、いつでも受付しております。寧ろくださいー!!」

ダ「欲張りすぎだヴォケー!!」

キャラ設定2・ライバルズ(前書き)

久々の投稿がこれで、すみません。
次回は日曜までに投稿しようとおもいます。

キャラ設定2・ライバルズ

・N

15歳、男。

グラフィックは公式通り。

唯、性格は公式ほど電波ではなく活発な少年。（にしてあげたい）さらに、ゲームほど早口ではない。（アデクさんに『直せ』と言われたらしい）

Nの城の一件の後、アデク氏に引き取られて修行中。

一言

「ボクは、キミと友達になれてよかったと…そう、改めて思うよ。」

・シュレン

15歳、女。

茶髪でサイドテール、目は緋色。

ダイヤの誘いによってトレーナーに興味を持ち、さらにTVでダイヤのシンオウリーグ挑戦を見て『トレーナーになろう』と決心する。

『ポケモンの秘められた力を引き出す』能力がある。

その才もあってか、バトルの腕もなかなかの物に上達した。

船上パーティに登場するのもワケなかったワケである。

一言

「さーて！私の實力、見せてあげようかなー？」

キャラ設定2・ライバルズ（後書き）

もはや、ただの復習になってしまった様な（汗）

足りないところ等ございましたら、ご連絡を。

拓也様、y u g a t a様、感想ありがとうございました？
皆様の感想が、私の生きる力です。

是非皆様、企画にもご参加ください？

それでは、この辺で失礼して。

ダイヤに質問。(前書き)

こちらのサイト様からお借りいたしました質問です。↓<http://lara-ruche.webszai.jp/annex.html>

本編とは一切関係無いです。更新遅れて申し訳ありません。しかも内容がくだらないと言う…

ダイヤに質問。

01..お名前をフルネームで教えてください。また、周囲の方からは何と呼ばれていますか？

「ん、ダイヤ。…フルネーム？…輝石ダイヤ。…何だその目は冗談だろ。あー、周りからは『ダイヤ』って名前呼びが多いな。」

02..誕生日・年齢・性別を教えてください。

「誕生日は12月20日。…うるせえな、誕生石が名前と違うくらいいいだろ。16歳、男な。」

03..体格・身体的特徴を教えてください。

「ふつーふつー。至って普通の男の子。」

04..出身地・在住地・家族構成を教えてください。また、現在どんなかと同居されていますか？

「えーと、フタバタウン出身、…まあ俺は旅に出てる身だし…家族は、母さん、俺、…あとバカ一人。」

05..貴方が生活しているのはどのような世界ですか？

「ポケモンという不思議な生き物が住んでる世界。」

06..現在の（現在目指している）職業を教えてください。また、その職業には何か特殊な能力・訓練等が必要ですか？

「職業ねえ…特に無い、かな。」

07..現在の職業等と平行して行っていることはありますか？

「人間やってます。」

08..何か免許・資格等はお持ちですか？また、賞罰に該当があればそれも教えて下さい。

「一応、シンオウ全ジムリーダーからの推薦状持ってる。」

09..お酒・煙草は好きですか？

「（笑）」

10..体力・健康状態に自信はありますか？

「まあ、旅してるうちに体力はついたかな。」

11..好きな食べ物・苦手な食べ物は何ですか？（飲み物でも可）

「好き嫌い好くない。」

12..好きなもの（こと）・苦手なもの（こと）は何ですか？また、何か得意なことがあれば教えて下さい。

「バトルが好きだよ。得意：でもある。苦手は：特に無いかなあ。」

13..自分の長所・短所を教えてください。

「切れると周りが見えなくなることが多い。長所は：なんでも良くね？ワカンネ」

14..ついやってしまう癖や口癖はありますか？

「気合が入りすぎると？が連続して並ぶ。」

15..何か習慣になっていることはありますか？また、日々心がけていることがあれば教えてください。

「早寝早起き。」

16..外出時の主な持ち物は何ですか？また、肌身離さず身につけているものがあれば教えて下さい。

「モンスターボールだろ、ポケッチだろ、サイコソーダ、おいしい水、それかr（ry）」

17…今気になっている対象があれば教えて下さい。

「このトーナメントの行方。」

18…実現出来るかどうかはともかく、今やってみたいこと（欲しいもの）はありますか？

「ポケモンマスター？…いや、師匠を超えられれば良いかな。」

19…自分を一言で表現すると？

「なんだろうな…」

作「『天上天下唯我独尊世界は俺を中心に回っている』」

「何しに来たんだよお前」

作「ドヤア」

「…知らん。」

作「おい交代しろよ」

「どこのカニだお前。仕方ねえな」

「と、言うわけでここからは作者が回答します。」

20…このキャラクターが生まれた・作品に登場したのはいつです

か？

「去年の6月…？いや、もっと前かな。DPP最盛期ですよ。」

21…このキャラクターを生み出す際、参考にした対象があれば教えて下さい。

「んー…特には。オリジナルの特別な存在ですね」

22…このキャラクターと自分との共通点・相違点はどこですか？

「えーと、そういうところは無いようにしてます。俺自身かつこ良く無いので、そこはかつこ良く行きたいじゃ無いですか。」

23…その他、このキャラクターについて語っておきたいこと等ありましたらどうぞ。

「いやいや、特には。動かしやすくてありがたい、くらいかな？」

ダ「ほら、時間だぞ。かわれよ」

作「そんなぁ…もっと話したいよう」

ダ「嘘つけ。…では、ここからは俺が。」

24…貴方の一番大切なもの（こと）は何ですか？

「うーん…仲間、家族…ありきたりだけど、その辺かな？」

25…その他、この機会に語っておきたい・主張したいこと等あり

ましたらどうぞ。＊

「バトルフロンティア、制覇してやるぜ?...とか言うキャラじゃ無いしな...」

ダイヤに質問。(後書き)

一応、物語の流れ的に16歳になりました。
また次回も…できれば…

第二十六話・激震、豪華客船（前書き）

投稿に間が空いてしまい、申し訳ございません。
夏休みに入りましたので、投稿を再開しようと思います。

第二十六話・激震、豪華客船

「オーダイル、冷凍パンチ！」

「エンペルト、メタルクロー！」

二体の巨軀から繰り出される体術。風圧が、トレーナーの目を襲った。

「くうっ…」

「この程度で怯むなよ、シュレン！俺たちの攻撃はまだおわってない！」

「ええっ！？」

エンペルトがバックステップで下がり、構える。

「剣の舞！」

「エエエエーン？？」

美しい舞の直後、翼の切っ先が輝き、鋭さを増した。そのまま真っ直ぐに、オーダイルに向かって走る。

「うわっ、やば！オーダイル、ハイドロカノン？」

「オオオオオダアイ！！！！！」

「切り裂け、エンペルト！」

「エンッ！エンッ！」

迫り来る豪水を真っ二つに切り裂き、再びせまる。

「うわぁ！えっと、えっと！」

「まだ甘かったな、シュレン！俺も二体倒された時は驚いたが…これで終わりだ！」

最後の切り裂くが、オーダーイルを確実に捉えた、瞬間。
船が…大きく揺れた。

「うおっ!？」

「じ、地震!？」

「バカ、ここは海の上だ!」

と、スピーカーから声が響いた。この声は…

『ハーイ！みんな聞こえるー?』

そう、船長の口ロだ。しばらく声を聞かなかった気がする。

『現在ヴィンセント号は、横殴りの攻撃を受けています！海中からの攻撃に注意してね☆では!』

ぷつり、と通信が切れる。

海中からの攻撃…? ということだ?

なんて考えていると、突如として…海が、割れた。

「なっ!？」

水中から顔を出したのは、巨大な潜水艦。

禍々しい雰囲気、ことの重大さを表している。

その潜水艦の頂部が開き、中から男が出て来た。

「…シュレン・バークは居るか?」

「…?」

シュレン・バーク…? シュレンのことだろうか。

「し、シュレンは私よ!」

「ほう」

男は、まるで品定めする様にシュレンの全身を眺める。

そして、徐に手を顎から外し、後ろにいた男に指示を出した。

「…行け」

「アイサー!」

細い男はこちらに向かって飛び上がり、見事に船に着地。
そして、シュレンを抱え上げ…

「きゃあっ!」

「ハッハア! 女の子もーらいっ! じゃーねー!」
「なっ!」

そのまま船へ戻り、細い男はマタドガスを繰り出す。

「黒い霧!」

「まああたどがあああす」

「くっ!」

辺り一面に、煙幕が広がる。船上はパニックとなっていました。

「しまった…シュレン、シュレン!」

「ダイヤ君、助け…っ!」

声は聞こえるが、前も後ろも分からないこの状況では…。
と、その時。

「羽ばたけ、カイリユー!!」

「クオオオン!!」

天に向かって、飛翔する竜。その風圧で、霧は晴れて行った。

「ゲッ、やられた!!」

「俺はカントーチャンピオンのワタル!今すぐにその子を放せ!」

「やーなこった!」

男は『べー』と舌を出して挑発する。

ピキ、とワタルの顔が歪んだ。

「カイリユー、流星群!」

「クオオオオオ!」

「ヒッ!やば!」

細い男は男の後ろに隠れる。

男は無言でボールを取り、

「守る」

ツボツボの守るによって、流星群を防いだ。

「くっ!」

「悪いが、シュレン・バークは頂いて行く」

「そうはさせないよ！」

アーケオスが男に飛び掛り、シュレンを掴んでこちらに飛んでくる。

「え、N！」

「ボクを忘れてもらっては困るよ？」

「…なるほど。」

男は納得した様に首を縦に振る。

「『ハルモニア』の名を持つ者：『偽物の英雄』か」

「っ！！！」

ハルモニア…？偽物…？なんのことだ？

「まあ、今の貴様など雑魚に過ぎん…？お前は」

「？…俺、か？」

今度は俺か。…この男、変に落ち着きすぎていないか？

「『伝説と心を通わせる者』…『時と空間の支配者』か…。なるほど、なるほど」

一人で何かつぶやいている様で、よくは聞こえない。

すると、男は腕を高々と振り上げた。

「いいだろう。今回は諦めよう。だが、次はこうは行かない。覚悟しておくことだな、シュレン・バーク」

「…」

「では、さらばだ」

「待ちなさい！」

潜水艦にもどろうとした男を、引き止める声。

「あなたたちは何者？目的は何？」

「：雪深き国の女王か……。いいだろう。我らの名は『Revive』。世界の再生を求める団体だ」

潜る潜水艦。

それを確認して、Nとシュレンのもとに駆け寄る。

「大丈夫か！？」

「うん、私は平気。」

「：ああ、ボクも大丈夫。」

「そうか、よかったあ……。」

安心のため息を吐くと、スピーカーに雑音が入る。

『ハイ！みんな大丈夫ー？ならよかった！』

まだ何も言ってない。

『トーナメントのことだけど、邪魔者のせいで時間なくなっちゃった！決勝戦できないや☆』

なんてこった。

『まああと少しでバトルフロンティアに着きます！それまでゆっくりしていいってね！』

そこで、放送がおわった。
あと少し、か。

「さて、気分を変えて。Nとシュレン、お互いを紹介してやろうか」
「わあ、本当？やった！」

「ボクも嬉しいよ。じゃあ、一先ず中に戻ろうか。」
「ああ、そうだな。」

会話をしながらも、ダイヤは…否。その場にいた者、全員。考えることは、同じだった。

《Revive…奴らは一体………？》

第二十六話・激震、豪華客船（後書き）

実は風邪で寝込んでます。

38. 1。なんてこった。

応援、感想等頂けましたら…すごく、嬉しいです。

第二十七話・金獅子との邂逅（前書き）

作「わーい、このコーナーが帰ってきたよ！」

ダ「コーナーだったのかこれ？ただのグダグダだろ」

作「ハハッ、久々だからテンション上がってね」

ダ「知った事か」

作「さてさて。今回は…金獅子と出会おうよ。」

ダ「ラ○ジャンか？」

作「違うから。元ネタ的にはそうだけど違うから。」

ダ「よく分からんな」

作「まあそんな感じでよろしくお願いしたいっ！」

第二十七話・金獅子との邂逅

「着いたー！ー！」

地面に降り立ち、ぐっと背中を伸ばす。

「ふわー、凄い大きい建物ばかりだねー」

シュレンが、フロンティアの施設を眺めながら言う。

「そっか、シュレンはあまり高い建物を見たことないんだっけ？」

「田舎者みたいに言わないでよー、N君！！」

シュレンがポンポンという感じで言うのと、Nは『ごめんごめん』と返す。

仲のいいことで、何よりだ。

「さて、それじゃ」

師匠に、自由に回る許可は取ってある。ならば…

「バトルフロンティア巡りと行きましようか！！」

「「うん（ええ）！！」」

＼side???＼

「さて、やっと着いたな」

久々の大地。…まあ、愛おしさも何も感じないが。

「うう…」

…とりあえず、こいつはダメだな。

「大丈夫か？」

「船、揺れちゃダメです…酔いました…」

「見りゃ分かるわ」

まあこいつは放っておこう。

と、するとあいつに話しかけるしかないが……？あれ？

「おい、あいつはどこ行った？」

「え？……あれ、」

さっきまですぐそこに居たのに。

そう思いながら、キョロキョロと辺りを見回す。…が、

「…居ません、ね」

「あのヤロオオオオオオオオ！！！！！！」

＼sideout＼

「さて、勢いよく出たのはいいが」

「うん」

「えーっと。これってもしかしくなくても」

もしかする必要もないな。決定的に：

「「「迷った」」」

とりあえず、近くの巨木の下にもぐりこむ。

木漏れ日が優しく降り注いだ。

「うわー、どうすんの！？あんなでっかい建物見えるのに道間違えたよ！？どうすんの！？」

「まあ大丈夫でしょ。何かしらの建物に向かって歩いてれば、そのうち着くと思うよ」

「はあ：俺ってこんな方向音痴だったかな…？」

「いや、ダイヤ君じゃないと思うけど」

おいN。その発言は『俺以外の人物が方向音痴だ』と言っているように聞こえるが。

「：なんでこっち見るのよN君」

「いや別に」

「嘘だー！！絶対私のせいだと思ってるでしょ！？」

「そんな事はないさ。ただ途中途中で目的地を変更されると、ダイヤが着いていけなかったんじゃないかなーと」

「ほら間接的に言ってるじゃん！！ダイヤ君、何とか言ってやってよ！」

「なんて言えはいんだよ…」

仲がいいのか悪いのか、さっぱり分からなくなってきた…。
とりあえず、どう收拾つけるか。

「わかったわよ！全部私が悪いんでしょ！？」

「Σ何故そうなる」

「いーわよいーわよ！私一人で行動するから！もう皆さんには迷惑
かけませんーっ」

『『子供だ…』』

声を掛けるまもなく、シュレンは走り去ってしまった。…おいおい。

「また迷うんじゃねえの？あれ」

「うん、そんな気がする」

「…あとで謝っとけよ」

「…うん」

「っひゃひゃっ W W W W W 面っ白えええ W W W W W」

若干の静寂を切り裂き、爆笑の音が頭上から聞こえた。

見上げると、…黒いコートが、木の枝からぶら下がっている。

いや、正確に言えば足をかけている（鉄棒で言えばこうもり振り降
り）のだが…。

「いやー、いいもん見せてもらったわ W W W ツヒイ腹あ痛ええ W
W W」

「…おい、あんた何者だよ」

「ん？ W W 俺か？」

木の枝に座りなおし、男はにやりと笑う。
コートがずれ、金髪が風に流れた。

「俺は——ああ、口止めされてんだっけ……。まあ、アレだ。通りすがりのオニーサンだ」

「はあ、そうですか。」

「じゃあまあボク達忙しいので、これで失礼します」

よし、ナイスだN。

俺達二人の協力プレイによって、変人から逃れ——

「いやいやいや。まあ待てよ少年w」

——られなかった：orz

「俺とおんなじ格好した奴、その辺にいねえか？」

「同じ……？」

そういえば……。

『俺と同じような格好した奴見なかったか？』

あの黒コートもそんなこと言ってたっけ。

「いや、船の中では見たけど……この辺りにはいない」
「ふー。ならよかったー……来い、ウィンディー!!」

木の上から、ボールを弾いて飛ばす。

丁度、俺達と木の幹の間に、美しいオレンジの毛並みの獣が現れた。

「伝説ポケモンのウィンディ！？すごいな…イッシュではお目にか
かれないポケモンだ」

「…そういえば、シンオウでも見たことがないな…」

そう考えると、師匠の言っていたように…『見たことのないポケモ
ンが見られる』ってことか。

「よっと」

ウィンディの背中に飛び乗り、そこでごろごろし始める黒コート。

「あーこの感触たまんねえ〜 W W W ずっともふもふ来りやあそ
れで良いや…。」

「「……………」」

「…あ、サンキューな少年達。名前を聞いておくぜ」

「ああ、俺はダイヤ」

「ボクはN」

「ふーむ。なるほどね。じゃ、覚えられたら覚えとくわ W W W」

ウィンディに指示を出すと、それは高速で消えていった。…あ。

「あいつの名前聞いてねえ!!」

「まあこっちから名乗る必要もなかったと思うけどね。」

「…ま、仕方ないか。気を取り直してっ！シュレンを探しに行くぞ」

「了解っ」

side???)

『ふうん、アレが《ダイヤモンド》か…。中々面白えことになりそうだなww』

第二十七話・金獅子との邂逅（後書き）

作「まあ、短いけどね。」

ダ「よくよく考えてみると、『ケンカ』↓『出会い』↓以上！だったからな」

作「まあ、次回はもっと長くする予定。だよ。」

ダ「そうか。楽しみにしてる奴がいるか知らんけどな」

作「居るよ！居るよ！…多分」

ダ「えーと、それでは。感想、アドバイス等いつでもお待ちしておりますりますので」

作「よろしく願います！！」

第二十八話・仲なおりと出会いと開幕と（前書き）

作「いえーい、今回も短いんだぜ！」

ダ「：しかも内容が薄い。タイトルの三つだけだ」

作「そんなこと気にしないって方もそうでない方も、是非ゆっくりして行ってね！」

ダ「では、そんな感じで行きますか！」

第二十八話・仲なおりと出会いと開幕と

その頃、シュレンは――。

＼sideシュレン＼

「ああもう！いいわよいわよ！二人で勝手に楽しんでればいいじゃない！」

そう言っ、地面を蹴る。土埃が、静かに舞った。
…かつ、虚しく。宙を舞った。

「…よく考えれば、相当下らないわね」

ため息を吐いて、近くにあったベンチに座る。

「…はあ」

「へ？」

「え？」

前、後ろ二つ並びの背もたれ付きベンチ。

当然、後ろ側にも座ることは出来るが…本当に人が居るとは。
気まずっ。

「あ、えーっと」

「お一人ですか？」

：黒いコートを着ている、女性。
髪は燃えるように紅かった。

「は、はい。一人…です…。」

女性はにこり、と笑う。：可愛い笑顔だな。

「本当に？」

「え」

「本当に、バトルフロンティアに一人で来たの？」

「…う」

迷子ですー！。

そんなこと、言えるわけ無い。…：けど、

この人になら、話せる。そんな気がして。全てを話して見た。
全部下らないことだけど、女性は聞いてくれた。

「へえ、そう言うことなんだ」

「はい…：すぐく下らないことなんです…。：私、暫く山暮らしだったから、人付き合いとかには慣れてなくて…。」

「ふーん」

女性はすつと立ち上がり、私の隣に座り直した。

「でも、人付き合いが苦手って言う割に敬語は上手」

「あ、それは」

「つまり、人付き合いが苦手ってのは変」

変…：だろうか。

間違ったことは言っていないつもりだが。

「敬語が使えるシンオウ民なら、『ごめんなさい』の一言だって言えると思うけどな」

「う……」

もごもごと、口籠ってしまう。

そう、最初からそんな事は分かってたんだ。けど、けど。

「……素直になれないんだ？」

「はい……」

「お……。おい……」

遠くから聞こえた声に、顔を上げる。
その主は、当然……ダイヤ。

「待ち人、来たみたいね」

「えっ、あ、その」

女性は笑顔で私を見て、フードを冠った。

「嬉しそうな顔。」

「えっ」

「その顔の方が、貴女は可愛いわ」

そのまま、背を向けて歩き出す。
つい、声をかけてしまった。

「あのっ！」

「なに？」

「お、お名前は！？」

「…フィア。またね、シュレンちゃん」

手を振って、再び背を向ける彼女を、見えなくなるまで見送った。
…途中途中、転びかけてたのが気になったが。

私の心は、晴れていた。

side out

「はぁ…」

人伝に話を聞いて歩くが、どうも色んなところをウロウロしているようだ。

情報が交錯している。

「どこ行っただよあいつ…」

何度目かのため息を吐いた。

すると、Nが聞き込みから帰ってきた。

「どうだった？」

「…いや。とりあえず、向こうの公園に入ったって事だけ」

「充分だ」

向こうと言うと…あっちにコルディタ公園とかいう公園があったな。

足早に、そちらに歩を速めると……見えた。

公園の中央、二対の背を向けあったベンチの前。

「おいしい、おいしい！」

声をかけると、こちらに気づいたようで。彼女は立ち上がり……？
立ち上がったのは、二人。

『あの黒コート……まさか』

だが、シュレンのところに着いた時……黒コートは消えていた。

「おいシュレン、今のって」

「え？……ああ、フィアさんだって。綺麗な人だったよ」

なんだ、女か……。とすると、三人目の黒コートになる。
一体何人いるんだよ……。

「まあ……シュレン」

「なに？」

「Nが言いたいことがあるんだと」

ほれ、とNを突き出す。

Nはアタフタとこちらを見て来た。

が、それも諦めたようで、口を開く。

「その……えっと。ごめん」

頭を下げ、反省の意を示す。

この当たり前の行動を出来ない人間が、この世に何人居るか……。

「君を傷つけてしまったようで、本当に申し訳なく思ってる。」
「…えっと」

お。

「こちらこそ、ごめんね」

…どんな心境の変化か。『わたしは悪くないから謝らないわよ』くらい言ってもいいと思ったんだがな。

「あんまり、子供っぽいことしすぎて。ちょっと、軽率だったわ」
「え、えーっと」

「謝りあってるなら、いいじゃねえか。いがみ合うよりよっぽどいい」

うーん。…二人を見ると、やっぱり。

「笑顔が一番だよ」

「? どういうこと?」

「そのままの意味だって」

side ???

「はあ」

さっきはかっこつけてあんなこと言ったけど…

「ここ…どこお…」

迷子なのは、私も一緒なんだよね…。

こんなことなら二人に着いてけばよかった…（泣）

だって片方はすでに居ないし、もう一人は『あいつを探してくる』
とか言って居なくなっちゃうんだもん…。

「はあ…」

何度目だろうな、私のため息…。

side out

「ワッハ！皆様準備はよろしいですか？」

「もちろん！大丈夫ネ！」

「ええ、こちらも大丈夫よ」

「ワーオ、ドキドキがとまりませんよ！」

「まあ落ち着き給え、諸君。…バトルフロンティア、開幕と行こう
じゃないか！」

第二十八話・仲なおりと出会いと開幕と（後書き）

作「さあ。俺は謎しか残さない」

ダ「かつこよくねえからな。一応言う」と

作「まあ、最後の五人は分かるでしょ。俺は喋り方よく分からんけど」

ダ「口調はまた感想等でいただくとして。」

作「楽しんでいただけたなら幸いです。感想等いつでも待っております！」

ダ「それでは！」

第二十九話・バトルタワートーナメント！（前書き）

作「対にバトル回！文字数は多いよ！」

ダ「文字数だけな。」

作「わかってるよ、内容が薄いつてんだろ！？」

ダ「分かってるならいい。」

作「では、生暖かい目でよろしくお願いします！」

第二十九話・バトルタワートーナメント!

「さて、どこに行くか？」

「うん、どうしようか」

「…あのさあ」

「「なに？」」

シュレンが呆れ顔で、目の前の塔を指差す。

「バトルタワーの目の前で話す内容じゃないと思うのよ」

「「…ですよねー…」」

バトルタワーも中々魅力的だが、シンプルな戦い方ゆえに奥が深そうだ。

できるだけ後に回したいが…一番に目に付いたからな。

「じゃ、受け付けするから待っててくれ」

そう言うと、Nが申し訳なさそうに口を開いた。

「ああ、ボクは少し調べたい事があるから外すね」

「えー？ N、付き合い悪いー」

「ごめんごめん。次はでるから」

「まあ、用があるなら仕方ないか」

「ごめんね。それじゃあ」

走り去るN、膨れっ面のシュレン。：なんやかんやでこいつら以下省略。

「じゃ、行ってくるから」

「ん、わたしも行くー」

受付のところまで着いて来てしまった。いいって言ってるのに。

「こんにちわ、バトルタワーへようこそ！本日は開幕記念として、マルチバトル大会を開催しております」

「マルチ？」

受付のお姉さんはにっこりと笑う。

「はい。まず、参加者の皆様には使用ポケモンを一体選び、控え室へ向かっていただきます。そこで好きなトレーナーとタッグを組み、トーナメントに参加していただく仕様になっております。」

「んー：つまり？」

「理解力がないお前。：まあ、要はタッグバトルだよ」

「なるほど！わかった！」

本当に理解してるのか…。受付のお姉さんも絶賛苦笑中だよ。

「じゃあ、その大会に参加します」

「はい、承りました。この用紙にお名前等必要事項を記入されたら、係員にお申し付けください。直ちに控え室へお連れ致します」

「了解です」

二枚の用紙を受け取り、二人で記入。即、控え室に連れて行ってもらった。

「どんな人がいるのかな？（ワクワク）」

「まあ、ほとんど船上パーティのメンバーと同じだろ。どうする？一緒に組むか？」

「えー？それじゃダイヤ君と戦えないじゃーん！だから別々にするー！」

相変わらずの子供っぽさ…。ま、ポケモンの相性的にもな。

そんなこんなで、控え室に到着。自動ドアを開くと、そこには。

「…おおー」

「なかなかすごいな」

ざっと見ただけで、100人ほどのトレーナー。ここ控え室だね？甲板のときもすごかったけど。

「…さて。ま、ここからは別行動「よーし！！誰かわたしと組みませんかー！！」速いわポケー！！」

しかもトレーナーの皆さんドン引きしてるじゃねえか！！誰か組んでくれるといいんだが…。

…ん？

あの、部屋の隅にいるのって…。

「あー」

「ん？…ああ、ダイヤ君だっけか」

「えっとはい」

そう、船内で出会った黒コート。…そういえば名前を聞き忘れてい

た。

「どう？見つかった？」

「ああ、はい。何人か」

「ふー、そっか。…これにも出てねーみたいだし、どーすっかなー」

ガシガシと頭をかく男。だが、すぐに顔を上げる。

「…よし。ダイヤ君」

「ダイヤでお願いします」

「ダイヤ。俺と組まないか？」

「へ？いいんですか？」

あのスターミーから、実力は計り知れる。…この人は、強い。

「こちらこそ、是非お願いしたいですけど」

「そか。…あ、自己紹介がまだだったか。俺はエリーゼ」

「…へ？エリーゼ？」

「おう。エリーゼでいい。あと敬語使うな」

「は、はあ」

…名前の事に突っ込んではいけない。俺は大人だ。あれ、これデジヤヴ。

受付に再度向かい、登録後すぐにフィールドに連れられた。

「…まあ、あれだ。作戦」

「どうする？」

「決まってるだろ」

眼鏡をクイツとあげ、エリーゼは笑った。

「テキトーに！”だ！！”」

「了解！！」

さすがに大会、レベルが高い。

だが、俺は仲間が数体倒されるのに対し、エリーゼはスターミー一
体で。

若干ゴリ押しな所もあったが、それでも強い。

結局、一周目の最周回まで来てしまった。

「ふむ。中々悪くない出来だな」

「…7回で一周か。これを十回以上続けるのは骨が折れる…。」

そう。百戦目でフロンティアブレーン…親玉が出ることになってい
る。

ゆえに、百勝…一周七戦。明らかに十周以上だ。

「ま、楽しんでいこうじゃねえか。次が来たぜ」

「あ、ああ」

しかも、エリーゼは…楽しそうだ。

純粹に、バトルを楽しんでる。…強いはずだ。

「お相手は…嬢ちゃん二人か。」

「…？ あっ」

相手は…そう、シュレンと…あれは。

「…なあ、ダイヤよ」

「なんだよエリーゼ」

「アレってさあ」

「うん」

姿は見たことないが、雰囲気でわかる。

「「ロロだよな」」

「ハイイ！呼ばれて飛び出てじゃじゃじゃーん★みんなの船長
ロロだよー！！いえーい！！」

呼んだけど呼んでねえ！！何、あの人トレーナーだったのか！？
てゆーかあんな幼児だったの！？船長すげえな！」

「ってかシュレン！組む相手を考えろ！」

「えー？でもロロさん強いよ？」

「そういう問題じゃない！」

エリーゼも苦笑いだし。

「…どうする？」

「まあいい。シュレンって子は俺に任せろ。お前には船長を任せろ」

「単にお前が闘りたくないだけだろ！？」

「よくぞ見破った！」

『バトルスタート!!!!!!』

って、始まった!?

「行けえ、ゴウカザル!」

「頼んだよっ! モジヤンボ!」

「ドクログ、任せた!」

「スターミー!」

各人のポケモンが登場。とりあえず、俺の目標は…

「ドクログ! モジヤンボに毒突き!」

「ドクロッ!」

「きゃー! モジヤンボ、守る!」

「もじゃー…ぼっ!」

ドクログ渾身の突きが、見事に防がれる。

「どっ…!」

「くっ、力押しは通用しないか…?」

「まあねー! さっすがモジヤンボ!」

「もじゃー!」

そういう鳴き声なんだ…というツツコミは心の中だけにして。
敵も動き出すようだな。

「モジヤンボ、ヤドリギの種!」

「もーじゃー!」

「かわせっ!」

「どかあっ」

素早く動き、全ての種を回避した。
…が、

「!?! ヤドリギの種が」

地面に落ちた途端、その場で成長を始めた。ドクロッグの足が捉われる。

「ドクロッ!?!」

「しまった!」

「やったね☆じゃあ次!身代わり!」

「もじゃじゃじゃじゃ…」

突如現れた植物が姿を変え、モジャンボとなる。

「くそめんどくせえええ!!」

「これが私のじわじわタクティクスだよ☆」

そう、めんどくさい相手だ…。こういうのを倒すのは非常に疲れる。だが、隣で一緒に戦ってる奴がいる。そうも言ってられないな。

「モジャンボ、根を張る!!」

「うおっ面倒くさっ」

…勝てるのかな?これ…。

「諦めるなよダイヤ」

「へ?」

そう。隣で戦っていた者…エリーゼ。
スターミーが、ドクロッグの隣に並んだ。
と、いうことは。

「うーっ、悔しい！ダイヤ君と戦うはずだったのに…」
「はは、悪いなお嬢さん！勝負は勝負だ！」

誇らしげに、向かい側にいるシュレンに向かってそう言い放つ。

「…さて。俺も参加するぜ」

「助かった…。圧倒的にめんどくさい相手でさ」

「ん、まあとりあえず…スターミー、サイコキネシスでヤドリギを
引きちぎれ！」

「ヘアッ！」

「ドクロッ！！！！」

ヤドリギの種から解放され、ドクロッグは吼える。

「ほー、なかなか育てられてるな」

「まあね」

「いいかなー？お二人ともー」

ロロがくたびれたような声を出す。待たせすぎたか…。

「待たせたな船長さん！行かせてもらおうぜ！」

「待ってました！かもーん☆」

みがわり、根を張る、ヤドリギに守る…。

これは厄介だ…けど。

「スターミィ、冷凍ビーム！」
「ヘアアアア！！！」

氷柱が、身代わりを貫く…が、ダメージは全くない。

「へへーん、効かないよん☆」
「…だが、これで身代わりは解けたな？」
「ふふん、そんなの新しく作れば「させると思ったか？」えっ！？」

そう。ドクロッグの持ち前の素早さによって、何時の間にやら背後に付いていたのだ。

そして、繰り出されるは…

「毒突き！！！！」
「ドクロオオオ！！！！」
「もじゃあああ！！！！」

ズドン、と音を立ててモジジャンボは崩れ落ちる。

「…うーん、残念☆ごめんねーシュレンちゃん」

『バトル終了ー！！勝者、ダイヤ&エリーゼペアー！』

会場に響く声とともに、歓声が広がった。

それに手を振り返していると、エリーゼが何か呟いて来た。

『悪いが、余り目立つ様な行動はしたくないんでね。俺はココで降

りるわ』

…は？

「えっ、ちょっと待っ!？」

「じゃーな!」

エリーゼ、会場から逃亡。

「…足…速っ……」

余りの衝撃に、言葉はそれ以上紡がれることはなかった。

第二十九話・バトルタワートーナメント！（後書き）

作「話まとまらなかったw」

ダ「ホント駄目だなお前」

作「でもさでもさ、また次の話が早めに上がりそうだよ」

ダ「上がりやあいいけどな」

作「では、感想その他お待ちしております！」

第三十話・I want many money. (前書き)

作「さあ、今回はバトルもあるよ」

ダ「あのキャラとバトルか…腕が鳴るな」

作「悪いが今回のお前は…ヤムチャだ」

ダ「なっ!?!」

作「まあ置いといて、前回はバトルタワーでバトル。」

ダ「まさかの逃亡直後からスタートだ!」

第三十話・I want many money.

結局、それ以降の試合続行が不可能になってしまった。
優勝は目前だったのに…。

「はあ」

「気にしない方がいいと思うなー。」

「シュレン…。」

彼女はにっこりと微笑んで、俺の隣に座り込んだ。
ポンポンと小気味良く背中を叩いてくる。

「ボロ負けたわけじゃないんだし、さ。」

「ボロ負けたら気にしろってことか？」

「そうじゃないけどさ」

彼女はまるで子供のように、ぷーっと頬を膨らませる。…何度目の
光景だろう。

「気にしないで次行こう！ってこと！」

「…なるほど。…まあ、気にしても仕方ないか…」

いつかのように迷いと埃を払って、立ち上がる。
未だにっこり笑う、シュレンと共に。

「…それじゃ、行くか？」

「うん！…あ、N君は？どうする？」

「ああ、…まあ待っててもいいんだが…連絡は？」

シュレンのポケッチを確認するが、着信履歴はない。

「なるほどね」

「一応こっちは連絡入れておいた。『終わったら連絡するように』って」

なるほど、当然と言えば当然だが…素晴らしい判断力だ。

「じゃあとりあえず、どうする？」

「うーん、そうだな……」

考えていると、突如として『ぐぎゅるるる』と音になった。

この地を震わす音は…

「え、えーつと…」

「…飯行くか」

顔を真っ赤に染めたシュレンを連れ、一路飯屋へ向かう事とした。

「……………」

圧巻とは、まさにこの事。

目の前で、皿が：空となった皿が次々積まれていく。
開いた口を何とか塞いで、大食漢に話しかけた。

「：シュレン」

「ふぁひ（何）？」

「：『好きなだけ食べばいい』とは言ったが：財布のことはもちろん考えてるよな？」

「：ごくん」

ふー、と一息ついたと思うと、まだ食べるのか……また注文を始めた。

呆れてものも言えない：だが言わねばなるまい。

「すみませーん、さっきの追加なんですけどー」

「おいコラ待て。ちゃんと考えてるよな？な？」

するとさっきまでの勢い（食事のせいかな？）は消えうせ、少女はぼそりと呟いた。

「：忘れてたわよ」

「なに逆切れしかけてんだ。いいか、こんなところで破産したらここから追い出されるんだぞ」

「でも、払えるんでしょ」

：是非、このくらいは悟ってほしい。そう思って、無言で、伝票と財布を突き出す。

「：えっと」

「計算してみろ。というか財布を開け。足りない事は火を見るより

も明らかだ」

「…やばいんじゃない？」

「やばいよ。」

言った通り、とにかくヤバイ。旅先で、金銭面で苦しくなることはかなりキツイのは明白。

『こんなところで足止めか…。一体誰が想像したろうな。』

「誰か助けてくれないかなー」

「銀行行きや金があるんだが…」

生憎、バトルフロンティアは開幕直後。未だにATMは整備途中だ。当然のごとく、溜め息が零れる。

「師匠：呼ぶわけには行かないよな」

「最後の手段にしたいなあ」

『『何かすごい小言とか言われそうだもん…。』』

目の前の皿を忌々しくにらみ、頭を抱えていると、背後から声がかかった。

「あら、シュレンちゃん」

「え？」

振り返ると、そこには…黒コートの人間。だが、シュレンは目を輝かせて立ち上がった。

「フィアさん！お久しぶりです！」

「と言っても昨日会ったじゃない」

さっきまでの意気消沈具合から、このテンションへの変わり身は…。切り替えが早いというかなんと言うか。…俺も見習うべきか。

「よかったわね、仲直りできたみたいで」

「その節はどうも…。あ、ダイヤ君。この人はフィアさん」

「ん、ああ。シュレンが迷惑かけたみたいで」

「いいいえ。そんなことないですよ」

握手をして、コートのデザインを見る。…矢張り、エリーゼや金髪と同じだ。

「これからお昼ですか？」

「うーん。そうなんだけど…（本当は迷っただけ）」

「あ！…えーっと、フィアさん：助けてくれませんか？」

「え？」

「ッ馬鹿！」

『食いつぶした本人が金を借りる気か！？』

数分前に『見習おう』と思った俺出て来い。

どうやら、本気で金を借りる相談をしているようだ。

「ふむふむ。なるほど…これはすごい」

「でしよう♪」

「威張るなよ」

皿の山を見て感心するフィア、胸を張るシュレン。だが、フィアは顎に手を当てて何か考えている。

「…分かりました。」

「いいんですか!？」

「ただし、“私にバトルで勝てたら”です」

バトルか…。俺が出ようかと一歩踏み出したとき、シュレンの腕がそれを制した。

「分かりました。わたしがやります」

「シュレン、お前」

すると、彼女はまた明るい笑顔を見せる。

「わたしの責任でしょ？このくらいやるわよっ」

「…骨は拾ってやるよ」

「いいですか？では、外へ」

店員に事情を説明し、店外へ出る。二人が相対し、ボールを構える。俺は右手を上げて宣言する。

「一対一のシングルバトル、時間無制限！勝負…開始！」

「ゴウカザル、出番よー!!」

「お願い、キノガッサ!!」

「キイイ!!」

「キノー!!」

さて。審判は第三者目線でできるから素晴らしい。

中立の立場から考えると…素早さ、タイプ相性的にもゴウカザルが優勢だが…。

「ゴウカザル、マッハパンチ!!」
「キイツ!!」

流石の俊足、目にも留まらぬスピードでキノガッサの胴を的確に撃った。

…が、

「タフだな…おい」

「キノガッサ、しっかりと捕まえておいて」

「キノッ」

「キィい!!」

「うわ!? 捕まった!!」

必死に振り解こうとするゴウカザル。だが、キノガッサは掴んだ腕を放そうとはしない。

「キノガッサ、キノコの孢子!! 増量で!」

「キノオオオオ…」

「き…い…」

「ご、ゴウカザル!」

命中率の高い、即効性の睡眠孢子…。これは強敵だ。
ゴウカザルは見事にその場に伏した。

「そのまま宿木の種!!」

「うわああ!!」

見事なじわじわ戦略か…。さて、シュレンはこのタイプとの対戦は初かな?

…どう勝つか…それが最大の問題だ。

「キノガッサ、貴方のターンです！影分身！！」
「キノノノノノノノノ！！！！！！」

凄まじい音と共に、キノガッサの姿が分裂。本気で厄介だな…。

「ゴウカザル、目を覚まして！！」

「…ZZZZZZZ」

ダメだこりゃ。…片やファイアのキノガッサは、体力を消費しているしダメージも受けているのに堪えていない。…ん？

「さあ、そろそろポイズンヒールの出番です！！」

「キノオー！！」

「ポイズンヒールか！！なるほどなっ」

「え？何々？どういうこと！？」

シュレンは全く気付いていないようだ。

「ポイズンヒール。キノガッサの特性だ。毒状態のとき体力が回復する」

「毒！？でもわたしは何も」

「あの首飾りだよ」

そう言って、俺はキノガッサの首飾りを指す。

「どくどくだまっつってな。オートで毒状態になるんだ」

「そんなあ！」

「そのとおりです。…キノガッサ、影分身！！」

更に数が増えていく。そろそろまずいな…。

「ゴウカザル、起きてえええ！……！！！！！」

「…ZZ…きつ？キキッ！！！」

目を覚まし、素早く立ち上がるゴウカザル。だが、その身はヤドリギに絡まっている。

「やった！目を覚ましてくれた！」

「ふふ、でももう一度眠らせるだけですよ」

「むむー…なら、こうするだけっ！！ゴウカザル、フレアドライブ
！！」

「キィイ！！」

身にまとう炎が、ヤドリギを焼き払った。
そのまま、影分身の一体に突っ込んでいく。

「考え無しにぶつかったって、当たるはずが「キノオオオ！！！！」
ウソォ！？」

「やった当たった！！」

「…まさか、全て計算のうち「うわー、勘で当たるもんだねー」…
俺の馬鹿」

ま、例え偶然でも…この一撃は痛いはず。

「キノガッサ、もう一度影分身！」

「キノッ」

「フレアドライブ！！」

「キィッ！！」

またか！！今度ばかりは流石に：

「シュレンちゃん、ミラクルは続けておこらな！」「キノオオオオオオオオオオ！！」

「：あ、また当たった」

そのまま、キノガッサは焼け焦げてダウン。

「え、えーっと：キノガッサ、戦闘不能。勝者シュレン」

「わーい！！お疲れゴウカザル！」

「キイツ！！」

ハイタッチをして、称えあう二人。：対して、悲しみにくれる女。

「うう：どうせ：どうせ私は不運です：」

「キノキノ」

キノガッサに慰められてるし。さっきまでの生き生きした表情はどこへ行ったんだ。

と、意気揚々とシュレンが近づいた。

「さ、ファイアさん！支払いお願いしますね！！」

「うう：約束ですからね：仕方ありません」

「申し訳ないな、なんか」

こんなバトルで大丈夫なのだろうか――。

呆然と、花曇の空を眺めた。

sideファイア

「はぁ」

シュレンちゃん達と別れ、私はまだ店の中に居た。
何度目か分からない溜め息をつくとき、すぐ横のカウンター席に客が来る。

「カレー1つ。ギガ盛りでお願いするぜ」

「はいよー」

厨房から元気な返事が聞こえた。ちらと視線を移すと、

「あ」

「おっす。どや？調子はwww」

黒コートに、金髪。

「今までどこにいたんですか！！」

「俺、縛られんの嫌いだからねwww」

店員から渡された異常量のカレーを食べながら、男は続ける。

「ま、その辺回ってた。」

「：貴方らしいと言えばらしいですが…」

「そういえば」

ごくろりと水を一飲みして、男はニカッと笑う。

「さっきのバトル見てたぜ」

「う。…恥ずかしい限りです」

「ああ、アレは恥ずかしいな」

いつの間にか平らげた皿を店員に渡し、男が溜め息をつく。

「…バトルを楽しみたいのは分かるがよ。楽しむだけじゃ勝てねえ
つてのは…お前もよく知ってるはずだ」

「…はい」

「ま、仕事忘れねえ程度に楽しめやw」

貴方には言われたくないです…と呟いて、目を伏せる。

「…さて。じゃあ俺はあのガキのところ行ってくる」

「ダイヤ君ですか？…まさか、仕事で？」

「何だお前。俺はニートじゃねえぞ。立派な社会人だって事を見せてやる」

凄まじいドヤ顔を残し、男は去っていった。

「…こういう風の吹き回しだろ…あ、エリーゼさんに報告しなきゃ」

ライブキャスターのスイッチを入れ、フィアは腰のモンスターボールに触れる。

「…頑張る。がんばりますから」

）side out（

第三十話・I want many money. (後書き)

作「キノガッサ不憫だろ。」

ダ「てゆーかあの人の不憫だ。」

作「まあ、いくら影分身つんでも当たる時はある。諦めんな、トレーナー諸君」

ダ「経験者は語るねえ」

作「まあね。…えと。ではでは、感想その他お待ちしております！」

ダ「是非よろしく願いします。それでは、また。」

第三十一話・バトルステージ、破壊神と見物と（前書き）

作「久々にこんな駄文を書いてしまった」

ダ「これは酷いな。内容薄っ」

作「あとで修正入れよう。そうしよう」

ダ「まあ、そんな感じで生ぬるく見てください」

第三十一話・バトルステージ、破壊神と見物と

なあ、諸君。アイドルトレーナーって知ってるか？

別にアイドルをトレーニングする人じゃない。

トレーナー自身がアイドルのあれ。

：そうだな、ハウエンチャンピオンのミクリさんみたいなタイプ。
まあ彼は正確に言えばコーディネーターだけどさ。

あの優雅なアレ、俺はあんまり好きじゃねえんだが：今回ばかりは、同情したね。

「ヒヤッヒヤッヒヤア W W W W その程度で破壊神とか W W W マジね
ーわ W W W」

そう：この人の所為で…。

「『バトルステージ、魅せろ！乱入者ありの勝ち抜きバトル』…。」
「なんだそりゃあ。唯の無法地帯じゃねえか」
「うーん…。不意の戦闘もあるわけだから、多少戦略性が必要って
ことじゃない？」

そうかなあ、と気の抜けた声をだして：目の前のピンク色のドームを眺める。

視線を下に移すと、派手な横断幕に気がついた。

「ん、何か書いてあるぞ」

「何々？『開幕キャンペーン・アイドルトレーナーヒョウガがやってくる！』：だってさ」

「ヒョウガ？誰それ」

そうつぶやいた時、シュレンは呆れたような表情を見せてきた。

「なんだよ」

「全く：有名でしょ？たしかホウエン出身のトレーナーで、四天王戦で良いところまで行っちゃって話。通り名は破壊神」

「アイドルねえ」

一瞬、母親のステージを思い出したが：それゆえに、アイドルは嫌いだ。

しかめっ面の俺をよそに、シュレンは：目を輝かせている。

俺に無言で何か伝えようとしているのだろう。

「ま、見てくか？折角だし」

「うん！」

素直で結構。

受付を済ませ、自動ドアをくぐると：そこは、歓声渦巻くステージだった。

自分達の居る客席はまるで荒海のようにうねっている。
ステージの上では：トドゼルガが華麗に舞っていた。

「さあ、誰か僕と戦う勇気のある者はいないのかい？」

『すごい、すごいぞヒョウガ君！！これで23連勝だ！！』

興奮気味のアナウンス。ステージ上のヒョウガは観衆に向かって手を振っていた。

「すごいね、23連勝だって！！ダイヤ君も挑戦してみたら！？」

「ええ？いいよめんどくさい」

そもそも、俺はああいう目立ち方は好きじゃないのである。

自動ドアまで戻ろうとしたところで、

「まあまあ、少年。もう少し見ていけよ」

と言う声を掛けられた。

振り返るとそこに姿はなく、いつの間だろう。目の前に現れた黒が、視界を塞いだ。

「よお、ダイヤ少年ww」

「あ、あんた」

「何々？知り合いなのダイヤ君？」

ウィンディ使いの男。何でこんなところに…。

「おっと、自己紹介が遅れたな。俺はユガタ。よろしくw」

「ああ、よろしく」

差し出された手に、一瞬反応が遅れた。

「で、聞きたいんだけどさ」

「は？」

「これ何やってんの？w w w w」

俺は『はへー』と気の抜けた声を出してしまったが、シュレンはむしろ目を輝かせて

「アイドルレーナーの勝ち抜きバトルみたいですよっ」

と答えた。答える必要もなかりうに。

「ふーん。まあ見ていくか。ダイヤ少年も見ろだろ？」

「え？いや、俺は」

「あの、あの！」

シュレンが嬉々として手を上げる。

「わたしもつと見てたい！！」

輝く目が痛い。すごくこう…心に突き刺さる。

「はいはい…わかったよ」

「ん、そんなこんなで次のバトルが始まりそうだな」

「あ、ホントだ！」

俺の前で、二人してステージ上を見る。

…この黒コート、何しに来たんだろ…。

「さあ、ルカリオ！！インファイトでフィニッシュ！」

「ブルッ！！」

「イワアアアア！！！」

「イワーク！！」

イワークが、強烈な一撃の下に崩れ落ちる。
これで：24連勝か。

「お疲れ、ルカリオ」

「ブルッ」

『今度はルカリオ一体！！矢張り強いぞヒョウガ君！誰にも止めることはできないのか！！？』

テンションの上がつている実況も、歓声にかき消される。

「なるほど：強いな」

「でしょ？」

「強い：ねwww」

二人の言葉を聴いて、ケタケタと笑うユガタ。

「確かに強いな。けど：足りねえwww」

「「足りない？」」

疑問符を浮かべる二人を他所に、ユガタは笑い続ける。

「まあ、お前らもそのうちわかるさwww」

『さすがホウエンの破壊神！この破竹の勢いを止められる者は名乗

りを上げろー！ーッ！！！！！！』

瞬間、ユガタの表情が固まった。急に真面目な顔になり、こちらに聞いてくる。

「…破壊神？」

「え？あ、ああ。なんでもそういう通り名らしいけど」

「うん、そうだよ？」

「ふーん」

するとユガタは駆け出し、コートを翻してステージに飛び上がった。

「ん？」

『ここで乱入者ー！ー！！さあ、ヒョウガ君はまた連勝を伸ばせるのかー！ー！？』

「さて。名前を聞かせてもらおうか？」

「いんやあ？俺が名乗るのは負けたときだけだww」

「…なるほど」

『それでは、バトルスタート！！』

「ゴー、トドゼルガ！！」

「いきな、ケッキンググ！！！！」

「トドオオオオ！！！！」

「…zzzzz」

そんな展開を、二人は呆然と眺めていた。

「おい、何やってんだあいつ！？」

「さ、さあ…？わたしも分からないけど…さっきまでのユガタさん

とは違うみたい」

「だな…。」

「トドゼルガ、華麗に決めろ!!!のしかかり!!!」

「トドオ!!!」

トドゼルガの重い一撃を、ケッキングは眠ったまま受ける。
だが、ユガタは鼻で笑って

「その程度か」

と呟いた。ケッキングの目がゆっくりと開く。

「アームハンマー」

「ゴオオ!!!」

「トドオオオオオ!!!」

巨大な丸太の如き二本の腕が、トドゼルガに振り下ろされ…ステージごと押しつぶした。

「と、トドゼルガ!!!」

『ななな、なんと! トドゼルガが! 一撃で! 倒されてしまったああアアア!!!』

「んだあ? もうダウンかWWW根性ねえなWWW」

「…ZZZZZZ」

ケッキングは『用は済んだ』とでも言うように、再び横になって寝に入った。

「…嘘だろ」

「あのヒョウガのポケモンが一撃で…」

あちらこちらから、ざわざわと呟きが聞こえる。

「…ユガタさんって」

「…どうやら、かなりのトレーナーのようだな。」

見た目や態度からは全く想像できなかったが…。

「くっ、ルカリオ！波動弾！！！」

「ブルルッ！！」

ボールから登場したルカリオの手のひらで、エネルギーが集中して…ケッキングに向かって放たれた。爆発が起きる。

『ノーマルタイプのポケモンに、格闘タイプの技……！！効果は抜群…だ…？』

煙が晴れると…未だ眠り続けるケッキングの姿。ヒョウガとルカリオはたじろぐ。

「な、なんだと！？なんというタフさだ…」

「ブルルッ」

と、一瞬の内にケッキングの姿は消え、ニヤニヤしたユガタだけ。

「っ！？」

「ブルルアウト！？」

「る、ルカリオオオ！！！！」

再び豪腕が唸り、今度はルカリオを場外へ吹き飛ばした。…当然、立ち上がれるはずもなく。

「ケヒヤヒヤヒヤ W W W W W」

「な…な…!!!!」

『なんとということだー！ー！まさか、まさかの2タテ！ー！一体何者なんだー！ー！』

「さあて、次は何を出す？ W W W」

そう言って指差すユガタ。…だが、

「あいつルール聞いてなかったな…。」

「そういえば途中参加だったもんね。」

「次は…いない」

「は？」

「僕の勝ち抜き線では、使用ポケモンは2体までなんだ…だから、終わり」

「ケヒヤ W W と言う事か W W W」

再びマントを翻し、ケッキングをボールに戻してステージから飛び降りる。

こちらにニコニコしながら歩いてきた。

「ドヤ？ W W W」

「何やってんだあんた…大会しっちゃかめっちゃかにして」

「けひゃひゃ W W つい楽しくなってね」

「でもユガタさんかっこよかったですよー」

「お、サンキュ。 W」

が、観衆全員がこちらを見ているのに気付いて、ユガタはフードを被りなおした。

「やべべ。エリゼに怒られちまう」

「エリゼ？…ああ、エリーゼか」

「ああ。…じゃ、俺は目立ちたくないから行くわ」
「待ちたまえ！！」

ヒョウガが、去ろうとするユガタに声を掛けた。
同じようにステージから飛び降り、何かを手渡す。

「受け取ってくれ。僕に勝った賞品だ」

「賞品？そんなのあったの？」

「…ほんと何も聞いてないな」

渡されたのは、どうやらタマゴのようだ。

だが、そんなことはお構いなしにまじまじと眺めたあと、「ふーん
…イラネ」と呟いて俺に押し付けてきた。

「「は！？」」

「いや、俺いらん。やるよ」

「え、でも賞品じゃないですか」

「いらないうって言うてるんだからいいんだよーWWWじゃ、俺はこれだ！！」

「あっ！！」

奇妙な高笑いを残して、ユガタは走り去っていった。

…なんで黒コートは皆走り去るんだろう…。

困った表情をヒョウガに向けると、

「いいんじゃないか？勝者の判断に任せるよ」

なんていう始末。…案外いい奴？

自動ドアを潜り、溜め息一つ。

「はぁ」

「どうしたの？もっと喜ばないとタマゴがかわいそうだよ」

「いや、いろいろありすぎて疲れた」

「まあねー。おつかれさま」

ぽんぽんと叩かれる。手からタマゴケースが落ちそうになるから止めていただきたい。

「はー、どうしようこれ…」

「リュックに入れたげる」

「ありがたいね」

深緑色のタマゴが入ったケースををゆっくりと持ち、リュックに入るシュレン。

「…うーん」

「?どうした」

「力を感じる」

「???」

シュレンはすぐに『なんでもない』と言ったが、：何のことだろう。
気にはなったが、シュレンの胃が鳴り出したのでそんな事もすぐに
忘れてしまった。

——そして、時は動き出す——。

第三十一話・バトルステージ、破壊神と見物と（後書き）

ネタがほしいです。是非ください。

第三十二話・動き出す『再生』（前書き）

作「短いぞ」

ダ「短いな」

作「箸休めです。」

ダ「タイミングを逃してた物を出しに来たんだろ？」

作「次回もそうなりそうだよ。タイミングって難しいね」

ダ「では、そんな感じで今回もよろしくお願いします！」

第三十二話・動き出す『再生』

（side N）

「…どう思いますか、アデク師匠」

「うむ…あの男が、何故『英雄』の話を知っていたか…か」

Nは一人、アデクの下に来ていた。

あの組織の言葉の真意、それを知るために…。

「…すまん、さっぱり分からんな」

「…そうですか」

まあ、答えを知っているはずもない。よく考えれば当然の事だ。

「そういえば、あのシュレンと言う少女はどうした？あの子も『Revive』に狙われていたはず」

「ダイヤと一緒に居ます。そのほうが安全だと思うので」

そうNが言うと、アデクは感心ともななんと取れない声を出す。

「随分信頼しておるようだな？」

「ええ。勿論ですよ…。」

目をつぶり、彼の姿を思い浮かべる。

「彼は、ブラックと似てる…いや。違うんですけど、なんていうか」

ふと、ダイヤと…彼が、重なって見えて。
アデクは複雑な表情で『そうか』と呟いた。

「まあ、ワシのほうでも『Revive』について調べてはいる。
お前はお前で楽しんでくるといい」
「…はい。ありがとうございます」

ポケモンセンターのロビーを出て、入り組んだ道を進む。
マップ上では、シュレンから連絡を受けたバトルステージまでの近
道なのだ。

「…急ごう」

なんとなく不安を感じて、歩を早める。
だが、その足もすぐに止まってしまった。

「ハッハア、久しぶりい『偽英雄』さんよオ」

——シュレンを攫おうとした男の出現によって——。

side out

「ん」

「どうした？」

次の施設、バトルキャッスルに向かおうとしたところでシュレンのポケットに通信が入った。

「Nからだ!」

「おお。やっと来たか」

「もしもーし! N?」

『やあ、シュレン、ダイヤ。待たせてごめんね』

…?

「もー、今どこに居るの?」

『いや。用が済んだからとりあえず連絡しようと思ってね。』

「…」

「? どうしたの、ダイヤ?」

…Nって、こんな早口だったかな…?

「あ、いや。…N、大丈夫か?」

『大丈夫。元気だよ』

「…そうか」

「変なダイヤー。…あ、わたし達これからバトルキャッスルに行くつもりだけど、今から来られそう?」

と、通信機の向こうのNは困ったような声を出す。

『うーん…ごめん、師匠に呼び出されててもう少しかかりそうなんだ。』

「えー? そんなあ」

『ごめんね、二人とも。終わったらすぐに行くから』

「…ああ」

「うー…速く済ませてきてよ？」
『わかった。じゃあね』

通信が切れる。

奇妙な違和感が、残っていた。

「…」

「どうしたの？」

「いや…なんでもない、と思う」

「?そう。」

なんでもない、と思いたい…。

(N…本当に、大丈夫なんだろうな…?)

「く…そお…」

「ハッハア、手駒もーらいっ」

第三十二話・動き出す『再生』（後書き）

次回を楽しみにしていただければ…幸いです。

第三十三話・『再生』の襲撃、『意思』の再来（前書き）

作「くっ…一体いつ誰を出せばいいのか分からない…!!」

ダ「そこは頑張ってくれよ。…えーと。前は、Nからの通信を受けて終わったな。」

作「ムリヤリひねり出してスタート!!」

第三十三話・『再生』の襲撃、『意思』の再来

「バトルキャッスルってこっち？」

「ああ。マップではそっちだって書いてある。：見なくても分かると思うがな」

このバトルフロンティア、何故だか中々に入り組んでいる。だから時々迷子なんか見たりするが：まあ、メインの施設がでかいから問題ない。

「あのお城？すごいなあー、かっこいいー！綺麗ー！」

「：女の子だな、お前も：ん？」

こういうメルヘンチックなものにあこがれるのだろう。と、城のほうがどうも騒がしかった。群がっている人々の一人に聞いてみる。

「おい、なんかあったのか？」

「いや、今中で怪しいやつらとブレインが戦ってるんだよ！」

「ブレイン…？」

『フロンティアブレイン？』

『ええ。バトルフロンティアの各施設の統率者であり、最強のトレーナー。それを人はフロンティアブレインと呼ぶの』

『へえ：強いんですね』

『タワータイクーンなんて、チャンピオンと同格の強さよ』

『まじっすか』

シロナとのやり取りを思い出す。
と、シュレンが食いついた。

「怪しいやつらって!?!」

「そ、それがわからねえんだ。なんでも『Revive』とか」
「!?!」

「ダイヤ君!?!」
「ああ!?!」

群集をかき分け、城の中に入り込む。
バトルステージには、傷ついた執事姿の男、そして…船上で出会った、ボスらしき男。

「ワッハ…これはこれは…強すぎますね…」
「ふん…フロンティアブレーンもこの程度か」

男はこちらに気付き、近づいてくる。

「シュレン・バーク。わざわざそこから来るとは…愚かな」
「シュレン、下がれ!」

二人の間に割って入る。

「…邪魔をするな『時空の覇者』」
「あ? やなこった。シュレンは守るって約束したんでね」
「…ならば…どうするかね?」
「バトルだ!?!」

シュレンと共に執事の下に駆け寄り、肩を貸してやる。

「大丈夫か？」

「面目御座いません…ご迷惑おかけします」

「気にすんな。休んでるといい」

そして、代わりにバトルフィールドに立つ。

「いくぞ！！」

「シャンデラ」

「エンペルト！！」

シャンデラ…？見たことの無い種族だ。イツシュ原産か？

「アクアジェット！！！！」

「プュイイイイ！！」

「…オーバーヒート」

「ボワワワア！！！！」

勢い良く突進すると、猛烈な熱風によって纏っていた水が蒸発してしまった。

あまりの熱に、思わず目を閉じる。

「くっ…！！」

「エン…」

「もう一度だ」

「ボワワワア！！！！」

高熱が再び噴出される。エンペルトが炎の中に取り込まれた。

「え、エンペルト！ハイドロカノン！」

「エエエエエエン!!!!!!」

高熱を、水の弾丸が跳ね飛ばす。そのままシャンデラに激突した。

「…ほう」

「ぼわ…わ…」

「よし！エンペルト、下がれ！」

「ピュイ！」

男は黙っている。黙って、俺とシュレンを見つめた。

「……いいだろう。貴様を認める」

「認める…？どういう意味だ？」

「そのままの意味だ。…我が名はフリード。『Revive』がボスだ」

「…何故シュレンを狙う！答えろ！」

そう言うと、フリードは鼻で笑って

「それは既に答えた質問だ」

とだけ答えた。

「答えた？…どういう」

「お喋りは終わりだ。マルマイン」

何時の間にか、フリードの横には球状のポケモンがいた。

「大爆発」

「な—————!!!!!!」

とっさの判断。ノーズを盾に、執事とシュレンを守った。

爆発が晴れたときに、既にフリードは居なかった。

「大丈夫…か…?」

「う、うん…大丈夫」

「あ、有難うございます…」

「ノオオズ」

傷ついたノーズをボールに戻し、フリードの居た場所を睨みつける。

「勝負を投げやがった…許さねえ」

「と、とりあえず執事さんのケガの手当てしないと!!」

「そうだった!!」

爆発を聞いて集まった群衆にジョーイさんを呼ぶよう指示し、とりあえず応急措置を開始する。

「済みません…ご迷惑おかけします」

「気にすんな。…おっと、あんまり動くなよ」

「はい。…お嬢様に合わせる顔がありませんね」

「お嬢様? やっぱりお仕えしてる人が居るの?」

シュレンが腕の手当てをしながら問うと、執事は笑って答える。

「はい、今はイッシュで四天王をしているお方で。…ああ、私、キヤッスルバトラーを勤めさせていただくコ克蘭と申します。」

「俺はダイヤ。で、」

「わたしはシュレン。」

「…あの男、とてつもなく強い男でした。」

まるで、独り言のように語りだした。

「黒き竜王、蒼き巨人、紫の月」

「…は？」

「彼の、メインポケモンです。私は見ることにしかできませんでした…
…実力不足です」

そう言い切ったところで、医療担当がやってきた。
搬送される寸前、コ克蘭は呟く。

「…絶対に、深追いはしないでください」

「無茶な相談じゃねえか」

「え？」

ボロボロの城を後に、俺は考えを口に出した。

「お前を守るって、Nと約束したんだ。深追いしないわけには行かない」

「…無理、しないでね。頼りにしてるけどさ」

「ああ」

再び、決意を固めると…突如、目の前に少年が現れた。

「！」

「だ、誰!？」

《ボクダヨ、ダイヤ》

頭に響く声、そして見たことのある容姿。

「…アグノム…! 久しぶりだな!」

「えっ!? アグノムって湖の伝説の!？」

《ウン、ヒサシブリ。ダイヤ、ゲンキソウデウレシイ》

そう。昔、リッシ湖に連れて行ったことがあったっけ…。結局テング山山的一件から、湖にも行っていなかった。

《タイヘン、ミタイダネ》

「…ああ。俺に力がないから…皆を危険な目に」

《…ダイジョウブ。ダイヤナラ》

そう言って、アグノムは俺の手を取る。

《ボクモ、エムリットモ、ユクシーモ、ミンナキミノチカラニナルヨ。だから、ケツシテアキラメナイデ。クジケナイデ》

「…ああ」

《…ア、ディアルガトパルキア、ソレニギラティナモカシテクレル。

ヨカツタネ、ダイヤ

「それは心強いな」

アグノムはにっこりと笑って手を離した。

《ワスレナイド。ボクたちガズットイッショニイルコト》

「…ありがとな。わざわざ」

《イツデモ、ヨンデ》

少年は消え、名残惜しさだけが残る。

と、シュレンが思い切り身体を揺すってきた。

「ねえねえねえ!!!! どういうこと!?! 伝説のポケモンに会ったことがあるの!?!」

「あー!!! 分かったから落ちてけ!!! 説明するから!!!」

事情を説明するのに、時間はかかったが……

ダイヤの中で、決意が着々と固まっていた。

第三十三話・『再生』の襲撃、『意思』の再来（後書き）

勿論、伝説を出すタイミングはふさわしいものを考えています。
まさかやたら滅多ら呼び出すわけには行かないので：W W

それでは、感想その他いただければ作者は元気を出します。
よろしく願いいたします！

第三十四話・新顔登場（前書き）

作「お久しぶりです。難産でした」

ダ「ほほ毎回だろ」

作「（無視）さてさて、前回と変わって今回はギャグ回？」

ダ「聞くなよ」

作「まあ楽しんでいてくださいな！」

第三十四話・新顔登場

「かぶっ!!」

「いててっ!! 止めろ! 放せゴラァ!!」

「…楽しそうだねー」

頭を噛み付かれ悶絶する俺、静かに見つめるシュレン。

実は、新たな仲間を手に入れたのだ。

名はカブルモ。撫でようとすれば手、抱こうと思えば腕と言ったように、何かめっちゃ噛み付いてくる。

「どの辺が楽しそうに見えるんだよ!? 明らかに悶えてるだろうが!」

「いや、こんな所で手持ちが増えてやったあ! みたいなの?」

確かに、バトルフロンティアのど真ん中で野生のポケモンが出てくるとは思わなかった。そしてこんなポケモンだとも思わなかったよ。

「いだだだだだだだ」

「かぶー!!」

「はは…どうしたんだろ、噛み癖? それともストレスかな?」

「どっちでも困る」

だが、仮にストレスだとすれば…

「バトル頼めるか? 手加減ありで」

「いいともさ!!」

バトルで晴らせるはず。

全力で頭から引き剥がし、バトルフィールドに立たせる。

「かぶ？」

「いいか、バトルだバトル。好きなだけ暴れていいぞ」

「かぶー♪」

お気に召したようで。

さて、あとはシュレンが何を出してくるかだが…

「いっけえ、カメックス!!!」

「ガアアメエエエ!!!!!!」

「空気を読め馬鹿あああ!!!!!!」

明らかに手加減じゃない!!!ガチだ!!!

「え? いや、他のポケモンでも大して変わらないよ」

「あー…それもそうだ」

確かにゴウカザルやリザードンを出されるよりはマシだ。
まあ落ち着いてカブルモに指示を出す。

「カブルモ、頭突き!!!」

「かぶー!!!」

「カメックス、受けて」

「ガアメエ!!!」

勢いよく駆け出したカブルモの頭突きがヒット。
…が、カメックスはビクともしない。

「カメックス、体当たり!!」

「ガメツ!!」

「カブウー!?!」

「カブルモおおおお!!」

カブルモは一撃で吹き飛ばされ、宙を舞った。
戦闘不能。

「…おい」

「何？」

「俺は練習相手を間違えたんだと思うんだが」

「うん、そう思う」

「かぶー」

「…で、結局ただ遊ぶだけになったわけね」

「うるせいうるせい。どいつもこいつも手持ちがガチなんだ」

カブルモは現在、ノーズの上に乗ってごろごろしてる。
だがそこはさすが岩鋼、微動だにしないな。

「タマゴもいつ孵るかわかんねえしよ」

「いや、それはそうでしょ。分かったら意味ないじゃない」

「そうなんだけどさー」

今すぐに力がほしい、というのが正直なところだ。
それこそアグノムたちに借りれば済むことだが…できれば迷惑はか
けたくない。

「Nも遅いねー」

「仕方ないだろ、用があるんだったら…？おい、あれ」
「え？」

広場から少し遠く、路地に入ろうとする人影。あの顔は…

『船上パーティーでシュレンを攫おうとした…!!』
「ど、どうしたの？」

慌てて聞いてくるシュレンに、『ここで待っててくれ』とだけ伝え
て走り出す。

影が路地裏に入り、少し遅れて俺も入ったところで声を掛ける。

「おい!!」

「んあ？…ハッハア、これはこれは」

ニタニタと笑う男。…間違いない。

「『覇者』様が何の御用で？」

「（覇者…？）お前、Reviveのメンバーだな!？」

「その通りい。ハッハア、ご名答〜」

「俺とバトルしろ!!ぶっ潰してジュンサーに引き渡す!!」

言うと、男は『はあ?』と声を漏らした。

「…ばっかだねえアンタ」

「何!？」

「俺みたいな悪者が、よーいどんで戦うとも思ってたの?」

「どういういm…っ!？」

突如として悪寒が走り、眩暈がしてきた。

「おいおい、大丈夫かあ?」

「く…!!」

「あんまりそっちに倒れこむなよお? “影になってる”ぜ」

「な……に…」

そこで、意識が途絶える。だがその寸前、

「おもしれえ『覇者』だなア!! おもしれえから俺の名前を教えてやんよ! 『レアン』だ、よろしくなア覇者!!」

という言葉と、高笑いが聞こえていた。

「…ん」

「やっと起きた!…よかったあ」

頭がズキズキする。周りを見ると…さっきまでと同じ路地だ。

「アレ？俺…」

「いつまでたっても帰って来ないから、心配して探しに来たの！そしたらこんな所で寝て…。大丈夫？」

という事は、あいつにやられたのか…。

「ああ、大丈夫だ…。サンキュウ、探しに来てくれて」
「まあねっ」

ゆっくりと立ち上がり、レアンが居た位置をにらみつける。

「…どいつもこいつも…」

「ん？どしたの？」

「いや。」

『やっぱり——力が足りないな』

第三十四話・新顔登場（後書き）

作「感想等はいつまでも受け付けてます！ください！くれ！寄越S
ぶふおあっ！！！」

ダ「失礼しました」

第三十五話・蠢く影と再生（前書き）

作「そろそろEX話を書こうと思うんだが」

ダ「ほう」

作「ネタがない」

ダ「WWW」

作「くださいな。」

ダ「誰か助けてやってください。」

第三十五話・蠢く影と再生

Side
? ? ?
(

「ヒヤッヒヤッヒヤWW大量大量WW悪いなあオヤッサン」

「ぐう お
お お
何故だ あ
ああ」

頭を抱え、カウンターに打ち付ける店主。

：場はバトルタワー前、スクラッチ店。屋台形式のそこで、大量の木の実を抱えるのはユガタ。

「15枚連続でビンゴ……!? 馬鹿な……」

3枚くらいの時には『不正かも』とは思ったが、15枚となると……逆に不正はありえない。

「んじやもう一枚」

「鬼かあ
ああああ！」

「なんて言わねえよ W W W 楽しませてもらったぜ、じゃーな」

「うおおおお」

店主の嘆きを聞きながら、ご満悦の表情で木の実にかじりつく。

…と、その肩に手が置かれた。

嫌な予感がして、表情が固まる。

「……やあああああああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ つつ つつ つつ つつ つつ つと見つけたぜ ええ ええ ええ ええ ええ ええ ……ユガタよ おお おお おお おお」

「うおおお！？怖え怖ええ！！」

木の実を取り落とさないように後ずさる。

「くっくくくく…今度こそ逃がさねえぞおおおお」

「やべえ…どこの悪役だこいつ」

「あーもう！！落ち着いてくださいエリーゼさん！！」

ボールを構えるエリーゼを、羽交い絞めにして止めるフィア。
エリーゼはじたばたと抵抗する。

「放せフィア！！こいつは一発やらねえと気が済まん！！」

「やめとけやめとけ、お前じゃ勝てねえよwww」

「ギイイイイイイ！！！！」

「ああああ唸らないでください！！ユガタさんも煽らないで！！
…あーもう！ロズレイド！！」

フィアがボールを投げる。ロズレイドは華麗に着地して、フィアの指示を仰いだ。

「ロズレイド、アロマセラピー！！」

「ロズウ…レイツ！！」

二つの花から、甘い香りが辺りに広がった。
エリーゼの表情が和らいでいく。

「…ふう…」

「落ち着きました？」

「ああ。悪いな」

「相変わらずいい匂いだよなあ、これ」

ユガタがロズレイドを撫でながら言う。
そして立ち上がり、真面目な表情に変わった。

「…で、だ。どうするんだ？」

「…『Revive』か…」

「…私たちの敵、ですよ」

「ああ。…ダイヤ達から目を放さないようにしろ。特にユガタ」

「ああ？」

「仕事だという事を忘れるな。依頼主に『気楽にやれ』と言われてもだ」

「はいはい」

肩をすくめて、軽く笑って見せる。
溜め息をひとつ吐いた。

「…フィア、お前もだ。戦闘が多くなる。気をつけろ」

「…はい」

「……」

では、と呟いて、フードを深く被りなおす。

「仕事、再開だ」

「「おうっ（はいっ）」」

Side Revive

「いいんですかぁ？あんなに派手にうごいてえ。ジュンサーが動きますよお」

「……………」

男は気だるそうに声を上げる。かたや、少女は一言も発しない。フリードは、そんな二人と目を合わせることなく言った。

「それが目的だ」

「はぁ？」

「…貴様もいずれ分かる。ティオレ」

「はぁ、そですか」

「……………」

「恐らく、クルトは分かっているだろうな」

「まじか！！」

「……………」

クルトは何も言わない。ティオレが溜め息をつく。

「仕方ねえなあ。俺らが出ますか」

「ほう」

「どうせしっちゃかめっちゃかだ。何したって変わらんでしょう？メインパーティーで行きますよ」

「…いいだろう」

「行くぞ、クルト」

「…」

無表情で言ったが、フリードは内心でほくそ笑んでいた。

『さあ、地神が動いた…どう出る？時空の覇者』

第三十五話・蠢く影と再生（後書き）

ネタ、いただければ可能な限り（と言いかほぼ全部）採用します。
何でもこい。と言いか来てくださいます。

第三十六話・不釣合いな二人組（前書き）

作「リア充は爆発しやがれー」

ダ「うるせえな。何だってんだ」

作「ついでに赤点30のやつも滅びろー」

ダ「ほとんどだわ」

作「それでは新キャラのお目見えといきましょうか。」

ダ「いきなりだなオイ。」

第三十六話・不釣合いな二人組

「かぶー！」

「ぴろろろー」

カブルモとFの追いかけてっこを、呆けた表情で眺める。

「どうしたもんかなあ…。」

「とりあえず、次の施設行かない？ バトルルーレット」

シュレンからの提案はもつともだ。

…だが、

「…気が乗らないんだ」

「…ぶー」

控えめなブーイングに申し訳ない気持ちにもなったが、どうもやる気が起きない。

「どっかに落ちてねえかなあ、やる気」

「落ちてるわけないでしょ？ 全く…。」

「あー、そのカップル。聞きたい事があるんだけど」

ぶふおっ、と二人して噴出して、後ろを振り返る。

…短パン小僧とゴスロリ娘…なんと不釣合いな事か。

とりあえずカブルモとFをボールに戻す。

「かかかかかカップル!？」

「あ、違うの？ いやなんかお似合いだったから」

「んなわけねえだろ：考えてからモノを言え」

「あー！ 失礼だよそれー！！」

シュレンをなだめながら、相手二人を眺める。

：片方は無表情で何も喋らない。口を開きさえしない。
片方はまあ今話しているわけだが。

「で？ 何の用だ？」

「あああ忘れるところだった。シュレン・バークって知らないか？」

一瞬声を上げそうになったが、ぐっところえて様子を伺う。

「ああ、ダイヤって少年でもいい。まあその二人なんだけど：居場所を教えてくださいがあればありがたい」

「：なんでその二人を探す？」

「ん、ちよつと仕事でね。」

どうやら、二人とも顔を知らないようだ。：今は撒いて、体制を整えたほうが得策か：。

少し仕掛けてみるか。

「教えてもいいけど、今一信用できないなあ、見た目怪しいし。：俺はコウキ、こっちはプラチナ。お前達は？」

こっちの男は単純そうだ：。上手く引つかかれば、

「そうだな、確かに名前くらい教えないと。俺はティオレ。こっちの子はクルト。」

「……………」

よし、いい情報を頂いた。後は適当にまいて：

「そうか。その二人なら、さつきキャッスルのほうで見たよ。じゃあね」

「お、ありがたいな。サンキュー。いくぞ、クルト」

本気で馬鹿でよかった。シュレンと共に立ち上がると、クルトが徐々に口を開いた。

「…ティオレ」

「お、なんだーいクルトちゃん」

「……対象の特徴、確認して」

「お？おう。えーと」

ティオレはごそごそと腰のポーチを漁る。
…まずい。

「『ダイヤ…フタバタウン出身、16歳。使用ポケモン…エンペルト、クロバット、アンノーン、ドクロッグ、ダイノーズの現在5体。外見的特徴…白の長髪、金眼』…」
「っ、シュレン、走れ！！！」

腕を引いて、全力で駆け出す。

…が、目の前にプテラが現れたことでその足は止められた。

「きゃあっ！？」

「くそっ…！！」

「よくやったクルト。全く、よくも騙してくれたなあ『ダイヤ』！」
「！」

「……………」

二人に向きなおし、ボールをとる。

「何故俺達を追う!!」

「分かってんだろう?俺達は『Revive』の一員だ」

「やっぱり!!」

嫌な予感当たっていた。クソッ。

「折角だ、ダブルバトルと行こう。俺達に勝てたら逃がしてやるよ!!」

「受けて立つ!!」

「だが、俺達が勝ったらシュレン・バークは頂いていく!」

「…ダイヤ!!」

不安な表情をするシュレン。…何度目かの同じ言葉を、俺は吐いた。

「お前は守るよ。俺がな…信じろ」

「いくぞ!!」

瞬時、そこは戦場と化した。

「バット、出番だ!!」

「カメックス、お願い!!」

「バンギラス、ぶっこわせ!!」

「……GO、ドサイドン」

超重量級コンビか……!! しかも砂嵐!!

「バット、飛べるか!？」

「ばっ…!」

暴風に、砂が混ざっているのだ。上手くは飛べないだろう。

「さっさと決めてやるぜ!! バンギラス、破壊光線!!」

「ギラアアアアア!!」

「!!」

照準はバット。弱ったほうから確実に潰すか…!!

「発射! 消し飛べえええええ!!」

「ギラアアア!!」

「ぐああああ!!」

風圧で体が浮く。

煙が晴れると、そこには甲羅で身を護ったバットがいた。

「さ、サンキューシュレン」

「守るが間に合ってよかった…。さ、反撃! カメックス、ハイドロカノン!」

「ガアアアメエエ!!」

水の大砲がバンギラスに向かう。が、まるでカメックスと同じようにドサイドンが前に出、受け止めた。

「ドサアアア…アアッ!!」

「耐え…!？」

「威力は四倍…いや、六倍のはずよ!？」

「ドサイドンの特性を知らないのか?」

ティオレの嘲るような声で、気付いた。

「ハードロック…！効果抜群を半減する…！！」

「しかも砂嵐と来たもんだ。特殊攻撃は分が悪いなあ？バンギラス、しとめろ！雷パンチ！」

「…岩石砲」

相手二体の大技が、バットとカメックスを襲った。
叫び声をあげ、二体同時に沈む。

「ぐ…！バット、休んでろ…！」

「ばばっ…」

「カメックス…ごめんね」

「ガメエ…」

「H A H A H A、やはり俺達是最強だな！クルト！」

「……………」

「…仕方ない。物理主体でいくぞ」

「うん！ぶつかってこう！」

「ドクログ！」

「バシャーモ…！」

しかも格闘タイプ。相性の上ではかなり有利だが…

「やっちまえバンギラス、岩雪崩れ…！」

「バアアアン…！！」

「ドクログ、好きにやれ…！」

「バシャーモ、いわ碎き…！」

「ドクロッ!!」

「バsshアアアア!!」

バンギラスが大地を砕き、岩を頭上から降らす。
だがそれはバsshーモによって碎かれ、道を開いた。
その道を通るのは：

「いけええええ、ドクロッグ!!」

「ドクロオオオ!!」

「ギラアアア!？」

隙だらけだったバンギラスを殴り飛ばし、今度はドサイドンに向く。
見れば、岩石砲の影響が未だ響いているようだった。

「……」

「バsshーモ、ブレイズキック!!」

「ドクロッグ、爆裂パンチ!!」

「「オオオオ!!」」

「ドsshアアア：ドサア!？」

ドサイドンは少し持ちこたえたが、体制を整える前にドクロッグが
動き、毒づきでしとめた。

「あーらら、やられちゃったか：あっけない」

「……………」

「さあ、次を出せ!」

「それとももう終わり!？」

そういうと、ティオレはいい笑顔で答える。

「んなわけねえだろ！？こんな楽しいバトル終わらせられねえ！！」

「：ティオレ」

「ああ。下がってるクルト」

クルトは後ろに下がり、ティオレが前に出てボールを構えた。：ど
ういうことだ？

「気にすんな。クルトは疲れたんだと」

「そうか。：舐められたもんだな」

「なめる？馬鹿言うな。今から魅せてやるよ」

と、構えたボールが一瞬燃え上がったように見えた。

「“地神”ヒードラン！！出番だ！！」

『ゴゴオオオオオオオオ！！！！！！』

「シンオウの大地を守る神：ヒードラン：！！！」

第三十六話・不釣り合いな二人組（後書き）

ティオレの外見のモデルは『疾風のジン』、クルトは『荒海のバンシー』です。

分かる人いるかなー？

第三十七話・揺らぐ大地、割れる空間（前書き）

作「今回はちょっと注意が言いたくてね。短いけど投稿しました」

ダ「なんだ？」

作「作者は“擬人化大好き”です。だからかは分かりませんが、この小説ではちよくちよくポケモンが喋ります。というか伝説が喋るのがデフォです。」

ダ「アグノムなんて完全に擬人化だしな。」

作「擬人化したらこんなだろうなあ、と想像してます。これが常。」

ダ「で？」

作「擬人化苦手な人にはこういう描写って苦手かなあ…と思ってさ。いまさら遅いけど。」

ダ「そういうことか。まあ、その辺も含んで読んでくださいってことだな」

作「うん。では、そんな感じでお願い致します」

第三十七話・揺らぐ大地、割れる空間

「熱いっ…」

『ゴボオオオオオオオオ』

叫ぶヒードラン。火山の大噴火の如きそれは、ただ大地を震わせた。

「H A H A H A H A、どうだ！？こいつに勝てる奴が果たしてお前らの手持ちにいるかなあ！！」

「ぐっ…ドクロッグ！」

「バシャーモも！」

何もせず待つだけのヒードランの顔面に、二体のパンチがクリーンヒットする。

…だが。

「効いてないの…！？」

「くっそ…！！」

「…ドクロオオオ！！」

ドクロッグは爆裂パンチを何度も叩き込む。だが、ヒードランは顔色ひとつ変えずにそれを受け続けていた。

だがそれに痺れを切らしたのはティオレのほうで。

「ヒードラン、マグマストームだ」

『ゴボオオオオオオオオ』

「ドクロッグ、避ける！！」

が、指示もむなしくドクロッグとバシャーモは爆炎に飲み込まれる。シュレンが、がくりと膝を突いた。

「…一方的過ぎる…」

「諦めんなシュレン…まだ手持ちは残ってる」

そう言って励ましたが、シュレンは立ち上がれない。

渦が止んだときに残っていたのは、黒焦げになった二体の無残な姿。ボールに戻して、次のポケモン…ダイノーズを繰り出す。

「諦めろ諦めろ！！伝説に敵うやつなんていねえんだからよお！！
ヒードラン、マグマストーム決めてやれ！！」

『ゴボオオオオオ』

再びの爆炎。だが、今度は策があった。

「ノーズ、電磁砲！！」

「ノオオオオズ！！！！」

電撃と炎のぶつかり合い。この最大技でなら、もしかしたら打ち勝てるかも……。そう思ったのだ。

だが、明らかに力の差は歴然で…電撃は炎に飲まれた。

「ノオツ…ノオオオオオズ！？」

「ノーズ！！」

再び焼き払われる、仲間。

…そうだ。これは、あの時と同じだ。

——アカギと、神と戦ったときと…。

ならば。

勝てるはずがないじゃないか。

俺は、シュレンと同じように膝を付いた。

「なんだ、降参か？つまんねえな…もっと楽しもうぜ」

勝てない——。

シュレンを、守れない。

「じゃ、お嬢さんは貰っていくぜ」

止められない——。俺には——。

『諦めるな、小さき者よ』

聞こえた。

頭の中に、響いてきた。

『お前には『意思』『知識』『感情』がついている。求めよ。決意を固めよ。小さき者、ダイヤよ』

『さすれば“力”は与えられん————。』

ティオレの腕を、思いっきり弾く。

「…シュレンに触るんじゃねえよ!!」

「…怖い怖い」

手を摩りながら、数歩下がるティオレ。

俺はシュレンの肩を掴み、聞く。

「大丈夫か？立てるか？」

「無理…無理よ…あんなの…」

頭にきて、頬を打った。

シュレンはぽかんとして、俺の顔を見る。

「『戦え』なんて言ってねえ!! 『立てるか』!？」

「…うん」

「よし。少し離れてろ」

近くに来ていたギャラリーに声を掛け、シュレンを預ける。
だが、シュレンは俺の手を放さない。

「ダイヤ君! 無理よ! やめて!」

「…何度も言わせんな。“信じろ”。俺は、勝つ」

そう言うと、シュレンの手から力が抜けた。

「悪いな、口下手で。」

「……………絶対、守ってよ」

「おう」

再び、俺は街中…否。戦場に立った。

「なんだ、まだ続けられるのか？楽しみだね」

「ああ。待たせた」

「さ、次のポケモンを見せてくれよ。データからすると…エンペルトが妥当かな？」

俺は首を横に振る。

「お前は知ってるんだろ。『Revive』のメンバーなら何のことだ？」

「お前らのボス曰く、俺は『時空の覇者』なんだそうだ。」

「ふーん…どういう意味？俺馬鹿だからよくわかんねえ」
「今から見せてやる」

眼を閉じ、祈る。誓う。

「？何してんだ？」

『来てくれ。…皆を…シュレンを、守りたいんだ。』

「…まだか…？…っ！？」

どこかで、鎖のような金属音が聞こえた。

それと同時に、俺の背後の空間に、ヒビが入る。

ティオレや、クルトの表情が固まるのが分かった。

…お前に会うのは、二回目だな。

「待たせたな。バトルを再開しよう…頼んだぜ、パルキア」

『ああ。勝負と行こう、再生を求める者よ』

「…っ！おもしれえなクソが……！！！」

第三十七話・揺らぐ大地、割れる空間（後書き）

感想その他ご意見、気軽にくださいな。

いや、本当に書いていただけると泣いて喜んで返事するんで本当お願ひします。

感想ってすごく作者の力になるんです。

第三十八話・空間無双（前書き）

作「さて、今回こそ勝負の本番。」

ダ「パルキア対ヒードランか」

作「一応伝説だからね。ヒードラン強すぎです」

ダ「ま、そんな感じで行こうか」

作「後書きでのアンケートにもご協力ください!!」

第三十八話・空間無双

『久しぶりだな、ダイヤよ…。強くなったようだな』

「そうでもないさ。…急に呼んで悪かったな」

『何を言うか』

パルキアは俺の隣に降り立ち、静かにヒードランを見据える。

『…堕ちたものだな、大地を守る神…ヒードラン』

『ゴボオオオオオ』

そういえば、こいつと対峙したときからずっと気になっていた。

「あいつ、何て言ってるんだ？」

『…何も言っていない』

「は？」

俺の問いに、パルキアは苦い表情で答える。

『叫んでいるのだ。唯、叫ぶだけだ』

「…それって」

「お喋りは終わったか!？」

ティオレが貧乏揺すりをしながら聞いてくる。

そうだ。今は、目の前の敵を優先しなければ…。

「ああ。待たせたな」

「いいねえ、伝説同士の対決!! 先に行かせてもらうぜ!! ヒードラン、だいもんじ!!」

『ゴオオオオ』

ヒードランの鋼の口内から、真紅の炎が漏れ出ているのが見える。
あの火力に、皆はやられたんだ――――。

「パルキア、気をつけろ！相手も伝説だ…油断するな」

『ふん。要は亜空に消し飛ばせばいいだけのことだ』

「は？」

そう言って、パルキアは右腕を大きく振り、空を裂いた。…文字通りに。

『亜空切断』

『ゴゴボオオオオオ』

「っだああああ！？」

大の字を描く巨大な火炎が、爆風と共に異空間へと吸い込まれ、消えた。

『…終わりか？』

「っ！…な、なあに。今のは小手調べさ。いけ、ヒードラン！…マ
グマストーム！！」

『ゴゴボボオオオオオオ』

今度は、先ほどとは明らかに炎の質が違った。
腰のモンスターボールが動いた気がして、

「やばい、アレには特に気をつけてくれ！俺の仲間も、皆アレでや
られたんだ！！」

『何度も言わせるな』

そして、二度目。今度は左腕を振る。

『消し飛ばせば済む事だ』

「おわああああ!!?」

さっきよりも大きな衝撃波。それだけに風圧も大きい。

だからこそ、完全に…獄炎は、消えていた。

敵にしたときの、あの恐怖。あれが、味方についただけで…横にいるだけで。こんなにも心強いのか――。

『つてゆーか…なんか若干脳筋入ってねえか? パルキアってこんなキャラなの?』

『何か考えたかダイヤ』

「何も考えてない! いやそれじゃダメだろ」

自分で自分にツツコミを入れる。おかしいな、シリアスな戦いじゃなかったのか?

…いや、目の前のこいつには…確実にシリアスな戦いになっているだろう。

「…歯がたたねえ…!! 同じ伝説のはずなのに…!!」

『同じ? 違うな。』

パルキアが反応して、語りだす。

『我々はアルセウスの生み出した、いわば分身だ。だが、その地神は我々の創った世界で生まれたのだ』

「…つまり、ヒードランの親とか…そういう位置な訳か」

『間接的ではあるがな』

[illegible]

突如、ティオレが爆笑し出した。何かと振り返ると、

「いいねえ、面白い！！いい収穫ができた！！ヒードラン、アイアンヘッド！！」

『ゴゴゴゴオオオ』

ドスドスガシャガシャと音を立てて、ヒードランがパルキアに近づく。

「パルキア、避けてく_r『消し飛ばせば済む事だ』ダメダメ本体はダメ!!! 技はいいけど本体は!!!」

パルキアは『面倒だな』という表情をした後、尻尾に水を纏わせた。

『ならば…砕くのみ』

『ゴゴゴボオ』

「アクアテール!!!!」

『ゴゴゴオオオオオ！？』

ヒードランの脳天に激突し、叩き伏せる。

その場にはクレーターが出来ていた。

立っているのは、パルキア一体。

「：負けか：いいだろう！逃がしてやる。だが次回はこうはいかねえぞ！楽しみにしてやがれ！！」

「……………プテラ」

二人はプテラに乗り、音速で消え去った。

激戦の跡で、パルキアに頭を下げる。

「ありがとう。本当に助かった」

『気にするな、ダイヤ。我々はお前に返しきれない恩がある』
「例えそうだとしても…だよ」

パルキアは笑った。

『お前のその謙虚なところは、評価すべき点だな』

「謙虚…なのか？」

『まあ、それよりも』

パルキアが首を向けた先には、

『彼女の元へ言ってやる事だ』

「…ああ」

シュレンが飛びついたことで、俺は後頭部を地面に叩きつける事になった。

♪（回復のテーマ）

「はい。ポケモンの回復が終了しましたよ」

「有難うございます」

ジョーイさんからモンスターボールを三つ受け取り、パソコンへと向かう。

ドクロッグとバット、ノーズがダメージを受けすぎた。一旦ナナカマド博士に預けて養生させよう、というのが目的だ。

「お久しぶりです、博士」

『うむ。…元気がないな。どうかしたのかね』

言われて、頬を抓ってみる。

「大丈夫です。少し、疲れちゃって」

『ふむ：くれぐれも、無理だけはせんでくれよ。』

「はい、わかってます。」

『それで、今日はどうしたのかね？』

「あ。それがですね」

事の次第を説明し、ボールを転送装置に置く。

「というわけでして」

『なるほど。わかった、私が責任を持って預かろう』

「有難うございます。」

『では、転送を始めるか』

機械の起動音がして、三つのボールが光に包まれた。

…が、光の消えたときには二つが残っていた。

「あれ？…博士、二つ転送されてませんよ」

『いや。転送は完了した』

「へ？」

『じつは、君に預かっていて欲しいポケモンがいてな。ウツギ君から送られてきたのだが…私よりも、君に育ててもらいたい。』

「（俺、結構いっぱいいいんじゃないけどな）構いませんよ。それで、もう一つは？」

尋ねると…珍しく、ナナカマドはにっこりと笑った。

『もう十分すぎるほど働いてもらったからな。有難う』

「…ああ」

もちろん、お前を忘れたことはなかったよ――。

そう心で呟きながら、ボールを二つ、新たにベルトに装着した。

『それでは、色々あるようだが…頑張ってくれたまえ』

「はい。有難うございます」

ぷつりと通信が切れて、ロビーで足をブラブラさせていたシュレンの元へ戻った。

「…おかえり」

「ああ。…さて、用事も済んだし…バトルルーレット行こうか」

「うん」

…若干シュレンのテンションが低い。嫌でも分かる。

「…どうした？」

「…わたしの為に、ポケモンを…ダイヤ君を傷つけない」

…なんとも、いえない。

けど、ひとつだけ。

「…バシャーモたちだってさ。嫌だったら、バトルしてないと思うぜ」

「……」

「戦う事を選んだ結果だ。悲しむより、あいつらを褒めてやれよ。

…そうでもしなきゃ、可愛そうだ」

「…うん。わかった」

そう言って、なぜかシュレンはパソコンへ向かった。

「…あいつもパーティチェンジか？」

「かぶっ」

「痛い痛い痛い痛い。止めなさいそして重いからどきなさい」

フリーダムカブルモさんがログインしました。6〜7kgは伊達じやねえぜ。

「かぶー」

「重い重い重い…あーもう！F、遊んでやれ！」

「ぴろろ！？」

Fを繰り出し、カブルモを降ろす。

「わるいな、頼む」

「ぴろろ…」

『仕方ないわね』とでも言いたそうな表情を見せた後、追いかけてが始まった。

少しすると、シュレンが戻ってくる。

「お待たせ」

「おう、いくか。戻れ二人とも」

二体をボールに戻し、ポケモンセンターを出る。
目指すは、すぐ横。バトルルーレット。

第三十八話・空間無双（後書き）

さて、皆様のおかげでPV50000アクセス突破いたしました。
有難うございます。

そこでEX話として、童話をモチーフに書こうと思うのですが…

1、不思議の国のアリス

2、シンデレラ

3、白雪姫

の内のどれかを選んでほしいです。

皆様の読みたいものを提供するのが作者の仕事なので…。

それでは、アンケートにご協力お願いします。

ダイヤの手持ち設定！！！ 変更が加わったりするよ！（前書き）

作「はい、今回は 狐様のご意見から、ダイヤ君の手持ちの設定をご用意しました。」

ダ「そういえばキャラ設定はあったけどポケモンの設定はなかったもんな。」

作「うん。俺も考えてなかったりしたけどね」

ダ「オイコラ」

作「でも今回でしっかり考えられたよ。そんな機会を与えてくださった狐様に感謝です！」

ダ「ありがとうございます！」

作「えーと、この設定は手持ちが進化するなりしたところで変更が入ったりします。ちょこちょこ見ていただければ幸いです。」

ダイヤの手持ち設定!!! 変更が加わったりするよ!

・エンペルト

♂。勇敢な性格で、とても几帳面。

ポツチャマの頃からダイヤと一緒にいる、初めの仲間。

マスターであるダイヤ、そして仲間を一番大事に思っている。

そのため、自分よりも常に仲間優先。ダブルバトルで味方を攻撃から庇うのは日常茶飯事。いつもダイヤや仲間怒られる。

技

メイン…アクアジェット ハイドロカノン メタルクロー 剣の舞

サブ…きりさく 水鉄砲 ドリルくちばし 冷凍ビーム

・クロバット（バット）

♀。陽気な性格で、いたずらが好き。

エンペルトの次に手持ちに加わった。幾多のバトルを様々な戦術で乗り越えてきた、隠れた強者。

姉御肌。バトルのときは真剣そのものだが、日常的に仲間にちよっかいを仕掛ける。

最近ではダイノーズがいたずらで全く驚かないのが気に食わないらしく、集中砲火の対象。周りの皆は一安心。

技

メイン…クロスポイズン エアスラッシュ どくどく どくどくの
キバ

サブ…そらをとぶ 噛み砕く ねっぷう

・ビーダル

♂。真面目な性格で、力が自慢。

唯一ゲットの描写が書かれなかった。バトルでも負けが目立っている。

だが、負けた自分を励ましてくれるダイヤのために強くなろうとこっさり毎晩特訓してる。

それが果たして実を結ぶかどうかは別の話。

ナナカマド博士の下では日曜大工的なことを手伝っていたため、手先が器用。

技

メイン…ばかぢから ギガインパクト カウンター 岩砕き

サブ…いあいぎり なみのり かいりき たきのぼり ロッククラ
イム

・ダイノーズ（ノーズ）

♂。穏やかな性格で、のんびりするのが好き。

ダイヤとの出会いは結構衝撃的だったが、アレは日光浴をしていた
だけ。道のど真ん中で。

メンバー入りは遅めだが、一応最年長。皆をまとめるのが得意。も
めごとカモン。

仲間は皆大事にしているが、ドクロッグの事を特に気にかける。

パワー型のポケモンとしても、手持ちの中での役割はハッキリして
いる。

技

メイン…いわなだれ 電磁砲 ロックオン マグネットボム

サブ…電磁波 大地の力 ストーンエッジ ねむる

・アンノーン（F）

♀。やんちゃで、少しお調子者。

ダイヤLOVE。助けてもらった頃からずっとLOVE。ちなみにダイヤは全く気付いていません。暴走したら仲間に止めてもらうのが常。

多種の技を使える、という珍しいアンノーンでもある。それはダイヤへの愛ゆえか、それとも…。

メイン…目覚めるパワー炎 氷 水 電気

サブ…一応全タイプ使えます。

・ドクロッグ

♀。意地っ張りで、ちょっぴり見栄っ張り。

元、ノモセのグレッグル集団の長。

パワー、スピード、テクニク、気力総合してメンバー最強。
ダイヤは一応トレーナーとして認めているが、気が乗らないバトルはしない。

逆にバトルを始めると勝つまでやめない。勝利に対する執念が強いということか。

態度や見た目からヤンキーっぽく見られやすいが、根は優しい。

技

メイン…爆裂パンチ 毒づき カウンター フェイント

サブ…ヘドロ爆弾 ふいうち

・カブルモ

♂。わんぱくな性格で、体が丈夫。

チームの新参。まだ戦闘能力は低いが、結構な有望株。
噛み癖が強い。ダイヤの頭が主なターゲット。

遊び相手になってくれるアンノーンやダイノーズが好き。
ただいま絶賛育成中。

技

メイン…つつく ずつき とっしん じたばた

まだメイン技しかない。

・クリムガン

♂。いじっぱりな性格で、好奇心が強い。

元は龍の穴に住んでいたが、ウツギに捕獲され、研究所で大暴れ。丁度抑止力になりうるポケモン（つまりビーダル）がいるというシンオウの研究所に送られた。

ゆえに、ビーダルとは拳で語り合った仲良しである。

技…げきりん

ドラゴンクロー

なしくずし

ばかぢから

ダイヤの手持ち設定!!! 変更が加わったりするよ! (後書き)

作「そして、要様のご意見…というよりリクを頂きましたので、擬人化書こうと思います!!」

ダ「お前テンション高いな」

作「そりゃそうさ! なんのために『萌えもんで小説書きたい』とか言ってたと思ってるの!？」

ダ「知らん」

作「需要があるなら書かせていただきますとも!…あ、苦手な方のために題名に『擬人化注意』と注意書きはしておきますので、あしからず。」

ダ「自重も大事だからな。」

作「それでは、また次話にてお会いしましょう!」

※擬人化注意!!

擬人化時設定（前書き）

作「さてさて、一応言っておきますと…ここから、擬人化設定になります。私の妄想しか入ってないのでご注意を。

えー、基本的にはポケモンのときと大差ないです。加えられた設定は

- ・年齢
- ・行動
- ・趣味

このくらいです。何か文句等ございましたら受け付けます。いつでもカモンです。

それでは、そんな感じで読み進めていただけると幸いです!」

※擬人化注意!!

擬人化時設定

・エンペルト

♂。勇敢な性格で、とても几帳面。
20歳。

一人称は私。二人称は呼び捨てだったり、『〜殿』だったり。
ダイヤのことは『マスター』と呼ぶ。

趣味は読書。ミステリーを読むのが日課。

・クロバット（バット）

♀。陽気な性格で、いたずらが好き。
22歳。

一人称はあたし。二人称はあなた、他は呼び捨て。
ダイヤのことは『マスター』。

結構気が強く、エンペルトとはケンカになりやすい。

趣味はいたずら。ダイヤにすると叱られるがその反応が楽しくて何
度もやる。

・ビーダル

♂。真面目な性格で、力が自慢。
24歳。

一人称はオイラ、二人称はお前、『くくさん』。
ダイヤは『大将』、『旦那』。

力仕事が得意。ナナカマド博士の手伝いも主に力仕事だったため、
しっかりと鍛えられている。

趣味は日曜大工。木工が大得意。

・ダイノーズ（ノーズ）

♂。穏やかな性格で、のんびりするのが好き。
68歳。

一人称はワシ、二人称は呼び捨て。ただし女性には『嬢』が付く。

普段はあまり動かず屋敷内にいるだけだが、いざ戦闘になるとパワフル。老いを感じさせないとは正にこのこと。

駒を使う遊びに強い。（ダイヤとの総合戦績…112戦110勝1敗1分）

・アンノーン(F)

♀。やんちゃで、少しお調子者。
17歳。

恐らく一番ポケモン時とキャラが変わらない。ゆえに説明不要。

基本は普通の女の子。ヒカリと仲がいい。

後はカブルモの遊び相手。

趣味はストーク…ではなくダイヤの観察。趣味ですはい。

・ドクロッグ

♀。意地っ張りで、ちょっぴり見栄っ張り。
18歳。

簡単に言おう。ツンデレに近い。

口癖は『どうでもいい』。どうでもいいことが多いらしい。という
か口数自体少ない。

だからこそ、チームで一番謎が多い。

趣味は組み手。ビーダルやエンペルトの相手をしている事が多い。

・カブルモ

♂。わんぱくな性格で、体が丈夫。
10歳。

遊ぶのが好きである。基本遊んでる。
『遊びの中で成長する』を地で行く子。

チームの仲間は皆遊び相手になってくれるから好き。

※擬人化注意!!

擬人化時設定(後書き)

EX話も近日公開でございます。

第三十九話・ルーレットゴッデス（前書き）

作「はい、今回も短めで投稿なのですが、一応理由があるんですねこれが。」

ダ「何だ？」

作「いや、問題は：『戦闘中にポケモンの鳴き声が入るのはどうか』ってことなんですよ。」

ダ「どーゆーことだそりゃ。」

作「例えばな。ほれ、エンペルトに技の支持」

ダ「ん？ ああ、エンペルト、冷凍ビーム？」

エンペルト「エーーン！」

作「はい、ざっくり言えばこれ。技の支持後とか、攻撃食らった時とかの反応…これを書くか否か。」

ダ「なるほど、見る人によっては見辛いか」

作「うん。というわけで、これもアンケートかな、と。ちなみに他のポケモン小説では書いてない場合が多いね」

ダ「おまえは何で書いてるんだ？」

作「いや、ポケモンの鳴き声が入ると盛り上がるかなって。でも書

いて『単調だなこれ』って思ってたね。」

ダ「なるほどねえ。」

作「と、いうわけで有無は皆様に決めていただきたい？お願いします！」

ダ「その他のアンケートもまだ募集中だ。よろしくな」

作「長々と失礼しました？」

第三十九話・ルーレットゴッデス

バトルルーレット。

運を味方につけてこそ、勝ち抜けるステージ：そう呼ばれている。外観はまるでサーカス小屋。中に入っても、証明が少ない所為か薄暗い。

「うーん…どいつらで行こうか」

「わたしは決まったよー」

「速いな。もしかして、さっきのパソコンで」

「うん。一応決めておいたんだ」

準備が早いと、スタートダッシュが違う：改めてそう思った。

少し遅れて三体を選び抜き、受付へ向かう。

緑とピンクの帽子の受付に話しかけると、

「ダイヤ様ですか？」

「え？あ、はい」

「フロンティアブレインのダリア様がお待ちです。どうぞ、こちらへ」

「へ？ええ！？」

「シュレン様もどうぞ」

「あ、はい」

いきなりフロンティアブレインまで素通しとは…どういうことだ？仕方なく、係員に従って通路を進む。

「どういうことだろうね」

「さっぱり分からんよ。一応、気をつけろ」

案内の元、到着したのは：バトルフィールド。
ぱっと明るくなり、頭上には大きなルーレットが現れた。
そして、くるくると：女が、フィールドの向かい側に立つ。

「ハーイ！待ってましたヨ！ダイヤ！シュレン！！」
「：アンタがダリアか」

派手な髪型にモデル体系。第一印象はそれだ。
とりあえず、当然の疑問を投げかけてみる。

「俺達に何の用だ？」
「それ！それはねえ、シロナから頼まれたからだヨ」
「シロナさんから！？」

シュレンの声と同時に、顔を見合わせる。
最近通信も取れないと思ったら、ブレーンと会っていたのか。

「『君たち三人の修行を見てやってくれ』ってサ。シロナの頼みな
ら断れないネ」

ところで、とダリアは辺りを見回した。

「三人目、N君はどこへ行ったのかな？」
「ああ：あいつは用事で出かけてるんだ」
「そう？分かった。じゃあ、あなた達二人の修行のお手伝い。先に
ダイヤ」

ダリアがボールを構える。

「ルールは1対3のルーレットシングルバトル。ダイヤ、貴方が3ネ。」

「…舐められたもんだ」

「だって、貴方は歯が立たないはず。『伝説』には」

すると、はるか高く、テントの天井部に黒い雲が浮かんだ。

「カモン！サンダー！！」

轟雷、来る。

まさにその言葉通り、雷が舞い降りた。

「バギヤアアアアアアア！！！！」

「…っ！！」

放たれるプレッシャー。今までに感じたものとは、質が違うが。それでも、人間を疎ませるには十分すぎるほどだった。

「どうしたの？早く」

「…分かってる！！」

先鋒…しかたない。任せよう。

「F！！」

「ぴろろろ！！」

「それじゃあ、ルーレットスタート♪」

「な！？」

ダリアの合図と共に、頭上のルーレットが高速回転を始める。

「さあ、ストップの宣言はあなたヨ!!」
「はア!?!:ストップ!!」

ピタリ、とルーレットが止まる。

その矢印が指すのは、稲妻のマークだった。

「:...?」

「結果は『パラライズ』!!」

ダリアがこちらを指差し、叫ぶ。すると、不意に腰周りに電流が走った。

「つッ!?!」

「ぴろろお!?!」

「F!!」

同時に、Fの叫びが聞こえた。見れば、麻痺の状態になっているではないか。

「テメエ、何しやがった!!」

「ルールを知らないで、ここに来たの? 予習不足ネ」

「ルール:...?」

シュレンに助けを求める。

「ここでは、ルーレットの出た目で対戦者に影響があるの!! 今のは『麻痺』の目だから、ダイヤ君の手持ち全てに麻痺が作用したわけ!!」

「マジかよ...!!」

「まあ、これは修行。いつでも『ヨードン』で対戦してくれると

は限らないからネ」

「…!!」

どこかで、聞いたことのある台詞…。

「…わかった。いいハンデだ」

「じゃあ、バトル開始。先手はあげるワ」

「F、アイスショット!!」

「ぴろっ!!」

10数個の氷弾を、サンダーの全身に向かって飛ばす。

「サンダー、放電で打ち消し!!」

「ギャアア!!」

氷は電気の熱によって解け、その身に届く事はなかった。

「届かない…!!?クソッ、F!!ファイアショット!!」

「ぴろ…ぴろっ!!」

「しまった、麻痺が!!」

「十万ボルト!!」

「バギアア!!」

迫り来る雷撃。…だが、Fは避けられない。

地に伏すだけだった。

「…もどれF。」

「どう?圧倒的な力の差…そしてテクニクの差は」

「それを見せられるほど、長いバトルじゃないですがね…いけ、エンペルト!!」

「プイイイイ!!」

「冷凍ビーム!! 狙うのは…足だ!!」

雷を起こす体毛がついていない足…そこなら、電撃も薄くなるはず。
だが、

「サンダー、避けてかみなり♪」

「ギャアアアア!!」

飛行と電気、双方の特徴である素早さで攻撃をかわし、
一撃。

「プイイイイイイ!!」

「エンペルト!!」

効果は抜群――。

立ち上がれるわけもなく、エンペルトの身体は砂埃を立てた。

「っ……」

「さっきまでの威勢はどこへいったの? まだまだ終わらないヨ」
「…」

ボールを、握り締める。

無力が痛い。無力が憎い。無力が許せない。無力が妬ましい。

何が『守る』だ……!!

「…ビードル」

ボールの中の仲間に、声をかける。

「…ダリアさん」

「なあに？」

「俺の負けです」

第三十九話・ルーレットゴッデス（後書き）

寮に舞い戻ったため、EX話が滞っています。

「このキャラの話が見たい」等ございましたら、感想でいただけると幸いです。

第四十話・そして、歯車は噛み合い始める。（前書き）

作「やっと始まる、って感じかな。」

ダ「なにが？」

作「いや、グダグダしてた前置きとかが、終わってさ。」

ダ「ふーん…。俺も頑張りときか」

作「そだな。いくぞっ！」

第四十話・そして、歯車は噛み合い始める。

「とりあえず、総評。決定的に足りてないのは…ポケモンのパワー、スピード。」

「……………」

「そして、アナタのメンタル。」

返す言葉もない。全く、その通りだ。自分の心が、一番足りてない。そのせいで、みんなには迷惑かけ…

ゴツツ！！！！！

「痛ってえ！？」

「ほーら、そんな風にすぐ考え込んじゃうところ。一番良くないよ」「ッ……………はい。」

確かに、これは俺の悪いくせだ。どうにかしたいな…。

「俺は……………」

「ん？」

「俺は、どうしたらいいんだ？どうしたら、皆を守れるように……………」

ゴンツ。

「痛だあああああああ？」

「それを見つげるための修行！さ、ポケモン出して！」

「は、はい！」

適当に、腰についてるボールを掴んで……………あ。

『これは…博士からもらった…』

「どうしたの？早く早く！！！！」

ダリアが急かしてくるので、仕方なくそのまま投げる。

「いけっ！」

「クガアアアアアア！！！！！」

紅い頭、青き翼。

「クリムガンかぁ。珍しいポケモン持ってるネ」

「ええ、まあ……。」

クリムガンは首を左右に振って、こちらを見る。

「よろしくな、クリムガン。頼りにしてるぜ」

「クガア！」

「準備はいい？いくよ！ダイヤ！」

ダリアもボールを構えた。…そこで、一つ重要なことに気づく。

「シュレンは何処行った？途中から見なかったんだが」

「ああ、あの子なら…バトルステージ。」

「ステージ…？一度行った…。修行を、あそこで？」

「うん。あの子には、あそこと…ケイトがあつてると思ってたネ」

「へえ…」

ダリアは、そう言ってくるりと一回転。

仕切り直し、ということか。

「それじゃ、今度こそいくよ!!!!!!」
「オーケーです!」

Side シュレン

ダイヤくんのバトル中に、係りの人に連れてこられた場所。
ここはヒョウガさんがバトルしてた、バトルステージだ。照明がいくつか落とされているようだが…

「こちらでお待ち下さい」

「あ、はい。」

バトルフィールドの一角に立ち、向かい側……本来なら相手が立っているであろう場所を眺める。

『…ダイヤくんが、いつも見てる景色。』

彼の目に、ポケモンバトルは……私は、どう見えてるんだろう。

「っ!!!!!!なに考えてるのよわたし!!!!!!」

ぺちぺちと、自らの頬を叩く。熱く火照ったそれは、さらに鼓動を早めて。

「……らしくないな…どうしたんだろ、わたし。」

「さあ、何でしょうね。」

バツと、頬から手を離す。

向かい側に立っていたのは…女性。ダリアよりも年上だろうか。

「おばさんが教えてあげましょうか？」

「……ステージマドンナの、ケイトさんですよ」

「ええ。あなたは私のことを知ってるようね」

「はい！」

カントー四天王のカリンさんと同じく、わたしが尊敬するトレーナーの1人――。

「自分の好きを貫く」。あの言葉、大好きなんです」

「それは光栄ね……さて、おばさんがここにいるわけ。わかるわね？」

ケイトはそう言って、こちらにボールを向けた。

何回、同じ行動を見てきただろう……。答えはわかっている。

「…はい。修行、ですよ」

「そう。あなたが恋心を抱く、ダイヤと同じ。」

「なッ！／＼／」

慌てるわたしを見て、ステージマドンナはニコニコ微笑む。

「ホホ、可愛い子。バトルで、その可愛らしさだけじゃなく…強さも見せて？」

「わわわ、わかってますっ！」

ケイトがハッサム、こちらはゴウカザルを繰り出す。

「ゴウカザル、火炎放射！」

「キイイイ！！」

「ハッサム、高速移動！」

先手の一撃は、難なくかわされ、さらに接近される。

「シザークロス！」

「こっちはインファイト！」

「キイイ！」

「……」

拳とハサミの激突。だが、ハサミは重いがゆえに、拳に手数で負けていた。

少しずつ、ハッサムのボディに当たり始める。

「よし、頑張れ！いけるよ！」

「ハッサム、みきり！」

連撃の一発が外れると、その後が立て続けにかわされた。

「そんな！」

「どうしたの、そのままじゃ当たらないわよ？」

「：なら、ゴウカザル！ジャンプ！」

「ウキイ！」

天井に届きそうなほどの跳躍。そこから、ゴウカザルは回転する。

「大文字!!」

「キィィィィ!!」

「成る程!…ハッサム、見切って!」

フィールド全体を多い尽くす、炎。額に汗が伝った。

「どう……?」

ハッサムは……

「……………」

黒コゲで、地に伏していた。

「や、やったあ!」

「ウキィィィィ!!!!」

ゴウカザルと喜び合っていると、拍手が起きる。

「おめでとう。強いわね、あなた」

「…ありがとうございます。…でも、すこしあっけなかったですね」

「あら、勝負は一瞬で決まるのよ。このくらい普通普通。」

ゴウカザルをボールに戻し、焼けた大地を見た。

…ダイヤは勝っただろうか。それが気がかりだった。

「……やっぱり気になる?彼のこと」

「!?!そそそんなこと!?!」

「ホホ。若くていいわねえ」

「違いますって！聞いてます！？」

必死に言い返すが、ケイトは聞く耳持たず。

「さて。このバトルステージの特色として、私が全タイプのポケモンを使っていいことになってるの」

「なるほど。」

「と、いうわけで。私の精鋭16匹と勝負してもらおうわ」

「ええええええええ！？まさか、さっきのハッサムは数に…」

「入ってないわよ」

「やっぱり！」

「さあ、強くなるため！いきましよう！」

「ええええええええ！！！」

＼side チャンピオンズ＼

「では、これより臨時会議を開きます。」

壇上にて、シロナが宣言する。入れ替わりで、今度はアデクが立った。

「さて、みなに集まってもらったのは他でもない。『Revive』

と、シュレン、ダイヤのことだ」

「：奴ら、特にあのボス。：強いぞ。今までの勢力の比にならないほどな」

ワタルが、マントを直しながら答える。

「ええ。あのツボツボも良く育っていた…。守る一つで、強さは十分に測れました」

とダイゴが言う。ミクリも続けて口を開いた。

「それゆえに、今我々は彼らのことを知らなければならない。そうですね？」

「うむ。シロナ、三人は何をしている？」

「ダリアに任せて、修行中です。ジムリーダー達には警備を」
「わかった。……さて、問題は奴らの居場所だが……」

アデクが言ったところで、ワタルとミクリが立ち上がった。

「空からは見たが、何処にもいない。」

「海は私が。やはり、どこにも。」

「：ふーむ。まいったのう」

見つからなければ、対策のしようがない。

溜息をついて、椅子に座り直した。

「：仕方ない。俺たちも警備に加わろう。何かあれば呼んでくれ」

「ああ、すまないな」

「じゃあ、今回はこれで解散ということで」

「そうだな…各自、注意しろ」
「」「はいっ」「」

Side Revive

「クルト」

「……………はい」

「これを渡しておこう」

「……………?」

クルトの小さな手の上に、モンスターボールが置かれる。

「『獅子王』だ。必要であれば使え」

「……………ありがとうございます」

ペこりと頭を下げる。

フリードは振り返って、レアンに声をかけた。

「英雄の方はどうした?」

「こちらですよ。」

レアンが手招きすると、Nはしっかりした足取りでこちらへ向かってきた。

「あとは……」

「これですか」

ティオレが持ってきたのは、白と、黒の球体。
呼応するように、光り輝いている。

「……期は、熟した」

フリードはローブを翻し、一同に向かう。

「諸君、最後の下準備だ。」

「っしゃあ、燃えてきたアアア!!」

「……………」

「暑苦しいねエ」

右手をあげ、高らかに宣言する。

「目的は、シュレン・バークの捕獲。皆、援護しろ」
「「「おおー!」」」(……………」

第四十話・そして、歯車は噛み合い始める。（後書き）

作「EX話の希望も受け付けております。よろしくお願いします！」

ダ「あ、手持ち情報にクリムガンが追加されたぞ。擬人化の方にもそのうち追加だ！感想その他、待ってるからな！」

（擬人化注意？）第ⅠF話・つまりは、もしも。（前書き）

作「すごいんだよこれが。俺って、基本的に一話4000文字程度がノルマなんですよ。」

ダ「ほう」

作「今回は何と5000文字超。なんぞこれ。なんぞこれ。」

ダ「暇ってこった」

作「あ、これから擬人化ものは第ⅠF話として扱います。注意してね。」

ダ「それから、クリムガンの擬人化設定も追加した。ぜひ見てくれ」

作「で、今回の主役は…まあ全員出るんだけど、主なのはクリムガンとドクロッグかな。」

ダ「あの二人か。珍しいな」

作「だろ？書いてたんだが、途中で何書いてたかわかんなくなった」

ダ「おいこら」

作「それではごゆるりと〜！」

（擬人化注意？） 第I F話・つまりは、もしも。

フタバタウン。特に目立った施設はなく、ポケモンセンターもない。
あるのは、森、林、草原。そして土。

「んー…」

そんなのどかな景色の中、伸びをするのはアヤコだった。
シンオウリーグ四天王を破ったトレーナー、ダイヤの母親にして、
自身もかつてはトップコーディネーターであった経歴を持つ。

そんな彼女に、箒を持った青年が近づいた。

「おや、アヤコ殿。お早うございます」

「あら、エン君。おはよう」

そう、ダイヤの手持ちポケモン…エンペルト。

「今日も早いよね？」

「ええ。今日は天気が優れていたの…庭の掃除でも、と」

箒を見せて微笑む彼は、普通に町にいる青年とも見劣りしない。
寧ろ勝っていると思うくらいに綺麗だ。

「…？どうされました？」

「いえいえ、エン君は働き者だなと思って」

「マスターのご実家ですから。主に仕えるものとしては、当然でs
ぶっ！？」

「きゃはー、お早うエンペルト♪今日も間抜けねえ♪」

「…バットオオオオ!!!」

空中から毛布を掛けられ、叫ぶエンペルト。
空から舞い降りたのは、紫の翼を持つ少女…バットだった。

「バットちゃん、お早う」

「あ、ママさんおはよ♪」

「バット、今日という今日こそは許さん!!」

「やっぱ!!」

そして、今日も追いかけてっここが始まった。

バットのいたずら癖は困ったもので、いつもこうして誰かしらに追いかけられている。

「朝御飯までには戻ってきてねー」

「わかってるわよー♪」

「喰らえええええ!!!」

水色の光線が飛び交っている方を極力見ないように、エンペルトの投げた箒を拾う。

――が、それは先にアンノーンの手に収まった。

「はい、ママさん」

「ありがとうFちゃん。珍しく早いね」

「うん。ダイヤが出かける音が聞こえたから」

…やはり私も親だから、ときどき自分の息子の身を案じるものだが…
…身内からも考える事になるとは思わなかった。

「どこかにお出かけしちゃったの? 皆おいて」

「ええ。なんでも、ジムリーダーに呼び出しを受けたとか…お仕事かしらね」

「ふーん…場所は？」

「よく分からないわ」

「そっか…残念」

目がギラリと光ったのが気になったが、深くは問わない事にした。朝食を作るのを手伝ってくれるそうなので、共に家へ戻る。

「くあー！ー！！負けたッ」

「おおー、ノーズ爺ちゃんつえー！ー」

「ふおふお、まだまだ若いもんには負けてられんよ」

居間には、ノーズ・ビーダル・カブルモの三人が将棋を指しているのが見えた。

結果はいつも通りのようだが。

「今日は皆早いわねえ」

「あ、母さんだー」

「ママさん、お早うございますー」

「アヤコ嬢、今日もいい天気じゃのお」

「ええ、ほんとに。今から朝御飯用意するから待っててねー」

あー、と言いながらビーダルが肩をゴキゴキ鳴らす。

「久々に指したら肩凝ったな…オイラ、少し身体動かしてくる」

「あら、行ってらっしゃい。」

「僕も行くー！！」

「おう、じゃあドクロッグとクリムガンも呼んど」

二階へ向かおうとしたビーダルを呼び止める。

「ドクログちゃんとクリーム君ならいないわよ」

「へ？」

「ああ、主と同じところにいるはずじゃ」

そう聞いて、Fはビーダルの胸倉に掴みかかる。

「ど、どういうこと！？何でドクログがマスターとっ」

「オイラは知らねえよ！？」

「まあまあ落ち着きなさい。要するに、さっき話した『仕事』よ」

【ほぼ同時刻、ノモセシティ・ノモセ大湿原前】

「じゃあ、11時にゲートに集合な。」

「……………」

ドクログは、何も言わずに湿原の奥へと消えていった。

それを見て、クリムガンは眩く。

「…よかったんですかい大将。あいつを自由にしといて」

「ああ。…珍しく、あいつの方から一緒に行きたいって言ったんだ。このくらい許して当然だろ」

「…よくわかりませんや」

そう言って、頭を掻いた。

「…ここはな、あいつと俺が出会った場所なんだよ」

俺は徐に口を開く。クリムガンはきょんとして『へえ』と言葉を漏らした。

「何か、思うところでもあったんですかね」

「さあな。あまりそういうことに深入りしちゃあいけないよ」

「おおーい、ダイヤー!!」

遠くの方から、仮面をつけた大男が走ってくる。
ノモセシティジムリーダーのマキシだ。

「久しぶりだな！元氣だったか？」

「ああ、…そっちも元氣そうでなによりだよ」

「うむ。…おお、クリムガンも元氣そうだな」

「あ、ああ」

マキシはもう一度笑って、俺達の肩を叩いてきた。痛い。

「それで、俺を呼び出したのはどういうわけ？」

「そうそう。それなんだが…まあ立ち話も何だ、大湿原に行くぞ」

「は？いや、それも立ち話になるんじゃないですかい」

「何言ってるんだ。ちゃんと湿原列車があるだろうが」

「ああ、納得だ」

「?？」

納得していないクリムガンをつれて、俺とマキシはゲートを潜った。

湿原に入ってすぐに、何かが変だと…私は気付いた。

昔どおりならば、その沼でウパーやマリルが戯れていて、その木ではコノハナたちが草笛を吹いていて。

そして、私が今いるこの森では…私のいたグレッグルの群れが暮らしていたはず。

何かがあったのは間違いない。ならば、一体何があったか。
軽く辺りを見回して、顔見知りを探す。

「…」

近くにあった植物にケンカキックを叩き込んだ。
すると、それはもごもごと動いて…

「痛たたた…なにしゃがるんです、グレッグル姐さ…いや、今はド
クロッグですか」

「マスキッパ、何があったか教えろ」

マスキッパは、その擬態による森の情報収集が得意だ。それを商売としていたころもあったが、

「…なんのことやら」

今回は、口を開かないようだ。
昔のように、視線をぶつける。

「……………」

「…わかりましたよ。」

マスキッパは『やれやれ』と言いながら、近くの木を引っかいて図を描いた。

「姐さんが旅に出てすぐ、新しい主がどうのこうのって話になりましてね。当然グレッグルから選出される予定だったんです。…けど、主の選定試験に、ある者が割り込んできて」

「ある者？」

「西の森の怪物、ドラピオンです」

「…あいつか…」

このノモセ大湿原は、大きく分けて2つ、細かく分けて4つのエリアがある。

『主』と呼ばれるものは、大湿原そのものの統括者だが…当然、それを認めない輩もいる。

その一人が、二つのエリアの片方『西の森』で怪物と恐れられた…ドラピオン。

「はい。昔、東の森の仲間に危害を加えたときに姐さんが撃退させた奴です。やつがどんどん進軍して行って、グレッグルの群れに來たわけで…立ち向かうにも、所詮は頭のない烏合の衆。次々にやられて、結果全員奴の配下にさせられちゃいました。」

「…」

「まあ、こんなかんじです。」

「…奴はどこにいる」

そういうと、マスキッパは驚いて

「…正気ですか？今の姐さんには関係のない話ですよ」

「関係ないものか。私の故郷を荒らす奴は…誰一人許さない」

拳を握り締め、大きく息を吐く。

マスキッパはそれを見て目を閉じ、もう一度植物に戻った。

「…奴は北の方の、姐さんのお氣に入りの場所にいます」

「…迷惑かけたな」

北を目指し、駆け出した。

「つまり、昔のドクロッグみたいに、そのドラピオンを止めればい

いわけか」

「そういうわけだ」

湿原列車内で、俺は茶を啜る。

クリムガンはずっと外を眺めていた。

「捕獲は…難しそうだな」

「そうか？」

「ドクロッグと違って、確実な悪意がある。…頼んだぜ、クリムガン」

「任せてくたせえ大将。パワー自慢なら負ける気はしません」

ドラピオンなら、リョウとの対戦の経験もある。そう苦戦はしないだろう。

…待てよ。

「その話で行くと…ドクロッグが先につくんじゃねえか」

「ああ、あいつのかつての群れが襲われたんなら…そうなりますね」

「ふむ、それはいいかな。運転手、もう少しスピードは出ないのか」

「これが限界ですよ！」

そもそも、湿原列車は観光用。スピードを出すためのものではない。

「あんまり急かしてやるなよ」

「そうだな。すっかり忘れ取ったワイ！！ハッハッハ」

だが、俺も内心急ぎたくて仕方がない。

ドクロッグを、信じてないわけじゃないが…。

「…心配ですかい」

「ああ。あいつは無理しやすい性格だから…百の軍勢に単身突っ込むぞ」

「…大将はお優しいですね」

「んあ？そうか？」

クリムガンはそういつて、再び外に視線を移した。

「ああ。大将は、優しいよ」

「…？」

湿原の北、明るい沼地。

一日中、日や月が眺められるところが、私は好きだった。…今だって好きだ。

こいつらがここに居なければ。

「よう『元主様』。人間の世話になって楽しかったかあ？」

「……………」

黙ってにらみつける。ドラピオンは鼻で笑って、

「で、今更なんの用だ？『森を捨てた主様』よお」

「…あいつらはどこにいる？」

「あいつら？…ああ、あいつらね」

くい、と指を向けた先には…かつての仲間達。

「あ、姐さん…」

「どうだ？久々の再開は。嬉しいだろ」

「ッ！！」

ドラピオンの顔面目掛けて、拳をぶち込む…つもりだったが、

「お前らッ」

「すみません姐さん、俺達…」

グレッグルたちによって、止められてしまった。

…そうか。

「そいつらはもう俺の傘下だ！！悪いなドクロッグ、これから俺が『主』だ！！やれ、グレッグル共！！」

グレッグルの群れが、こちらに襲い掛かってくる。

…そうだな。

「弱者は、力に従うしかない…。お前達の行動は正当だ」

「…あ？何言って」

「本当の力って奴を、見せてやろう」

「む……?」

「聞こえたか、マキシ?」

「ああ、聞こえた。」

「大将、俺は先に行くぜ!!!!!!」

クリムガンが湿原列車の窓から飛び出す。

その後ろ姿を眺めながら、俺は耳を済ませた。

「…やっぱり。ドクロッグが戦ってる」

「相手は、恐らくドラピオンだろう。急ぐか?」
「ああ」

俺が答えるとマキシは頷いて、

「停めてくれ!」

湿原列車が停止すると同時に、二人とも窓から飛び降り、森に向かってかけ出した。

「はぁー…はぁー…？」

「さすがに疲れてるみてえだなあ？百の軍勢の前には、流石の元主様も勝てねえか」

「ッ…ああ？」

飛び出してきたスコルピを薙ぎ払い、一步踏み出る。
沼は赤く染まり、今まで倒した数が浮いている。

「どうだ、今まで死ぬ気で守ってきたもんを死ぬ気で潰す気分は？最高だろ？」

「…反吐が出る」

「ふん」

背後のスコルピ達を制し、ドラピオンが前へ出る。

「まあいい。早く『主の証』を渡しな」

「…何のことやら」

「とぼけるな！テメエが持つてゐることはわかってんだよ？」

疲労したドクロッグの身体は、いとも簡単に吹き飛んだ。

「それさえあれば、俺は本当の主になれる？絶対的な支配ができるんだよ？」

「……ガハッ？……」

その剛腕によって、幾度も幾度も叩きつけられる。
だんだんと遠のく意識。

「…主になりたきや…」

「あ？」

「部下の力だけに頼らず…自分の力で部下を守れるようになりな…」
「言ってるじゃねえよ！」

「ぐっ」

再度、沼に叩き込まれる。

「なら、テメエを殺して探してやるよ？」

「…やれよ」

鋭い爪が、正確にドクロッグの喉元をとらえた…瞬間。

「!??ぐあっ??」

「家の仲間に手エだしてんじゃねえよ！」

クリムガンのパンチで、ドラピオンが吹き飛んだ。
そのままドクロッグを抱え、距離を取る。

「…全部一人でやったのか」

「…余計なこと…」

「大将に言われてやってるんだ。自分の意思じゃねえ」

近くの木の下に下ろし、ドラピオンを見据えた。

「クソが…何もんだ！」

「こいつの仲間だ！」

そう言うのと、ドラピオンは高々と笑う。

「仲間あ？笑わせる！そいつは群れの仲間を見捨て、たった今潰した奴だぞ！そんな奴に仲間がいるなど」

「だからどーした」

「何…？」

「そもそも、こいつらが潰されたのはお前のせい。ドクログがない間に群れをおそったのもお前。…つまり」

ドラピオンに歩み寄り、顔面に一撃。

「全部お前のせいだろおが！！」

「うがああああ！？」

「…すまない」

「気にすんな。」

動けないドクログを、クリムガンが負ぶっている。そんな状況。

「俺はボール持ってないし、大将も遅い。しかたないさ」

「……頼みがある」

「ん？」

ドクロッグが差し出したのは、白いペンダント。

「何だこりゃ？」

「主の証だ」

「さっきいった奴か」

「ああ。初代主のギヤラドスの牙でできてる。…壊してくれ」
「……いいのか？」

沼に足を取られながら進む。

「いいんだ。主なんて、いない方が」
「…」

牙を握り、手のひらに力を込める。

ぴし、といったところで、

その手は、数人のグレッグルによって止められた。

「お前ら…」

「姐さん…俺らが何の為に、ドラピオンと戦ったか…わかりますか」
「姐さんに、主でいて欲しいからですよ」

クリームガンの手から外された主の証が、ドクロッグの首にかけられる。

「だが…私はお前らを…この手で」
「んなのいつものことです」

「へばい俺らを鍛えてくれてたのは姐さんだけです！」

「…いいやつらだな、お前ら」

クリムガンの瞳から、涙がこぼれ出た。

「ですから!」

「……………」

「…龍の旦那、姐さんのこと、頼みましたぜ」

「ああ、責任持って助ける」

グレッグル達は一礼して、その場を立ち去った。

入れ違いになるように、ダイヤが駆け寄ってくる。

「悪いな、マキシのオッサンについて行ったら遅れ…ってひでえ傷だな!?!? とりあえずボールに戻すか」

「…いい。一人で歩ける」

そう言って、ドクログは背中から降りる。

ダイヤとすれ違ったところで、

「…いいか、ドクログ」

「…」

「お前は主であろうとなんだろうと『仲間』だ。忘れんなよ」

ドクログは空を見上げる。

クリムガンも、ダイヤも。

「…どうでもいい」

一筋の、雫が伝った。

（擬人化注意？）第I F話・つまりは、もしも。（後書き）

ドクロッグの話が見たい！というご意見からです。ありがとうございます。

その他意見等ございましたら、気軽に言ってくださいね！文句言われると泣いちゃうかもしれんけど！ww
それでは！

企画、再来…急募!!

作「はい、今回は前書き無しでお送りいたします。…というより、アレですね。恒例の『作者からのお願い』です」

ダ「お願い？」

作「ってゆーか、うん…正直言って小説の作者が頼むような事ではないわけですよ。」

ダ「それって結構前から色々やってるような」

作「言うな!!…えーとですね。作品内では『第I F話』の方の話です」

ダ「おう。」

作「『I F話の手持ちの名前を考えてください』!!!」

ダ「…は？」

作「いや、ね? きっと将来、敵として別のエンペルトと戦う事もあるでしょ」

ダ「まあ、あってもおかしくないな。話としては書いてないけど、そういうことも何度かあったし」

作「そうそう。で、そういう時って結構分かりづらいのよ」

ダ「例えば？」

作「例えば：うん、ドナルド・ダ○クとドナルド・マ○ドナ○ドが居たでしょう」

ダ「ギリギリな例えだなオイ」

作「二人に話しかけてみよう。おいドナルド!!」

「グワァグワァ!!」

「らんらんるー」

作「さて、どっちがどっちだ？」

ダ「モロバレだわ。モロバレルだわ」

作「ふむ。例えが悪かったか…。まあ色々と不都合があるわけです。そこで、最初こそ：ダイヤ、君に新しいニックネームを考えてもらいたい!」と思っていた」

ダ「俺か? まあ別に構わないけど」

作「だがしかし」

ダ「ん？」

作「お前が今までにつけてきたニックネームは？」

ダ「え？…えっと、ポツチャマには『ちやま』、クロバットには『バット』、ダイノーズには『ノーズ』…かな？」

作「……………」

ダ「……………」

作「というわけで、皆様に考えていただきたい！！！」

ダ「オイコラ。何か文句あんのか」

作「本当に、自分で何もできない作者で申し訳ありません。この小説は読者の皆様にとって、本当に読みやすいと思っていただける作品にしたいのです。」

ダ「…わかってるよ。俺にネーミングセンスが無い事ぐらい」

作「和名、英名どちらでも構いません。感想等で受け付けます！！採用したら、またこんな感じで発表したいと思います。」

ダ「俺の代わりに、頼んだぜ…」

作「皆様からのご意見をお待ちしています！！」

第I F話・ダイヤチームに聞いてみる20の質問（前書き）

作「はい、今回は擬人化6人のキャラ・口調を掴む&掴んでいただくために、こちらのサイト様のお題をお借りしました。

>P<>A href="http://kinokaku.dokkoisho.com/pokemon/GP-30Q.htm
l"<【擬人化ポケモンへの質問集】>/A<>/P<

大分長ったらしくなっていました。最後まで読んでいただければ幸いです。

…ああ、そうだ。ダイヤは登場しません。」

第I F話・ダイヤチームに聞いてみる20の質問

【01. 簡単にメンバーの紹介をお願いします。】

エンペルト（以下、エ）「じゃあ私から。エンペルトのーニツクネームは募集中だったな。というわけでエンペルトだ、よろしく」

クロバット（以下、ク）「わたしはクロバット♪エンと同じくNNは募集中よ。」

ビーダル（以下、ビ）「オイラはビーダル。このチームじゃ三人目の仲間だね。勿論NNも募集してるよ」

ダイノーズ（以下、ノ）「…おお、儂か？儂はダイノーズ。言うまでもなく唯の爺じゃ」

アンノーン（以下、F）「やほー☆アンノーンのFでっす♪NN募集中だよ」

ドクログ（以下、ド）「……………」

ビ「ドクログ、自己紹介っ」

ド「…ドクログだ。」

エ「とりあえず、マスターのメインパーティはこの6人だ。よろしく頼む」

【02. リーダーはどちら様ですか？】

エ「私だな」

ク「ええ……？」

エ「なんだ、何か文句でもあるのかクロバット」

ク「いやあ、別にそんなものは無いけど」

ビ（絶対あるなこれ…）

ノ「まあ、リーダーはエンペルトじゃろ。主との付き合いも一番長いわけじゃし」

F「うん。あたしも文句は無いね。一番レベル高いのもエンペルトだもん」

ド「…どうでもいい」

ク「ちえっ、まあいいか」

エ「オイ」

【03. 副リーダーはおられますか？】

ク「はいはいはいはい！！それは私でしょ！！」

ビ「え、そうなの？」

ク「何よビーダル、文句あるわけ？（ギロリ）」

ビ「い、いやモチロンアリマセンヨ」

F「えー？あたしはドクロッグかダイノーズだと思ってたけど」

ノ「儂か？爺にそんな役目は務まらんよ」

エ「私としては、ドクロッグに任せていたつもりだったんだが…」

ク「キーーーーッ！！何よ皆ドクロッグ最前！？」

ド「…興味ない。んなもの譲るわ」

ク「やった♪これでわたしが副リーダーよ！！！」

ビ「…オイラの存在意義って一体…」

【04. 先鋒はどちら様ですか？】

ノ「む、これはF、ぬしじゃな」

F「え？…あ、そういえばいつも最初の方に出るね」

エ「ああ、どんな相手にも対処できる万能型だからな。Fが相手の体力を削ってくれるおかげで、後続の我々も戦いやすいというもの

だ」

F「おおー、褒められた。やったあ」

ク「私もわりと先発が多いけど？」

ビ「多分、クロバット姉さんは素早さが高いからでしょ。ごり押しするときじゃないかな？大将ってそういう戦いするときあるし」

【05・参謀役はどちら様ですか？】

エ「ダイノーズ爺だな。経験と知識にはいつも助けられる」

ノ「ふおっふおっふお、あまり褒めても何も出んぞ？」

ク「えー、私じゃないの？」

F「姉さんに任せたら、ダブルバトルで仲間割れが起きるわよ」

【06・一番の問題児は誰ですか？】

エ・ビ・ノ・F・ド「「「「……………」「「「「」

ク「…何で皆一斉にわたしを見るわけ」

エ「言うまでもないな」

ビ「姉さんのいたずらは悪質なんだもん。この前はオイラの靴がジ

ユン君の家に投げ込まれたし」

ノ「まあ、クロバット嬢らしいといえbraらしいがの」

ド「……」

ク「ドクログは溜め息つかないでよ!!それが一番傷つくんだからね!!」

【07・最年長と最年少は誰ですか?】

ノ「儂が最年長で」

F「あたしが最年少!。17歳の女の子!」

ビ「あれ、ドクログ姉は幾つだったっけ」

ド「…18」

F「一つしか変わんないの!」

ビ「年下!?!うそお!?!」

エ「…そんなに驚くことか?私はマスターから聞いていたからそうでもないが」

ド「……よく年上に見られる……」

ク（ちよつと、ドクログが落ち込んでるわよ!!!）

ビ(き、気にしてたんだ!! ヤバイ、悪いことしちゃったよ!!)

ド「…もう、どうでもいい…」

【08. パーティー一番のアタッカーは?】

ビ「え、え〜と…もちろんドクロッグだよね!？」

ド「……………(ずーん)」

エ「ああ、スピード・パワーも問題なく高い。正直、私も勝てる気がしないな」

ビ「お、オイラも全然勝てないんだ!! パワーに自信あるんだけどね!!」

ド「どうでもいい…」

ク(立ち直ってないわよ!! どうすんの!?)

ビ(うう…オイラはどうしたらいいんだ…)

【09. では、ディフェンサーは?】

F「ダイノース爺ちゃんでしょう? 流石の岩鋼タイプ」

ノ「それを言うなら、エンペルトにも鋼が入っとうろくに」

エ「いや、私の耐久はそれほど高くないから：やはり爺だろう。」

ノ「ふおっふおっふお。まあ、どんな攻撃でも受けられるかと言われればそうでもないがの」

【10・パーティーの最強キャラは誰？】

ビ「はいはいはいはい！！ドクログだと思います！！」

エ「どうしたビーダル：手をそんなに振り上げなくても、そんな事はわかってる」

ク「うん。私たちよりもドクログのほうがずっと強いじゃん。初めてあったときもボコボコだったし」

ド「…」

ビ（あ、何かちょっと嬉しそうだ）

F「うん。パワー、スピード、その他諸々あわせたらこのチームで一番強いよね。頼りになるー！」

ド「…ど、どうでもいい」

ノ「嬉しそうじゃのう」

ド「う、うるさいっ！ー！！」

【11. 逆に最弱は？】

エ「…ふむ」

ク「まあ、ねえ」

ビ「Σ二人とも酷いよ！！何で迷わずオイラを見るんだ！！」

F「ビーダルが負けっぱなしだからでしょ」

エ・ク（言いやがった！！）

ビ「ひ、ひでえ…こいつぁひでえや…ガクッ」

ク「あ、倒れた」

エ「まあ、ほうっておくでしょう」

ビ「心配してくれよ！！何で皆オイラに冷たいんだ！！」

【12. パーティーのバランスは良好？】

ノ「悪くは無いと思うがの。攻守も安定、タイプもそれほど被っておらん」

エ「それも計算しての、マスターの人選…といったところか」

ク「そうだったの？大分行き当たりばったりで仲間にしてんだと思

ってた」

F「そんなわけ無いでしょ！マスターはちゃんと考えてるんだから！」

D「…また始まるぞ」

E「あああ、次の質問を！！」

【13．パーティーの良いところは？】

ク「仲がいいところじゃないかな？」

E「…お前の口からそれが出てくるとは思わなかったな」

ク「あら、失礼なこと言うじゃない。わたしだって、みんなとスキンシップを取るためにいろんな事してるんだから」

ビ「だったら人が嫌がることしないでくれよ…」

F「でも、確かに仲はいいよね。わたしは嫌いな人いないよ」

D「…そうかもな」

F「お、ドクログが興味を示した」

D「…前の群れでも同じだった。仲が良いのは、一番大事なことだと思う」

F「へー…。」

【14・パーティーの悪いところは？】

ク「短気な人が多い事じゃないかな？」

エ・ビ・F「「誰の所為だと」」

ク「さあね☆」

ノ「そうじゃなあ、特には無いと思うが…どう思う、ドクロッグ嬢」

ド「…皆、まだまだ弱い。…勿論私もだ」

エ「…確かに。まだまだ、成長できる」

ク「…ここまで真面目に言われると…でも、そうよね」

ビ「オイラもまだまだ強くなれるんだ!!がんばろっ!!」

F「あたしもマスターのために頑張るんだっ!」

ノ「ふおふお、そうじゃのう。皆で頑張ろう」

ド「……………」

【15・パーティーに欠けているものは？】

ク「私に対する優しさ？」

エ「お前は黙っている」

F「マスターに対する敬意!!」

ビ「結構尊敬してるけどなあ」

ノ「先ほどの質問と似ておるのう」

エ「そうすると…力、か。マスターも『強くなりたい』と、何度も言っていた」

F「でも、変に力だけを求めたらダメだと思うの」

ビ「うん。オイラも強くなりたいけど、ギンガ団の奴ら見たいにはなりたくないな」

ク「つまり、『正しい強さ』ってこと？」

エ「…難しいな。この問題は」

【16. パーティーに名前をつけるならどんな名前？】

エ「これは考えた事もなかったな」

F「なんだろう。単純に『ダイヤチーム』とか？」

ク「…単純すぎて引くわね」

ビ「オイラ、ネーミングセンス無いんだよね」

エ「と、言うわけでダイノーズ爺。何か案はないだろうか」

ノ「儂か。…ふーむ。そんな急に言われてものう」

ク「流石に無理だね。なんだろう、『ダイヤ』を外国の言葉にしたらどうなるかな」

ノ「…おお、それならフランス語でd i a m a n t。これをそのまま呼んで『ディアマント』でどうじゃ」

エ「……」

ビ「……」

F「…微妙？」

ノ「そうか…すまん」

ク「ま、まあチーム名はまた今度決めましょ!!」

【17. ライバルパーティーなどがありますか？】

エ「ジュン殿達、つまりマスターのライバルのパーティだな。」

ク「ドダイトス、カビゴン、ヘラクロス、フローゼル、ギャロップ、ムクホークの6人よね」

エ「ああ。中でも、ドダイトスは研究所時代からの友人だ。今でこそライバルだがな」

ク「ムクホークはよく一緒に空を飛んでるよ。時々横から攻撃してみたり」

ビ「オイラはヘラクロスと仲良くなったぜ。あいつと組み手する事もあるんだ」

ノ「あのカビゴンとは話が合う。またゆっくり話をしたいものじゃ」

F「フローゼルと買い物したことあるよ。あの子も自分のマスター好きだって！」

ド「…ふん。」

エ「まあ、色々各自、思うところはあるようだが……」

皆「」「」「絶対には負けたりはしない！！！！」「」「」「」

【18. トレーナーはどんな人ですか？】

エ「強く、優しい人だ。誰よりも私たちを大事にしてください」

ク「反応がかわいい子だよ…何考えてるかわかんないときもあるけど、私たちを危険な目にあわせないようにしてるのはよく分かるよ」

ビ「すっげえ優しい！！オイラのこと応援してくれる！…だから、その期待にオイラは応えるんだ！！」

ノ「これから、どんなトレーナーになっていくか…今も、未来も楽しみな少年じゃ。期待しとるよ」

F「かっこいいし、強いし、優しいし、ああもう言い尽くせない！要するにステキなトレーナーなんだから！！」

ド「…おかしい奴だ。私を仲間になど…まあ、悪い奴ではないことだけは確かだ」

【19. 今後の目標は何ですか？】

エ「どう思う？皆」

ク「聞くまでも無いわよ、エンペルト」

ビ「当面の目標は皆一緒だよな？」

ノ「ふおおお、これで一人でも違ったら恥ずかしいのお」

F「まさかそんなことないでしょ♪ねードクログ」

ド「…どうでもいい」

エ「せーの」

皆「」「」「打倒チャンピオン！！」「」「」

エ「皆で、マスターをシンオウチャンピオンにしよう。必ず」

ク「勿論♪」

ビ「当然さ!!」

ノ「ふおふおふお」

F「ダイヤを最強のトレーナーにする!!」

ド「…どうでもいい…けど、チャンピオンは倒す」

エ「皆で頑張ろう。これからも」

【20. お疲れ様でした。最後になにかどうぞ!】

エ「とりあえず、私はこれから夕食の手伝いをしなければならないので、ここで失礼する。」

ク「あーあ、早いわねえ。お疲れ様」

ビ「じゃあ、オイラは時間まで鍛錬だ。ドクロッグ、一緒にどうだ？」

ド「…いいだろう。丁度退屈していたところだ」

F「あたしはダイヤ呼んでくるね〜♪きつとまだ寝てるでしょ♪」

ノ「F、ぬしただだと危険だから儂も行こう。…それでは、儂らは

これで。」

第I F話・ダイヤチームに聞いてみる20の質問（後書き）

と、言うわけでニックネームも募集中です。チーム名も募集します。その他も感想等で受け付けております、よろしくお願いします!!

第四十一話・歯車は狂い、そして（前書き）

更新速度低下、申し訳ないです。

告知というわけではないですが、後数話したら番外編でコラボを書こうと思っています。ご期待ください。

第四十一話・歯車は狂い、そして

修業は、丸二日ほどで終わりを迎えた。

ダリアは『もう教えることはないヨ！頑張ってネ！』と言っていた。ということは、もう続きはないのだろう。

シュレンの修行はまだ終わっていないようなので、俺は休憩がてら、コルデイタ公園近くのカフェに立ち寄った。

カウンター席に座り、コーヒーを注文。

ドリッパの音を聞きながら、腰のボールを触る。

…この修行中に得たものは多い。

単純にチームの成長だけでなく、クリムガンの実力の把握、弱点の克服、そしてカブルモの進化。

カブルモは進化するとシュバルゴとなり、鋼タイプを得る。チームになかった存在なので、非常にうれしいところだ。

これなら、この実力なら、仲間を守れる。そう思える。

『…そーいや、Nから連絡あったのかな』

連絡担当はシュレンだったので、全く把握できない。一応番号は教えているのだが。

と、隣に客が座った。

「マスター、コーヒー一つ」

聞いたことのある声。向き直して、よく見てみれば。

「シュレン!？」

「や、ダイヤ君。久しぶり」

自然に隣に座られたので驚いたが、どうやら修業を終えたようだ。

「なんか…大人っぽくなったな」

「ええ！？そそ、そんな二日じゃ変わらないよっ」

「あ、ほんとだ。いつも通りだ」

「ダイヤ君！！！」

そう、こんな風に元気なほうが、調子が狂わない。

二日ぶりに、こんなに明るい表情に出会えた（ダリアは別）。

「修行、どうだったんだ？たしかステージマドンナのケイトさんだ
って」

「うん。わたしは弱点タイプの対応法…それから、途中でファクト
リーヘッドのネジキさんが」

「ファクトリーヘッド！？あの！？」

さらに驚いた。シュレンには二人体制で付いていたのか。
しかも、フロンティアブレーンが二人も…。

「うらやましいね。俺はダリアさんだけだったからな」

「はは、でも、期待されてるからなのか心配だったからなのかは分
かんないけどね…。」

「じゃあ、問題は…Reviveの動きか」

空気が重くなる。

やはり、このタイミングで戦いの話はNGだろう。
あわてて話題を変える。

「ま、今は気にしないほうがいいか。少しの休憩だ」
「う、うん。ここのコーヒーおいしいって評判だよ、覚める前に飲んじゃお」

シュレンの言葉に、奥にいたマスターが頭を下げる。

コーヒーを飲み始めはしたが、頭は『Revive』のことに集中していた。

『レアン、ティオレ、クルト。あの三人は、全員強い。…今の俺で、ぎりぎり勝てるかどうか。…それよりも、ボスのフリードか。あいつ、まだ実力を隠してる…。シュレンを戦わせるわけにはいかないな…。』

と、唐突に何かの音が鳴った。

「ん？」

「あ、わたし。…はい。…あ、ケイトさん。…え!？」

謎の端末で通信をしているようだ。だが、見る見るうちにシュレンの顔が青ざめていく。

「どうした？」

「『Revive』が…来た。今は、ダイゴさんとワタルさん、ミクリさんが止めてるって」

「チャンピオン三人がかりで『止める』!?!ってことは」
「うん。あのボスが来てる」

まずい。早く助太刀に行かなければ…いや、俺たちが行っても足手まといかもしれない。
とりあえず、師匠と連絡を取るか…!？

「とりあえず、師匠を探そう。マスター、お代は置いてく!!」

シュレンとともに店を飛び出し、辺りを見回す。

と、ずいぶん久しぶりの声が聞こえた。

「やあ、二人とも。お待たせ」

「N!？」

「…?」

N。確かに最近会っていなかった。…けど、なんだろう。
この違和感は。

「心配したんだよ!？　今までどこに行ってたのよ!!」

「ごめんごめん。それでも早く来られるように頑張ったんだ」

シュレンがNにグツと近づく。

…こいつ、こんなに早口だったか?でも、なんていうか…。

「そうだ、N、今Reviveが来てるの!　早く行かなきゃ」

「そうか!　ならきつとこっちだ。さっき大きな音がしたからね。」

…さ、ダイヤも。行こう」

「あ、ああ…?」

「どうしたんだい、ダイヤ?」

なんだろう。不意に、口をついてしまった。

「お前、本当にNだよな?」

「…」

Nの表情が変わる。それと同時に、物陰から男が飛び出してきた。

「ハッハア、ゲンガー『催眠術』!!」

「ゲーンガガガ!!」

「きゃっ…う…」

「し、シュレン!? N、テメェ!!」

「ダイヤ、来い。ボクと勝負だ」

「うるせえ、そこをどけっ!! シュレン、シュレン!!」

レアンは、シュレンを抱えるところこちらを見、笑った。
そのまま空を見上げて、

「クルト、こっちだ!!」

「……………」

飛んできたプテラにつかまり、レアンは高笑いをして。
残されたのは、俺とNだけ。

「…っ」

「怒りに燃えているね。どう、大切なものを奪われた気分は。悔しい? つらい? 妬ましい? …だが、そんなことは関係ない。ボクは君と戦う。それだけだ」

「…俺はお前とは戦えない。戦いたくない」

Nは、俺の仲間だ。これ以上戦いで傷つけあいたくない。

「落ち着いてくれ。俺と一緒に、シュレンを」

「君に戦う気がなくても、ボクにはあるんだ。いや、戦わなくちゃいけない。Reviveのために!! ゾロアーク!!」

ゾロアークが、雄叫びを上げながら登場する。

…N、何がそんなに…お前を変えた。

「お前は、友達思いで…ポケモンが好きで…そんな奴だった。そのはずだ!!」

「そう、今もボクは『トモダチ』が好きさ。けど、悪いね。ボクは英雄。ハルモニアの名を継ぐ、Reviveの下僕!!」

「そうか、なら…戦う理由がある!!行け、エンペルト!!」

「エエエエーン!!」

冷静になれ。頭を冷やせ。

Nがなぜ裏切ったか? 英雄とは何のことか? 今はそんなことはどうだっていい。

勝って、話を聞けばいい。きっと何かの間違いなんだ。

「エンペルト、ドリルくちばし!!」

「ゾロアーク、『ダークラッシュ』!!」

「ダークラッシュ!!」

ゾロアークの体から黒い輝きが放たれ、それが両腕に広がり。

くちばしの一撃を弾き、そのままボディに連続でパンチが叩き込まれた。

エンペルトの顔が苦痛で歪み、相当な距離吹き飛ばされる。

「エンっ…!?!? ヅッ」

「エンペルト!?!? なんだその技は!?!? 聞いたことがないっ」

「ボクのトモダチの新しい技だよ。『ダークわざ』…。すべてのポ

ケモンに、効果抜群のダメージを与える」

「そ、そんな技っ……？」

見ると、ゾロアークの黒い光が、自身を蝕んでいるようで：表情が歪んでいる。

「おい、まさかその技：ポケモンに影響があるのか!？」

「トモダチは『戦いたい』と言っている。ボクはそれに応えただけさ」

「テメエ……!!」

久々に……こんなに、楽しくないバトルだ。

「クソツ、エンペルト！ アクアジェットだ！！」

「ゾロアーク、ダークバースト!!!!」

「エエエエン！！」

「ぞ……ロアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアア！」

『call、Call。From Rean』

ガチャリ。

「…どうした、異常でもあったか」

『それあ寧ろボスのほうですよ。如何ですか調子は』

「…何、思い知らされたよ。…」

“王者”という物のレベルの低さを」

そう言っ下ろした、フリードの視線の先には。

「か…ハッ」

「クソッ…強すぎる…」

「全く…歯がたちませんね…」

傷だらけのチャンピオン三人が、地に膝をついていた。

「『水の貴公子』、『鋼の皇子』そして『龍神』。全員の手持ちは潰した。これで何も出来まい…そちらの邪魔になることもないだろう」

『ひゃー、マジですか…。』

「どうだ、そちらはうまく進んでいるか？」

『ええ、今女の子捕まえたところです』

「覇者はどうした？」

『英雄さんと闘ってますよオ』

「…そうか。ならば、早めにもどって来い。撤収する」

『アイサー…っと。すいやせん、少し遅れます』

「そうか」

『上限は？』

「五分だ」

プツッ。

端末の電源を切り、もう一度視線を三人に向けた。

「我々はもう終わりかもしれないが…そちらはまだ終わっていないよ
うだな…！」

「五分で事は済む。あちらも、」

左手を上げ、それを勢いよく振り下ろし、一言。

「こちらもな。“ダークブレイズ”」

『ギョオオオオオアアアアア？？』

（数分前）

「う…」

頭が割れるように痛い。ぼやーつとして、まるで宙に浮いているような感覚だった。

「…のほうですよオ。如何ですか調子は」

どこかで聞いたような声が聞こえる。

…ふと横を見ると、

「ええ、今女の子捕まえたところです」

レアン——。一瞬で、全て思い出した。

自分が攫われて、Nがダイヤの前に立ちふさがったこと。
今、ここはプテラの上。飛び降りれば助かるか——？

「…………飛び降りたら、死ぬ」

「!?!」

声を掛けてきたのは、クルトだった。どうやら目が覚めたときから見られていたらしい。…気配に全く気付かなかった。
だが、そんな事はない。

「それでも、わたしはやるしかないの…にげるしか」

「そうはさせねえからなあ!!…いえいえ、こちらの話です」

レアンにまで気付かれてしまった。

「…っクッ!!放して!!」

「…………ダメ」

クルトに羽交い絞めにされる。中々振り解けず、そのままの状態が続いた。

「英雄さんと闘ってますよ…」

「…あいつ、誰と通信してるの？」

「…………ボス」

やはり、フリード…。だが、彼はチャンピオンと戦闘中のはず。通信する余裕さえあるんだ、そう思うと。急に不安になってくる。

「…ダイヤ君…」

「…っと、すいやせん。少し遅れます」

遠くの方で、稲光。雲行きが怪しくなってきた。

「さて、女の子。あんた人望あるねえ」

「…どういう意味？」

「助けは覇者だけじゃない、ってことだ…クルト、安全運転頼むぜ」
「……………了解」

レアンはゲンガーを出し、稲光を見つめる。
すると、そこには。

「シュレンちゃん!!」

サンダー、ファイヤー、フリーザーの、伝説の三鳥。
それに乗った、ダリア、ケイト、ネジキの三人だった。

第四十一話・歯車は狂い、そして（後書き）

次回も頑張りたいです。

第I F話・ニックネーム（前書き）

さて、そろそろコラボ作品が書けそうな頃合いです。只今相手方の作者様と調整中。

今回は以前から募集していたニックネームの発表になります。

第ⅠF話・ニックネーム

ダイヤ「と、いうわけで。今回は前から募集してたニックネーム発表」

クロバット「いえーい！」

F「いえーい？」

ダイヤ「…もつと盛り上げろお前ら」

エンペルト「…矢張り、急に名が変わるのは…些か」

ダイノーズ「ワシも、同じく」

ドクロッグ「…ふん」

ダイヤ「ビーダルは？」

ビーダル「…zzz…あ、ごめん聞いてなかった」

クロバット「エアスラッシュ？」

ビーダル「ぎゃあああああ？」

ダイヤ「安心しろよ、その辺も考慮してあるって。俺はお前らのトレーナーだぜ？」

エンペルト「マスター…？」

ダイヤ「じゃあ紹介してくぞー。まずはエンペルト、ダイノーズ、ドクロッグ。三人からだ」

三人「……………」

ダイヤ「三人は変更なし。」

三人「……は？」

ダイヤ「理由は、エンペルトは俺の一番最初のパートナーだからな。昔からの呼び方がいいだろうと思った」

エンペルト「ま、マスター……ありがとうございます？」

ダイヤ「次、ダイノーズ爺な。今更変える必要も無いだろう、てことでこうなった。これからもよろしくな」

ダイノーズ「うむ、よろしくの。こっちの方が性に合つとるわい」
ダイヤ「ドクロッグは他の呼び方じゃ答えてくれないからだ」
ドクロッグ「…ふんっ」

F「マスター、私はー？」

ダイヤ「はいはい、じゃあFから。今日からお前の名前は…『フェリス』だ。」

ビーダル「へえ、いい名前だね。由来は？」

ダイヤ「Fから始まる名前だからな。後、響きがいいと思って。…どうだ？」

F改めフェリス「うん、マスターが決めた名前だもん♪ 良いに決まってるじゃない？」

ダイヤ「そっか、なら良かった。」

ダイヤ「じゃあ次、ビーダルな。お前は『デイルグ』。」

ビーダル改めデイルグ「早いよ！？もう少し間が欲しいよ！？」

ダイヤ「なんだ、気に入らなかったか」

デイルグ「いや、思いの外かつこいいからいいけどさ」

ダイヤ「クロバットー、次お前な」

クロバット「はいはい、どんな名前？」

ダイヤ「『ヴィオラ』。紫はヴァイオレット、そこから来た言葉。」
クロバット改めヴィオラ「あら、キレイな名前。気に入ったわ。」

「じゃ、皆さんそういうことで！これからもよろしくな！」

「了解です」

「おおー！」

「はいよっ！」

「応、了解じゃ」

「……ふん」

「うん!よろしくね!」

第I F話・ニックネーム（後書き）

登場はしていませんが、クリムガンの名前はラドガンに決定しました。

これらのニックネームは、第I F話でのみ使用するつもりなので、あしからず。

感想等、いただければ幸いです。
リクエストも受け付けております。

第四十二話・連戦、使者、そして（前書き）

お久しぶりです、Kavalleristです。
また少しずつ更新していきます。よろしくお願いします。

第四十二話・連戦、使者、そして

「ダリアさん!!」

「私たちが来たからにはもう大丈夫ヨ!!」

頼もしい助け。フロンティアブレーション三人なら、この二人に勝てるかもしれない。

「今すぐにその子を放しなさい!!」

「やなこったア。ゲンガー、催眠術!!」

「サンダー、十万ボルト!!」

「行きなさいファイヤー、火炎放射よ!!」

「さあフリーザー、冷凍ビームです!!」

流石は伝説、と言うべきか。ゲンガーが行動するよりも遥か早くに技を繰り出し。

ゲンガーは黒焦げになって、プテラの上に落ちた。

「…あーあ…やられちゃったねエ」

「……………レアン」

クルトが何か言おうとしたが、それはレアンの目によって制される。

「助けはイラネえぞクルト。そのまま女の子押さえてろ」

「さあ、もう一度だけ言うわよ!! シュレンを放して投降しなさい!!」

レアンは一つ、大きく欠伸をして、ゲンガーをボールに戻す。そして目をこすりながら、一言だけ呟いた。

「気付いてねえんだもんなア」

「…？何のこと？」

「これだから、フロンティアブレーンも高が知れてるっての」

「ワーオ、負け惜しみですか？」

がしがしと頭を掻いて、大きく両腕を開く。

「お前らは影に囲まれてるんだぜ」

「何を言ってるの…？サンダー！？」

「ぎぎゃあ…ZZZ」

「ファイヤー！！どうしたって言うの！？」

「ふ、フリーザー！？」

三匹が、次々と目を閉じていく。翼の動きも止まり、それはつまり、墜落を意味していた。

「ダリアさん！！ケイトさん！！ネジキさん！！」

「ヒヤハハハハハハハ！！！！大爆笑！！！！威勢のよかったわりに、足がやられたら追っかけられねえのかよ！！」

「…レアン、五月蠅い」

「ヒヒッ、悪いなクルト…ぶふっははは」

「三人に何をしたの！？」

そう言うと、レアンは笑うのをやめてこちらをにらむ。

「あんたは黙って攫われてりゃいいんだよ。影に包まれて」

「影、影って…さっきから何…う…」

まるでゲンガーに催眠術を当てられたように、急激な睡魔がわたし

を襲う。

「せめていい夢でも見てな…ケケケッ」

こんな、悪夢みたいな出来事…これ自体が、夢だったらいいのに…
…。

＼side ダイヤ＼

「クリムガン、ばかぢから！！！！！」

「くがあああああ！！！！」

「ば、バイバニラ避ける！！」

「ヒャアアアア」

現在、状況は一体一。これが最後の勝負。
Nの表情に、だんだんと焦りが見える。

「ば、馬鹿な…何故ボクが負けそうなんだ！？ダイヤ、さっきまで
どこに行っていた！！」

「…勉強してきたんだよ…諦めないってことを！！」

クリムガンの一撃が、バイバニラの身体を掠める。

「なんで…トモダチも、ボクも強くなったはず！だのに！！」

「目を覚ませ！！Reviveの力なんて、お前には必要ないはずだ！！」

Nは頭を抑え、その場に立ち尽くす。バイバニラは未だに攻撃を避け続け、クリムガンはそれを追う。

「ボクは…ボクはアア！！」

「バンギラス、大文字！！」

「ギラア！！」

「クガアアアア！！」

突如、声と共にクリムガンが爆炎に飲み込まれる。

その方向には…バンギラスをつれたティオレが居た。

「て、テメエ！！バトルに横槍を」

「俺達『悪の組織』に、『正々堂々』を掲げろとでも？H A H A H A、笑えるね」

そのままNの肩を取り、エアームドを繰り出す。

「英雄さん、大丈夫かい？」

「て、ティオレ…ボクは、」

「アンタは英雄だよ。れっきとした、ね。さあ、エアームドに乗っ

てボスのところに行きな」

「あ、ああ：ありがとう」

「N! !」

Nはこちらに振り返ると、額を拭ってから口を開いた。

「：ボクと戦いたいなら、ボスのところに来るんだ：。待っているよ」

「N! ! お前はっ」

「エアームド、行ってくれ」

鋼鉄の翼が羽ばたくと、瞬間にNはその場から居なくなった。
今度は、ティオレとダイヤだけ。

「くそっ：またか：! ! !」

「さて、俺はあんたの始末を頼まれたわけだ。まあ英雄さんの手助けってのが正確だけど。英雄さんはあんなこと言ってたけどな：見てたけど、手持ちはもう居ないんだろ？ パルキアを呼ぶか？」

「ッ」

その手は、確に残っている。：だが、ダイヤはそれを望まない。
Nを、シュレンを助けられなかったのが自分の力不足なら、その責任は：他のやつに押し付ける理由はない。

「何もしないの？」

「：ああ。やれよ」

「：残念だ。じゃーな、覇者。

バンギラス、吹雪」

「ギラァアアア! ! !」

猛烈な暴風雪が、ダイヤに襲い来る――が、

それはまた、横槍によって防がれる。

「ウィンディ、フレアドライブ!!」

「ガオオオオオ!!」

「!? 誰だ!?!」

雪は炎にかき消され、俺の周りに三つの黒い影が並んだ。

ウィンディの横に並んだ黒はフードを取り、その金の髪を掻きあげる。

「な、なんなんだお前ら!?!」

「唯の通りすがりの黒コート…名はユガタ。」

ユガタは今までとは全く違う表情。鋭く、バンギラスをにらんでいた。

「ふ、ふん!! バンギラスの前に炎タイプを出すなんてな!! いけ、岩雪崩れ!!」

「遅えよ。インファイトだ」

「ガオオ!!」

バンギラスに飛びつき、連続で突進を繰り返す。その容赦ない連撃に、バンギラスはゆっくりと沈み、倒れた。

「ぎら…ア」

「な、なん…だと…!?!」

「これ以上ダイヤ少年に危害を加えるつもりなら、手加減しないが…どうする?」

「…っ、フライゴン、空を飛ぶ!!」

慌てて、ティオレは去ってゆく。

ダイヤは三人の顔を確認した。

「お前ら…なんで…」

「流石に、目の前で人がやられそうになったらな」

ユガタはそういつて微笑む。

だが、今は一番に優先しなければならないことがある。

「そうだ、シュレンを助けねえと!!」

「一人で行く気ですか？」

「ッ…そうだ、師匠に連絡」

「シロナさんなら、今はアデクさんとタワータイクーンのクロツグさんと一緒に、シンオウまで調べものに行ってます」

「そんな…悠長な…!!」

地面を蹴り、砂を飛ばす。何度目だろう、自分の無力を感じたのは。

「あの子を、助けたいか？」

「…当たり前だろ。力が無くたって、俺は行かなきゃ…。“守る”
っていう約束も果たせてないのに」

「そうか」

何度も何度も言った、守るという言葉。

今の俺は、嘔吐きと言われても否定はできない、そう言って海のほうへ歩を進める。

「どこに行くんだ」

「あいつらはあっちに行った。海の方だろうがなんだろうが…
俺は追う」

「仲間に無理させてでも、か？ 仲間を守るって口にする奴の行動とは思えないね」

その言葉にとうとうブチ切れて、ダイヤはエリーゼの胸倉をつかむ。

「仕方ないだろッ！？ 俺だって、もっと別の方法を探したい！！けど今はそんな悠長なこと言ってられねえんだよ！！俺はこんな事じゃ諦めないって！！俺はまた嘘をつくことになる！！」

エリーゼはその言葉を静かに聞いた後、息の荒いダイヤを引き剥がし、フィアに目で指示する。

フィアは頷いてボールを一つ取り、投げた。

「ロズレイド、アロマセラピー」

そう、あの時と同じように、甘い香りが辺りを包む。

ダイヤも静まり、その場に座り込んだ。

「…悪い…」

「何、俺も言いすぎた。…けど、それでわかった。お前の覚悟は本物だ」

「覚悟…？」

復唱すると、エリーゼ達三人は俺の眼の前に立ち、片膝を立てた。

「我ら三人、貴方に力を貸そう。使命を果たすまで」

「…は？ 使命？ 力を貸すって…どういうことだよ、説明してくれ！」

いきなりの出来事に、ダイヤは当然ついていけない。

立てた膝を元に戻し、強い視線で口を開く。

「俺たちは、とある組織：何でも屋みたいなものだ、その幹部でな。ある日、とある人物から二つの依頼がされた。その一つが“シンオウ地方出身のダイヤというトレーナーを見守り、時に助けになってくれ”って内容だ。」

「だ、誰だよそんなこと頼んだのは!？」

だが、エリーゼは首を横に振るだけ。

「それは言えない。組織のルールでな」

「……」

ダイヤは只管に考える。

自分の身を案じる人：母：？いや、母さんはそんな回りくどいことはしない：なら一体：

エリーゼは構わずに話を続ける。

「このまま海に出るにしても、でかい船を使うと敵にバレる。俺たちの船を使うぞ」

「お前らの：？確か、ここは関係していないの船の入港は禁止されていたはずだけど」

「俺たちの腕を舐めんなよwwその位ヨユーヨユーww」

緊張感の無いユガタの言葉に、自然と表情が綻んだ。

と、そこでエリーゼの表情が強張り、眼鏡を少し触ってこちらを見た。

「じゃあ、ファイアはダイヤを船まで連れてつてくれ。俺とユガタは後始末して行く」

「後始末？」

「まあ、獲物にとどめを刺し損ねて見逃すバカはいないよなって事だ」

「なるほどお。ウィンディ、火炎放射？」

「ガオオオオオ？？」

「うわあああ！？」

ウィンディの火は近くの木に広がり、そこに隠れていたらしい人間が飛び出して来た。

総勢、ざっと15人ほど。

「Reviveめ、人数増やしやがったか…。ファイア、さっさと行け。俺らでもカバーしきれないかも知れん」

「ええ！？」

「うえへwww自信無いんですかエリゼさんww」

「黙ってるクソユガタ？」

二人がギャーギャー騒ぎながら手持ちを出すと、ファイアはダイヤの腕をつかみ、目で行き先を示す。そして耳に口を近づけて

「いいですか。貴方は今、一体も戦える手持ちがいません。だから、絶対に私から離れないでくださいね」

と囁いた。

了解、と小さくつぶやいて、後方の爆発が遠ざかるのを確認する。

「二人だけで大丈夫なのか？流石にあの人数じゃ…」

「何言ってるんですか…あの二人は強いですよ。私よりも」

その表情は自信に満ちている。信頼の大きさが伺えた。すると、数度後ろに振り返り溜め息をついた後、頷いて小さく呟いた。

「…うん、やっぱりここまで誰も来てない…。少しとばそうか」
「とばす？ ってうわっ！！」

突如追い風が発生し、ダイヤは足を取られたが…そのまま風に乗リ、直進方向の港へ到達した。
風が止んだおかげで地面に叩きつけられたが。

「痛たたた」

「ご、ごめんなさい！！説明を忘れてたわ」

フィアはそう言って、綿雲のようなものから飛び降りる。
どうやらポケモンのようだ。ダイヤがじっと見ていると、フィアが説明に入る。

「あ、この子はエルフーンっていうイッシュ原産のポケモンよ。さっきの追い風はこの子のおかげなの」

「きょうっ」

「へえ…。面白いな」

そのまま、示されたボートに乗り込む。5人乗れるかどうかの、小さなボートだった。

運転席を眺めていると、フロンティアの方から駈けてくる二つの人影があった。

「フィア、船だせええ！！！！」

エリーゼとユガタが全速力で走ってくる。

エリーゼはどうやら必死のようだが、ユガタは相変わらず笑顔は崩さないままだ。

「えっ！？ あっはい！！」

その声に反応して、フィアがダイヤの前に立ち舵を操る。

操縦をオートに切り替えると、ボートはゆっくりと進みだした。

港から1メートルほど離れたところで二人は跳び、ボートに着地した。大きく揺れた所為でバランスを崩し、こけそうになる。

「あー、疲れた……。流石にあれだけの量をぼこすのは辛いな」

「いーじゃんいーじゃん、八対七で俺のほうが倒した数多いけどな
www」

「くっそ、次は負けねえ」

「お疲れ様です」

その場に座り込んで話を始めた二人に、そう言ってタオルを渡す。
一段落着いたところで、エリーゼが地図を広げ始める。

「それは？」

「俺達が今向かってる、Reviveたちのアジトがある島の地図だ。アジトっても、本当に隠れる程度だけだな」

「へえー……」

バサバサと音を立てながら、まだ広げていく。

「おい、ちょっと待て。それって何万分の一スケールだ」

「さあな」

「ぷぎゃーwwww」

「オイ！！」

近くでユガタが笑い転げているが、その上にも地図は広がる。

「現実的な数字である事は確かだ。：聞いた話じゃ、バトルフロンティアよりも大きいくせに未発見の島らしい」

「フロンティアよりも…！？」

一日かけても回りきれないフロンティアよりも広い。その事實は、ダイヤを焦らせるには十分すぎた。

「そんなんで間に合うのかよ！？あいつらが何する気かしらねえが、Nやシュレンに何かあったら！！」

「さっき言ったことを忘れんな！！」

びくり、とダイヤの体が強張る。

エリーゼは再び、確認するように言葉を紡いだ。

「お前の覚悟は認める。何があったかは知らないが、お前の心構えが代わったのもわかった。だが、焦るな。焦って一步を踏み出せばあいつらの餌食になる。頭を冷やせ」

「ッ…わかったよ」

『そうだ…焦るな、俺。いまは、できるだけのことを…そう。この三人と、俺の仲間達で。』

「ダイヤさん」

「…あ、何だ」

「手持ちを回復させておきます。貸してください」

「ああ、頼む」

「じゃ、回復の間に説明しておくぞ。この地図なんだが」

既に甲板の半分を埋め尽くした地図の一角を指差し、エリーゼが説明を始める。

「俺達はこちらに上陸し、その向こう側の×印：そこにあるアジトに攻め込む。このとき、本来ならいるだけの人数で分かれて挟み撃ちにするのが基本だ。」

「じゃあ、上陸直後に分かれろ」「そうはいかねえってことなwww」
のそのそと、地図の下から登場したユガタが別の一角を指差す。

「上陸したあとアジトまで真っ直ぐ向かう、この道。これが最短距離だね。焦るなどは言っちゃけれど、それなりに早いほうが都合いいだろ？それに、分かれるよりもまとまって行ったほうが誰かが残りやすいんだ」

「それって、つまり」

エリーゼは頷いて答える。

「途中で敵に遭う事になる：おそらく、あの三人。そいつらは俺らで止める。」

「ですから、ダイヤさんがフリード：そして、Nさんの下へ行って下さい。」

「俺が…。」

たった一人で、二人を相手に。

震える手を、ぎゅっと握り締める。

「大丈夫だ。俺達も後から追いついて加勢してやるし、シロナさんたちにも連絡はついてる。すぐに増援が来るさ」

「…おう。助かるよ、ありがとな」

「気にすんな」

そして、数時間後。

「おーい、島が見えてきたぜー」

ユガタが指差す先に、確かに。

「…でかい島だな…」

「上陸の準備だ。用意しておけ」

岩陰にボートを着け、砂浜に飛び降りる。少年と、黒コート三つの影。

「腕が鳴るねえwww」

「む、無駄な戦闘はしないでくださいね？目立ちますから」

「さて、それじゃあ開戦といきますか。」

「ああ。…皆、無理だけはしないでくれ。行くぞ…!」

「「了解…!」」」

第四十二話・連戦、使者、そして（後書き）

是非、感想いただければ嬉しいです。

リク頂いたもの、コラボはもう少しお待ちください。

第四十三話・戦闘、開始（前書き）

相変わらず不定期投稿ですみません。

今回はバトル、それなりに頑張ってみました。

気になるところ等ありましたら感想にてよろしくお願いします。

第四十三話・戦闘、開始

「足元、それと頭上。それから前方と後方に注意しろ」

「要するに全方位じゃんwww」

無人島特有の生い茂った森の中、転ばないように静かに駈ける。

「アジト…どうやら、あの山のようなだな。」

エリーゼが指差した先には、テンガン山よりも少し低めの…山。上るにもかなりかかりそうだ。

「あの上にいるとしたら大変ですね…」

「そうだな…シュレンに何かあったら…」

「ん、拓けたな」

森を抜け、広場のような場所に出る。そこで、エリーゼの表情が曇った。

「…いる」

「え？」

「こそこそ隠れるのが趣味のようだな…出て来い!!」

「…ハッハア!!」

近くの茂みから聞いたような声がすると、あたりを黒い影が覆う。

「おう、久しぶりだなア『覇者』!! わるいがここは通さねえぜえ」

「それはこっちの台詞だ」

「おおっと!？」

レアンに体当たりでもするかのように、エリーゼは飛びかかる。
だがそれはひらりとかわされ、ダイヤと距離が開いた。

「漫画みたいな展開は好きじゃねえが…俺を置いて先に行け!!後から必ずついていく!!」

「…任せた!!」

「おい、逃げんな覇者!! あっクソ!!」

後ろは振り返らず、ただ前を見て走る。

「…ユガタ」

「あん? w w w」

「大丈夫だよな」

「安心しな、あいつはつええって。俺よか弱いけどな w w」
「そっか」

未だ静かな森を抜け、山に向かって岩を上がる。

「…そういや」

「なんです?」

「二つ目の依頼って何なんだ? たしか依頼は二つって言ってたよな」
「あー……………」

フィアが、気まずそうにユガタの方を見る。

「なあに、お前には言うなって言われてるんでね。そういうことで」
「…それもルールか」
「おう。」

疑問は残ったまま、また一步一步踏み出して行くが、

「ゴアアア？」

「？なんだありゃあ」

近くの岩陰から、獣の声。

イーブイやガーディがぞろぞろと出てくる。

「チッ、面倒くせえ：お前らの相手をしてる暇はねえってのに？」

「任せときなww」

ユガタが一步前に出て、ウィンディを繰り出す。

「吼える？」

「グルオオオオオ？？」

咆哮が衝撃波を呼び、ガーディ達を吹き飛ばす。

咆哮が止むと、フィアは大慌てでユガタに近づいた。

「何やってるんですか？これじゃあ敵にバレちゃいますよっ」

「いーんだよ、もうバレてっから」

「何？」

空中からプテラがやってきて、その上にいた少女が飛び降りる。

「な？」

「よく気づいたな：」

「ずっと影がついて来てただろww」

そう言って笑い、ボールを構える。
クルトも、同じくボールを構えた。

「さて、バトルと行きましょーかww」

「………望むところ」

「ユガタさん？」

ファイアが大声を上げる。構えていたユガタはこけて、ファイアのほうを見た。

「何だよ？」

「その子は私が相手をします？」

「…お前、」

「私がやります！」

何度目かの大声を上げるファイア。

ユガタは溜息を一つ吐いて、ボールをしまった。

「悪いなお嬢さん、選手交代だww」

「……私はだれでも構わない」

代わりにファイアが、クルトの向かい側に立つ。

「なーんか見逃してくれそうだから…先行くぜ」

「はい。行ってください」

走り出したユガタの後ろに着いて走る。

ファイアはどこか頼りないから心配だ。

「心配すんなよ、ダイヤw」

「え？」

「俺たちは全員強いんだ。」

そう言って、ユガタはウィンディの上に俺を乗せる。

「飛ばすぜ、舌噛むなよ？」

「あ、ああ？」

「神速？」

＼sideシュレン＼

「さあ、やれ。シュレン・バークよ」

「……」

「この石に、触れるだけで良い。触れて念じるだけだ。簡単だろう？ そうすればお前は解放してやろう」

それだけで終わるはずが無い。わたしはそう思う。

問題は、今どう逃げるかじゃ無くて、今何をしたらあとで何が起きるか。

「…それをして、あなた達にどんなメリットが？」

「分かっているはずだ。我々が望む事は」

「？…世界の、再生…」

「そういうことだ…さあ」

なおも、黒と白の石を目の前に突き出される。
けど、今はすべきじゃない。

「…もう少し、考えさせて」

「…ふむ。仕方ない」

今は、ダイヤ君が来てくれるのを待つ…それが最善。

＼side out＼

「うおええええええ」

「おいおい、Gにやられたか？ W W
「がう」

乗り物酔いに似た症状。背をユガタに摩ってもらいながら、ゆつくりと立ち上がる。

そこは、山の中腹だった。

「早っ…いつの間に」

「神速だからなww」

と、急に気温が上昇したように暑くなる。

足元がだんだん赤く発光してきたのを見て、再び二人はウィンディの飛び移り、その場を離れた。

「あれは…」

「再登場かww」

「H A H A H A、その通り!!」

大地を溶かし、ヒードランがその巨体をあらわにする。横からティオレが出てきて、ユガタを指差した。

「お前!!」

「俺？」

「そうみたいだな…」

「さつきはよくも…俺とバトルしやがれ!!」

ユガタは頭を掻いてこちらを見た。

「先にいきな。どうやらこいつは俺にしか用がないらしいし」

「…悪いな、三人とも。つき合わせて」

「なーに言ってたんだ。仕事だぜ? ww」

いつも通りの笑顔を確認して、頂上目指して走る。

高いところにくると、いろんなことがよく見える。

各所で激戦が繰り広げられているようで。

俺も皆の期待に応えるために、闘わなくては。

「N!!」

「来たね、ダイヤ。勝負といこう、あのときの続きだ!!」

頂上にいたN、そしてフリード。

二人とは連戦になりそうだ――。

side エリーゼ

「サイコキネシス!!!!」

「ヘアアアア!!!!」

「ゲエエエンガアア!!!!」

超能力のぶつかり合い。木々がきしみ、地にヒビが奔る。互いにこう着状態の中、先に動いたのはゲンガー。

「堕ちろ、催眠術だア!!」

「ゲェーン!!」

「ヘア!? アアアア: z z z」

「チッ、催眠厨が: 調子に乗りやがって!!!」

舌打ちして、スターミーを引っ込める。

レアンは楽しそうにニタニタと笑っていた。

「ハッハア: 何を出しても、ゲンガーの素早さを超えられなきゃ話にならねえぜ?」

「バシヤーモ、Let's go!!」

「バッシアアアアアア!!」

登場したバシヤーモが腕の炎を滾らせると、レアンはブフォッと大きく吹き出し、こちらを指差して笑い始めた。

「ヒヤハッ、お前、ゲンガーに格闘タイプを出すとか: 沸いてねえか?」

「黙ってかかって来いよ」

その言葉でレアンは笑うのをやめ、同時にゲンガーは両手にサイコパワーを集中させる。

「ゲンガー、サイコキネシス!!」

「ゲェエンツ!!」

それは真っ直ぐにバシヤーモに向かっていったが、刹那。

全てはバシャーモを通り過ぎていった。

「“みきり”」

「チイツー！！　ゲンガー、サイコネシス連打！！」

「ゲンツー！！　ゲンツー！！！！」

「シャシャシャシャアア！！！！！！」

技を出すごとに動きに疲労し、精彩を欠くゲンガー。

それとは対照的に、バシャーモはスピードを増し、悠々とサイコネシスをかわしている。

「な…なんで！？　何でそれだけ動いて、全く疲れないんだよオ！？」

「何だ、加速をしらねえのか？　古い奴だな…」

「加速…！？」

加速とは、時間が経てば経つほど素早くなる特性。

それを受けたバシャーモは、もはや疲れの概念を超えている。だがレアンは納得できないようで、

「バシャーモの特性は『猛火』だろオ！？」

「俺のバシャーモは特別なんだよ。…行け、ブレイズキック！！」

「ッシャアア！！」

疲労したゲンガーの顔面に、爆炎をまとったバシャーモの右足が襲い掛かる。

「しまっ」

「ゲエエエエエエン…」

目を回して、ゲンガーが倒れる。バシャーモは華麗に着地して、再び炎を上げた。

「ハッハア、やるじゃねえか…楽しめそうだな」

『…さて、まずは一体…。次はどう来る？催眠厨』

＼side　ファイア＼

相手は地面、こちらは草。相性の上では有利だけど、…実際、

「…押しつぶして、カバルドン」

「カバアアアア!!」

「ロズレイド!!」

「ろずうろうう!!」

パワー差、体格差は明確。パワータイプの相手をコントロールするのが草タイプだけど、これは制御しきれない。

「っ…」

「……次」

「ッ、分かってるわ!!」

吹き荒れる砂嵐の中、ノクタスを繰り出して様子を見る。

「影分身!!」

「ノクタッ」

「……カバルドン、地震」

「カバアアア!!」

分身していても、本体も地面に着いている。一撃を受け、影分身が解けた。

「の…ク…」

「ノクタス!!」

「……氷のキバ」

「グアアア!!」

ノクタスをボールに戻し、間一髪で戦闘不能を避ける。
クルトがこちらを睨んだ。

「……」

「…くっ、」

強い。行動行動が裏目に出てしまって、運も相手に味方してる…気がする。

『…勝てないのかな? また、あの二人に迷惑かけることになる…のかな?』

違う。今回は、ダイヤも関わっている。

…そうだ、きつとエリーゼなら、あの男とのバトルもさっさと済ませてるに違いない。

『もう少し…もう少し頑張ったら、きっとエリーゼさんが来てくれる…そしたら』

「……早く、次の勝負」

「あ、は、はい!!」

他力本願もいいところだけど、私には…力はないから。
他人に頼るしかない…。

「行って、キノガッサ! 宿木の種!」

「キノオッ!!」

「……小ざかしい」

「カバアアアア!!」

＼side ユガタ＼

「いけえドサイドン? つのドリル?」

「運ゲー決めて来やがったかwwならこっちは…ハガネール? アイアンテールでぶつとばせ!」

「ドッザアアアア?」

「ハガアアネエエエエ?」

つのドリルは不発に終わり、ハガネールの巨大な尾はドサイドンを10数メートル吹き飛ばす。

そのまま起き上がったところを頭上から叩きつけた。

「どさ：ア」

「くそおおお？」

「甘い甘い：伝説の力に頼りすぎなんだよ、テメエは」

「う：！ヒードラン？」

『ごごぼおおお』

ずっと控えていたヒードランが、前に進み出た。

ユガタはそれを強く睨みつけて、ハガネールに指示をだす。

「地震？」

「ハアガネエエエ？」

「ヒードラン、跳んでマグマストーム？」

『ごごぼぼおおお』

その巨体をものともせず、ヒードランは宙を舞う。その滞空中に業炎を放ち、それは正確にハガネールを捉えていた。

「ハッガアアア！？」

「下がれ、ハガネール」

素早くハガネールをボールに戻し、次のボールを投げる。

「サンダース、かみなり」

「キュオオオン？」

「ひねり潰せ、アイアンヘッドだ？」

『ごごぼぼおおお』

何度も何度も電流を奔らせるが、それを物ともせず突進は続く。
結果、軽々としたサンダースの体は吹き飛ばされた。

ユガタは苦い顔でボールに戻し、また別のボールを構える。

「伝説、ね…。」

「H A H A H A H A、どうしたどうした！！ このままじゃヒード
ランの熱で全ッ部溶けちまうぜ！！」

「ぶっ壊してやるよ！！！！」

第四十三話・戦闘、開始（後書き）

また次回もよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0609t/>

ポケットモンスター ～白き金剛石の輝き～

2011年11月17日21時05分発行